長岡京跡右京第 1019 次発掘調査報告

－ 長岡京跡右京八条二坊二・六・七町の調査 －

２０１３

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

序　　文

長岡京市では「住みつづけたい　みどりと歴史のまち　長岡京」をめざして、日々街づくりに取り組んでおります。

西山と桂川に挟まれた自然豊かなこの地は、これまで継体天皇による弟国宮、桓武天皇による長岡京と二度にわたって宮都、つまりは日本の首都が置かれたところです。さらにはまた、悠久の歴史の中でたびたび表舞台として登場してもきました。

これらの貴重な文化遺産は、開発の前に調査され、必要な限りにおいて現地保存、ないし記録保存されています。当センターでは、それらの埋蔵文化財を有効に生かして新しい街づくりに寄与したいと活動しております。

さて、長岡京市南部の地に、学校法人立命館による学校建設が計画されました。それにともなう発掘調査は１年余続き、長岡京時代から江戸時代にいたる、複数の時代の重要な遺構・遺物の発見が相次ぎました。

そして調査終了後、ただちに整理作業に取りかかり、このたび長岡京市埋蔵文化財調査報告書第56集として刊行する運びとなりました。

主な成果としましては、長岡京期の甕据え付け穴を備えた大型建物や、平安時代の井戸、戦国時代の堀状遺構、江戸時代の建物や灌漑用導水施設など、どれもこの地域の歴史を解明する重要な成果です。

今後これらの成果を市民のみなさんに広く公開することで、さらに市民に愛されるセンターを目指してまいる所存です。

最後になりましたが、発掘調査を始め、現地説明会など、当センターの発掘調査にご指導・ご協力いただきました、学校法人立命館、工事関係者、発掘現場周辺の住民の皆様、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所を始めとする関係各機関に厚くお礼申し上げますとともに、今後なお一層のご支援を賜りますようよろしくお願い申しあげて、本報告書刊行のご挨拶といたします。

平成２５年 ９月

公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター

理事長　　井　上　満　郎

凡　　例

1．本書は、学校法人立命館が計画した学校の建築工事に伴って実施した、長岡京跡右京第1019次調査（7ANROZ-4地区）の本調査に関する報告である。

2．調査は、公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、試掘調査は平成23（2011）年2月14日から3月25日まで、本調査は4月4日から平成24（2012）年3月30日まで行った。試掘調査は、当センター調査係主査の木村泰彦が、本調査は木村と公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所主任の伊藤潔が担当した。試掘調査の成果については、別途に報告してある。

3．調査の対象となった遺跡は、長岡京跡右京八条二坊二・六・七町である。

4．長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』（1977年）収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。

5．長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号（1992年）の復原案に従った。

6．本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。

7．本文の（注）に示した長岡京に関係する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』（二）（2013年）に従って略記した。

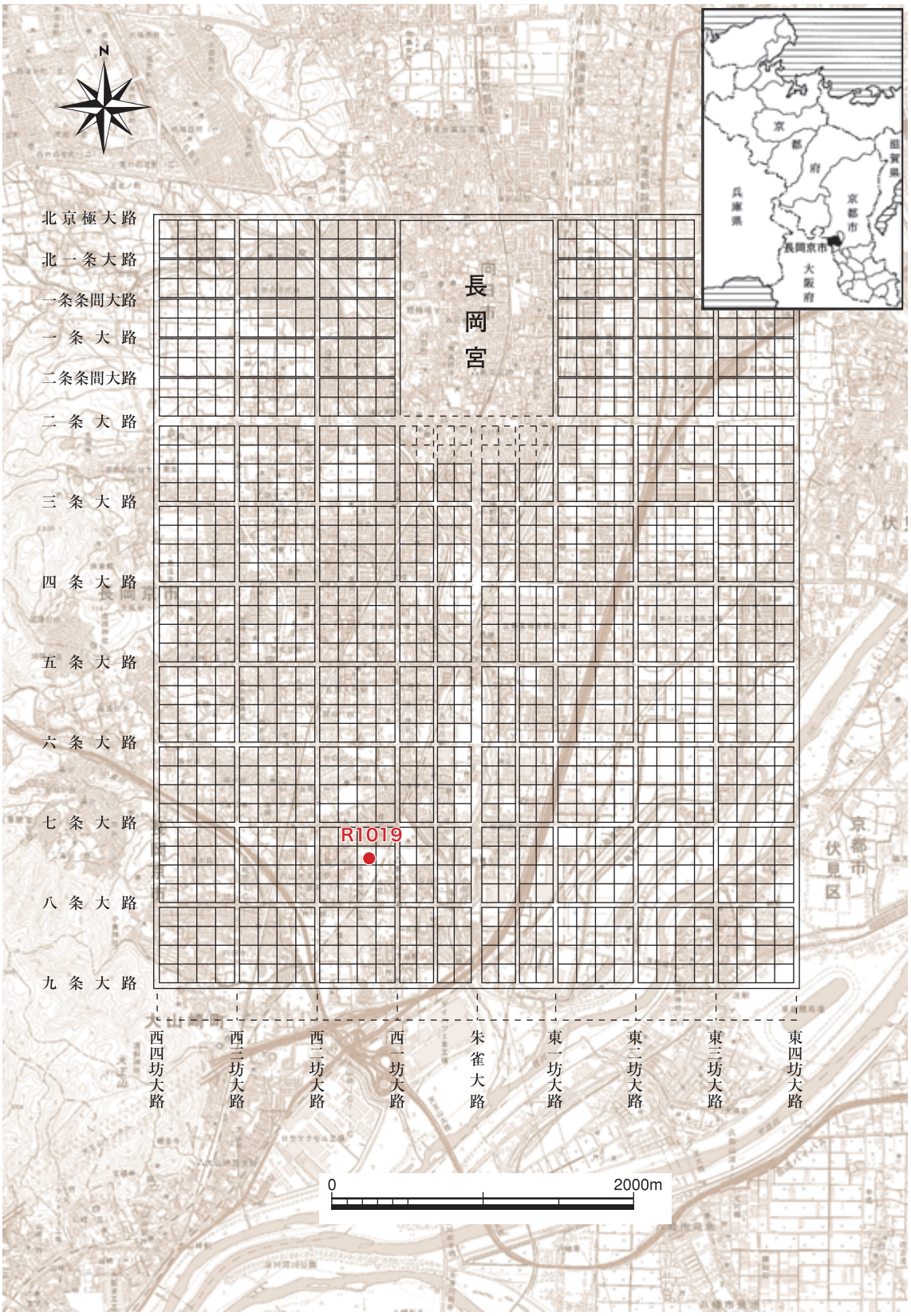
8．本書において使用している遺構番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数＋番号であるが、煩雑さを避けるため、調査次数を省略している。「SD01」の場合、調査次数を冠した「SD○○○01」が正式な番号である。

9．本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第VI系によっている。

10．本書の挿図の土層名で〈 〉を付けて表示した記号は、『新版標準土色帳』（1997年版）のJIS表記法による土色名である。

11．現地調査ならびに整理作業にあたっては、泉拓良、井上満郎、植村善博、都出比呂志、中尾芳治、一瀬和夫、小森俊寛、玉田芳英、中井均、仁木宏、橋本久和、福島克彦、渡辺晃宏の各氏より種々のご教示を賜った。

12．本書の執筆・編集は、おもに木村が行った他、小田桐淳、原秀樹、山本輝雄が一部を協力して執筆した。



第１図　長岡京と調査地の位置（1/40000）

本　文　目　次

序　文 …… i
凡　例 …… ii
第１章　はじめに
　１　位置と環境 …… 1
　　（１）位置と立地 …… 1
　　（２）歴史的環境 …… 2
　２　調査経過 …… 3
第２章　調査の成果
　１　１トレンチ …… 9
　　（１）検出遺構 …… 9
　　（２）出土遺物 …… 18
　２　２トレンチ …… 21
　　（１）検出遺構 …… 21
　　（２）出土遺物 …… 55
　３　３トレンチ …… 83
　　（１）検出遺構 …… 83
　　（２）出土遺物 …… 86
　４　４トレンチ …… 87
　　（１）検出遺構 …… 87
　　（２）出土遺物 …… 109
　５　５トレンチ …… 113
　　（１）検出遺構 …… 113
　　（２）出土遺物 …… 135
　６　６トレンチ …… 143
　　（１）検出遺構 …… 143
　　（２）出土遺物 …… 150
　７　石器・金属器 …… 151
第３章　ま と め
　１　江戸時代 …… 157
　２　戦国期 …… 157
　３　平安時代 …… 158
　４　長岡京期 …… 158

図　版　目　次

図版１　（１）右京第 1019 次調査地航空写真（北東から）
（２）右京第 1019 次調査地航空写真（南西から）
図版２　（１）右京第 1019 次調査地航空写真（北から）
（２）右京第 1019 次調査地航空写真（南から）
図版３　（１）１トレンチ全景（北から）
（２）１トレンチ検出遺構全景（北から）
図版４　（１）土器棺墓 SX36 調査過程（東から）
図版５　（１）２トレンチ全景（北から）
（２）２トレンチ北部・６トレンチ全景（北東から）
図版６　（１）土管埋設遺構群（南から）
（２）土管埋設遺構 SX52（西から）
（３）井戸 SE55（北から）
（４）井戸 SE68（南から）
図版７　（１）２トレンチ北部 土管埋設遺構群（南から）
（２）井戸 SE122（南から）
（３）土管埋設遺構 SX19（南から）
（４）土管埋設遺構 SX123（南から）
図版８　（１）２トレンチ北部・６トレンチ 堀 SX09 全景（北から）
（２）堀 SX09 と恵解山古墳（北西から）
図版９　（１）２トレンチ北部 堀 SX09 上層掘り下げ状況（南から）
（２）２トレンチ北部 堀 SX09 下層掘り上げ状況（南から）
図版 10　（１）堀 SX09 全景（南から）
（２）堀 SX09 掘削単位の痕跡（北から）
図版 11　（１）堀 SX09 底部掛矢・木簡出土状況（南から）
（２）堀 SX09 底部掛矢出土状況（東から）
（３）堀 SX09 底部木簡出土状況（南から）
図版 12　（１）井戸 SE83 上層遺物出土状況（北から）
（２）井戸 SE83 下層須恵器甕出土状況（南から）
図版 13　（１）井戸 SE116 全景（北から）
（２）井戸 SE116 井戸側（東から）

図版 14　（1）井戸 SE114 全景（南から）
（2）井戸 SE114 井戸側（南東から）
図版 15　（1）掘立柱建物 SB88、溝 SD84・85 全景（北から）
（2）掘立柱建物 SB88、溝 SD84・85 全景（西から）
図版 16　（1）溝 SD82・84 全景（南から）
（2）溝 SD84 須恵器大甕出土状況（東から）
図版 17　（1）３トレンチ全景（北から）
（2）３トレンチ全景（南から）
図版 18　（1）４トレンチ全景（北西から）
（2）４トレンチ北部全景（西から）
図版 19　（1）４トレンチ南部全景（北西から）
（2）４トレンチ南部全景（北東から）
図版 20　（1）溝 SD653 ～ 656 全景（南から）
（2）井戸 SE636 全景（南から）
図版 21　（1）掘立柱建物 SB4006 ～ 4008 全景（東から）
（2）土坑 SK819 遺物出土状況（東から）
図版 22　（1）５トレンチ全景（南東から）
（2）５トレンチ下層全景（東から）
図版 23　（1）５トレンチ拡張後全景（北から）
（2）５トレンチ西部全景（南東から）
図版 24　（1）６トレンチ全景（西から）
（2）６トレンチ全景（東から）
（3）６トレンチ東部小穴群（北から）
図版 25　（1）堀 SX09、落ち込み SX101 全景（南から）
（2）堀 SX09、落ち込み SX101 全景（北西から）
図版 26　（1）土管埋設遺構 SX54 出土土管
（2）土管埋設遺構 SX52、井戸 SE55 出土土管
（3）土管埋設遺構 SX52 出土土管の墨書
（4）井戸 SE55 出土土管の墨書
図版 27　（1）堀 SX09 出土木簡
（2）堀 SX09 出土木簡（赤外線写真）
（3）堀 SX09 出土掛矢（保存処理後）
図版 28　井戸 SE83 出土遺物
図版 29　井戸 SE116 出土遺物
図版 30　掘立柱建物 SB88・91、井戸 SE114、溝 SD82、小穴 P95 出土遺物

図版 31　溝 SD84 出土遺物
図版 32　溝 SD84 出土須恵器大甕−1
図版 33　溝 SD84 出土須恵器大甕−2
図版 34　出土遺物
図版 35　出土遺物

挿　図　目　次

第 1 図　長岡京と調査地の位置（1/40000）…… iii
第 2 図　発掘調査地位置図（1/5000）…… 1
第 3 図　発掘調査前風景（北東から）…… 4
第 4 図　発掘調査作業風景（東から）…… 4
第 5 図　専門委員の視察（南から）…… 4
第 6 図　現地説明会風景（南から）…… 4
第 7 図　中学生の体験発掘（西から）…… 4
第 8 図　須恵器大甕の復元作業風景…… 4
第 9 図　全調査区検出遺構図（1/500）…… 5
第 10 図　1 トレンチ検出遺構図（1/200）…… 10
第 11 図　1 トレンチ土層図（1/80）…… 11
第 12 図　溝 SD30、柵 SA34 実測図（1/80）…… 12
第 13 図　柵 SA41 実測図（1/80）…… 12
第 14 図　柵 SA46 実測図（1/80）…… 13
第 15 図　土坑 SK33 実測図（1/50）…… 14
第 16 図　土坑 SK38 実測図（1/10）…… 14
第 17 図　土器棺墓 SX36 出土土師器皿・甕…… 14
第 18 図　土器棺墓 SX36 実測図（1/10）…… 15
第 19 図　掘立柱建物 SB37 実測図（1/80）…… 16
第 20 図　掘立柱建物 SB40 実測図（1/80）…… 17
第 21 図　1 トレンチ出土遺物実測図−1（1/4）…… 18
第 22 図　1 トレンチ出土遺物実測図−2（1/4）…… 19
第 23 図　2 トレンチ検出遺構図（1/200）…… 23
第 24 図　2 トレンチ土層図（1/80）…… 25
第 25 図　井戸 SE28・55・68、土管埋設遺構 SX52 ～ 54 実測図（1/80・1/400）…… 27
第 26 図　井戸 SE118・119・121・122、土管埋設遺構 SX19・123 実測図（1/80）…… 29
第 27 図　掘立柱建物 SB73 実測図（1/100）…… 30
第 28 図　溝 SD61、柵 SA62 実測図（1/80）…… 31
第 29 図　柵 SA77 実測図（1/80）…… 32
第 30 図　柵 SA78 実測図（1/80）…… 32
第 31 図　柵 SA129・131 実測図（1/80）…… 33

第 32 図　柵 SA130 実測図（1/80）…… 33
第 33 図　柵 SA132 実測図（1/80）…… 33
第 34 図　柵 SA133 実測図（1/80）…… 34
第 35 図　柵 SA134 実測図（1/80）…… 34
第 36 図　柵 SA80 実測図（1/80）…… 34
第 37 図　柵 SA81 実測図（1/80）…… 34
第 38 図　堀 SX09 実測図（1/80・1/200）…… 37
第 39 図　堀 SX09 4 区 掛矢・木簡出土状況実測図（1/40）…… 39
第 40 図　掘立柱建物 SB92 実測図（1/80）…… 40
第 41 図　井戸 SE83 実測図（1/40）…… 41
第 42 図　井戸 SE116 実測図（1/40）…… 42
第 43 図　掘立柱建物 SB88 実測図（1/80）…… 43
第 44 図　小穴 P95 遺物出土状況実測図（1/20）…… 45
第 45 図　掘立柱建物 SB91 実測図（1/80）…… 46
第 46 図　小穴 P15 ～ 18・72 実測図（1/80）…… 46
第 47 図　掘立柱建物 SB91 柱掘形遺物出土状況実測図（1/20）…… 47
第 48 図　掘立柱建物 SB96 実測図（1/80）…… 48
第 49 図　掘立柱建物 SB111 実測図（1/80）…… 49
第 50 図　掘立柱建物 SB113 実測図（1/80）…… 50
第 51 図　井戸 SE114 実測図（1/40）…… 51
第 52 図　溝 SD82・84 実測図（1/80）…… 52
第 53 図　溝 SD85 ～ 87 実測図（1/80）…… 53
第 54 図　溝 SD90 実測図（1/80）…… 54
第 55 図　溝 SD93 実測図（1/80）…… 55
第 56 図　土管埋設遺構 SX52・123、井戸 SE122 出土遺物実測図（1/2・1/4）…… 56
第 57 図　井戸 SE55 出土遺物実測図（1/4）…… 57
第 58 図　土管埋設遺構 SX54 出土遺物実測図（1/4）…… 58
第 59 図　堀 SX09 他出土遺物実測図（1/4）…… 58
第 60 図　井戸 SE71、水溜 SK108 出土遺物実測図（1/4）…… 59
第 61 図　堀 SX09 出土掛矢実測図（1/8）…… 59
第 62 図　堀 SX09 出土木簡実測図（1/4）…… 60
第 63 図　井戸 SE83 上層出土遺物実測図−1（1/4）…… 62
第 64 図　井戸 SE83 上層出土遺物実測図−2（1/4）…… 63
第 65 図　井戸 SE83 下層出土遺物実測図（1/4）…… 64
第 66 図　井戸 SE116 出土遺物実測図−1（1/4）…… 65

第 67 図　井戸 SE116 出土遺物実測図−2（1/4）…… 66
第 68 図　井戸 SE116 隅柱実測図（1/4・1/10）…… 67
第 69 図　井戸 SE116 横桟実測図（1/10）…… 68
第 70 図　掘立柱建物 SB91 出土遺物実測図（1/4）…… 69
第 71 図　掘立柱建物、小穴他出土遺物実測図（1/4）…… 70
第 72 図　井戸 SE114 出土遺物実測図（1/4）…… 71
第 73 図　溝 SD82 出土遺物実測図（1/4）…… 72
第 74 図　溝 SD84 出土土師器実測図（1/4）…… 73
第 75 図　溝 SD84 出土須恵器実測図−1（1/4）…… 74
第 76 図　溝 SD84 出土須恵器実測図−2（1/8）…… 75
第 77 図　溝 SD85 出土遺物実測図（1/4）…… 76
第 78 図　溝 SD90 出土遺物実測図（1/4）…… 79
第 79 図　２トレンチ出土瓦実測図（1/4）…… 80
第 80 図　井戸 SE114・116 出土木製品実測図（1/2・1/4）…… 81
第 81 図　井戸 SE66 全景（西から）…… 83
第 82 図　３トレンチ検出遺構図（1/200）…… 84
第 83 図　３トレンチ土層図（1/80）…… 85
第 84 図　３トレンチ出土遺物実測図（1/4）…… 86
第 85 図　４トレンチ検出遺構図（1/200）…… 89
第 86 図　４トレンチ土層図（1/80）…… 91
第 87 図　掘立柱建物 SB4001 実測図（1/80）…… 93
第 88 図　柵 SA4002 実測図（1/80）…… 95
第 89 図　柵 SA4003・4004 実測図（1/80）…… 96
第 90 図　溝 SD638・642 実測図（1/50・1/150）…… 97
第 91 図　掘立柱建物 SB4005 実測図（1/80）…… 98
第 92 図　掘立柱建物 SB4006 実測図（1/80）…… 99
第 93 図　掘立柱建物 SB4007 実測図（1/80）…… 100
第 94 図　掘立柱建物 SB4008 実測図（1/80）…… 101
第 95 図　掘立柱建物 SB4009 実測図（1/80）…… 102
第 96 図　井戸 SE636 実測図（1/80）…… 103
第 97 図　土坑 SK493 実測図（1/20）…… 104
第 98 図　土坑 SK645 実測図（1/20）…… 104
第 99 図　土坑 SK819 実測図（1/50）…… 104
第100図　溝 SD653 ～ 656 実測図（1/50・1/150）…… 105
第101図　井戸 SE636 上層出土遺物実測図（1/4）…… 106
第102図　井戸 SE636 下層出土遺物実測図（1/4）…… 106

第103図　土坑 SK539 他出土遺物実測図（1/4）…… 107
第104図　土坑 SK819 出土遺物実測図（1/4）…… 108
第105図　４トレンチ出土瓦実測図−1（1/4）…… 109
第106図　４トレンチ出土瓦実測図−2（1/4）…… 110
第107図　５トレンチ下層第２面全景（南東から）…… 113
第108図　５トレンチ上層検出遺構図（1/200）…… 115
第109図　５トレンチ下層第１面検出遺構図（1/200）…… 117
第110図　５トレンチ下層第２面検出遺構図（1/200）…… 119
第111図　５トレンチ土層図（1/80）…… 121
第112図　掘立柱建物 SB5001 実測図（1/80）…… 123
第113図　掘立柱建物 SB5003 実測図（1/80）…… 124
第114図　掘立柱建物 SB5004 実測図（1/80）…… 125
第115図　柵 SA5002 実測図（1/80）…… 126
第116図　溝 SD1121、土坑 SK1152 実測図（1/80）…… 127
第117図　溝 SD1122 実測図（1/80）…… 128
第118図　溝 SD1001 実測図（1/80・1/150）…… 129
第119図　溝 SD12 実測図（1/80）…… 130
第120図　土坑 SK1288・SK1289 実測図（1/80）…… 131
第121図　土坑 SK1323 実測図（1/20）…… 131
第122図　溝 SD1119 出土遺物実測図（1/4）…… 132
第123図　溝 SD1121 出土遺物実測図（1/4）…… 133
第124図　溝 SD1122 出土土師器実測図（1/4）…… 134
第125図　溝 SD1122 出土須恵器実測図（1/4）…… 135
第126図　溝 SD1001 出土土師器実測図（1/4）…… 136
第127図　溝 SD1001 出土須恵器・灰釉陶器実測図（1/4）…… 137
第128図　５トレンチ各遺構出土遺物実測図（1/4）…… 138
第129図　５トレンチ出土瓦実測図（1/4）…… 139
第130図　６トレンチ検出遺構図（1/200）…… 144
第131図　６トレンチ土層図（1/80）…… 145
第132図　落ち込み SX97 実測図（1/50）…… 147
第133図　６トレンチ各遺構実測図（1/80）…… 148
第134図　６トレンチ出土遺物実測図（1/4）…… 150
第135図　石器・石製品実測図（1/2）…… 152
第136図　石製品実測図（1/4）…… 153
第137図　鉄製品実測図（1/2）…… 154
第138図　銅製品・鉛製品実測図（1/1・1/2）…… 155

付　表　目　次

付表－１　トレンチ一覧表 …… 7
付表－２　１トレンチ出土遺物観察表 …… 161
付表－３　２トレンチ出土遺物観察表 …… 162
付表－４　３トレンチ出土遺物観察表 …… 179
付表－５　４トレンチ出土遺物観察表 …… 179
付表－６　５トレンチ出土遺物観察表 …… 182
付表－７　６トレンチ出土遺物観察表 …… 189
付表－８　石器・石製品観察表 …… 190
付表－９　金属製品観察表 …… 191
付表－10　報告書抄録 …… 194

第１章　はじめに

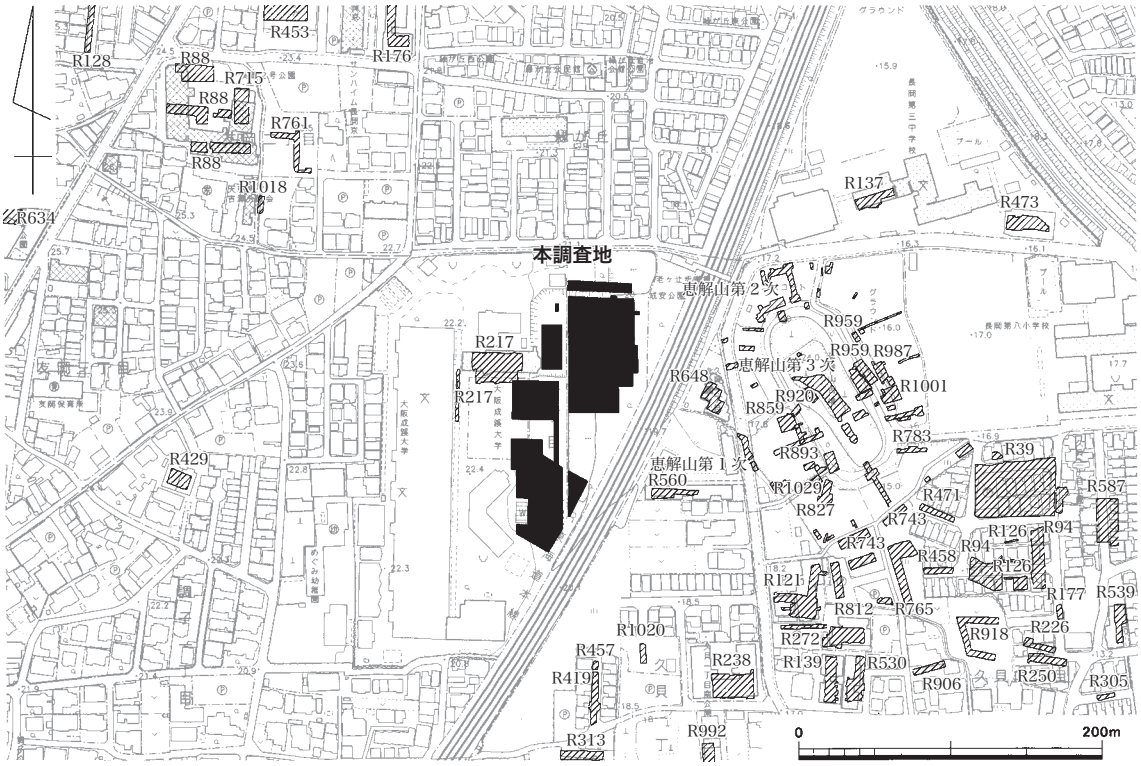
１　位置と環境

（１）位置と立地

長岡京市は、京都盆地の西南部に位置する 80,000 余人の人口を有する小都市で、北は京都市西京区と向日市、東は京都市伏見区、南は乙訓郡大山崎町、西は大阪府三島郡島本町の２市２町とそれぞれ境を接している。東西約 6.5km、南北約 4.3km、面積 19.18km^2 を有する市域内には、古山陰道、山陽道、久我畷、西国街道などの古道をはじめ、東海道新幹線、名神高速道路、国道 171 号線、JR 東海道本線（京都線）、阪急電鉄京都線などといった現代の主要な交通網が南北に縦走しており、また最近では市の南部地域を横断するように京都縦貫自動車道が開通するなど交通の至便な所であることは今も昔も変わりはない。

長岡京市の地勢をみると、京都盆地の西辺を限る丹波層群からなる西山山地と、そこから東に向かって派生する大阪層群で構成される丘陵地、おもに砂礫層からなる高位から低位にかけての段丘、桂川、小畑川、小泉川などの河川が形成した後背湿地や氾濫原などというように、おおむね西から東に向かって階段状に傾斜する地形をなしている。現在、丘陵地の多くは竹薮に覆われて緑豊かな景観を呈しており、段丘はおもに商業地や住宅地、農地として、そして東部の氾濫原は工業地域としての土地利用がなされている。

今回の調査地は、京都府長岡京市の南部地域に位置しており、阪急長岡天神駅から南南東に約



第２図　発掘調査地位置図（1/5000）

1.2km、JR 長岡京駅より南南西に約 1 km の地点にあたる調子一丁目 25 番 1 他に所在している。すぐ東側には JR 東海道本線が南北に走り、さらに東側には長岡第八小学校と長岡第三中学校が所在している。一方、西側には、北から南下する西国街道が方向を変えて南西方向に延びている。当地を地形的にみると、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する低位段丘Ⅰ上に立地していることが知られ、現地表面での標高は 20 ～ 21.6 m前後である。

（２）歴史的環境

調査地の周辺には、恵解山（いげのやま）古墳や南栗ケ塚古墳などといった古墳をはじめ、旧石器時代から近世に至るまでの重複遺跡である南栗ケ塚遺跡や友岡遺跡などが分布している。また、長岡京の条坊復原によると右京八条二・六・七町にまたがる所で、付近には西一坊大路と八条条間小路の交差点が想定されていた。さらに長岡京廃都後には、第 3 次山城国府が設置された可能性が指摘されていることなど、歴史的な環境に恵まれた地域であるといえる。以下では、周辺の遺跡の概要を説明する。

恵解山古墳は[注1]、調査地のすぐ東側に所在する全長 128 mに復元される前方後円墳である。これまでに 12 次におよぶ発掘調査が実施されており、後円部、前方部とも 3 段に築盛されていること、東西のくびれ部付近に形態と構造の異なる造り出しを備えていること、墳丘の傾斜面には葺石を施し、普通円筒、朝顔形埴輪の他、蓋形、家形、水鳥形、鶏形、甲冑形などの多彩な形象埴輪を樹立していることなどが判明している。埋葬施設は竪穴式石室と考えられており、結晶片岩や石英斑岩、竜山石など埋葬施設に使用されたとみられる他地域から搬入された石材が出土している。さらに、前方部の中央には武器類を中心とする副葬品のみを埋納した施設が存在し、最近の調査で斧や鋤先、鎌などの鉄製品や斧形の石製品などが出土したことから、複数の埋納施設を有している可能性が考えられるようになった。

南栗ケ塚古墳は、恵解山古墳の南東部に所在し、長岡京跡右京第 39 次調査[2]（以下では、長岡京跡を省略する）によって確認された埋没古墳である。14 m ×17 m程度の長方形に復元される方墳で、墳丘は後世に削平を受けて遺存していないが、幅 0.5 ～ 1 m、深さ 0.15 ～ 0.4 mほどの周溝内から円筒、朝顔形、家形などの埴輪が出土している。恵解山古墳の周堤に近接して営まれていること、単独で存在することなどを重視すれば、陪塚である可能性も考えられる。

調査地の南東部に位置する南栗ケ塚遺跡は、旧石器時代から近世に至るまでの重複遺跡であり、勝竜寺、久貝一丁目～三丁目、調子三丁目にかけての広範囲に所在している。まず旧石器時代では、右京第 39 次調査でナイフ形石器、同 121 次調査[3]で細石刃などが出土しているが、特に右京第 570 次調査[4]ではナイフ形石器とともに剥片資料が出土している。剥片資料の数点は原位置を保持しており、また接合資料が確認されるなど、注目される成果が得られている。縄文時代では、右京第 955 次調査[5]において前期の竪穴建物 1 基が確認された他、柱穴や土坑、窪みなどの遺構群が検出されている。土器や石器類のみならず、動物遺存体など出土遺物も多彩、豊富であって、近畿地方における縄文時代を研究する上で良好な資料が得られた。弥生時代に入ると、前期では右京第 473 次[6]と同第 964 次調査[7]で土坑が、中期では右京第 39 次と同第 587 次調査[8]で方形周溝墓、

右京第964次調査[9]で土坑などが確認されている。恵解山古墳の南東部に弥生時代の集落と墓地が営まれていたことが明らかになっている。古墳時代では、右京第94次調査[10]で流路内から初期須恵器が出土しており、また古墳の南西部にあたる右京第812次調査[11]で検出した落ち込み内から普通円筒、朝顔形、蓋形などの埴輪片がまとまって出土していることは注意すべきである。付近に、そうした埴輪を伴う古墳がかつて存在し、長岡京期以降に破壊された可能性が推察されている。埴輪は、黒斑を有するものが多いことから、恵解山古墳とおおむね同時期に比定することができ、陪塚の可能性もあながち否定できない状況である。平安時代に下ると、前期の遺構群が多彩な遺物とともに確認されている。右京第121次[12]と同第272次調査[13]で掘立柱建物と土坑が9世紀前半代の遺物とともに確認されており、また右京第139次[14]と同第530次調査[15]では南北に廂をもつ大型建物と柵が、さらに右京第419次調査[16]でも南北に廂をもつ大型の東西棟建物などが確認されている。そして、右京第812次調査[17]の落ち込み内からは、先述した埴輪片とともに須恵器、土師器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器など9世紀後半代の遺物がまとまって出土していることも注目されている。こうした平安時代前期の遺構や遺物は、『日本紀略』延暦16（798）年の条に「遷任山城国治於長岡京南」と記載されている山城国府（第3次）に関連している可能性が指摘されていることは、興味深いことである。

一方、調査地の西側に所在する友岡遺跡は、縄文時代から中世にかけての重複遺跡であり、友岡一丁目〜四丁目、花山三丁目などの範囲に所在している。縄文時代では、右京第453次調査[18]で確認された自然流路跡から、縄文土器、ナイフ形石器、打製石鏃、石匙、楔形石器、磨石などが出土しており、縄文中期から後期にかけての集落を想定することができる。飛鳥時代になると、右京第95次[19]と同第128次調査[20]で確認した自然流路から土師器や須恵器などの遺物がまとまって出土した他、右京第429次調査[21]で土坑、同第430次調査[22]で竪穴建物や溝などが確認されており、集落の存在が推定されている。

2　調査経過

今回の調査は、学校法人立命館が計画した立命館中学校・高等学校の移転、建設工事に伴う発掘調査として実施したものである。計画内容によれば、建設用地は大阪成蹊大学芸術学部のキャンパス約42,489㎡で、大学がグラウンドとして利用しているキャンパスの東側に新たな校舎や体育館を建設し、対して大学の学舎が立ち並ぶ西側は既存の建物を解体してグラウンドや野球場にするものであった。

キャンパス内では、過去に右京第217次調査[23]が実施されており、長岡京期のいわゆる甕据え付け建物の存在が確認されていたが、広大な敷地の割に情報量が乏しいことから、まず試掘調査を行って遺構・遺物の有無、およびその広がりの範囲を確認し、その状況に応じて本調査が必要か否かを判断することになった。試掘調査[24]は、調査対象地に3カ所の延べ面積613㎡の試掘トレンチを設定し、平成23（2011）年2月14日から3月25日まで行った。その結果、試掘1トレンチでは柱掘形や溝、土坑などが検出され、また試掘3トレンチでは幅約4.2 m、深さ約2.1

第３図　発掘調査前風景（北東から）

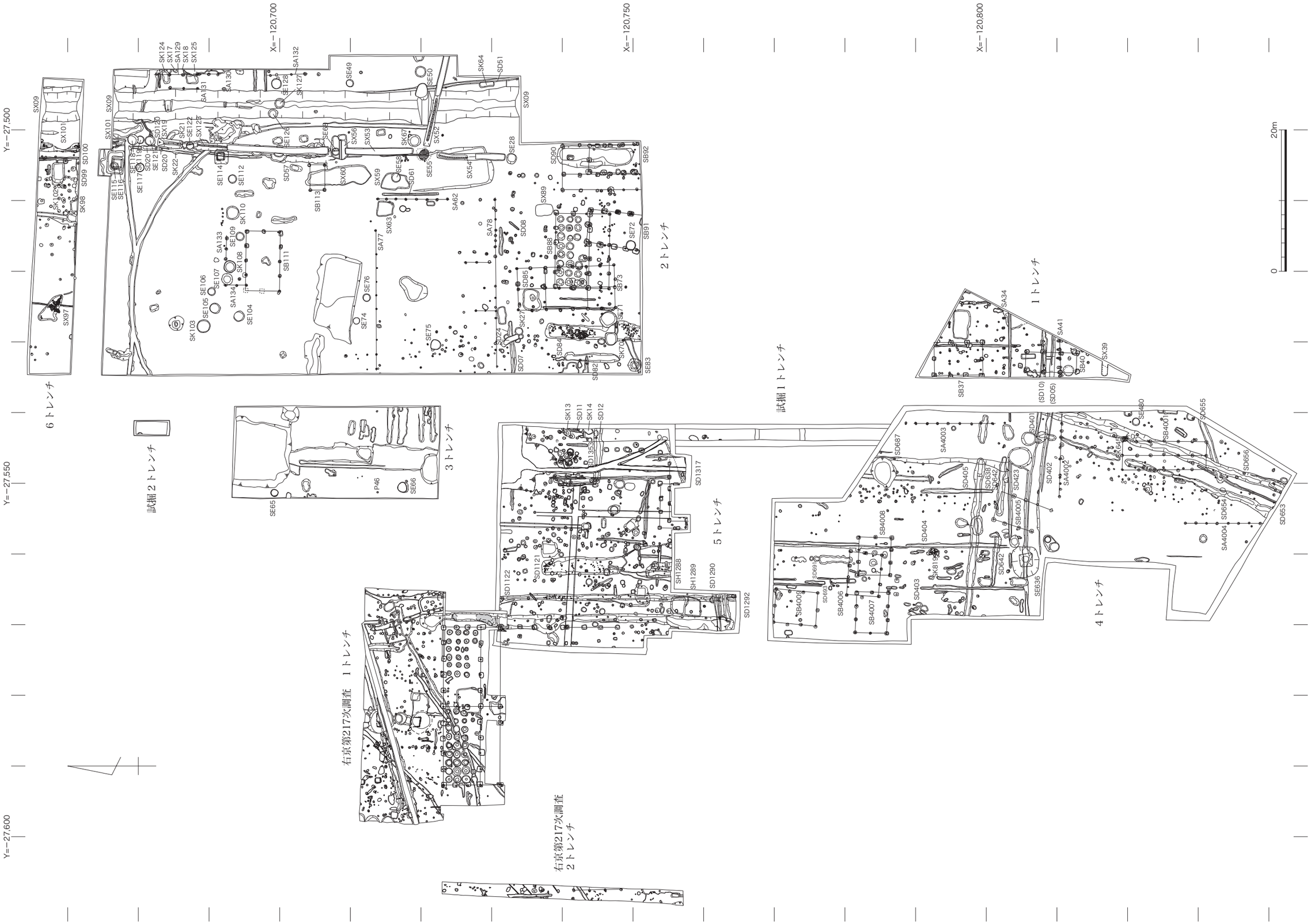
第４図　発掘調査作業風景（東から）

第５図　専門委員の視察（南から）

第６図　現地説明会風景（南から）

第７図　中学生の体験発掘（西から）

第８図　須恵器大甕の復元作業風景



第９図　全調査区検出遺構図（1/500）

付表－１　トレンチ一覧表

トレンチ名	調　査　期　間	調査面積
試掘トレンチ	平成 23（2011）年２月 14 日～３月 25 日	613㎡
１トレンチ	平成 23（2011）年４月４日～５月 16 日	188㎡
２トレンチ	平成 23（2011）年４月４日～平成 24（2012）年３月 30 日	3,081㎡
３トレンチ	平成 23（2011）年４月４日～５月 16 日	368㎡
４トレンチ	平成 23（2011）年６月６日～ 12 月 16 日	1,662㎡
５トレンチ	平成 23（2011）年 10 月 28 日～平成 24（2012）年３月 28 日	702㎡
６トレンチ	平成 23（2011）年 11 月 17 日～ 12 月 21 日	233㎡

ｍもある南北方向の堀など注目に値する遺構を確認できたことによって、敷地の全域に遺構、遺物の埋没している可能性の高いことが予測された。このため、引き続き本調査を行うことが決定したが、大阪成蹊大学の授業や行事の関係もあって、調査が可能な地点に１～６までのトレンチを順次設定して調査を進めることになった。

本調査にあたっては、まず４月４日から１～３トレンチの調査に着手したが、そのうち最も面積の大きな２トレンチについては残土置き場の都合から南部と北部に分けて行った。１トレンチでは、江戸時代の建物や柵、長岡京期～平安時代の火葬墓などを検出したが、３トレンチは遺構がほとんど遺存していない状況であり、ともに５月 16 日に終了した。６月６日からは４トレンチの調査を開始したが、このトレンチも南北２回に分けて行うことになった。４トレンチの南部では、江戸時代の掘立柱建物や柵、井戸などを検出して 10 月 17 日に終了した。10 月 18 日から引き続き北部の調査を進め、長岡京期から平安時代にかけての井戸や掘立柱建物などの遺構を確認して 12 月 16 日に終了した。５トレンチは､10 月 28 日から翌年の３月 28 日まで実施し、長岡京期と考えられる掘立柱建物や柵、溝などを検出したが、トレンチを部分的に拡張するなどした。最も遅れて掘削した６トレンチは、11 月 17 日から 12 月 21 日まで実施した。２トレンチの北部と５トレンチについては、年末の 12 月 27 日に調査を一時中断し、翌平成 23（2012）年の１月５日から調査を再開し、２トレンチの北部が終了した３月 30 日をもって現地での全調査を終了することができた。２トレンチでは、江戸時代の井戸と土管埋設施設、掘立柱建物、柵をはじめ戦国期の堀、長岡京期～平安時代の甕据え付け建物、掘立柱建物、井戸など各時代各種類の遺構を検出し、多大な成果を得ることができた。

調査期間中は、７月 11 日に大阪成蹊大学芸術学部生 80 名余りが授業の一貫として見学に訪れたのを契機として、８月４日に江戸時代や戦国期を中心とする１回目の調査成果を報道機関に

公表し、8 月 30 日には当センター専門委員の視察を受けた。そして、8 月 31 日には平安時代と長岡京期の調査成果を報道機関に公表した。現地説明会は、当初 9 月 3 日に計画して準備を進めたが、台風 12 号の影響による警報発令により 9 月 10 日に延期して開催したところ、150 人余りの参加者を得ることができた。その後、11 月 1・2 日には長岡京市内の中学 2 年生を対象にした体験発掘、11 月 10 日には大山崎町の中学 2 年生の体験発掘を受け入れるなどした。

第２章　調査の成果

１　１トレンチ

１トレンチは、校地南側にあたる体育館建設予定地の東端部分に設定したものである。調査開始時はコンクリート擁壁を隔てた西側は、大阪成蹊大学が使用中であったことから、調査可能なグラウンド部分からトレンチを設定したため、南北が30ｍ、東西が13ｍの三角形トレンチとなっている。調査の結果、近代、江戸時代、平安時代、長岡京期の遺構、遺物が検出された。なお調査終了後は土置き場の関係から直ちに埋め戻しを行っている。

トレンチ内での層序は、厚さ約0.3～0.7ｍの工場建設時盛土の下に、灰色砂質土（第２層）、明褐色砂質土（第３層）の薄い堆積があり、それらを除去するとトレンチ南側で、畦の盛り上がりを挟んで東西方向の溝SD05と溝SD10が検出される。また南側では直径約３ｍの円形の野井戸が確認された。これらは工場以前の近代水田耕作に伴うものである。この溝SD10より北側ではマンガンを含んだ灰色～黄灰色砂質土（第11・12層）の薄い堆積があり、これを除去するとにぶい褐色粘質土（第26層）の地山に至る。この面で近世～長岡京期の遺構が検出された。一方南側では溝SD05の南側が0.3～0.4ｍほど低くなっており（落ち込みSX35）、全面ににぶい褐色砂礫土が堆積していた。また底部付近では黄灰色砂質土の薄い堆積が認められた（第11図）。これらの下から遺構が検出された。検出面の標高は北側で19.1～19.2ｍ、南側で18.7ｍである。またトレンチの中心国土座標は、X=−120,800、Y=−27,530である。

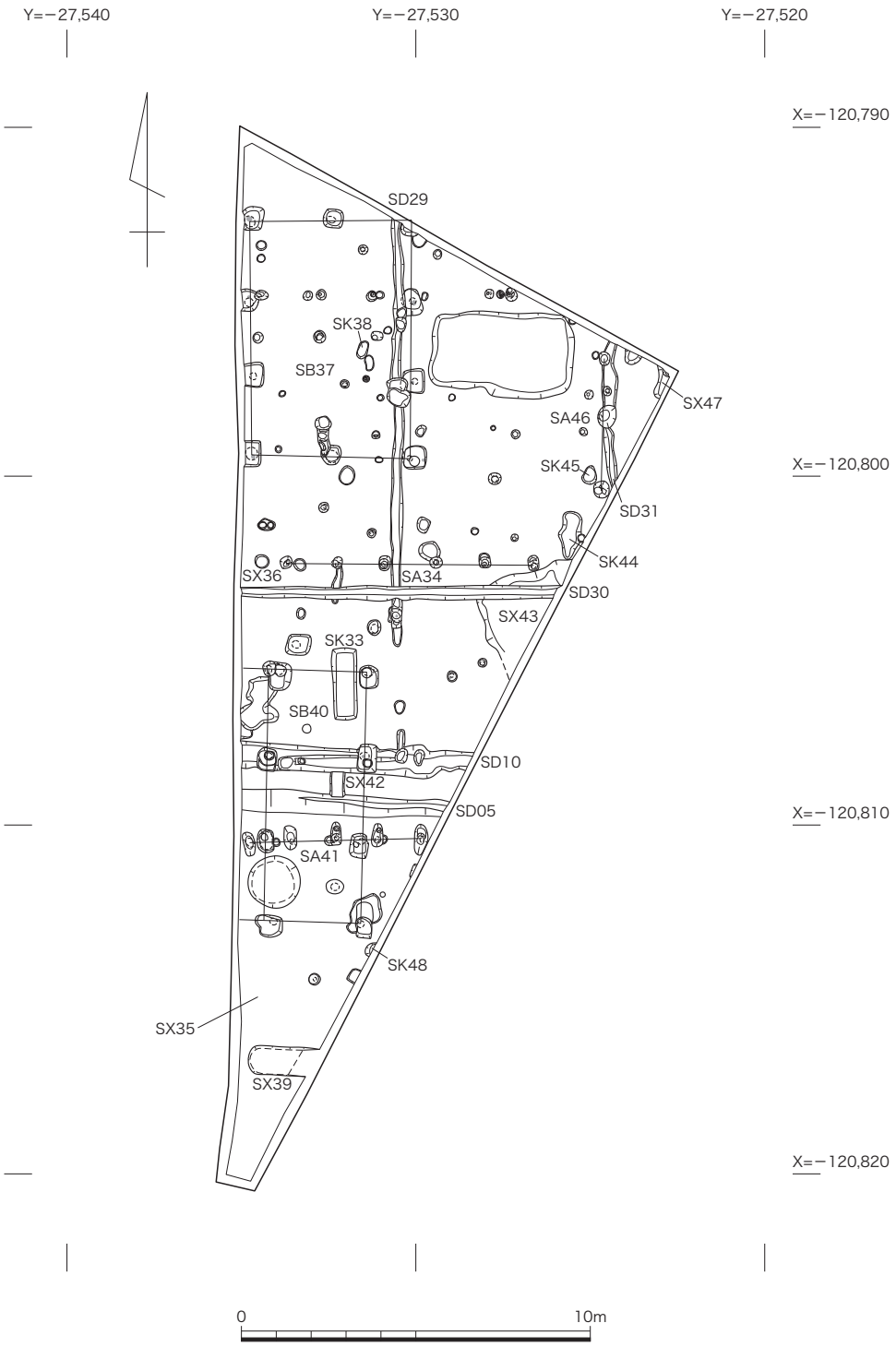
（１）検出遺構

Ａ．江戸時代の遺構

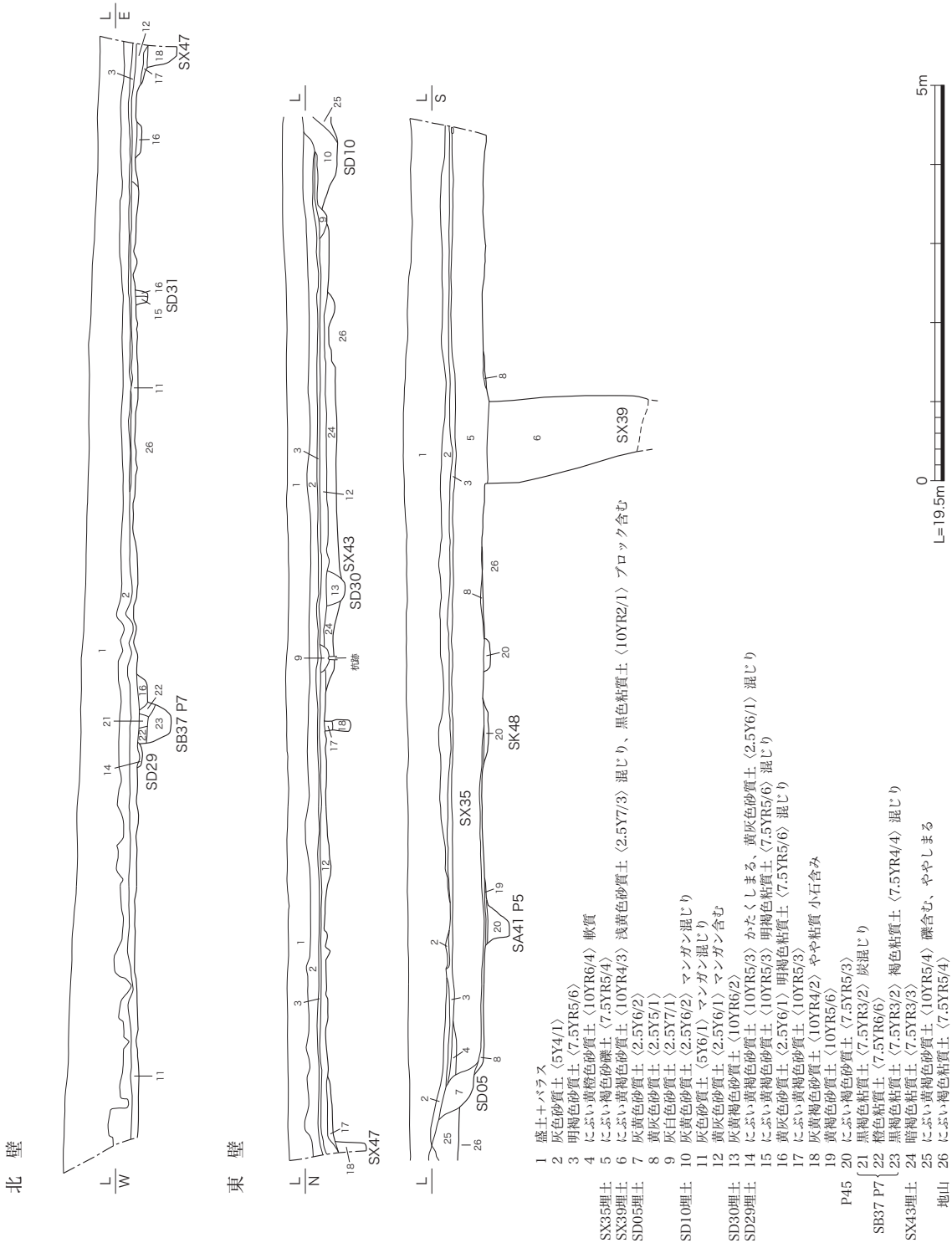
溝SD29・31（第10図）　調査地北部で検出された南北方向の小規模な溝である。幅0.3～0.4ｍ、深さ0.1ｍで、埋土はにぶい黄褐色の砂質土である。両溝の距離は６ｍで、溝SD29は直線的であるが、溝SD31はやや湾曲気味である。共に土師器、染付磁器等が出土している。

溝SD30（第12図）　調査地中央付近で検出された東西方向の溝である。幅0.3～0.4ｍ、深さ0.2ｍで、調査地東端ではさらに深く落ち込んでいて0.35ｍである。この溝は幅に比べて深く、断面も台形状に掘り込まれるなど、上記の溝SD29・31とは深さ、形状が異なっている。埋土は４層で、最下層に暗褐色粘質土があり、褐色砂質土、にぶい黄褐色土、褐色砂質土の順に堆積している。溝内からは土師器、陶器、桟瓦片、鉛製有孔円盤などが出土している。この溝は柵SA34と一連の施設と考えられるものである。

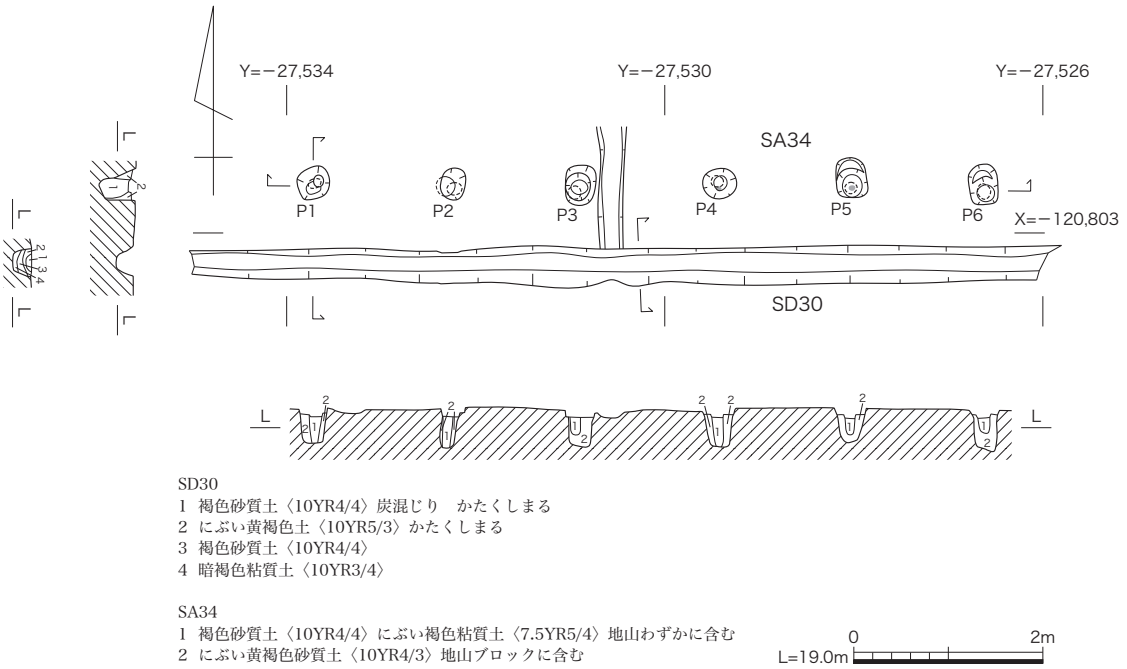
柵SA34（第12図）　溝SD30の北側に平行する東西方向の柵列で、５間分が検出された。溝SD30との距離は中心で約0.8ｍである。柱掘形は0.3～0.4ｍの平面円形～楕円形を呈し、深さは0.3～0.4ｍで、内部には直径0.1ｍの細い柱痕が残されている。柱痕は掘形底部まで達していないものもあり、間隔は約1.4ｍである。掘形内からは土師器片、陶器片などが出土している。位置や埋土の類似性などから溝SD30とセットとなる遺構と思われる。おそらく何らかの



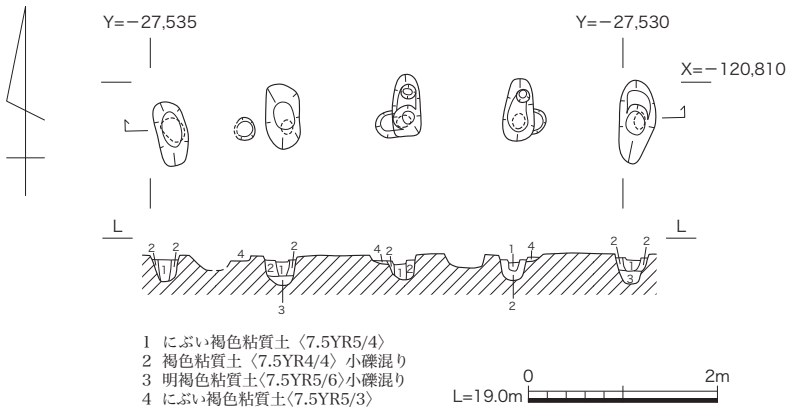
第10図　1トレンチ検出遺構図（1/200）



第 11 図　1 トレンチ土層図（1/80）



第 12 図　溝 SD30、柵 SA34 実測図（1/80）

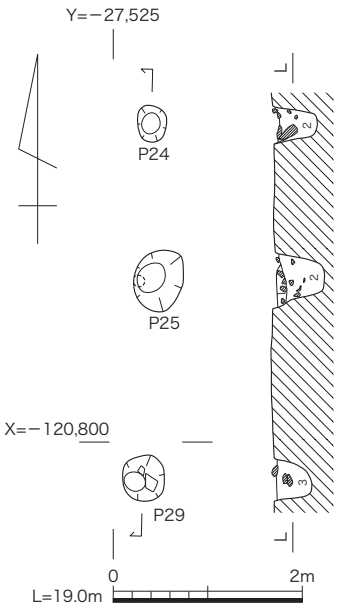


第 13 図　柵 SA41 実測図（1/80）

遮蔽施設とみられるが、具体的な構造や性格に関しては不明である。

柵 SA41（第 13 図）　調査地の南側の一段下がった個所から検出された柵列である。円形と楕円形の掘形からなっており、2 時期の建て替えによるものと見られる。平面円形のものは直径約 0.2 ～ 0.5 m、深さ 0.1 mで、楕円形の柱掘形に切られている。柱痕は確認できないが、間隔は約 1.5 mである。平面楕円形のものは東西 0.3 m、南北 0.6 ～ 0.8 m、深さは約 0.3 mである。内部には直径約 0.1 ～ 0.15 mの柱痕があり、掘形底部にまで達していないものもある。柱間は約 1.25 mで、このうち 2 基の柱掘形には、0.3 m北側に柱痕が認められた。楕円形に掘られたのは柱の位置変更が原因だったのかもしれない。遺物が少ないため時期は不明であるが、近世と見られる円形の柱掘形を切って同一場所に作られていることなどから近世の遺構と判断したものである。

柵 SA46（第 14 図）　調査地北東隅で検出された南北方向の柵列で、３基分の掘形が確認されている。北側から P24 は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.4 m、P25 は直径 0.5 ～ 0.6 m、深さ 0.5 m、P29 は直径 0.4 ～ 0.5 m、深さ 0.4 mで、いずれも比較的深く、また埋土に小礫を多く含んでいるのが特徴である。柱痕は P25 以外確認できていないが、掘形の間隔は北から 1.6 m、2.1 mである。また P25 からは土師器の皿と共に朱漆と黒漆を使った漆器の皮膜が出土している。



1　橙色粘質土〈5YR6/6〉
2　褐灰色粘質土〈7.5YR4/1〉
　　橙色粘質土〈7.5YR6/6〉ブロック含む
3　褐灰色粘質土〈5YR4/1〉
　　にぶい赤褐色粘質土〈5YR4/4〉混じり

第 14 図　柵 SA46 実測図（1/80）

落ち込み SX39　調査地の南端部で検出された東西方向の落ち込みである。調査地内より東に延びており、約２m分が検出された。幅は 0.8 m、深さは２mまで掘り下げたが底部は確認できなかった。ほぼ垂直に掘り下げていて、埋土はにぶい黄褐色砂質土のみであり、一気に埋め立てられたことがわかる。埋土内からは近世陶器・磁器、キセルなどが出土している。

検出当初は性格について不明であったが、２トレンチにおいて同様の遺構が検出され、これが内部に土管を据えた導水施設であることが判明した。それによれば約３mの深さに垂直に溝を掘り、底部に土管を据えて周囲をグリ石で充填した後埋め戻している。水は井戸から導いており、おそらく西側の調査地外に井戸が存在したものと見られる。詳細に関しては２トレンチの土管埋設遺構を参照されたい。

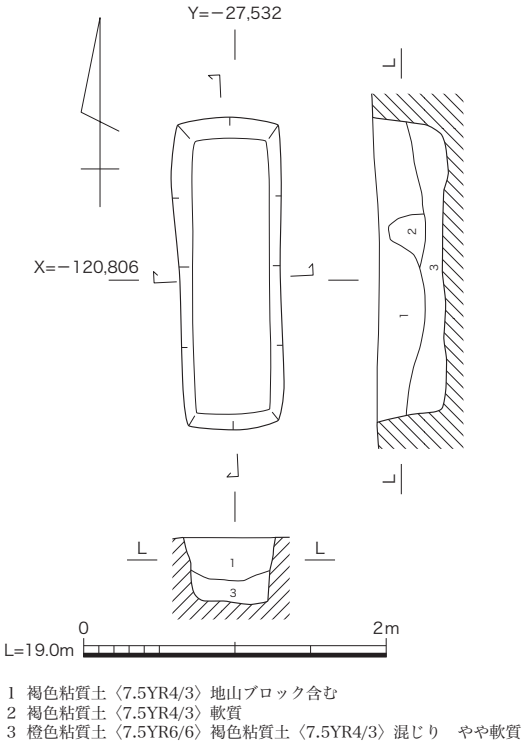
落ち込み SX47　調査地東隅で検出された不整形な落ち込みで、深さは 0.3 mである。部分的な検出であるが桟瓦片、磁器小片などが出土している。

土坑 SK48　調査地南部の東壁際から検出された平面円形の落ち込みで、直径約 0.5 m、深さ 0.1 mの浅いものである。落ち込み SX35 によって削平されているようであるが、近世の磁器が出土している。

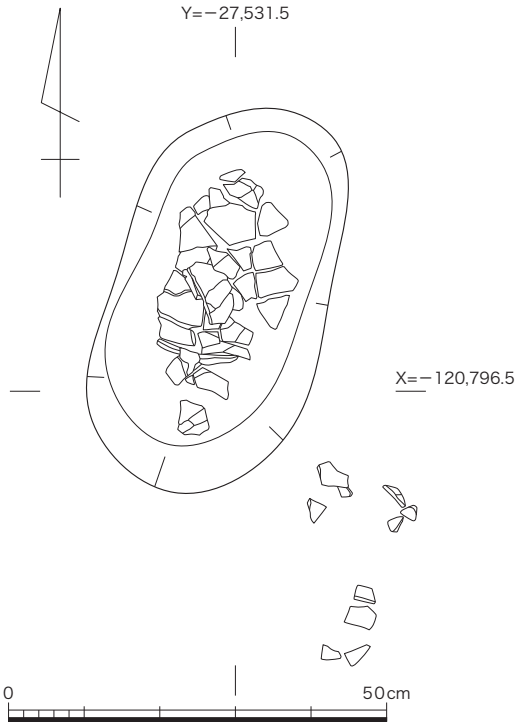
B．平安時代の遺構

土坑 SK33（第 15 図）　調査地中央付近で検出された平面長方形の土坑である。南北 2.1 m、東西 0.7 m、深さ 0.4 mで、埋土は３層である。基本的に上層の褐色粘質土と下層の橙色粘質土があり、部分的に褐色の粘質土がブロック状に含まれている。形状から墓壙の可能性もあるが、遺物がまったく含まれておらず、時期も不明である。方位や形状、掘立柱建物 SB40 と重なることなどから平安時代に含めている。

土坑 SK38（第 16 図）　調査地北西部で検出された平面楕円形を呈する土坑である。南北 0.5 m、東西 0.3 m、深さ 0.1 mの浅いもので、土師器の甕が２個体出土している。土坑の周囲にも破片が散見されるが性格に関しては不明である。



第 15 図　土坑 SK33 実測図（1/50）

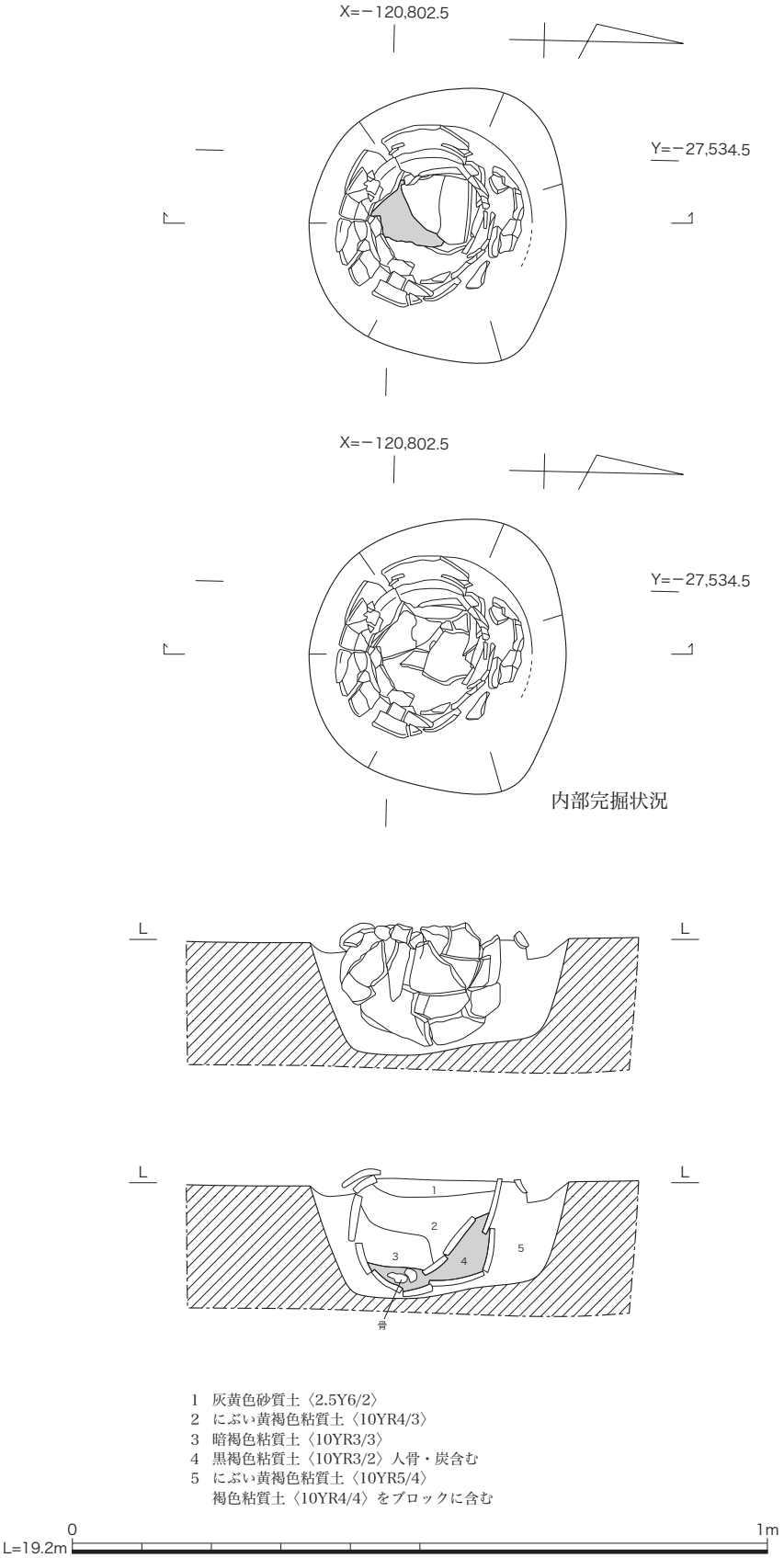


第 16 図　土坑 SK38 実測図（1/10）

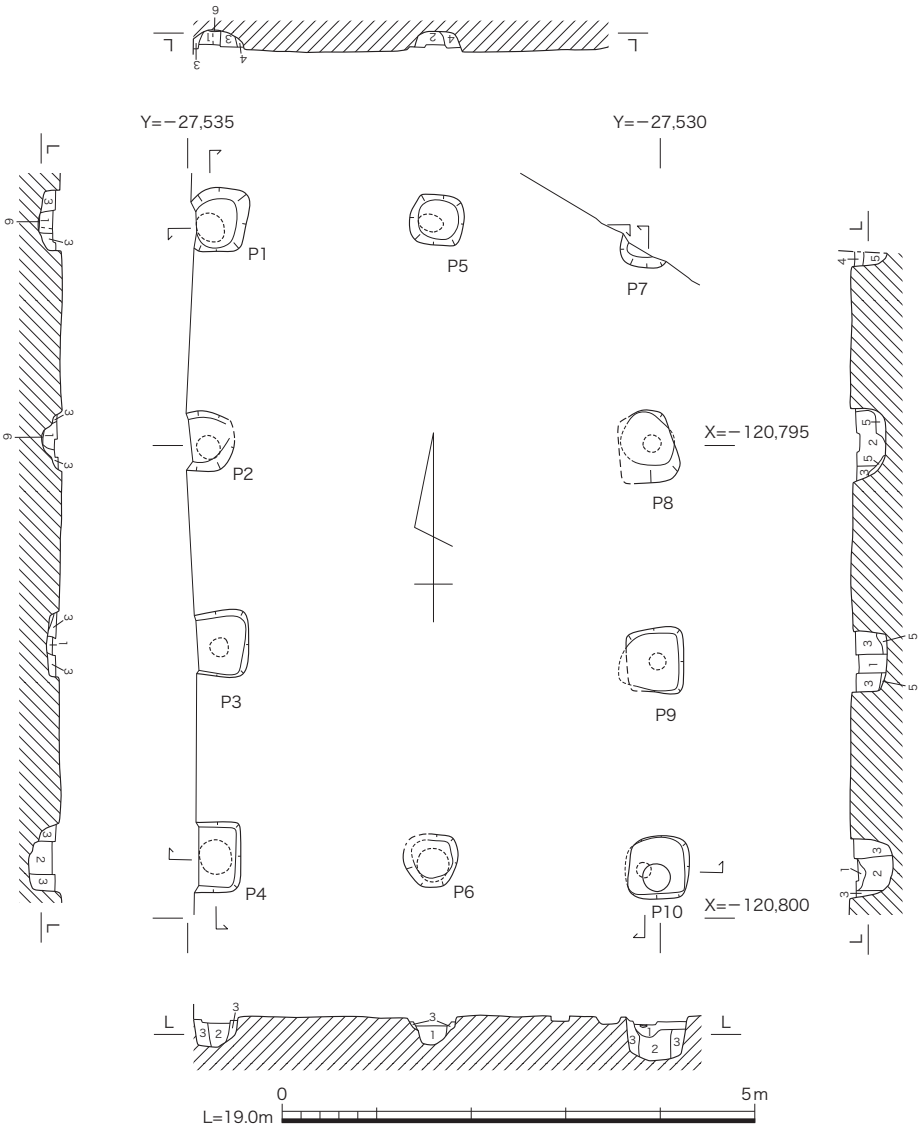
土坑 SK44　調査地北東部で検出された平面不整形な土坑である。南北 1.7 m、東西 0.7 m、深さ 0.1 mで平安時代の土師器皿などが出土している。

土器棺墓 SX36（第 17・18 図）　調査地中央西辺で検出された土器棺墓である。南北 0.37 m、東西 0.4 m、深さ 0.2 mの土壙内部に火葬骨を入れた土師器の甕を納め、土師器の皿で蓋をしたものである。検出当初の状況は水田開墾時による削平のため皿の口縁部と甕の頸部付近が確認された（図版４左上）。その後内部を掘り下げると、甕口縁部や皿底部片が落ち込んでいる状況が確認され、埋納後程なくして上部が落ち込んだことが推定された（図版４右中）。甕内部に落ち込んでいる土器片を除去すると、火葬骨を含んだ黒褐色粘質土が約３～５cm の厚さで堆積していた（図版４左下）。内部は火葬骨のみで、副葬品などは認められなかった。

第 17 図　土器棺墓 SX36 出土土師器皿・甕



第 18 図　土器棺墓 SX36 実測図（1/10）



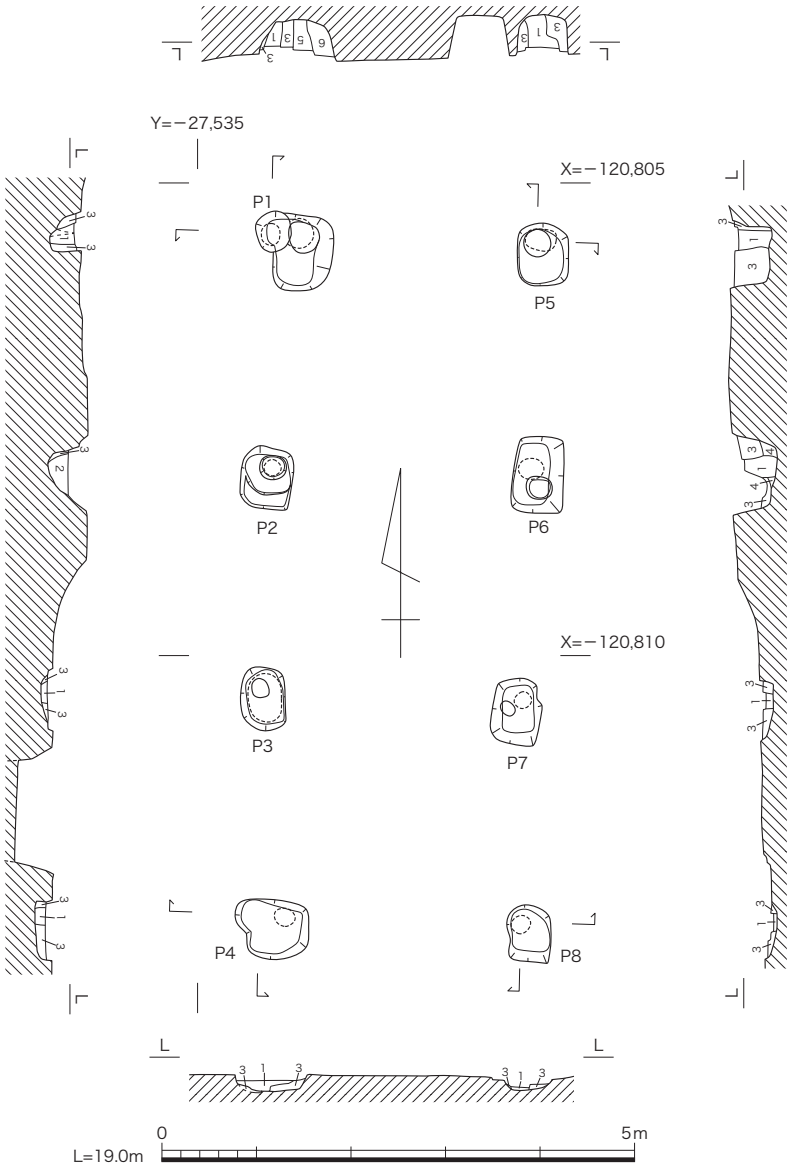
1 黒褐色粘質土〈7.5YR3/2〉炭混じり
2 黒褐色粘質土〈7.5YR3/2〉　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉含む
3 褐色粘質土〈7.5YR4/4〉　黒褐色粘質土〈7.5YR3/2〉混じり
4 橙色粘質土〈7.5YR6/6〉
5 にぶい橙色粘質土〈7.5YR6/4〉
6 灰白色粘質土〈5Y7/2〉

第19図　掘立柱建物SB37実測図（1/80）

また土壙内からも遺物は出土していない。長岡京期の遺構の可能性もあるが、都の中での埋葬は禁止されており、これまでも類例がない。また奈良時代の遺構とするには今回の調査を含め、これまで周辺では同時期の建物は検出されておらず疑問が残る。長岡京期以外とすれば遷都直後の時期、第３次山城国府との関連が考えられる。現段階ではその可能性を指摘するにとどめておきたい。

C．長岡京期の遺構

落ち込み SX42　調査地南の水田に伴う東西溝SD05・10に挟まれるように検出されたもの



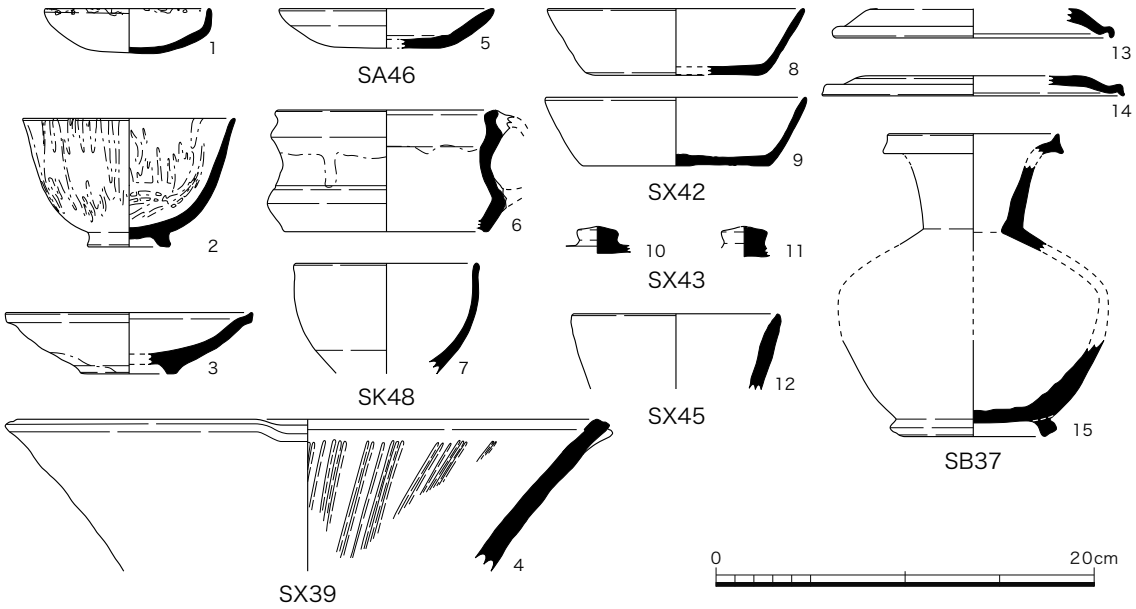
1　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉
2　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉　橙色粘質土〈7.5YR6/6〉混じり
3　橙色粘質土〈7.5YR6/6〉　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉ブロック含む
4　にぶい褐色粘質土〈7.5YR5/4〉

第 20 図　掘立柱建物 SB40 実測図（1/80）

である。南北を切られているため全形は不明であるが南北方向の溝の可能性もある。幅 0.4 m、深さ 0.1 m、長さは 0.7 m分を確認している。狭い範囲ではあるが、須恵器杯、土師器皿、炭などがまとまって出土している。

落ち込み SX43　調査地中央東辺で検出された広く浅い落ち込みである。調査地の外に広がるため規模は不明であるが、深さは 0.1 m、東西・南北共に 3 m以上の平面方形を呈すると見られるものである。埋土は暗褐色粘質土で、長岡京期の遺物を少量含んでいた。

土坑 SK45　調査地北東部で検出された平面不整円形の土坑で、南北 0.5 m、東西 0.4 m、



第21図　1トレンチ出土遺物実測図−1（1/4）

深さ0.2 mである。南側が深く、北側はなだらかに浅くなっている。内部から土師器食器片、須恵器杯片などが出土している。

掘立柱建物SB37（第19図）　調査地北西部で検出された東西2間、南北3間の南北棟建物である。柱掘形は棟持柱のみ一回り小さく一辺0.5 m、他は一辺0.6～0.7 mの隅円方形で、深さは0.2～0.4 mである。内部には直径0.2～0.3 mの柱痕が残り、抜き取りにより広がっているようであるが、柱間は2.25 mである。このうち南東隅の柱掘形P10の柱痕からは、須恵器の壺L・杯蓋などが出土している。

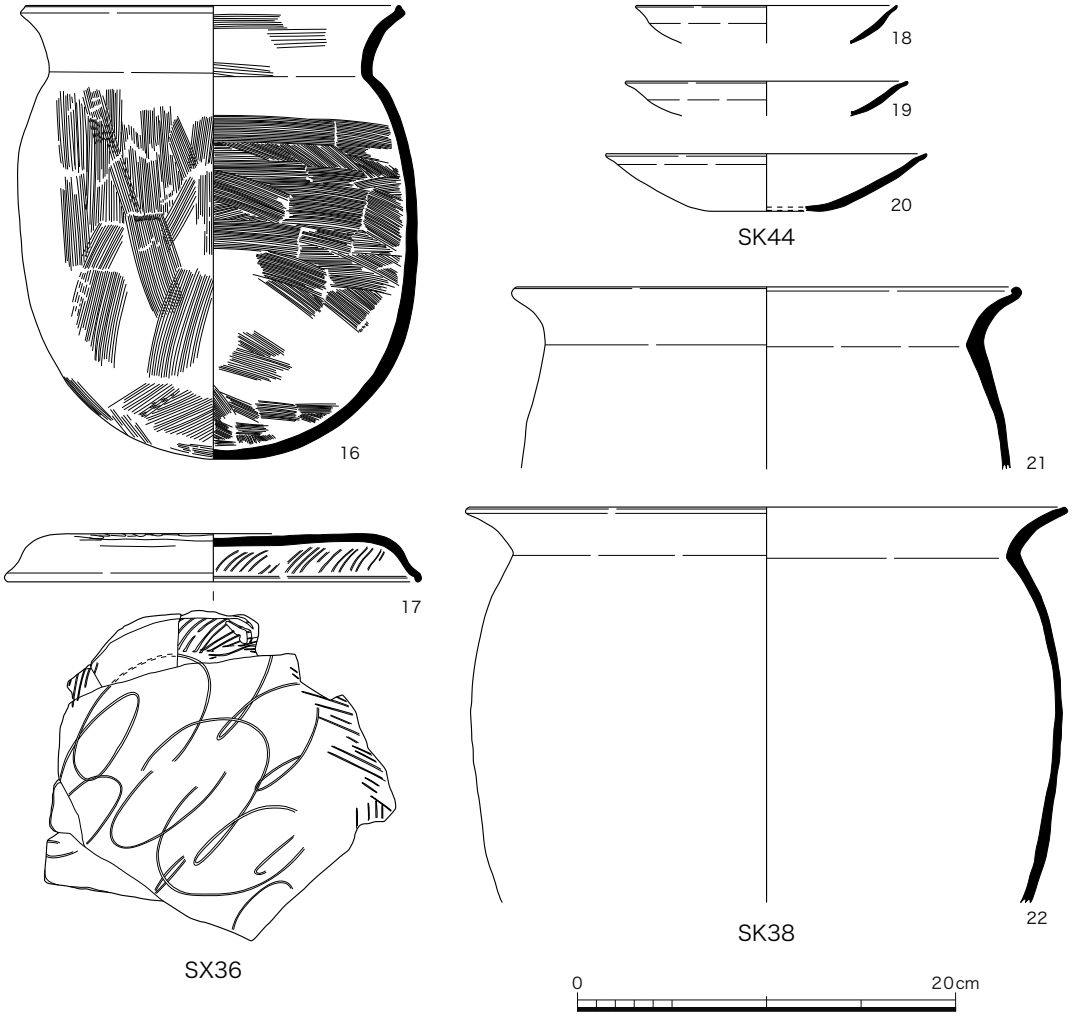
掘立柱建物SB40（第20図）　調査地南部で検出された建物で、南北方向の柱列が2条確認されている。おそらく東側の柱列は廂にあたり、西側の柱列が身舎にあたるものと見られる。この状況から東西2間、南北3間の南北棟の東に廂が付く建物とみられる。南半分は落ち込みSX35によって削平されており、掘形底部がわずかに残されていた。柱掘形は東西が0.4～0.6 m、南北が0.6～0.8 mの隅円長方形のものが大半である。深さは残りの良い北半部で0.4～0.5 m、南半部では0.1～0.2 mである。内部には直径約0.2 mの柱跡が残り、柱間は南北が2.4 m、東西が2.7 mである。このうち北西のP1の掘形は全体に東寄りに掘られており、このため柱の位置を変更して掘形北西部を拡張して柱を立てている。

（2）出土遺物

A．近世の遺物（第21図）

落ち込みSX39出土遺物　1は土師器皿で、口縁端部には油煙が付着する。2は黄ばんだ素地に呉須で粗い線描き文様を描く。高台畳付部分のみ釉を掻く。肥前産の染付碗。3は、いわゆる口縁部に溝を巡らす皿。砂目積みの痕跡。高台のみ露胎で、ヘラ削りした高台内面は三日月形を呈する。唐津産。4は、6本単位の櫛目を施し、小さな片口を作る擂鉢。丹波産。

柵SA46出土遺物　土師器皿（5）はP25から出土したもので、見込みに圏線が巡る。京都



第 22 図　１トレンチ出土遺物実測図－２（1/4）

産を模倣した在地産とみられる。他に朱漆と黒漆を使った漆器の皮膜が出土している。

土坑 SK48 出土遺物　６は､片側に把手が付く水差しか。屈曲する口縁部上半を施釉しており、把手の下方にはヘラ描きがある。７は、口縁端部が少しくびれる。内外面を丁寧に施釉する。これらの遺物は、概ね 17 世紀前半を中心とする時期に比定される。

Ｂ．平安時代の遺物（第 22 図）

土器棺墓 SX36 出土遺物　16 の甕は蔵骨器として利用されていたものである。直立気味に開く口縁部と、やや長胴で丸い底部を持った体部からなっている。内外面はハケメで仕上げているが長岡京期では一般的に見受けられないタイプである。そのため時期決定の判断は困難である。

17 は蔵骨器の蓋として利用されていた土師器の皿である。口縁端部を外反させた後、上方に突出させる。口縁部内面には放射状の暗文、内面には螺旋状の暗文を施している。遺構でも述べたように奈良時代の遺構・遺物が周辺で見られない状況と、近年暗文を有する土器は長岡京期においても存在することが判明しており、少なくとも長岡京期頃には比定できよう。ただし都内での埋葬が禁止されているという面から、遷都直後の時期、第３次山城国府との関連で考えておき

たいが検討を要する。

土坑 SK38 出土遺物　21 は口縁端部を突出させるタイプのもの、22 は長胴で口縁部が鋭く屈曲して端部を丸く納めるものである。表面は剥離しており、ハケメなどの調整はまったく残っていない。9 世紀初頭か。

土坑 SK44 出土遺物　18 ～ 20 は土師器椀である。これも非常に残りが悪く、器表面はすべて剥離している。9 世紀末頃と考えられ、おそらく第 4 次山城国府への移転時期に相当する遺物と見られる。図示したもの以外に土師器皿・甕片、須恵器杯類・壺片、黒色土器片などが出土している。

C．長岡京期の遺物（第 21 図）

落ち込み SX42 出土遺物　8・9 は、須恵器杯 A。8 は灰色で硬質であるが、9 は白灰色を呈し軟質である。他に土師器皿、炭などが出土している。

落ち込み SX43 出土遺物　10 は須恵器杯蓋、11 は土師器杯蓋でいずれもつまみの破片である。12 は製塩土器の口縁部片である。他には土師器甕、須恵器の壺・甕片、瓦片などが出土している。

掘立柱建物 SB37 出土遺物　図示したのは南東隅の P10 の柱痕から出土したもので、13・14 は須恵器杯蓋の口縁部片。15 は須恵器壺 L の口縁部・頸部・底部片である。接合しないが同一個体である。底部内面と口縁端部の上面には灰が付着する。他に土師器食器類・甕の破片、須恵器杯類・甕、黒色土器の破片などが出土している。

２　２トレンチ

２トレンチは、調査地北東部の校舎建設予定地の東側に設定したものである。１トレンチでも述べたごとく、調査開始時は大阪成蹊大学が使用中であり、調査可能な東側グラウンド部分のうち南半部分にトレンチを設定した。これは秋季に行われる大学の学園祭においてグラウンド北部が駐車場としての利用がなされるためで、学園祭終了後に北側を拡張し、合わせて南側の一部を埋め戻している。調査の結果、近代、江戸時代、戦国期、平安時代、長岡京期の遺構・遺物が検出された。トレンチ中心の国土座標は、X=−120,710、Y=−27,510 である。

調査地北半部は以前の工場建設時にかなり削平されているため、基本層序は南部を中心に述べる（第 24 図)。工場建設時の盛土の下には部分的に水田耕作土が残り、床土を除去すると近世遺物を包含するにぶい黄褐色砂質土（南壁第４層）が堆積している。これらを切り込んで近世末〜近代の井戸・水溜などが掘られている。この井戸と水溜はセットの状態で調査地内全体に分布していた。黄褐色砂質土を除去した段階で、南部では江戸時代の遺構が確認され、さらにその下に平安時代、長岡京期の遺物を包含する黒褐色粘質土（南壁第８層)、褐色粘質土（南壁第９層）が堆積している。ただしこれらの層が確認できるのは南壁周辺のみであり、北部・西部においては基本的に盛土の直下で地山面となり、この面で遺構が検出されている。検出面の標高は、北西部で 19.4m、北東部で 19.1 m、南西部で 19.2 m、南東部で 18.7 mである。

（１）検出遺構

Ａ．江戸時代の遺構

土管埋設遺構群（第 25・26 図、図版６・７）　数基の井戸同士を地下約３ｍに埋設した土管でつないだもので、極めて特殊な遺構である。調査地の北東部で南北 55m にわたって検出されていて、北側から順に、井戸 SE118、井戸 SE121、土管埋設遺構 SX19、井戸 SE121、土管埋設遺構 SX123、井戸 SE68、土管埋設遺構 SX53、井戸 SE55、土管埋設遺構 SX54、井戸 SE28 となり、さらに井戸 SE55 からは東に分岐して土管埋設遺構 SX52 が延びている。基本的に湧水の見られる井戸と、汲み上げ用の井戸があり、これらを土管でつなぐことによって複数個所での汲み上げを意図したものと考えられる。南北の土管はほぼ水平に設置され、東に分岐したものはわずかに東側に傾斜している。このような施設は今のところ乙訓地域では他に例がなく、設置には相当な手間と費用がかけられたと思われるが、成果のほどは不明である。

井戸 SE118　検出面で直径 1.5m、底部で直径 1m、深さは 3.2m で最も深い。土管は埋設されていないが、南側の井戸 SE121 とは底部で高さ 0.7 mのトンネルでつながっており、本来あった土管が撤去された可能性もある。調査時湧水は見られなかった。すぐ南の SK119 は井戸 SE118 と切り合い、深さ１ｍで止まっていることから、何らかの理由で掘り直しが行われたと見られる。

井戸 SE121　井戸 SE118 の南１ｍにあり、直径 1.4 m、深さ３ｍである。底部には南北に導水のためのトンネルが穿たれていて、南側底部には土管が設置され、0.2 mの厚さのグリ石を

充填した後上部は土で埋め戻している。土管は直径 12 ～ 13cm、長さ 63 ～ 67cm で、一方を直径 17 ～ 18cm に広げて受け部としている。土管は受け部を北にして設置されている。土管の埋め戻し土は崩落していて内部は広くなっている。また井戸の上面東側には幅 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.2 mの溝 SD120 があり、井戸との境には直径 0.2 ～ 0.3 mの石を 2 個設置していた。おそらく汲み上げた水を東側に流していたと見られるが、延長部は調査地外のためどのような施設があったかは不明である。調査時に湧水は見られなかった。

土管埋設遺構 SX19　試掘時に確認されていたもので、井戸 SE121 の南 0.3m に位置し、長さ 4.5m、幅 1.2m、深さ 3m で、底部に土管を設置し、グリ石で周囲を埋めている。土管埋設遺構では最も規模が小さく、唯一完掘できた遺構である。

井戸 SE122　土管埋設遺構 SX19 の南 0.5 mにある直径 1 m、深さ 3 mの一回り小さい井戸である。南北はトンネルで連結され、底部には土管を埋設する。井戸上面は南北の溝状に一段へこんでいる。調査時に湧水は見られなかった。

土管埋設遺構 SX123　井戸 SE122 の南 0.5 mに位置し、長さ 18.6 m、幅 1 ～ 1.2 m、深さは 3 mで、検出された土管埋設遺構の中ではもっとも長いものである。北部の 4 m分のみ底部まで掘り下げを行った。底部の状況は他と同様である。

井戸 SE68　土管埋設遺構群の中心に位置する直径 1 m、深さ 3.1 mの小型の井戸である。南北にトンネルを掘って底部に土管を埋設し、グリ石を充填している。井戸上面周辺は南北 2.4 m、東西 3.3 m、深さ 0.4 mの方形に一段深くなっている（SX56）。

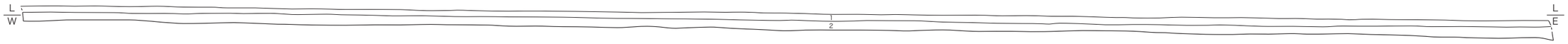
土管埋設遺構 SX53　井戸 SE68 の南 0.7 mに位置する長さ 9.7 m、幅 1 mのものである。掘り下げは行っていないが、北側の井戸 SE68 と南側の井戸 SE55 の状況から、他と同様に 3 mの深さで、底部に土管を埋設したものである。

井戸 SE55　土管埋設遺構 SX53 の南 0.9 mにある直径 1.3 ～ 1.6 mの平面不整円形の井戸である。深さは 3.1 mで、底部から約 0.5 m上の西壁は地下水脈にあたり、調査中も常に湧水が見られた。おそらく当時もこの井戸が湧水量の多い灌漑の中心であったと見られ、内部は壁面崩壊で南北 2 m、東西 1.7 m近くまで広がっている。底部には幅 0.5 ～ 0.7 m、長さ 1.1 ～ 1.9 mの枘穴を持った角材が 10 本敷き詰められており、その東と南に土管が埋設されていた。東の土管は北の土管埋設遺構 SX53 へ延びるものと、東の土管埋設遺構 SX52 に延びるものとにＬ字状に設置され、東側の土管は長さ調整のため短く打ち欠かれている。南に延びる土管は北側とは接続せず、また方向も他とは逆に受け部を南に向けている。これらの状況から、壁面崩壊時か東側に土管埋設遺構の分岐を行った際に大きく改修を行っている可能性がある。井戸 SE55 の北東 0.9 mには、直径 1.8 m、深さ 0.7 mの浅い円形土坑 SK67 があるが、セットとなる水溜の可能性がある。

土管埋設遺構 SX54　井戸 SE55 の 1.2 m南に位置し、長さ 9.7 m、幅 1 m、深さ 3 mで、北側約 4 m分を掘り下げた。その結果、この土管埋設遺構のみ土管の形状が異なっていることが判明した。北側の井戸 SE55 との接続部のみ拡張した受け部を持つ長いタイプのものであるが、それより南側では直径約 14cm、長さ約 26cm で一端を短く突出させて接続部とした短いタイプ

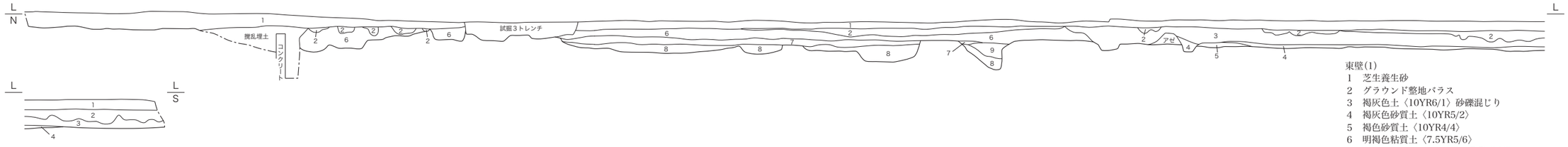
第 23 図　2 トレンチ検出遺構図（1/200）

北　壁



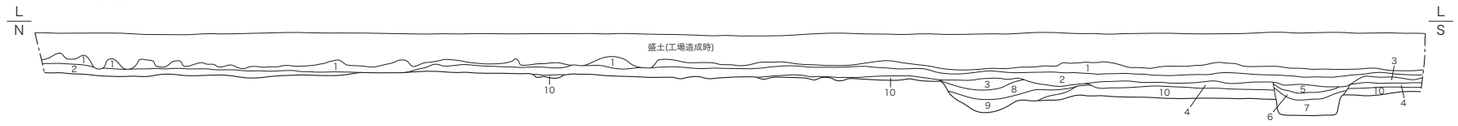
北壁
1　芝生養生砂
2　グラウンド整地バラス

東　壁（1）

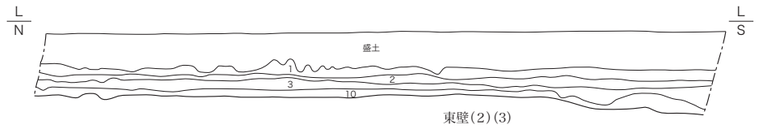


東壁(1)
1　芝生養生砂
2　グラウンド整地バラス
3　褐灰色土〈10YR6/1〉砂礫混じり
4　褐灰色砂質土〈10YR5/2〉
5　褐色砂質土〈10YR4/4〉
6　明褐色粘質土〈7.5YR5/6〉
　+灰褐色砂質土ブロック〈7.5YR4/2〉
7　灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉
8　明褐色粘質土〈7.5YR5/8〉
　+灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉
9　褐色粘土〈7.5YR4/6〉小礫混じり

東　壁（2）

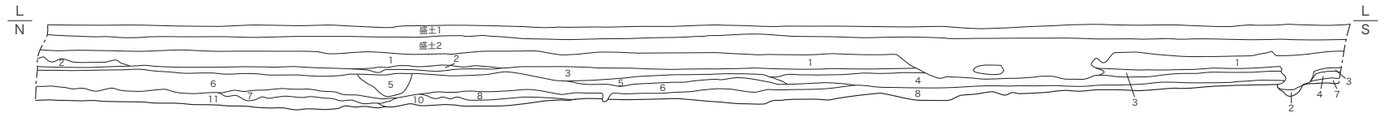


東　壁（3）



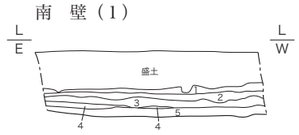
東壁(2)(3)
1　耕作土
2　床土I
3　床土II
4　灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉
5　灰黄褐色礫混じり砂質土〈10YR5/2〉
6　明黄褐色粘質土　礫混じり〈10YR6/6〉
7　明黄褐色粘質土　礫混じり〈10YR6/6〉
　+にぶい黄褐色砂質土　礫混じり〈10YR4/3〉
8　黄褐色シルト〈10YR5/6〉
9　褐灰色粘土　礫混じり〈10YR4/1〉
10　黒褐色砂礫混じり土〈10YR3/2〉

東　壁（4）



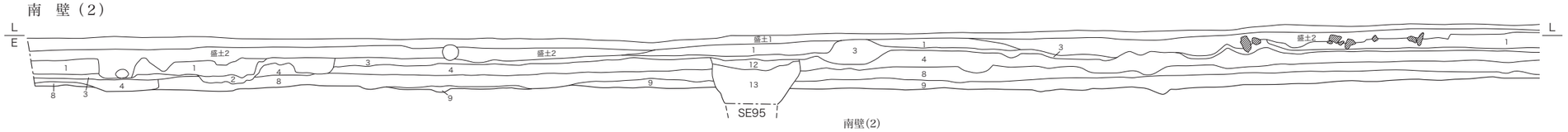
東壁(4)
1　耕作土
2　床土１
3　床土２
4　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉遺物包含層
5　灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉
6　にぶい黄褐色小礫混じり土〈10YR5/4〉
7　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉
8　黒褐色粘質土〈7.5YR3/1〉小礫混じり　遺物包含層
9　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉遺物包含層
10　褐色粘質土〈10YR4/4〉礫混じり
11　灰黄褐色小礫混じり粘質土〈10YR4/2〉遺物包含層

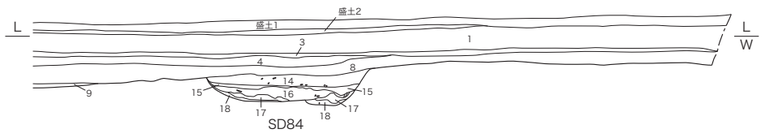
南　壁（1）



南壁(1)
1　耕作土
2　床土I
3　床土II
4　灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉
5　黒褐色砂礫混じり土〈10YR3/2〉

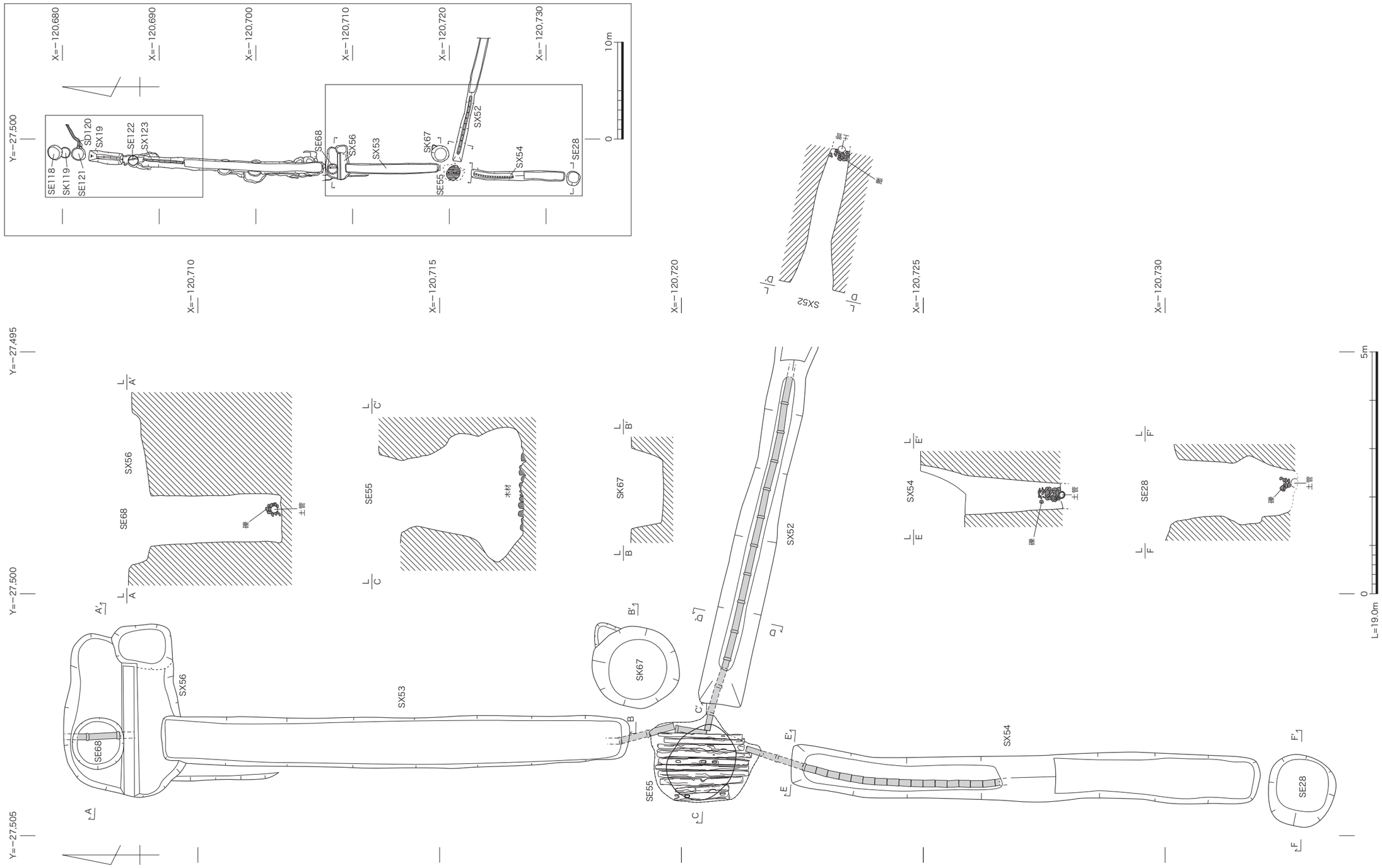
南　壁（2）



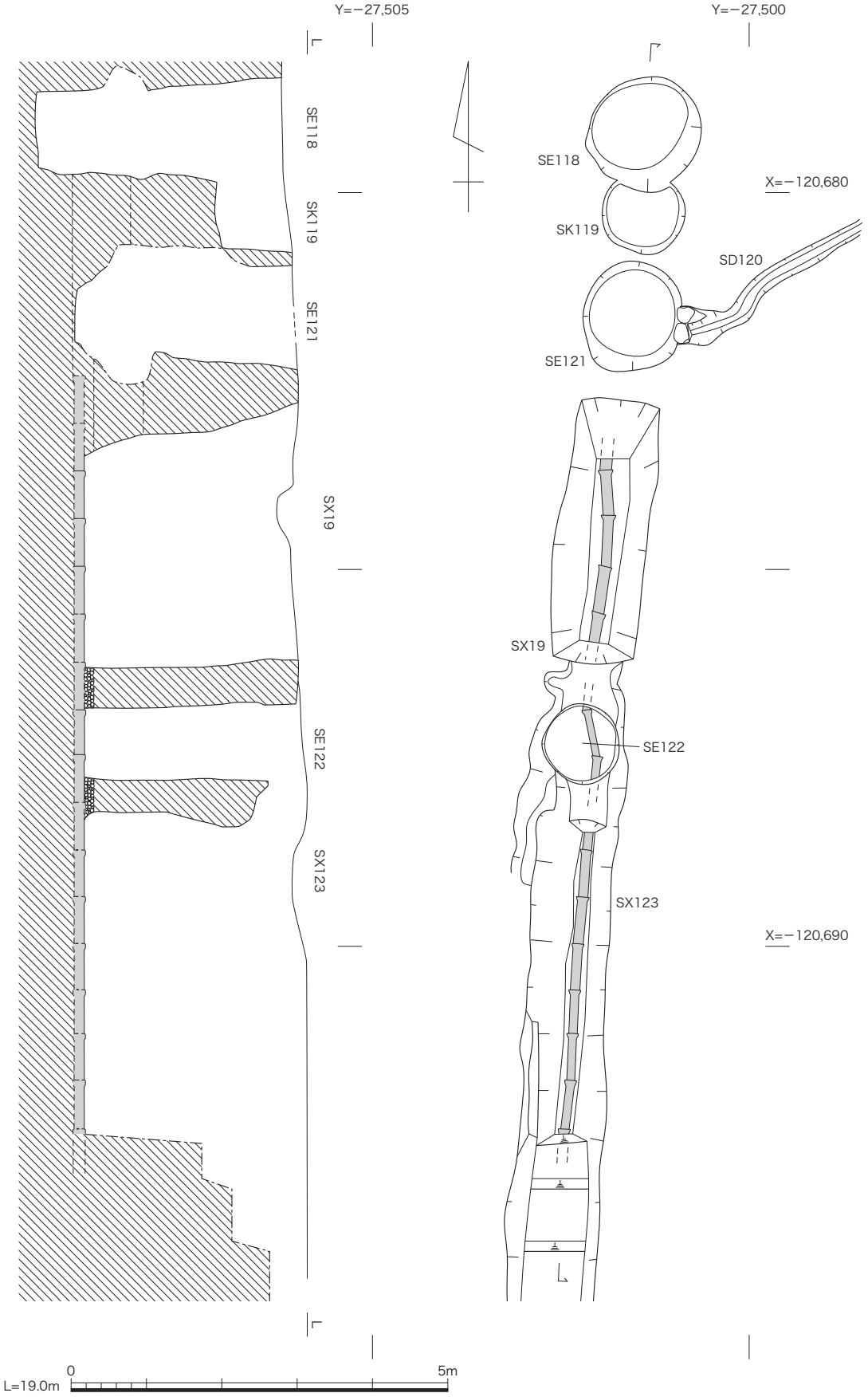


南壁(2)
1　耕作土
2　床土I
3　床土II
4　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉遺物包含層
5　灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉
6　にぶい黄褐色小礫混じり土〈10YR5/4〉
7　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉
8　黒褐色粘質土〈7.5YR3/1〉小礫混じり　遺物包含層
9　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉遺物包含層
10　褐色粘質土〈10YR4/4〉礫混じり
11　灰黄褐色小礫混じり粘質土〈10YR4/2〉遺物包含層
SE95
12　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉マンガン混じり
13　灰黄褐色砂礫〈10YR5/2〉
SD84
14　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉炭混じり　遺物多く含む
15　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉炭混じり　遺物多く含む
16　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉
　+明黄褐色粘質土ブロック〈10YR7/6〉焼土混じり　遺物多く含む
17　明黄褐色粘質土〈10YR7/6〉遺物多く含む
18　黒褐色粘質土〈10YR3/2〉遺物多く含む

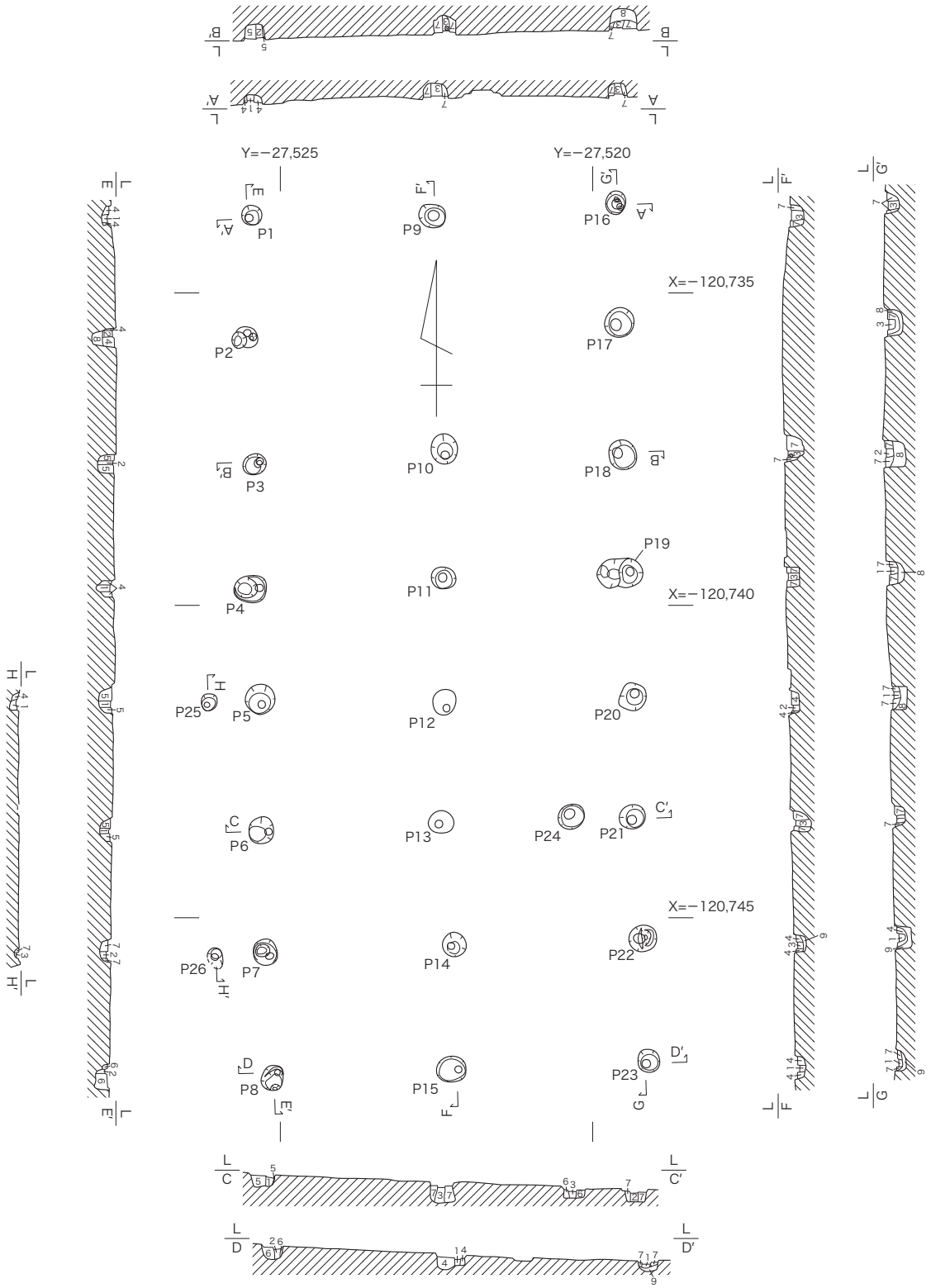
第24図　2トレンチ土層図（1/80）



第 25 図　井戸 SE28・55・68、土管埋設遺構 SX52 ～ 54 実測図（1/80・1/400）



第 26 図　井戸 SE118・119・121・122、土管埋設遺構 SX19・123 実測図（1/80）



1　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉灰白色粘質土〈10YR7/1〉褐色粘質土〈7.5Y4/4〉混じり　やや砂質
2　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉灰白色粘質土〈10YR7/1〉褐色粘質土〈7.5Y4/4〉混じり　やや砂質
3　にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉灰白色粘質土〈10YR7/1〉混じり
4　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉炭、砂混じり
5　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉橙色粘質土〈7.5YR6/6〉炭混じり
6　にぶい黄橙色砂質土〈10YR7/4〉炭混じり
7　にぶい黄橙色砂質土〈10YR7/4〉暗褐色粘質土〈10YR3/3〉混じり
8　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉橙色粘質土〈7.5YR6/6〉混じり　やや軟質
9　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉

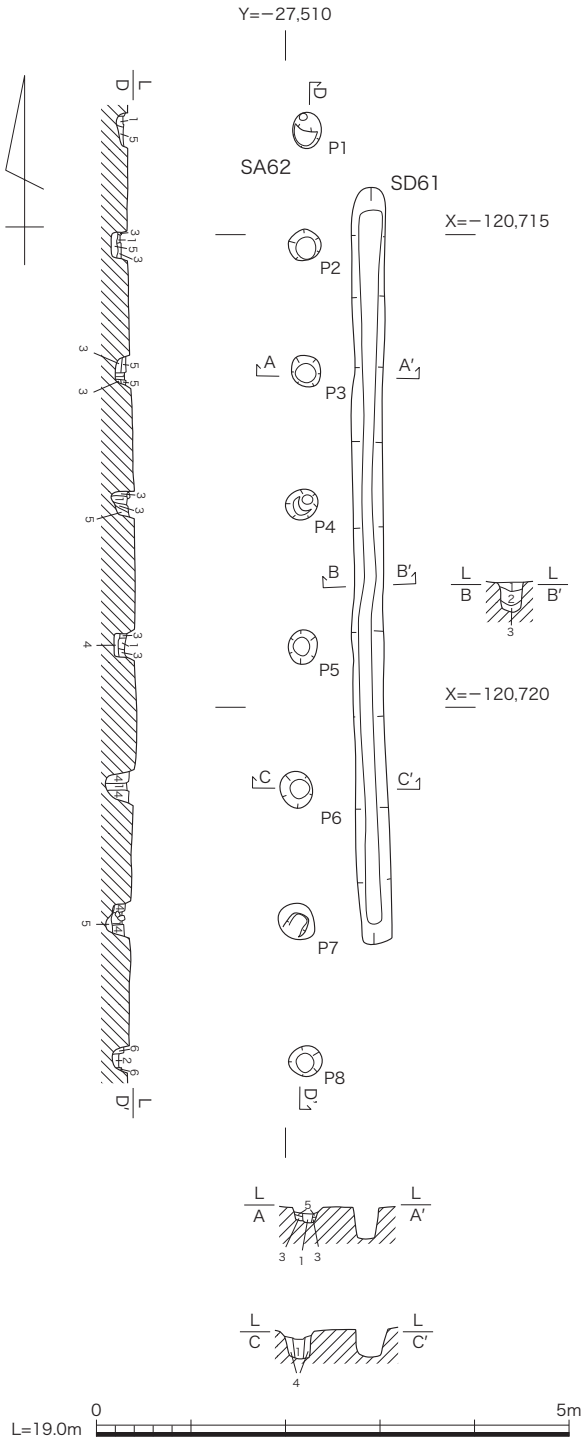
第 27 図　掘立柱建物 SB73 実測図（1/100）

のもので、全体は瓦と同じように黒色に燻されている。突出部を北にして設置されているが、このタイプの土管はこの遺構のみで見られ、他には確認できない。

井戸 SE28　土管埋設遺構群の最南端に位置する直径 1.5 m、深さ 2.9 mの井戸である。この井戸も底部から約 0.8 m上の南西壁から湧水があり、壁面の一部がえぐれている。底部北側には土管埋設遺構 SX53 と接続するトンネルが穿たれ、底部には土管が設置されているが、この部分では他と同様の塩釉をかけた長いタイプの土管である。受け部は南を向いている。

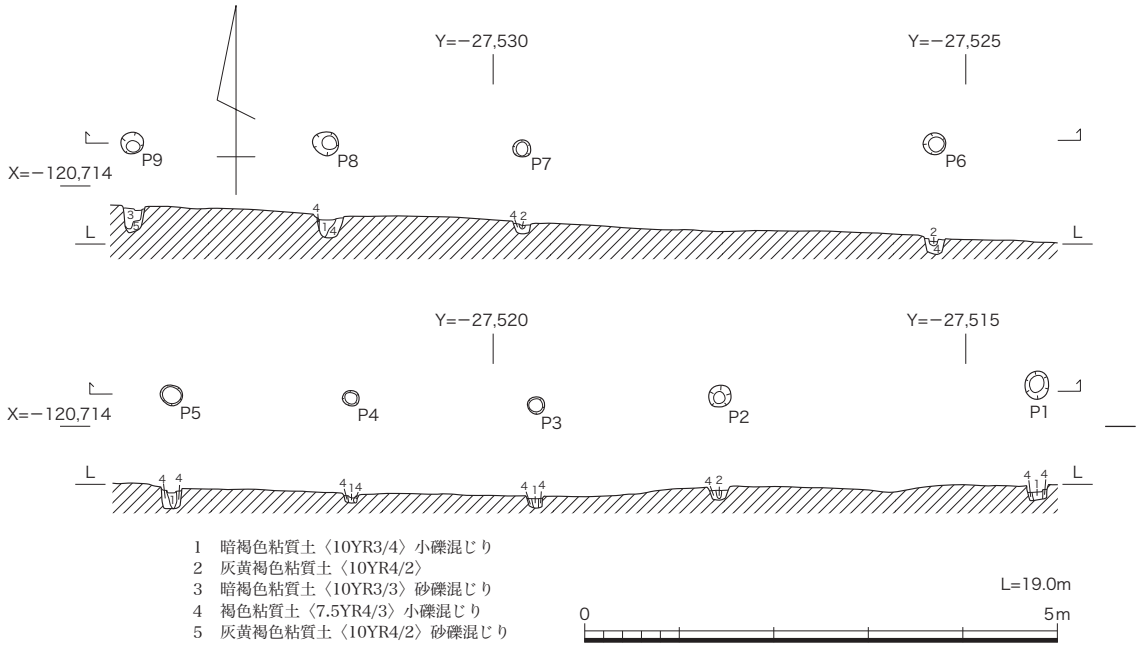
土管埋設遺構 SX52　井戸 SE55 から東に分岐した土管埋設遺構である。戦国期の堀 SX09 が完全に埋め立てられた後にそれを横断しており、幅 0.9 m、深さ 3 m、長さは 13 m以上で調査地外に延びている。底部には長いタイプの土管が受け部を西に向けた状態で埋設されていて、グリ石を周囲に充填した後に埋め戻されている。

掘立柱建物 SB73（第 27 図）　調査地南部で検出された東西２間、南北７間の南北棟建物である。南側５間には中央に束柱があるが、北側２間には見られない。この部分が土間の可能性がある。柱掘形は直径 0.3 ～ 0.5 mの円形で、深さは 0.15 ～ 0.4 m、内部に直径 0.1 mの柱痕が残る。柱間は南北が 1.9 ～ 2.0 m、東西が約 3 mで、東側 0.9 mには南北２間分の小さな張り出しがある。遺物は極めて少量であるが、江戸時代後期の土師器皿などが出土している。

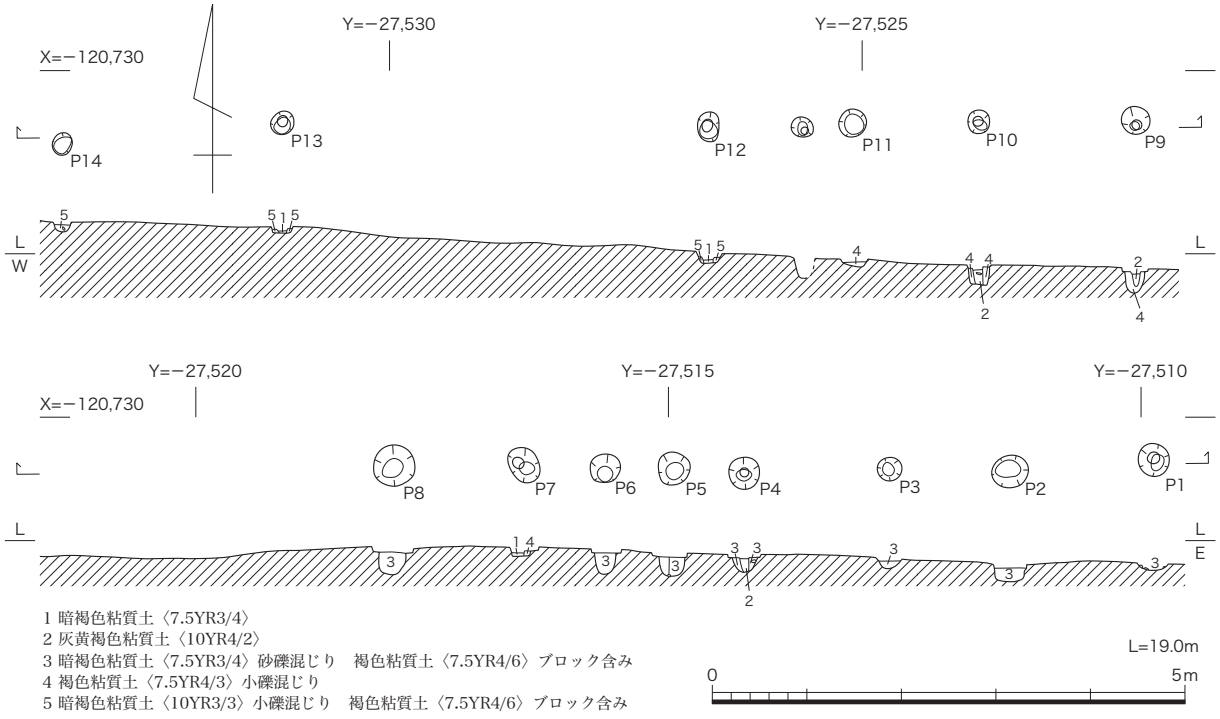


SD61
1　灰褐色粘質土〈7.5YR4/2〉砂礫混じり
2　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉
3　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉砂礫混じり
　明黄褐色粘質土〈10YR7/6〉ブロック含み
SA62
1　褐色粘質土〈7.5YR4/6〉　灰褐色粘質土〈7.5YR4/2〉ブロックに含む
2　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉小礫混じり
3　灰褐色粘質土〈7.5YR4/2〉小礫混じり
　褐色粘質土〈7.5YR4/6〉ブロック含み
4　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉砂礫混じり
5　にぶい黄色砂質土〈2.5Y6/4〉
6　褐色砂礫混じり土〈10YR4/4〉

第 28 図　溝 SD61、柵 SA62 実測図（1/80）

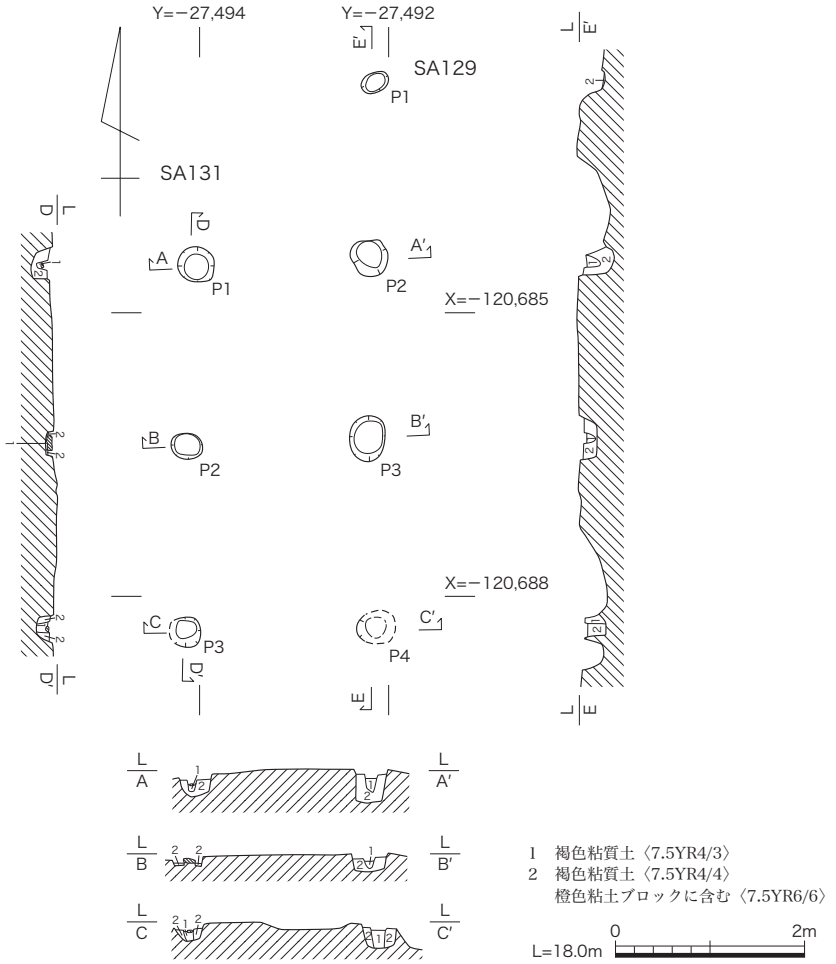


第 29 図　柵 SA77 実測図（1/80）

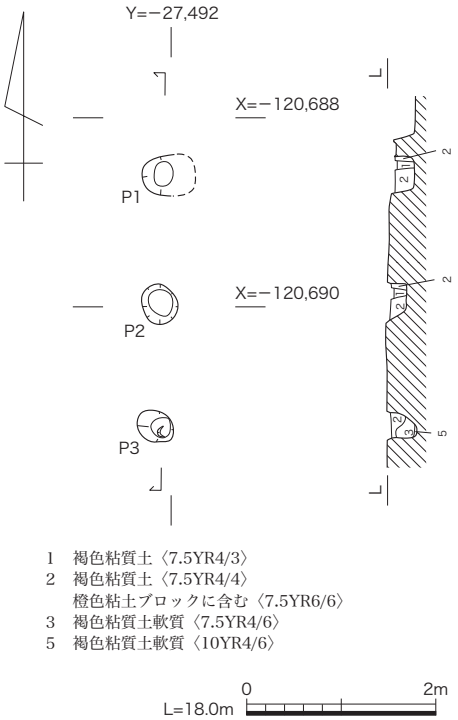


第 30 図　柵 SA78 実測図（1/80）

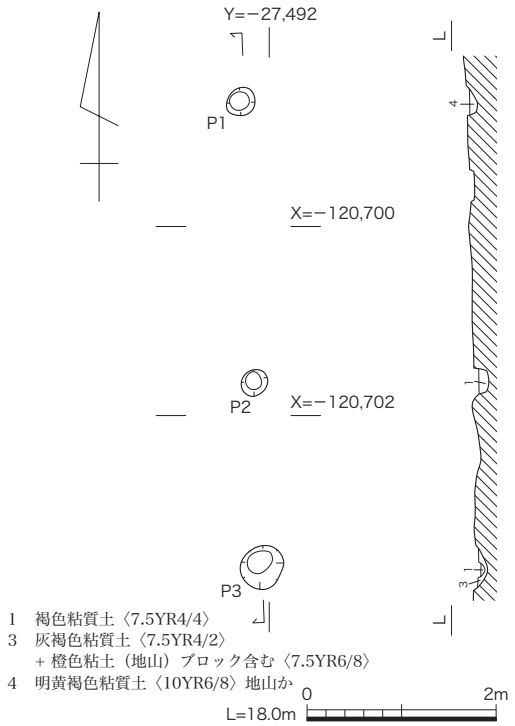
溝 SD61・柵 SA62（第 28 図）　調査地中央で検出された南北方向の溝と柵列である。検出状況からセットと見られるもので、方向は異なるが同様の遺構が 1 トレンチでも確認されている。溝 SD61 は幅 0.3 m、深さ 0.3 m、長さは 8 mである。埋土は 3 層であるが、断面では施設などの痕跡は認められなかった。柵列は溝の中心から 0.4 m西側で 7 間検出された。柱掘形は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さは 0.1 ～ 0.3 m、柱間は 1.3 ～ 1.5 mである。これらは後述する柵



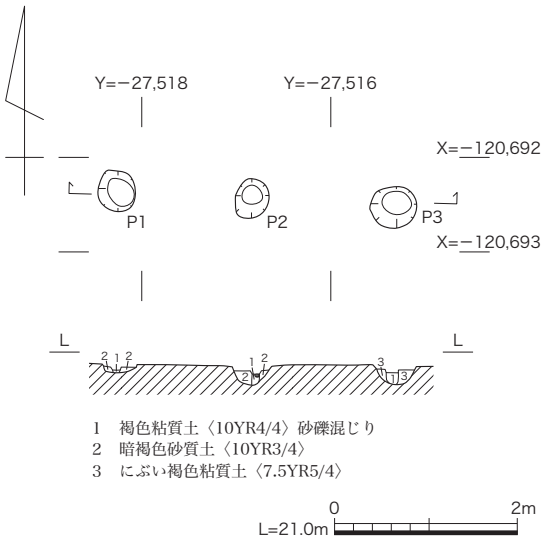
第 31 図　柵 SA129・131 実測図（1/80）



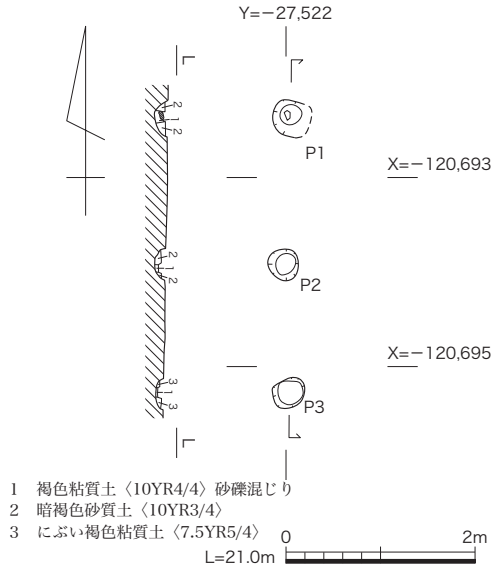
第 32 図　柵 SA130 実測図（1/80）



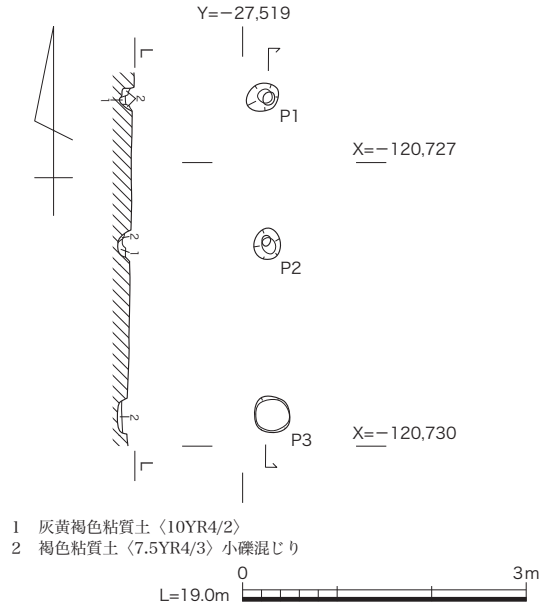
第 33 図　柵 SA132 実測図（1/80）



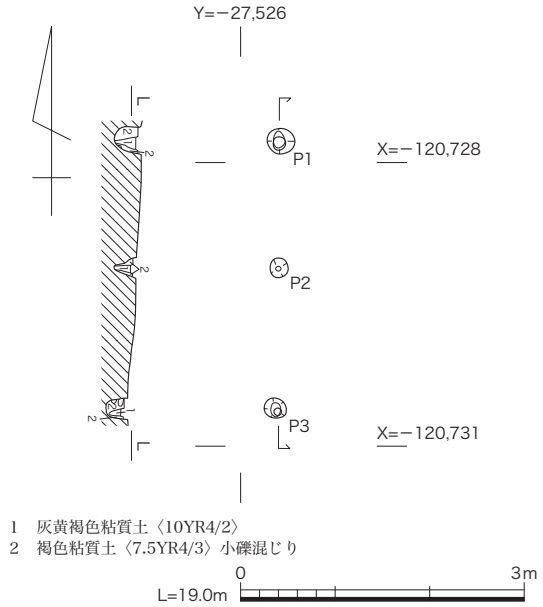
第 34 図　柵 SA133 実測図（1/80）



第 35 図　柵 SA134 実測図（1/80）



第 36 図　柵 SA80 実測図（1/80）



第 37 図　柵 SA81 実測図（1/80）

SA77・78 とともに方形の区画を形成するうちの東側の施設と見られる。

柵 SA77（第 29 図）　調査地中央西寄りで検出された東西方向の柵列である。東の延長部は柵 SA62 の北側と一致しており、一連の遺構と考えられる。不揃いな部分はあるが、9 基の柱掘形が約 40 m分確認された。柱掘形の直径 0.15 ～ 0.3 m、深さは 0.1 ～ 0.3 mである。柱間は大きく離れる部分を除くと 1.9 ～ 2 mである。北側を区画する施設と見られる。

柵 SA78（第 30 図）　柵 SA77 の南 17 mで検出された東西方向の柵列である。東端の柱掘形は南北方向の柵 SA62 南延長部に一致することから、一連の遺構と見られるものである。柱掘形は線上に並ぶもの 15 基を選んでいる。柱掘形の直径 0.15 ～ 0.4 m、深さは 0.1 ～ 0.3 mで、柱間は西側が広く、東側では狭くなっている。南側を区画する施設と見られる。これらの区画が

果たしてどのような性格を有する施設かは不明であるが、南北は 17 m、東西は 25 m以上の広さを有している。出土遺物から江戸時代後期と推定される。

柵 SA129 ～ 132（第 31 ～ 33 図）　調査地北東部で検出された南北方向に並ぶ柱列で、小規模な柵列としたものである。柵 SA129 は北側を削平されているが、柱掘形 4 基が検出された。削平を受けている北側のものを除き、直径 0.3 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mで、柱間は 1.9 ～ 2.0 mである。柵 SA130 は柵 SA129 のすぐ南で検出された 3 基の柱掘形で、北側の柱掘形は柵 SA129 の南側の柱掘形を切っている。柱掘形は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m、柱間は 1.4 mと狭い。柵 SA131 は柵 SA129 の西 1 mで検出された 3 基の柱掘形で、柵 SA129 とは方位がわずかに異なっていることから別の柵としたものである。柱掘形は直径 0.3 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m、柱間は 1.9 mである。柵 SA132 は柵 SA130 の南 7 mで検出された 3 基の柱掘形で、柱掘形は直径 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m、柱間は北から 3 m、1.9 mである。

柵 SA133・134（第 34・35 図）　調査地北部で検出された東西方向と南北方向に並ぶ 3 基の柱掘形である。柵 SA133 は唯一東西方向に並ぶもので、柱掘形は直径 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m、柱間は 1.5 mである。柵 SA134 は柵 SA133 の西 3.7 mにあり、北側の柱掘形は柵 SA133 の西側延長上にあたるため、関連する遺構と見られる。近現代の井戸に切られているが、柱掘形の直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.1 m、柱間は北から 1.6 m、1.3 mである。

柵 SA80・81（第 36・37 図）　調査地の南西部で検出された南北方向に並ぶ 3 基の柱列である。柵 SA80 は東西方向の長い柵 SA78 の北 0.7 mにあり、柱掘形は直径 0.3 ～ 0.4 m、深さ 0.1 m、柱間は北から 1.5 m、1.9 mである。柵 SA81 は柵 SA80 の西 6.8 mあり、南の柱掘形は柵 SA78 の並びと一致しており、やはり関連する遺構と見られる。柱掘形は直径 0.2 ～ 0.3 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m、柱間は北から 1.3 m、1.5 mである。

この他に調査地南部では方形の落ち込み SX89 や調査地中央付近で浅い落ち込み SX59・60・63 等があり、調査地全体からは近現代も含んだ井戸とそれとセットとなる水溜などが多数検出されている。

B．戦国期の遺構

堀 SX09（第 38 図）　調査地東辺部で検出された南北方向の堀で、2 トレンチ内では約 57 m、北側の 6 トレンチを合わせると 68 mにわたって検出された。幅は約 4 m、深さは約 2 mであるが、場所によって若干状況が異なる。調査地内では断面用セクションを 3 個所（B・C・D断面）に設け、南から 1 ～ 4 区に分けている。以下地区別に述べていく。

1 区南では幅は 4.3 m、深さは 1.9 mで、底部の幅は 0.8 ～ 1.0 mである。1 区の中央付近では東西の壁面および底部が幅約 1 mにわたって周囲よりも突出している。（図版 10−２）これはおそらく堀を掘削したときの工事区画を示すものと見られ、同時に掘り進んだ南北の工事区画を最終的に貫通させた名残と見られる。このような観点からすれば、調査地内での微妙な堀の形状の違いは、割り当てられた工事担当区画の差とも見ることもできよう。1 区と 2 区の境にあるD断面周辺では、堀幅はもっとも広くなっており、上面幅は 4.7 m、深さ 1.9 m、底部幅 1.5 mで

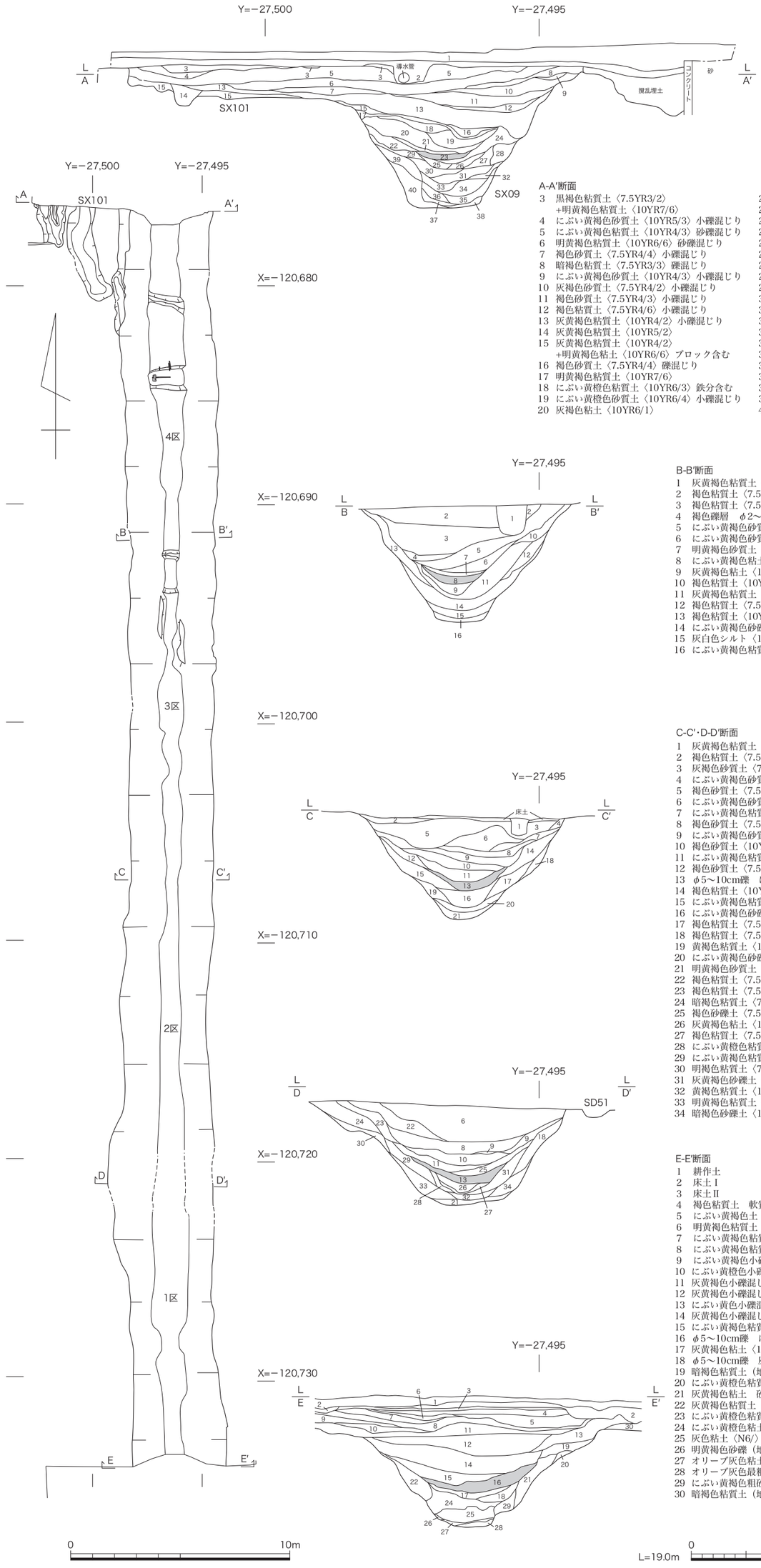
断面は台形状を呈する。２～３区にかけて幅は 3.8 ～ 3.9 mと狭くなっており、深さは 1.9 m、底部は 0.5 mで、C断面付近では断面は逆三角形に近いものとなっている（図版 10－1）。３区の中央付近でも底部が狭くなっている個所があるが、1区で見られたような明確なものではない。３区北部のB断面付近からは底部が 0.2 mほど深くなり、1.5 mほど北側では土手状に高くなった後再び深くなっている（図版 9－2）。この付近では幅 3.9 m、深さ 2.1 m、底部はやや平坦になり、幅は 0.8 mである。４区では中央付近で再び北側に 0.4 ～ 0.5 mほど深くなり、約 4 m北側でわずかに土手状に高くなっている。同時に４区の北部では、堀の西側を東西約４mにわたって 0.5 m近く掘り下げている（落ち込み SX101）。このためこの付近では堀 SX09 の肩部は高さが異なっていて、東側では堀の深さは 2.5 m、西側では 2.0 mとなる。この状況は 6 トレンチで特に顕著であり、そちらも参照されたい。

堀内の埋土は大きく上層と下層に分けられる。下層は底部付近に堆積している薄い粘土層を主とするものと、堀の両肩から流入した地山の崩壊土を含んだもので占められており、遺物は非常に少なく、古墳時代の埴輪片、飛鳥時代の瓦片、長岡京期、平安時代の土器片、戦国時代 16 世紀頃の土器片が少量出土している。現状では戦国期の遺物が堀の年代を示すものと考えている。また 4 区の一段深くなった部分の底部付近からは頭部を西に向けた木製の掛矢と南北方向を向いた状態の木簡が 3 点出土した（第 39 図・図版 11）。掛矢の頭部は破損しており、柄には破損の修理の痕が見られた。木簡は非常に長く、上部にのみ墨痕が認められた。残念ながら解読できなかったが、他の出土例ではこのタイプの木簡は工事の割り当て区間を表示するものと考えられている。この部分では他に遺物がまったく出土していないため時期は確定できないが、堀が完成した段階で破損した掛矢と不要になった木簡が投棄されたものと見られる。これら下層堆積は底部から約 0.6 ～ 1.0 mの厚さがあり、最終堆積層（A断面第 23 層、B断面第 8 層、C断面第 13 層、E断面第 16 層）には直径 5 ～ 10cm の小礫が多く含まれている（図版 9－1）。おそらく堀は長らくこのような窪んだ状態で残されていたものと思われる。

上層は堀を人為的に埋めているようで、南側 1・2 区では主に西側から、北側 3・4 区では主に東側から一気に埋め立てられている状況が看取される。上層埋土の直上は水田であり、おそらく水田可耕地拡張に伴って埋め立てが行われたものと見られる。ちなみに昭和 21 年米軍撮影の航空写真には、堀の痕が細長い水田として明瞭に映っており、それによれば本来の堀は約 400 m近くの長さがあったと推定される。この堀は現在の調子と久貝の境にもあたり、航空写真ではこの堀の痕跡より東は竹藪、西は水田と土地利用の上でもはっきりと違いが見て取れる。上層の遺物は規模の割には多くはないが、近世遺物を中心に古墳時代、飛鳥時代、長岡京期、平安時代の土器片などが出土している。

C．平安時代の遺構

掘立柱建物 SB92（第 40 図）　調査地南東部で検出された長岡京期の遺構群を切っている掘立柱建物で、北で 1.5° 東に振っている。東西 2 間、南北 4 間以上の南北棟建物で、柱掘形は平面隅円方形を呈し、東側のものは 0.5 m、西側のものは一回り大きく、0.7 ～ 0.9 mで、深さも 0.2



A-A′断面

3　黒褐色粘質土〈7.5YR3/2〉
　+明黄褐色粘質土〈10YR7/6〉
4　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉小礫混じり
5　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉砂礫混じり
6　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉砂礫混じり
7　褐色砂質土〈7.5YR4/4〉小礫混じり
8　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉礫混じり
9　にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉小礫混じり
10　灰褐色砂質土〈7.5YR4/2〉小礫混じり
11　褐色砂質土〈7.5YR4/3〉小礫混じり
12　褐色粘質土〈7.5YR4/6〉小礫混じり
13　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉小礫混じり
14　灰黄褐色粘質土〈10YR5/2〉
15　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉
　+明黄褐色粘土〈10YR6/6〉ブロック含む
16　褐色砂質土〈7.5YR4/4〉礫混じり
17　明黄褐色粘質土〈10YR7/6〉
18　にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/3〉鉄分含む
19　にぶい黄橙色砂質土〈10YR6/4〉小礫混じり
20　灰褐色粘土〈10YR6/1〉
21　灰黄褐色粘土〈10YR4/2〉鉄分含む
22　にぶい黄褐色粘土〈10YR5/3〉
23　褐灰色粘質土〈7.5YR6/2〉礫（φ5cm）混じり　鉄分多い
24　にぶい赤褐色礫〈5YR4/4〉粘土混じり
25　オリーブ灰色粘土〈2.5GY5/1〉礫混じり
26　オリーブ灰色粘土〈2.5GY6/1〉砂礫混じり
27　灰色粘質土〈7.5Y5/1〉小礫混じり
28　にぶい橙色粘土〈7.5YR6/4〉鉄分含む
29　灰色粘土〈7.5Y5/1〉
30　灰色粘土〈10Y5/1〉小礫含む
31　灰色粘土〈7.5Y5/1〉礫混じり　軟質
32　オリーブ灰色〈10Y5/2〉砂礫混じり
33　緑灰色粘土〈7.5GY5/1〉砂混じり
34　青灰色粘土〈5BG5/1〉砂礫混じり
35　オリーブ灰色粘土〈5GY5/1〉砂混じり
36　灰オリーブシルト〈7.5Y5/3〉
37　灰色粘土〈10Y5/1〉砂混じり
38　緑灰色粗砂〈10G6/1〉
39　緑灰色シルト〈10GY5/1〉
40　黄褐色シルト〈10YR5/6〉小礫混じり

B-B′断面

1　灰黄褐色粘質土〈10YR5/2〉小礫混じり
2　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉小礫混じり
3　褐色粘質土〈7.5YR4/6〉小礫混じり
4　褐色礫層　φ2〜5cm〈7.5YR4/4〉
5　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/4〉小礫混じり
6　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉小礫混じり
7　明黄褐色砂質土〈10YR7/6〉
8　にぶい黄褐色粘土〈10YR4/3〉φ5〜10cm礫混じり
9　灰黄褐色粘土〈10YR6/2〉
10　褐色粘質土〈10YR4/4〉小礫含む
11　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉砂礫混じり
12　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉小礫混じり
13　褐色粘質土〈10YR4/4〉小礫混じり
14　にぶい黄褐色砂礫土〈10YR5/4〉
15　灰白色シルト〈10YR7/1〉砂礫混じり
16　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉砂礫混じり

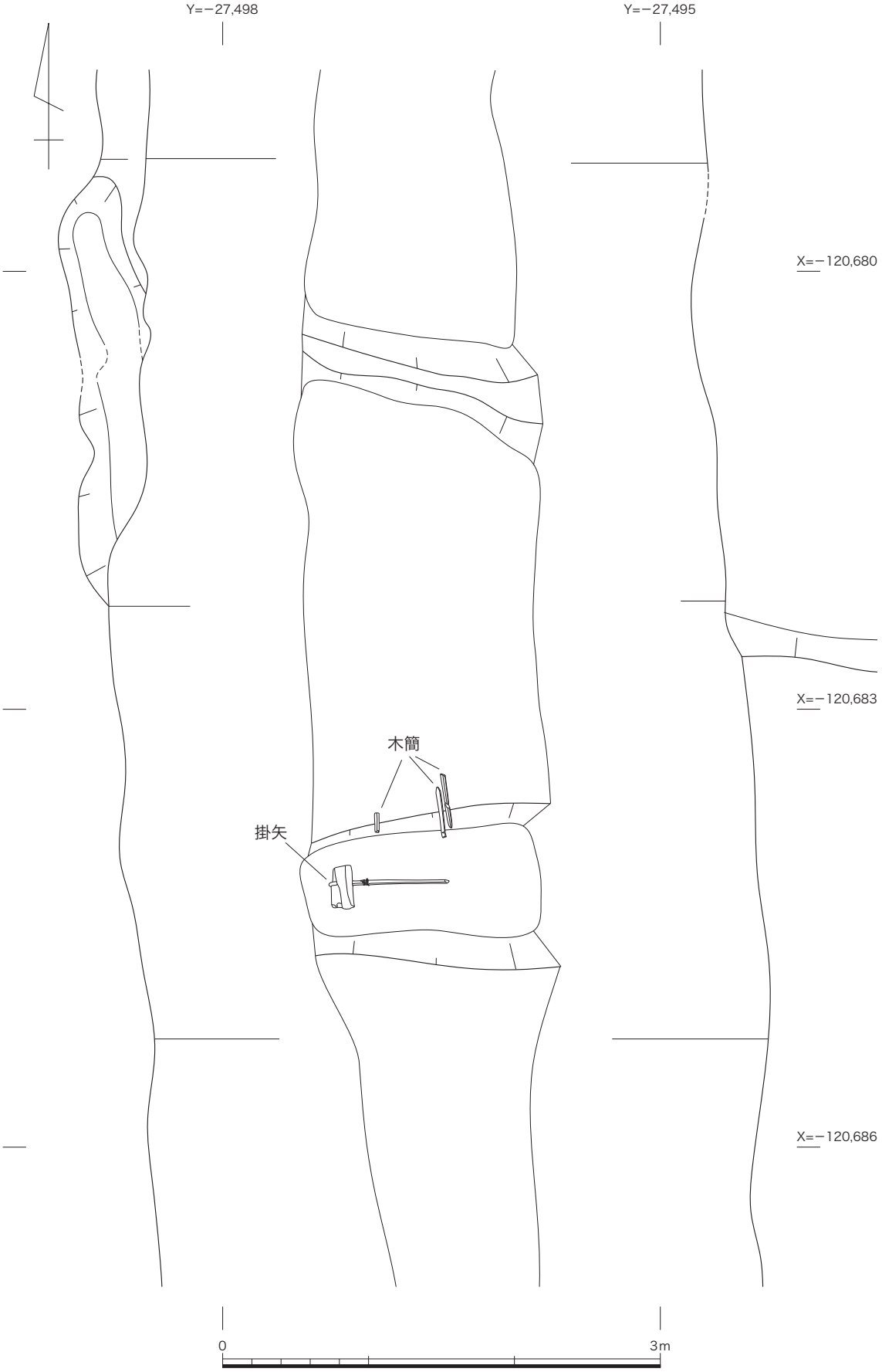
C-C′･D-D′断面

1　灰黄褐色粘質土〈10YR5/2〉小礫混じり
2　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉小礫・マンガン混じり　かたくしまる
3　灰褐色砂質土〈7.5YR5/2〉鉄分含み
4　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉鉄分含み
5　褐色砂質土〈7.5YR4/3〉礫混じり
6　にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉礫・炭混じり
7　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉小礫混じり
8　褐色砂質土〈7.5YR4/4〉
9　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉小礫混じり
10　褐色砂質土〈10YR4/4〉礫混じり
11　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉
12　褐色砂質土〈7.5YR4/3〉小礫混じり
13　φ5〜10cm礫　にぶい黄褐色粘土〈10YR4/3〉混じり
14　褐色粘質土〈10YR4/6〉
15　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉
16　にぶい黄褐色砂礫土〈10YR5/3〉
17　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉
18　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉砂礫混じり
19　黄褐色粘質土〈10YR5/6〉砂礫混じり
20　にぶい黄褐色砂礫〈10YR5/3〉　　地山再堆積
21　明黄褐色砂質土〈10YR6/6〉
22　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉小礫混じり
23　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉わずかに礫含む
24　暗褐色粘質土〈7.5YR3/4〉小礫混じり
25　褐色砂礫土〈7.5YR4/6〉
26　灰黄褐色粘土〈10YR6/2〉φ5〜10cm礫混じり
27　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉礫混じり
28　にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/3〉わずかに小礫含む
29　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/3〉
30　明褐色粘質土〈7.5YR5/8〉
31　灰黄褐色砂礫土〈10YR5/2〉
32　黄褐色粘質土〈10YR5/6〉砂礫混じり
33　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉
34　暗褐色砂礫土〈10YR3/3〉

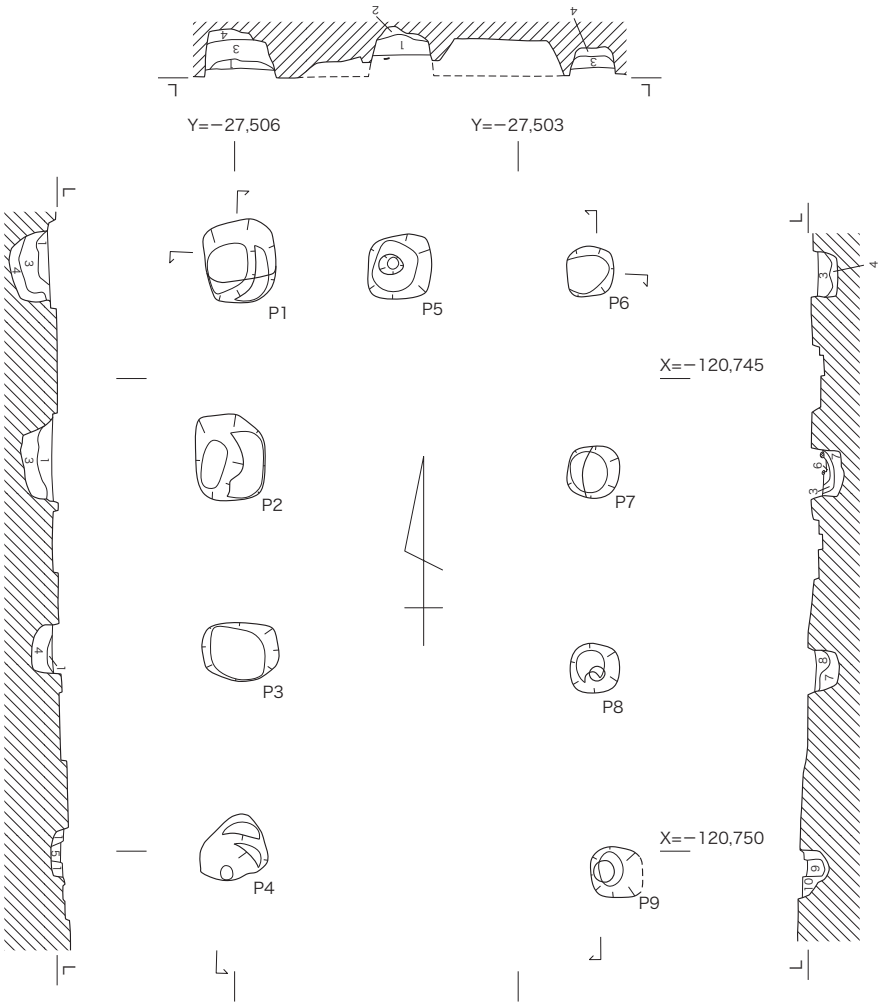
E-E′断面

1　耕作土
2　床土Ⅰ
3　床土Ⅱ
4　褐色粘質土　軟質〈7.5YR4/3〉
5　にぶい黄褐色土　小礫混じり〈10YR5/3〉
6　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉
7　にぶい黄褐色粘質土　小礫混じり〈10YR4/3〉
8　にぶい黄褐色粘質土　炭混じり〈10YR5/3〉
9　にぶい黄褐色小礫混じり土〈10YR5/4〉
10　にぶい黄橙色小礫混じり土〈10YR7/4〉
11　灰黄褐色小礫混じり粘質土〈10YR4/2〉遺物包含
12　灰黄褐色小礫混じり砂質土　軟質〈10YR5/2〉
13　にぶい黄色小礫混じり砂質土〈2.5Y6/3〉
14　灰黄褐色小礫混じり砂質土〈10YR4/2〉
15　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉
16　φ5〜10cm礫　にぶい黄褐色粘土混じり〈10YR4/3〉
17　灰黄褐色粘土〈10YR6/2〉
18　φ5〜10cm礫　灰黄褐色粘土混じり〈10YR6/2〉
19　暗褐色粘質土（地山）+にぶい黄褐色粘質土（地山）〈10YR3/4〉+〈10YR7/4〉
20　にぶい黄橙色粘質土（地山再堆積）〈10YR7/4〉
21　灰黄褐色粘土　砂礫混じり〈10YR5/2〉
22　灰黄褐色粘質土　礫混じり〈10YR5/2〉
23　にぶい黄橙色粘質土〈10YR7/4〉地山
24　にぶい黄橙色粘土　φ5〜10cm礫わずかに含む〈10YR6/3〉
25　灰色粘土〈N6/〉
26　明黄褐色砂礫（地山崩壊土）〈10YR6/6〉
27　オリーブ灰色粘土〈2.5GY6/1〉
28　オリーブ灰色最粗砂礫混じり〈5GY6/1〉
29　にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土〈10YR5/3〉
30　暗褐色粘質土（地山）〈10YR3/4〉

第38図　堀SX09実測図（1/80・1/200）



第 39 図　堀 SX09 4 区 掛矢・木簡出土状況実測図（1/40）



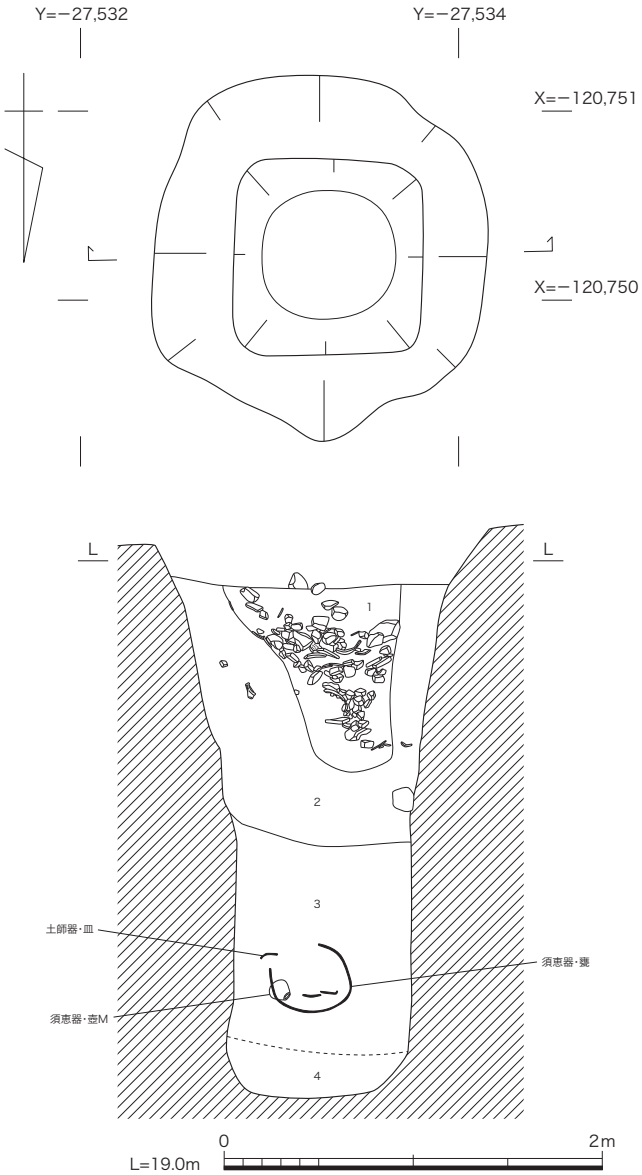
第40図　掘立柱建物SB92実測図（1/80）

～0.5 mとばらつきがある。柱痕も明瞭なものは少なく、柱間は南北が2.1 m、東西が約1.9 mである。遺物が少ないため、切り合いなどから平安時代前期と推定している。

井戸SE83（第41図）　調査地南西隅で検出された平面隅円方形の井戸である。検出面では東西1.75 m、南北1.9 m、下方では1 m四方の整った方形となる。深さは3 mで、井戸側はまったく残されていなかった。堆積土は上層（第1・2層）と下層（第3・4層）に大別される。上層は平安時代の遺物で占められ、最終的な埋土である暗褐色粘土（第1層）は約1 m四方、深さ1.3 mで逆三角形状に堆積していて、大量の遺物と礫が出土している（図版12－1）。その周囲と下にある褐色粘土層（第2層）は検出面から1.7 mまで堆積しているが、遺物は非常に少なかった。下層である灰黄褐色粘土（第3層）は1.1 mほどの堆積が認められるが、上半部には遺物をまったく含んでおらず、下半部で須恵器の甕・壺、土師器皿などが出土した（図版12－2）。

最下層の灰褐色砂礫混じり粘質土（第４層）には遺物は含まれておらず、上記の遺物は実質井戸底に堆積していたものとみられる。須恵器の甕は口縁部を欠いているがほぼ体部は完形で、つるべとして使用されていた可能性もある。

井戸 SE116（第 42 図）　調査地北東端で検出された長方形の掘形内に縦板組隅柱横桟留めの井戸側を納めたものである。掘形は南北 2.4 m、東西 3.3 mで、検出面から 1.8 m下がったところで、南辺寄りに 1.8 m四方、深さ 1.5 mの一回り小さい掘形を設け、そこに井戸側を設置している（図版 13 – 1）。隅柱は約 10cm 四方の角材で、約 110cm 分が残る。横桟は最下段のみが残されていた。幅約 15cm 前後、厚さ 7cm、長さ 110cm で両端に作り出した枘と、隅柱に設けた枘穴とで組み合わせている。側板は幅 10 ～ 19cm、厚さ 1 ～ 3cm の板材で、長さ 80 ～ 100cm 分が残る。一辺に 6 ～ 8 枚をたて並べ、裏側に隙間をふさぐよう横にずらした形で同様に板材をたて並べている（図版 13 – 2）。北辺と東辺は 15 枚、南辺と西辺は 17 枚使用している。断面では下から 1.6 ～ 2.0 m近くまで方形井戸側の痕跡が残るが、それより上では土層は大きく乱れている。最終埋土の暗褐色粘質土には礫と共に９世紀代を中心とする多くの遺物が含まれていた。下層では非常に少なくなっている。底部には褐灰色粘土が 0.25 ～ 0.35 mの厚さで堆積していて、その上面には側板の破片が堆積していた。したがって井戸廃絶時の底部はこの面であったと見られる。この褐灰色粘土からは「上」と墨書された土師器杯や櫛等が出土している。

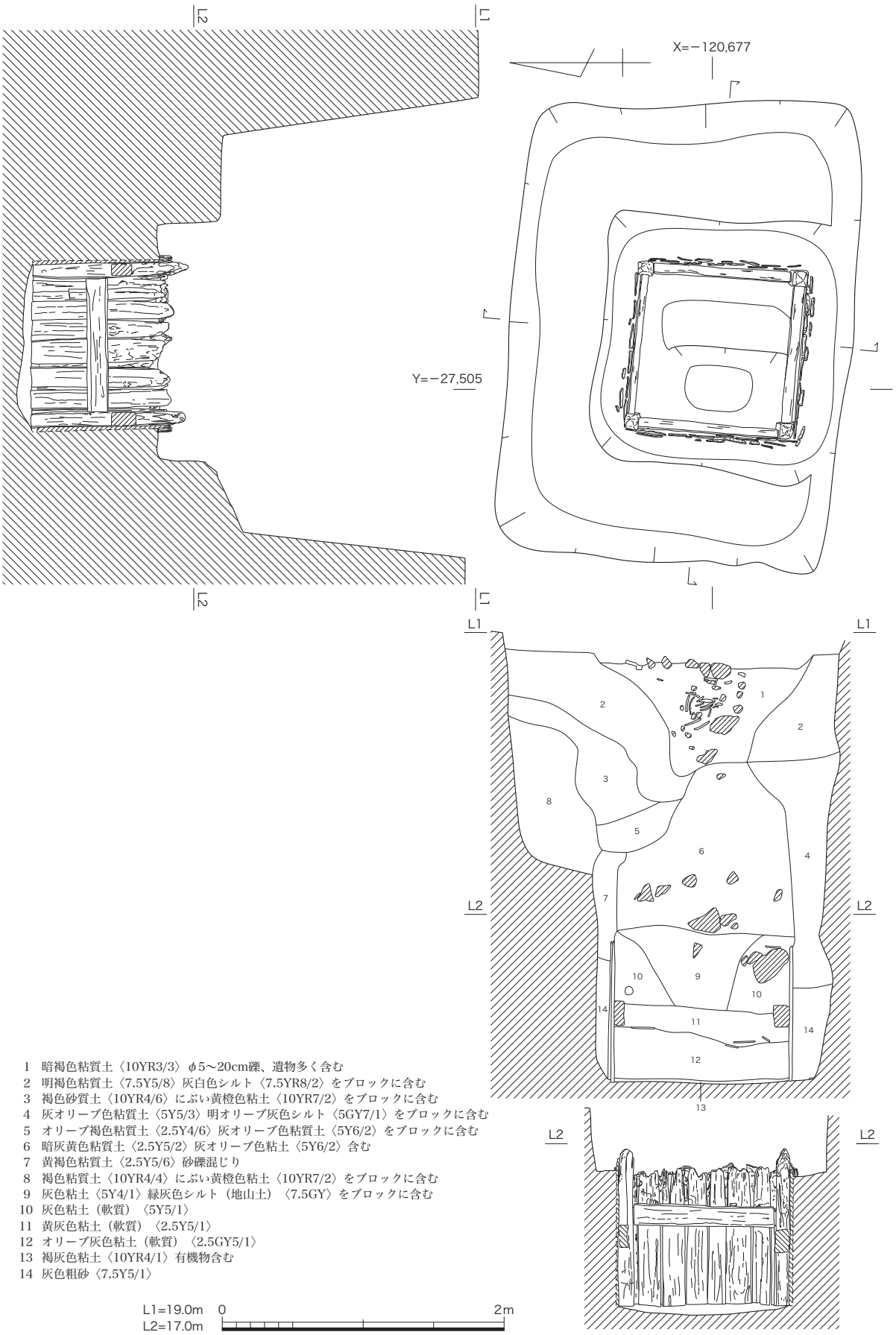


1　暗褐色粘土〈7.5YR3/4〉非常に軟質　拳大礫・石多量に含む　遺物多い
2　褐色粘土〈7.5YR4/3〉砂礫混じり　遺物少ない
3　灰黄褐色粘土〈10YR4/2〉小礫混じり
4　灰褐色砂礫混じり粘質土〈7.5YR4/2〉

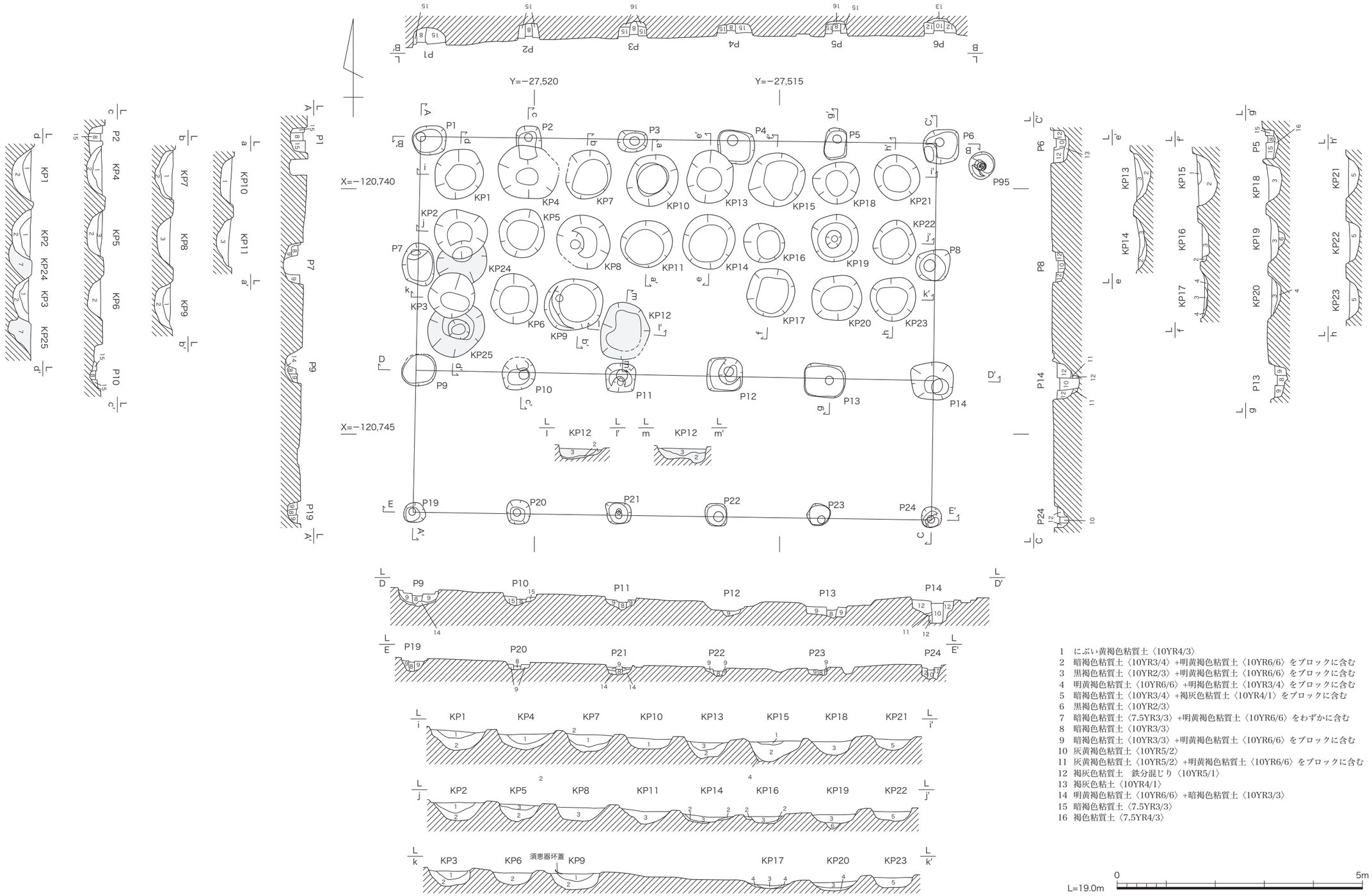
第 41 図　井戸 SE83 実測図（1/40）

D．長岡京期の遺構

掘立柱建物 SB88（第 43 図）　調査地南側で検出された南北２間、東西５間、南に廂を持つ南北棟建物である。内部には須恵器の大甕を据え付けた痕と見られる円形の穴が多数残されていた。身舎の柱掘形は一辺 0.5 ～ 0.8 mの隅円方形～長方形で、深さは



第42図　井戸SE116実測図（1/40）

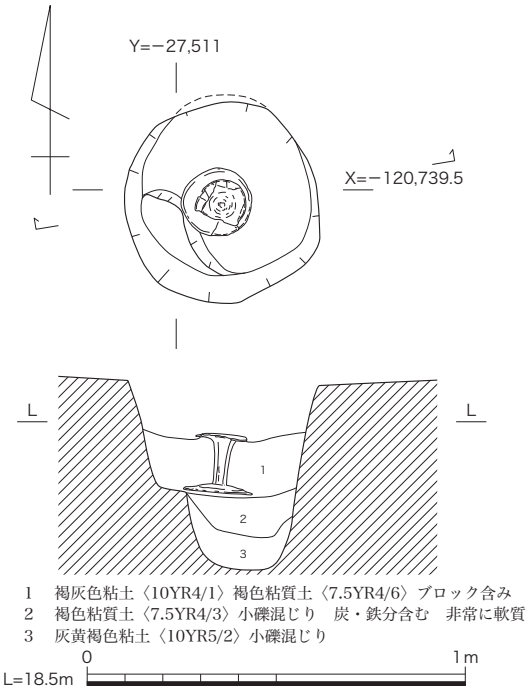


1　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉
2　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉+明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉をブロックに含む
3　黒褐色粘質土〈10YR2/3〉+明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉をブロックに含む
4　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉+明褐色粘質土〈10YR3/4〉をブロックに含む
5　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉+褐灰色粘質土〈10YR4/1〉をブロックに含む
6　黒褐色粘質土〈10YR2/3〉
7　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉+明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉をわずかに含む
8　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉
9　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉+明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉をブロックに含む
10　灰黄褐色粘質土〈10YR5/2〉
11　灰黄褐色粘質土〈10YR5/2〉+明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉をブロックに含む
12　褐灰色粘質土　鉄分混じり〈10YR5/1〉
13　褐灰色粘土〈10YR4/1〉
14　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉+暗褐色粘質土〈10YR3/3〉
15　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉
16　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉

第 43 図　掘立柱建物 SB88 実測図（1/80）

0.3 ～ 0.5 m、廂の柱掘形は一回り小さく、一辺 0.4 ～ 0.5 m、深さは 0.1 ～ 0.3 mである。内部には直径約 0.2 mの柱痕が残されており、柱間は南北 2.4 m、東西は 2.1 m、廂の出は 2.9 mである。

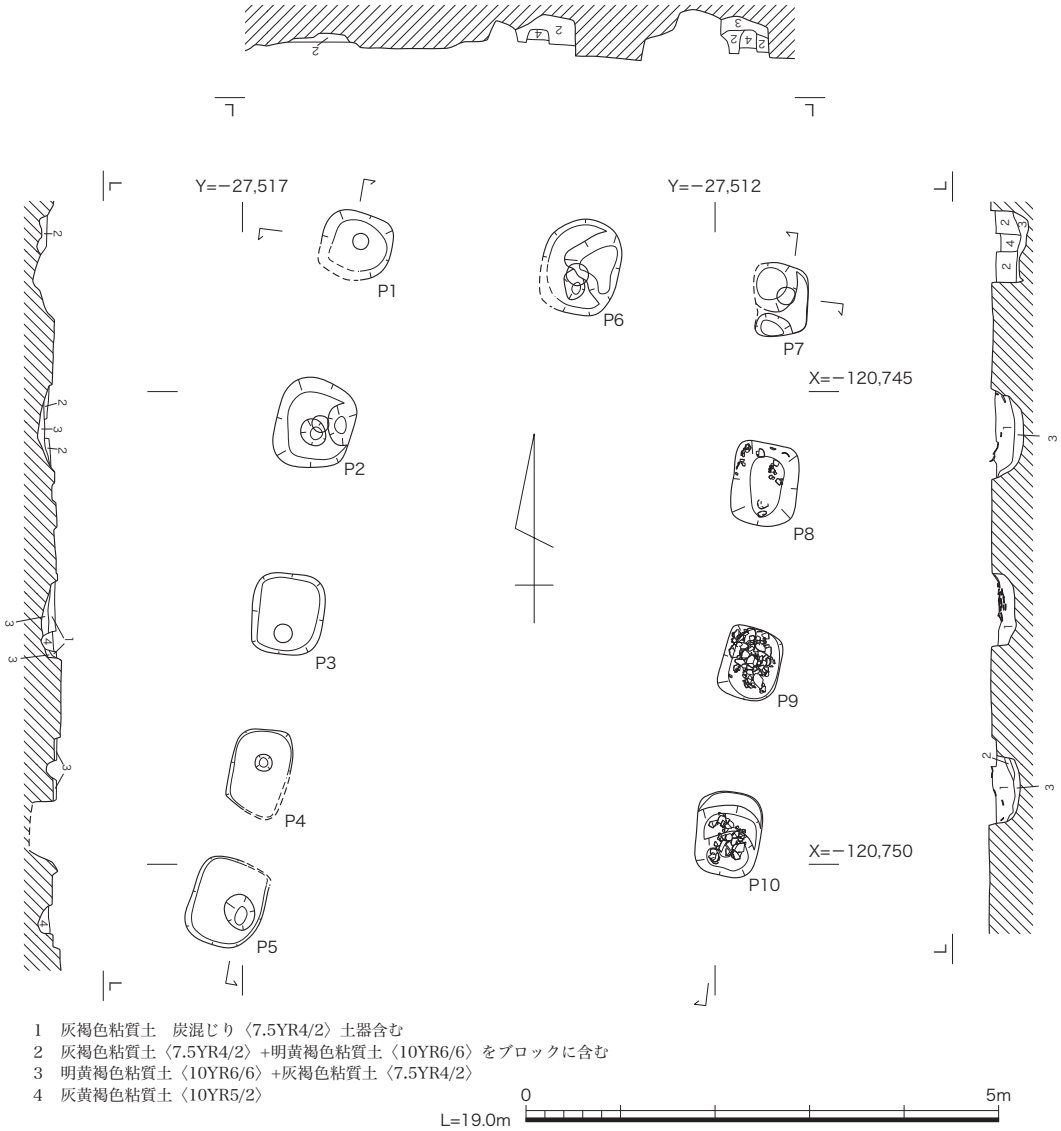
内部の円形穴はほぼ建物全面に 22 基(KP1 ～ 11・13 ～ 23）認められる。南北３基、東西８基で、南側の列のみ中央２基分は設置されていない。おそらくこの個所に建物への出入り口があったためと見られる。また建物南西隅にはこれらに切られた円形穴が２基（KP24・25）確認された。おそらく最初に建物南寄りに設置された大甕の配置を、建物北寄りに変更したことからこのような切り合いが生じたと考えられる。したがって建物中央南で検出された KP12 も位置的に見て変更前の配置と見られる。検出当初はこの KP12 は切り合いを持たないため、建物内の円形穴は 23 基としていたが、上記の理由からシンメトリックに配置された 22 基と訂正しておきたい。円形穴の直径は 0.8 ～ 1.2 m 、深さは 0.2 ～ 0.4 mで、断面は半球形に近いものである。埋土は１～２層のものが多く、遺物をほとんど含まないが、KP9 からは須恵器の杯蓋の完形品が出土している（第 71 図 194)。この須恵器内面には「米」の墨書が確認され、建物上面の包含層からも「米」の墨書土器片が出土している（第 71 図 196)。須恵器の大甕を据え付けたと見られる円形穴を持つ建物は、主に酒造りを行っていたと考えられることから、「米」の墨書土器はそれに関連する可能性が高いといえよう。



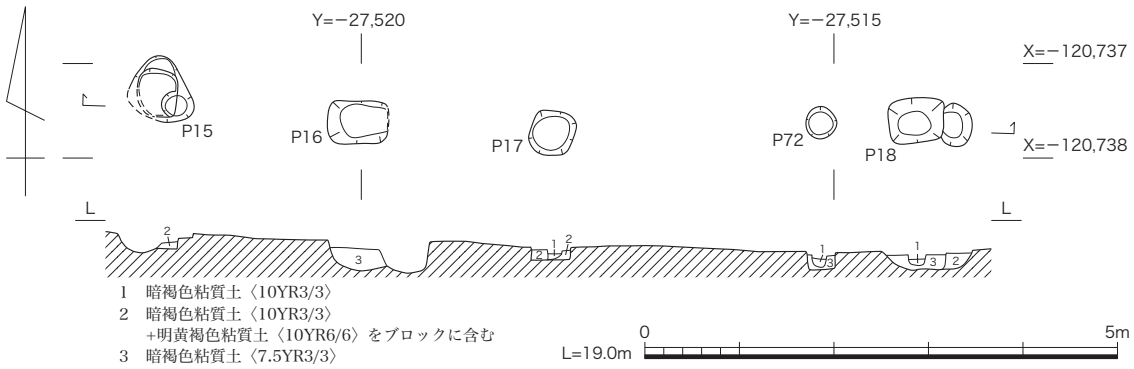
第 44 図　小穴 P95 遺物出土状況実測図（1/20）

小穴 P95（第 44 図）　掘立柱建物 SB88 の北東部に隣接する直径 0.5 mの円形の小穴である。検出面から 0.3 mで一回り狭くなり、北東寄りでさらに 0.2 m深くなる。この上段部分で土師器高杯が倒立状態で検出された。高杯は脚部端部を欠失するがほぼ完形で、高杯が出土した褐灰色粘土（第１層）からは他に土師器皿と須恵器杯Ａ片が出土している。下層の褐色粘質土・灰黄褐色粘土からは遺物は出土していない。出土状況から祭祀遺構と見られるが、掘立柱建物 SB88 の北東に隣接することから、関連する遺構の可能性がある。

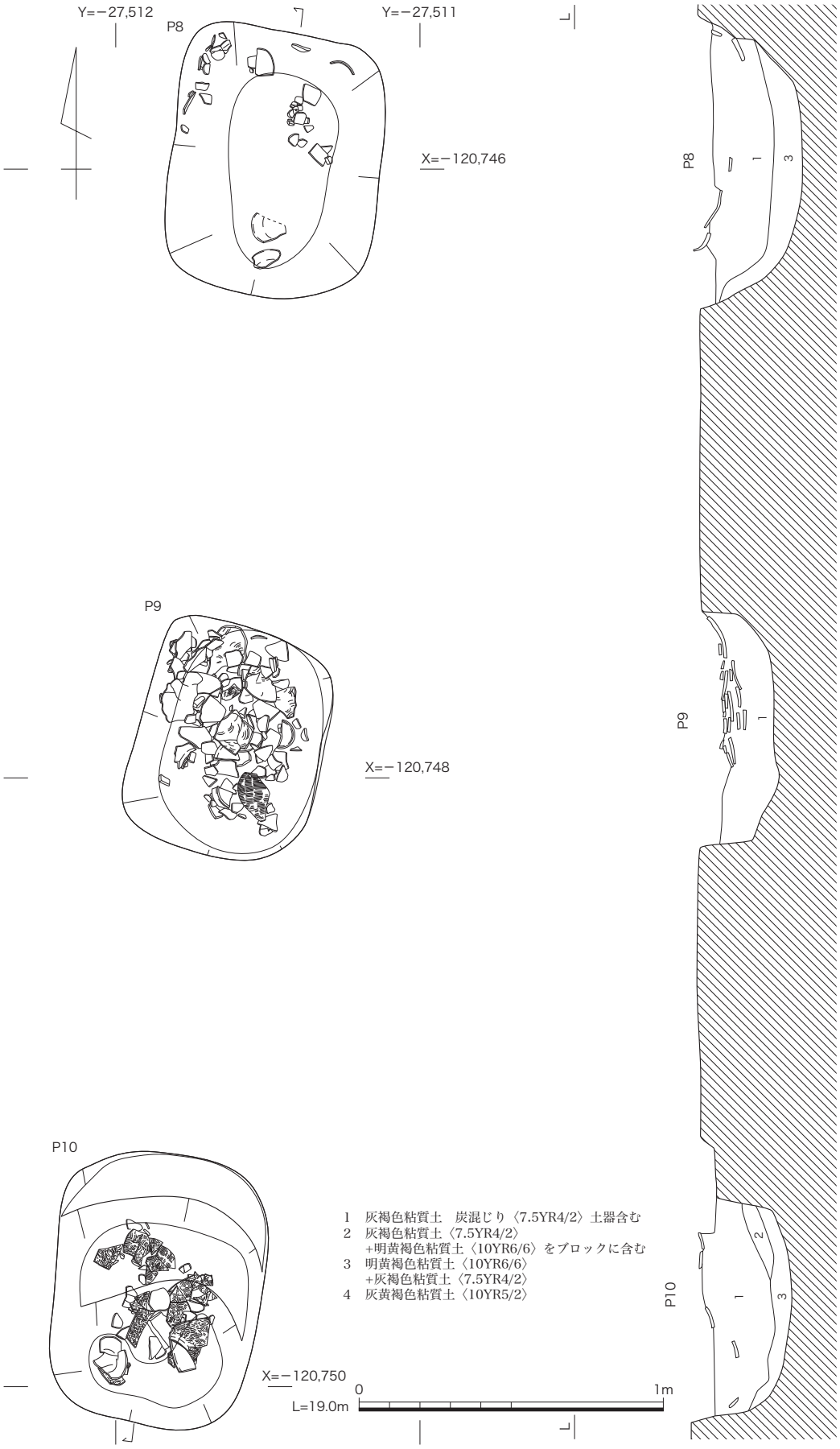
掘立柱建物 SB91（第 45・47 図）　掘立柱建物 SB88 に切られる斜め方向の掘立柱建物で、柱掘形内から、多くの長岡京期の遺物が出土したことから初期段階に存在した先行建物と判断したものである。先述した平安時代とした掘立柱建物 SB92 とは方位も異なっており、北で 10° 東に触れている。東西２間、南北４間以上の南北棟建物で、柱掘形は一辺 0.7 ～ 0.9 mとやや大型の隅円方形～長方形で、深さは西側が浅く 0.1 ～ 0.2 m、東側では 0.3 ～ 0.4 mである。西側と北側の柱列で直径 0.15 ～ 0.2 mの柱痕が確認された。柱間は西側は不揃いで、北から 2.1 m、



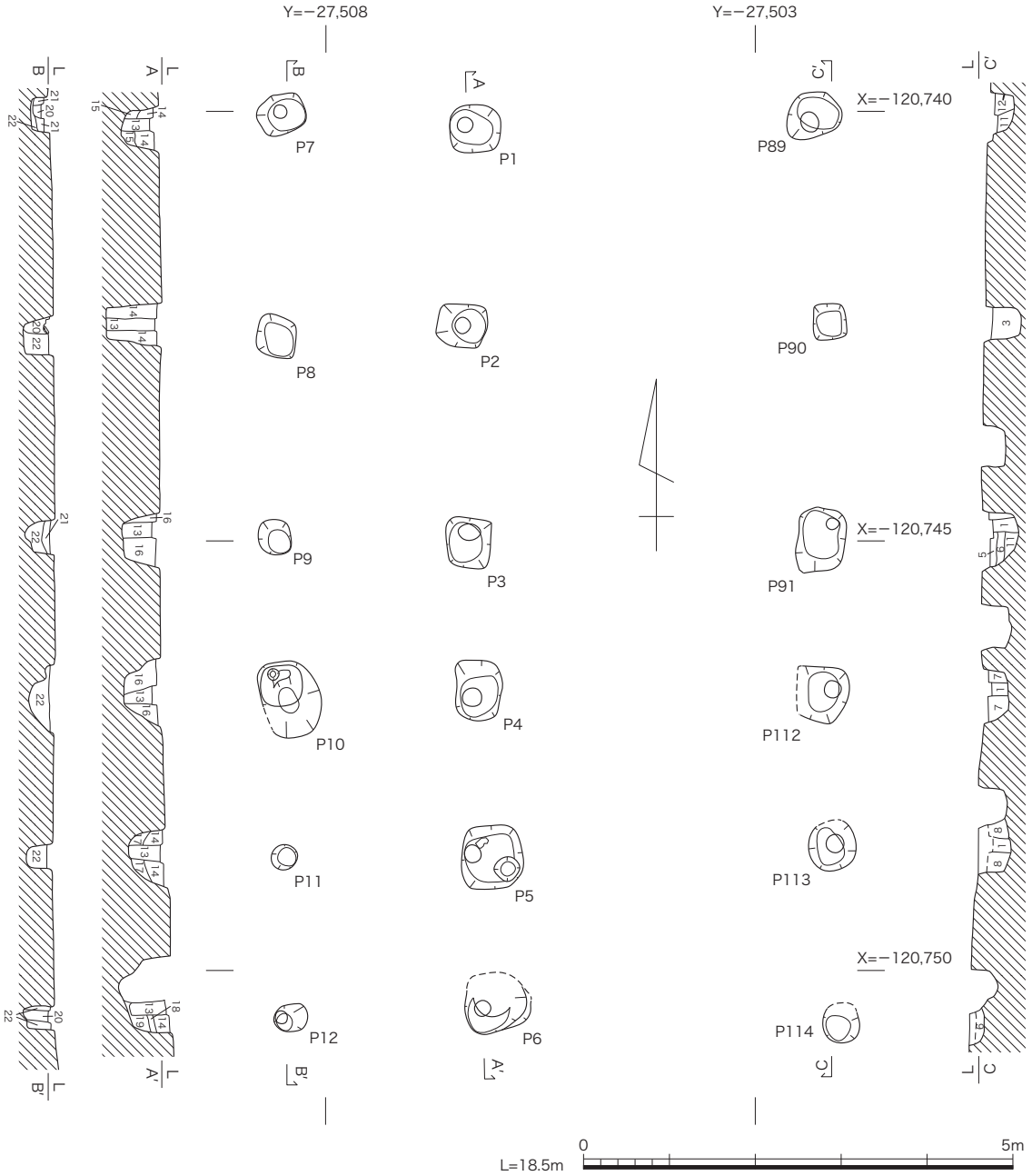
第 45 図　掘立柱建物 SB91 実測図（1/80）



第 46 図　小穴 P15 ～ 18・72 実測図（1/80）

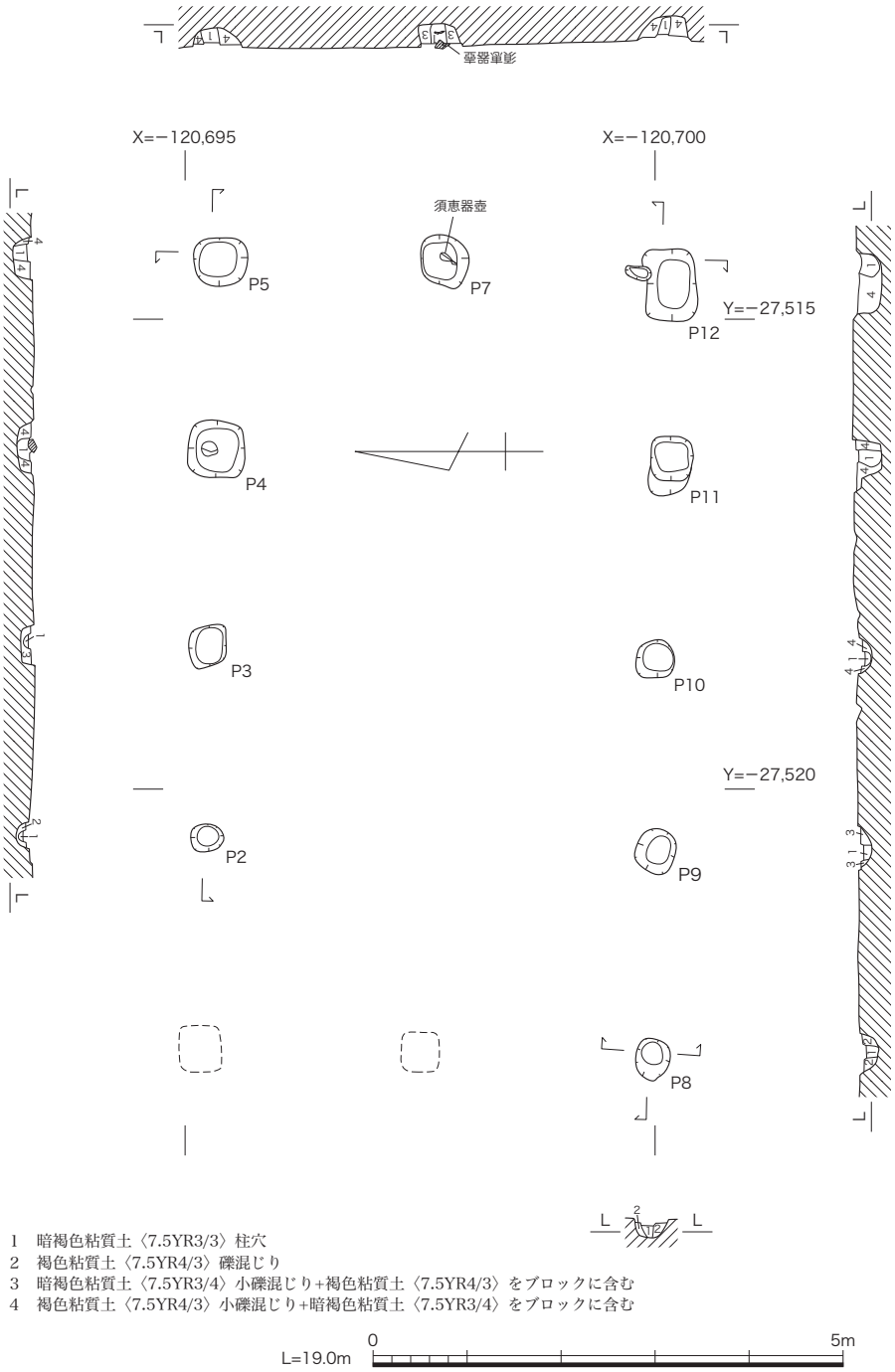


第 47 図　掘立柱建物 SB91 柱掘形遺物出土状況実測図（1/20）



1　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉
　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉ブロックに含む
2　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉
　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉混じり　しまりなし
3　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉土器片・炭含む
4　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉
　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉ブロックに含む　小礫混じり
5　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉
　明褐色粘質土〈7.5YR5/6〉ブロックに含む　土器片・炭混じり
6　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/4〉礫混じり
7　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉礫混じり
8　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉小礫混じり
9　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉
10　褐色粘質土〈7.5YR4/6〉小礫混じり
　灰黄褐色粘質土〈7.5YR4/2〉わずかにブロックに含む
11　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉
　明褐色粘質土〈7.5YR5/6〉ブロックに含む　礫混じり
12　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉
　明褐色粘質土〈7.5YR5/6〉ブロックに含む　土器片混じり
13　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉
　灰褐色粘質土〈7.5YR5/2〉を少量ブロックに含む
14　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉
　明黄褐色粘質砂礫混じり〈10YR6/6〉をブロックに含む　遺物・炭含む
15　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉遺物・炭含む
16　明黄褐色粘質土　砂礫混じり〈10YR6/6〉遺物・炭含む
　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉をブロックに含む
17　暗褐色粘質土　砂礫混じり〈10YR3/4〉
18　明黄褐色粘質土〈10YR7/6〉
19　明黄褐色粘質土　砂礫混じり〈10YR6/6〉
20　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉柱穴埋土で遺物含む
21　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉
22　褐色粘質土　砂礫混じり〈10YR4/6〉
　明黄褐色粘質土　砂礫混じり〈10YR6/6〉をブロックに含む　遺物・炭含む

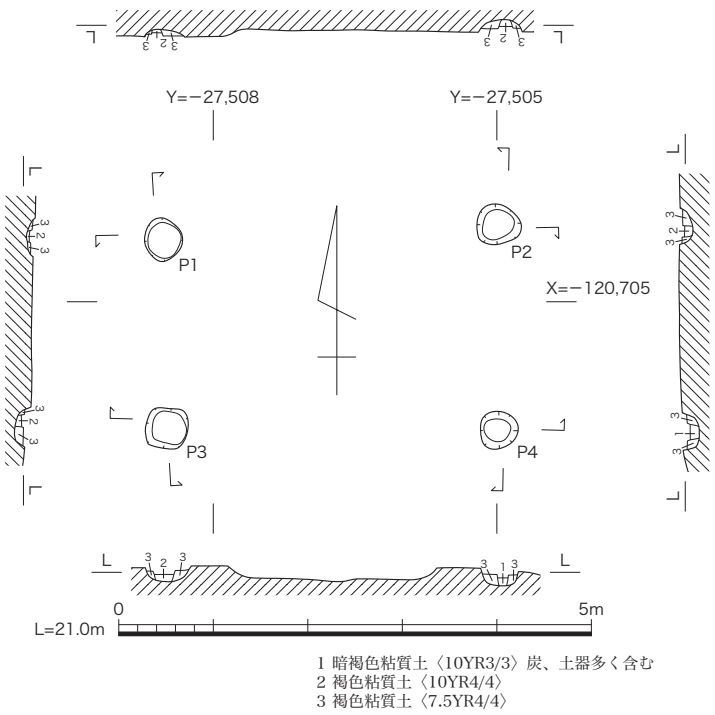
第48図　掘立柱建物 SB96 実測図（1/80）



第 49 図　掘立柱建物 SB111 実測図（1/80）

2.1 m、1.4 m、1.6 m、北側では東西 1.3 mである。東側の柱掘形では柱痕は確認されず、内部には多くの遺物が含まれていた。P9 では土師器・須恵器の食器類の他に土師器の甕や羽釜、須恵器の甕など比較的大型の土器類が大量に出土している。P10 でも須恵器の甕や土師器食器類が出土している。祭祀の可能性もあるが、内容は一般的な土器類が多く、完形品もないため断定はできない。なお調査地内で同様の方位を持つ建物などは確認できていない。

小穴 P15 ～ 18・72（第 46 図）　掘立柱建物 SB88 の北部に並ぶ東西方向の柱列で、当初は



第 50 図　掘立柱建物 SB113 実測図（1/80）

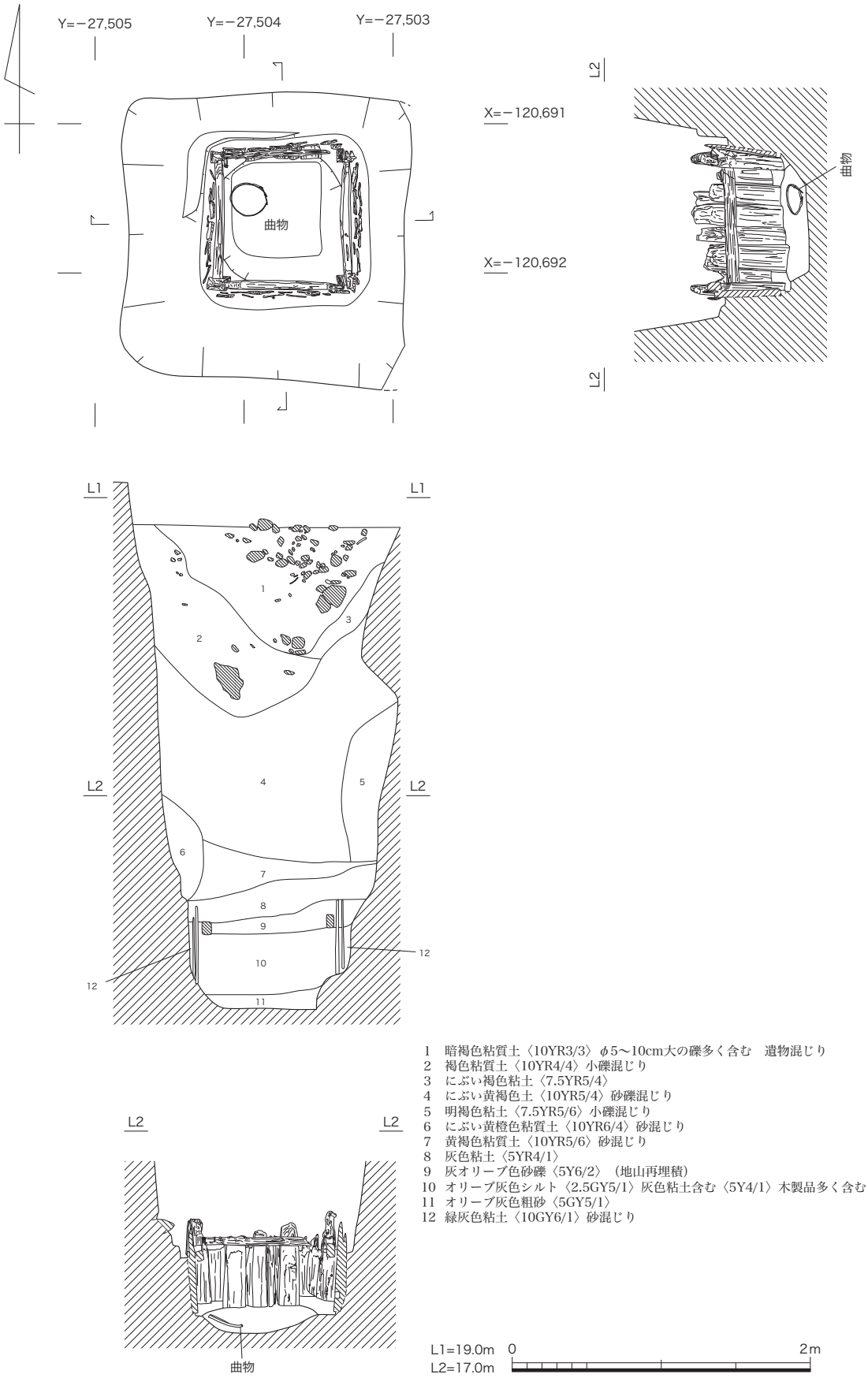
北側の廂と考えたが、柱筋がやや異なるため、柱列として認識している。

掘立柱建物 SB96（第 48 図）　調査地南東隅で検出された、南北 5 間以上、東西 2 間、西に廂を持つ南北棟建物である。後述する区画溝 SD 90 に東側柱列の掘形西辺が切られているため、長岡京期でも先行する遺構と考えられるものである。ただし先述した掘立柱建物 SB91 とは異なり、正方位を指向しており、様相は異なっている。柱掘形は一辺 0.3 ～ 0.9 mと大きさにばらつきがあり、平面も隅円方形～不整方形と一定ではない。深さは 0.2 ～ 0.6 mで、掘形内には直径 0.15 ～ 0.2 mの柱痕が確認できる。南北の柱間は北側 2 間分が 2.4 m、それより南では 1.8 ～ 1.9 mで、東西は棟持柱が未確認であるが 2.1 m、廂も 2.1 mである。

掘立柱建物 SB111（第 49 図）　調査地北部で検出された南北 2 間､東西 4 間の東西棟である。調査地の北部一帯は以前の工場建設時に大きく削平を受けているため、北西部の柱掘形は未確認である。柱掘形は一辺 0.3 ～ 0.7 mの隅円方形で､削平のため円形に近いものもある。深さは 0.1 ～ 0.3 mで、内部には 0.15 ～ 0.2 mの柱痕が残り、柱間は南北 2.4 m、東西 2.1 mである。このうち東辺中央の P7 からは猿投産の須恵器壺片が出土している。

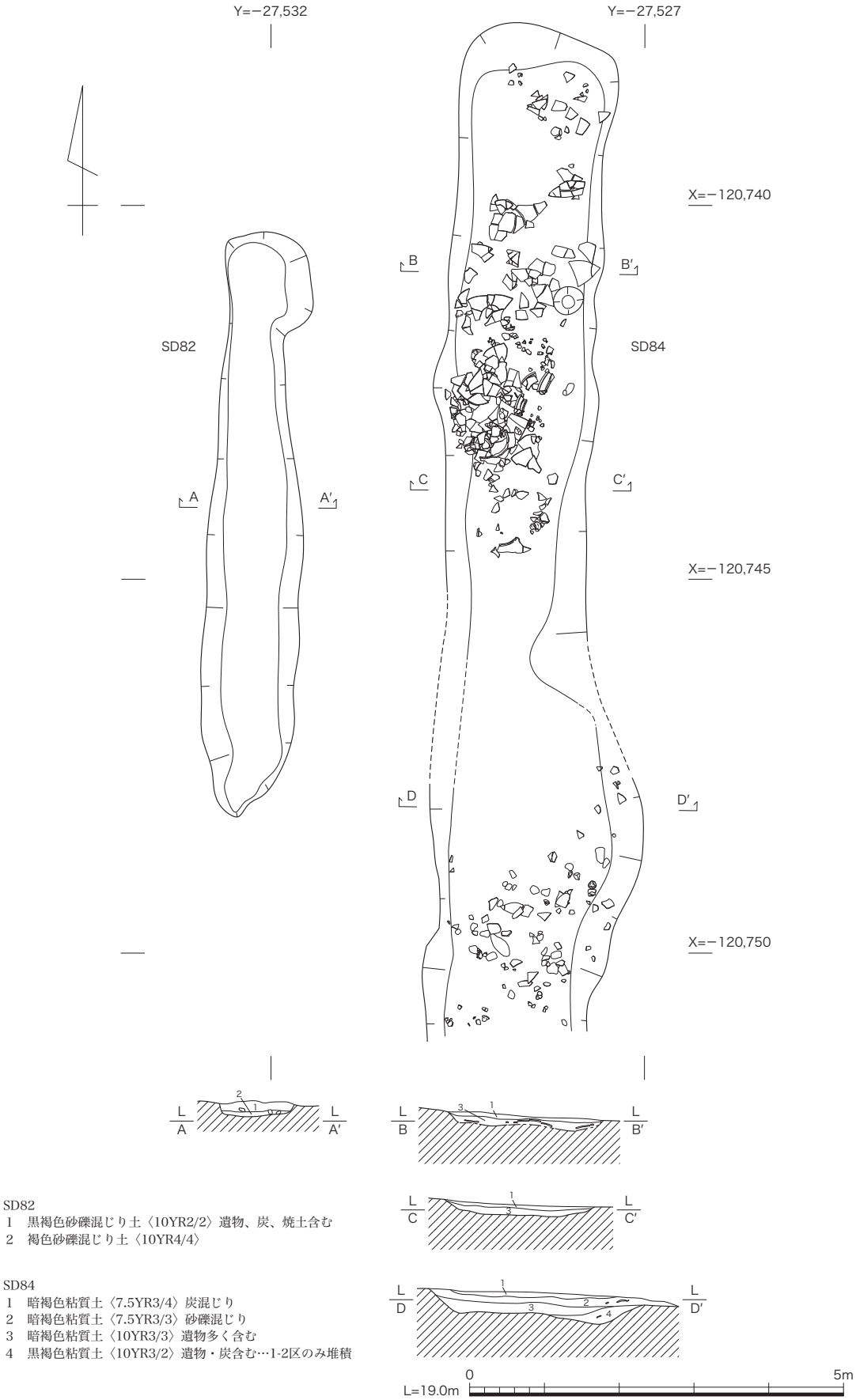
掘立柱建物 SB113（第 50 図）　調査地中央付近で検出された南北 1 間、東西 1 間の小規模な建物である。柱掘形は一辺 0.4 mの隅円方形～不整円形で、深さは 0.1 ～ 0.2 m、内部に残る柱痕の直径は 0.1 mである。柱間は南北 2.1 m、東西 3.6 mで門と考えられるが、周辺に柵列などはみられない。柱掘形内からは、須恵器壺、土師器椀・皿・甕などの破片が出土している。

井戸 SE114（第 51 図）　調査地北東部、江戸時代の土管埋設遺構 SX123 の西側に接して検出された。井戸の掘形は 1.9 m四方で、深さは 3.5 m、底部には約 1 m四方の縦板組隅柱横桟留の井戸側が約 0.7 mの高さで残っている。井戸側の残りは良好ではないが、隅柱は 10 ～ 13cm の角材で、東西辺は下から 30cm に、南北辺は下から 40cm の個所に枘穴を設けている。横桟は幅約 10cm 前後、厚さ 5 cm 前後、長さ約 90cm で、両端に枘を作り出しているがかなり腐食が進んでいる。側板は幅 10 ～ 15cm、厚さ 2 ～ 3cm で一辺に約 6 枚を立て並べた後、裏側の隙間を塞ぐようにもう一列立て並べている。北辺は 8 枚、南辺は 11 枚、東辺は 9 枚、西辺は



1　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉φ5〜10cm大の礫多く含む　遺物混じり
2　褐色粘質土〈10YR4/4〉小礫混じり
3　にぶい褐色粘土〈7.5YR5/4〉
4　にぶい黄褐色土〈10YR5/4〉砂礫混じり
5　明褐色粘土〈7.5YR5/6〉小礫混じり
6　にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/4〉砂混じり
7　黄褐色粘質土〈10YR5/6〉砂混じり
8　灰色粘土〈5YR4/1〉
9　灰オリーブ色砂礫〈5Y6/2〉（地山再埋積）
10　オリーブ灰色シルト〈2.5GY5/1〉灰色粘土含む〈5Y4/1〉木製品多く含む
11　オリーブ灰色粗砂〈5GY5/1〉
12　緑灰色粘土〈10GY6/1〉砂混じり

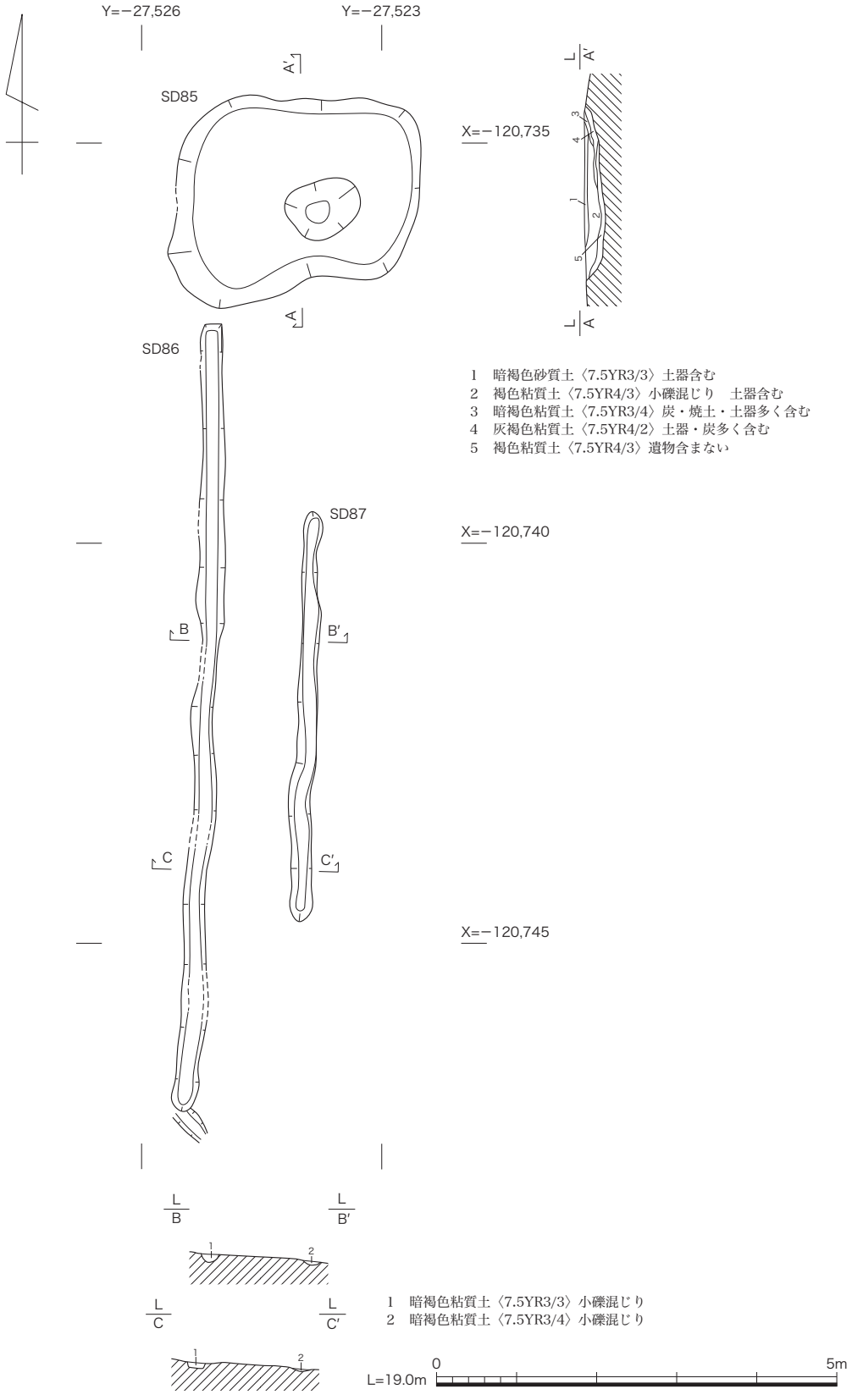
第 51 図　井戸 SE114 実測図（1/40）



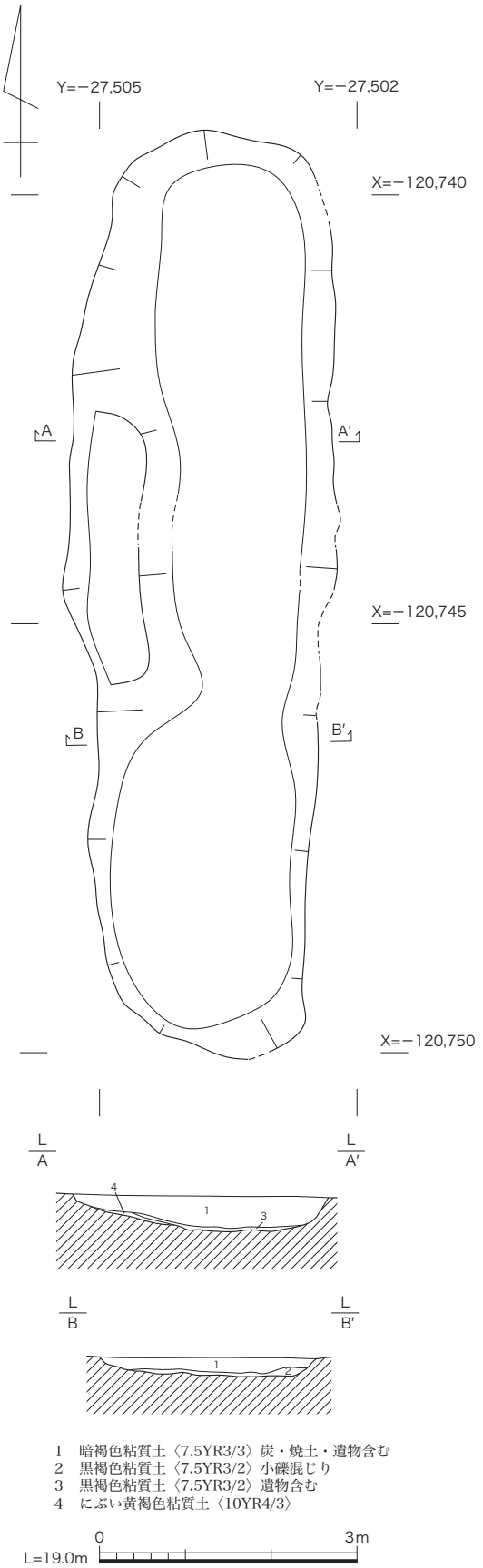
SD82
1　黒褐色砂礫混じり土〈10YR2/2〉遺物、炭、焼土含む
2　褐色砂礫混じり土〈10YR4/4〉

SD84
1　暗褐色粘質土〈7.5YR3/4〉炭混じり
2　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉砂礫混じり
3　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉遺物多く含む
4　黒褐色粘質土〈10YR3/2〉遺物・炭含む…1-2区のみ堆積

第52図　溝 SD82・84 実測図（1/80）



第 53 図　溝 SD85 ～ 87 実測図（1/80）



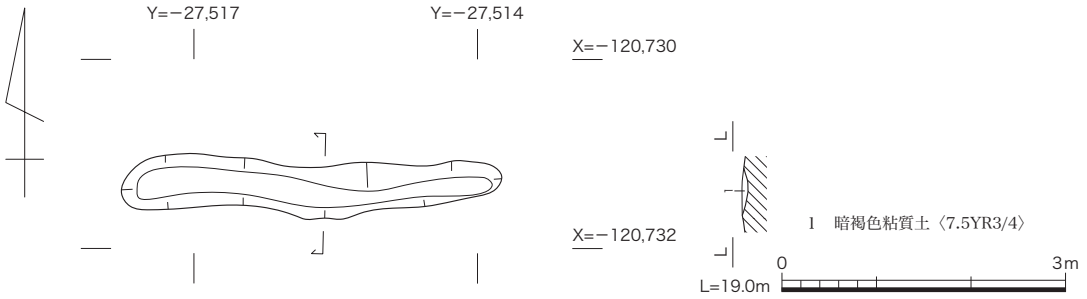
第54図　溝SD90実測図（1/80）

10枚使用している。断面観察では、検出面から2.8 mまでは井戸側抜き取り時と見られる堆積があり、さらに上面1.6 mには礫を多く含んだ最終的な埋土があり、遺物は主にこの層から出土している。井戸側内にはシルトと粗砂が堆積していて、曲物底板・側板、箸などの木製品が少量出土している。

溝SD82・84～87・90　甕据え付け穴を持つ掘立柱建物SB88を取り囲むように検出された溝群で、幅広の浅い溝と細い溝からなる。いずれも長岡京期の遺物が出土している。

溝SD82・84（第52図）溝SD82は掘立柱建物SB88の西側9 mにある南北方向の溝で、幅0.7～1.3 m、長さ7.8 m、深さ0.2 mである。埋土は2層で、上層の黒褐色砂礫混じり土からは炭・焼土などとともに土師器食器類・甕、須恵器食器類、製塩土器などが出土している。下層の褐色砂礫混じり土からも土師器甕などが出土している。

溝SD84は同じく掘立柱建物SB88の西側5 mにあり、溝SD82とは約1.9mの間隔で並ぶ南北方向の溝である。幅1.9～2.8 m、深さは0.2～0.4mで、南に深くなっている。13.5 m分が検出されたが、さらに南側の調査地外に延びている。埋土は北側では2層、南では4層確認できる。このうち第3・4層からは遺物が大量に出土している。また、第4層には焼土・炭を含んでいる。溝内からは土師器・須恵器の食器類・甕などが出土しているが、もっとも多いのが須恵器大甕の破片である。非常に浅い溝の底部に張り付くように破片が分布していて、主に北半部に集中するが、南半部にも一部分布している。甕は9割以上の破片が残されており、ほぼ完形に復元できる珍しいものである。口縁部破片は北部に集中していて、上を向いた口縁



第 55 図　溝 SD93 実測図（1/80）

部の下に体部・底部片が堆積しており、成立した甕がひしゃげたような印象を受ける（図版 16－２）。状況から見ておそらく掘立柱建物 SB88 に据えられていた甕のひとつとみられ、破損により投棄されたものと見られる。この大甕片を取り上げたところ、その下から小型の甕が一個体出土している（第 75 図 312）。この他に溝の南半部の東肩には小型の土師器皿Ｃが 16 枚重なり合って出土していて、その上部には黄色の粘土がかぶせられていた。

溝 SD85 ～ 87（第 53 図）　溝 SD85 は掘立柱建物 SB88 の北西約２ｍにある南北 2.6 ｍ、東西３ｍ、深さ 0.2 ～ 0.3 ｍの浅い落ち込みで、先述のごとく掘立柱建物 SB88 を取り囲む一連の遺構と見られることから溝としている。埋土は５層で上部の４層には多くの遺物を含んでいる。土師器の食器類・甕類が多く、須恵器は少量である。

溝 SD86・87 は溝 SD85 のすぐ南に平行する２条の細い溝である。遺物の出土はないが、掘立柱建物 SB88 のちょうど西側 1.5 ｍ、1.8 ｍに位置し、埋土が長岡京期の溝に共通することなどから関連する遺構と判断したものである。幅 0.2 ～ 0.3 ｍ、深さ 0.1 ｍほどで溝 SD86 は長さ 9.9 ｍ、溝 SD87 は 5.1 ｍである。

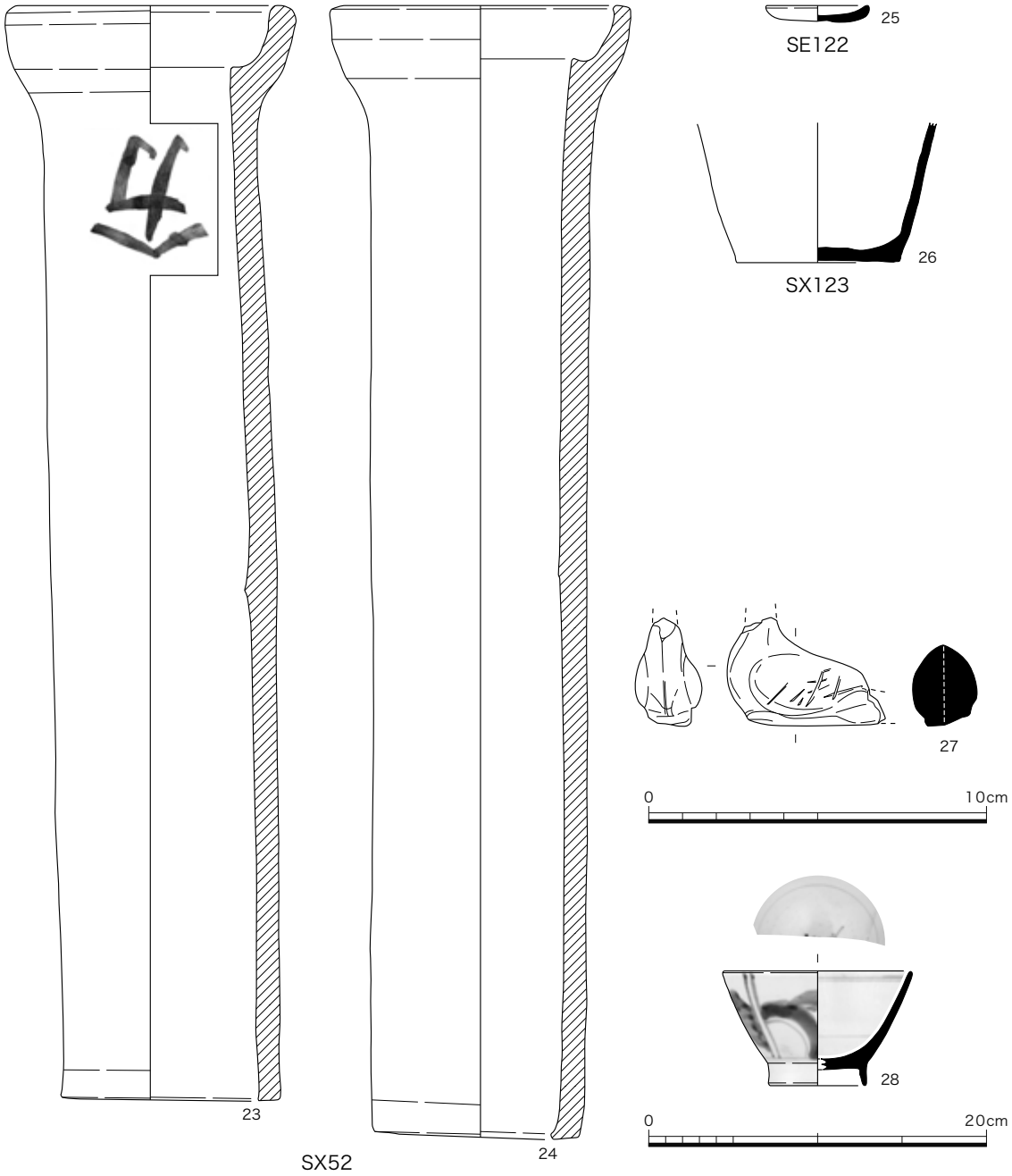
溝 SD90（第 54 図）　掘立柱建物 SB88 の東側 6.5 ｍの位置にある南北方向の幅である。幅 2.6 ～ 3.2 ｍ、長さ 10.8 ｍ、深さは北部で 0.4 ｍ、南部で 0.2 ｍである。溝の西方にはテラス状に一段浅くなる部分が認められる。埋土は上層に厚く暗褐色粘質土が堆積していて、炭・焼土などとともに土師器・須恵器の食器類のほか、須恵器大甕の口縁部片が出土している。

溝 SD93（第 55 図）　掘立柱建物 SB88 の北側約 7m にある東西方向の溝である。幅 0.4 ～ 0.6m、長さ 4m、深さ 0.1 ｍで、遺物は出土していないが、埋土や位置などから一連の区画溝としたものである。

（２）出土遺物

Ａ．近世・戦国期の遺物

土管埋設遺構 SX52・123、井戸 SE122 出土遺物（第 56 図）　23・24 は、素焼きの土管。粘土板を丸く巻いた円筒の一方に連結するための受け口を作る。土管に墨書きで記号と文字を組み合わせた「ヤマカ」の屋号が記されている。製造または販売に関わる商家の称号とみられる。25 は、土師器皿。26 は、陶器壺。内外面に施釉する。底部に５箇所の目跡が残る。27 は、鳩の土人形。二枚の型を合わせて作る。28 は、肥前産の磁器。広東碗。これらの遺物は、概ね江

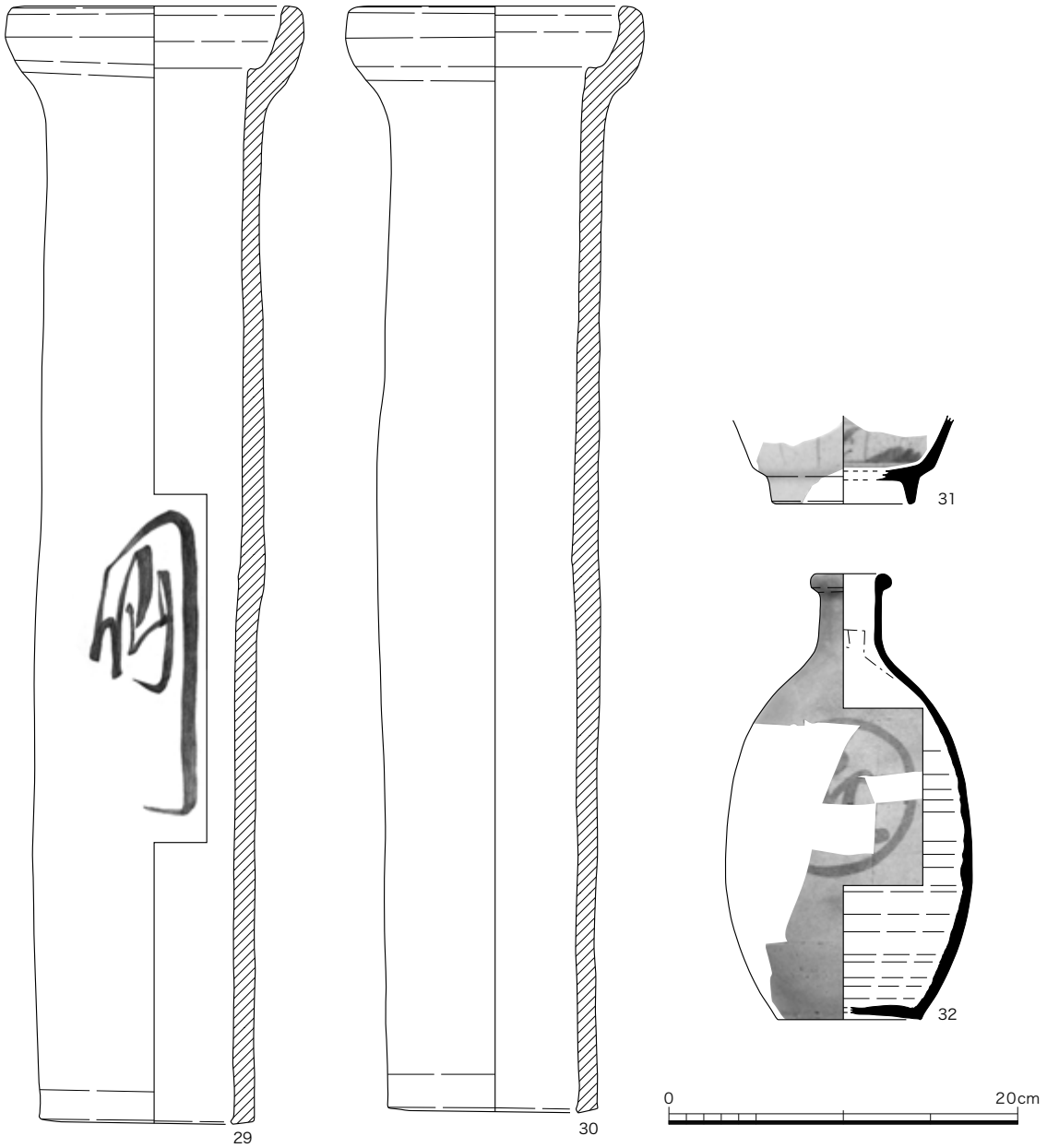


第 56 図　土管埋設遺構 SX52・123、井戸 SE122 出土遺物実測図（1/2・1/4）

戸時代末頃から明治時代にかけてのものと考えられる。

井戸 SE55 出土遺物(第 57 図)29･30 は､素焼きの土管。前述の土管と類似する。墨書きで｢カネセン」の屋号が記されている。31 は、筒型の磁器鉢。32 は、陶器の徳利。外面に酒屋の屋号とみられる銘が記されている。欠損しているが「近」であろうか。いわゆる貧乏徳利と呼ばれる貸し徳利は、江戸後期から昭和初期頃まで使われていたようである。

土管埋設遺構 SX54 出土遺物（第 58 図）　33 ～ 36 は、瓦製の土管。同一寸法の寸胴形で、連結しても外面が突出しない。内面にコビキ B の横筋が残る。時期の決め手となる遺物は乏しいが、一連の調査成果からみて戦国期を上限に江戸時代までのものであろう。

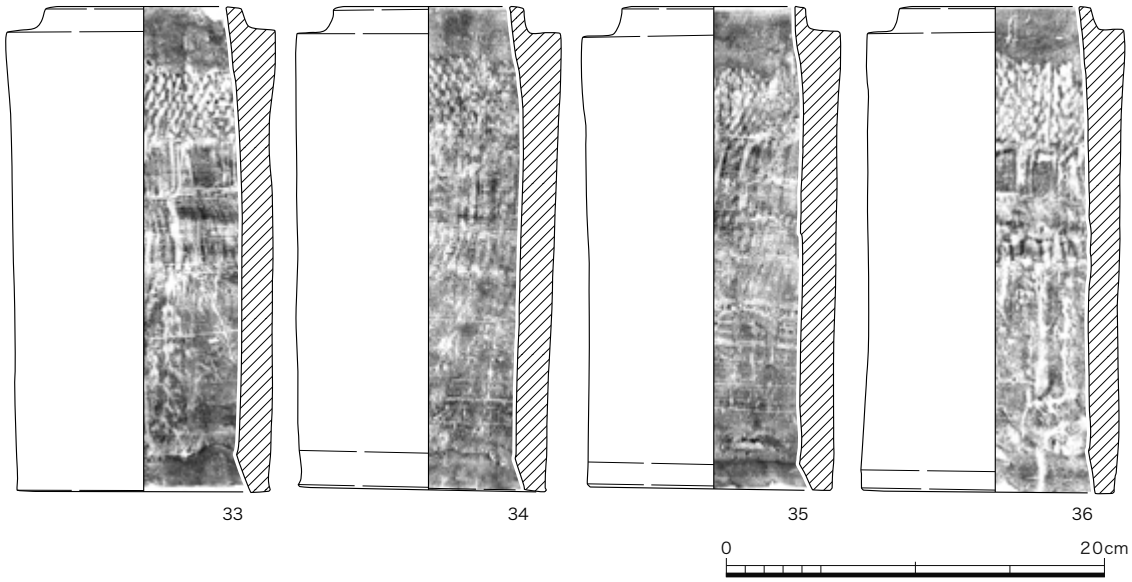


第 57 図　井戸 SE55 出土遺物実測図（1/4）

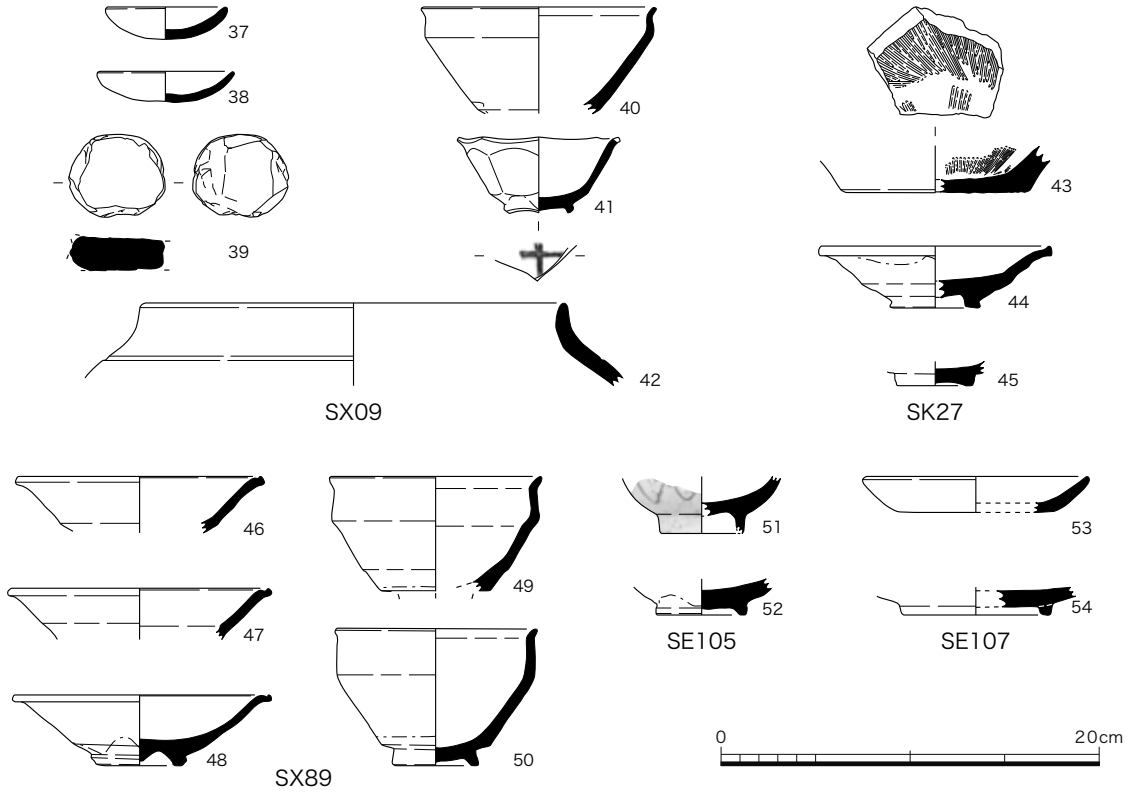
掘立柱建物 SB73 出土遺物（第 71 図 209）　遺物は非常に少量で、唯一図示できたものがP17 から出土した土師器皿である。口径 7.0cm で内面と口縁部をヨコナデし、他は不調整である。

堀 SX09 出土遺物（第 59･61･62 図）　いずれも堀の下層から出土したものである。37･38 は、胎土･色調の特徴から在地産の土師器皿。39 は、瓦片を丸く打ち欠き、割れ口を平にこすっている。40 は、鉄釉の天目茶碗。瀬戸・美濃産とみられる。41 は、白磁の盃。体部を八角に面取りしており、高台は抉りをいれる。高台内に「十」の墨書がある。42 は、瓦器の湯釜。堀 SX09 から出土した遺物は、16 世紀末～ 17 世紀前半に比定される。

63 は 4 区の最下層から出土した掛矢である。頭部は直径 15cm、長さ 28.3cm で、外面は多

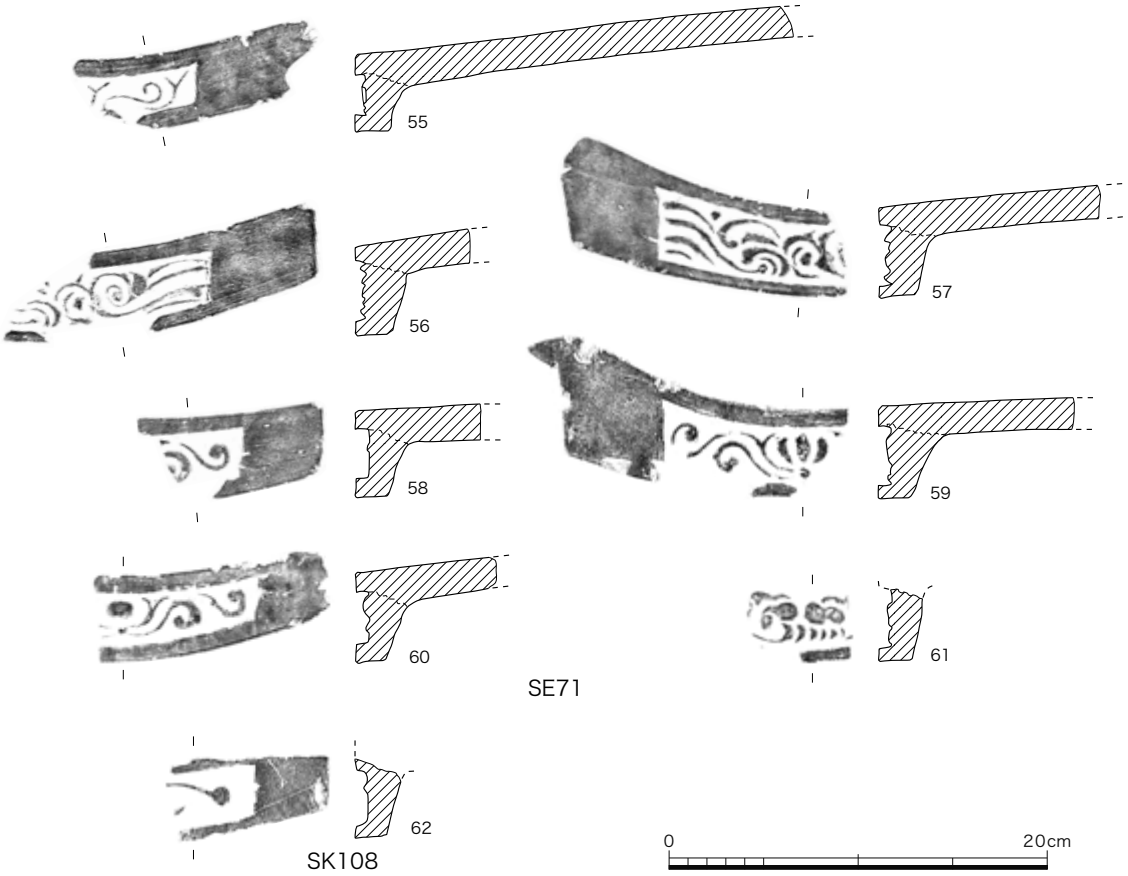


第 58 図　土管埋設遺構 SX54 出土遺物実測図（1/4）

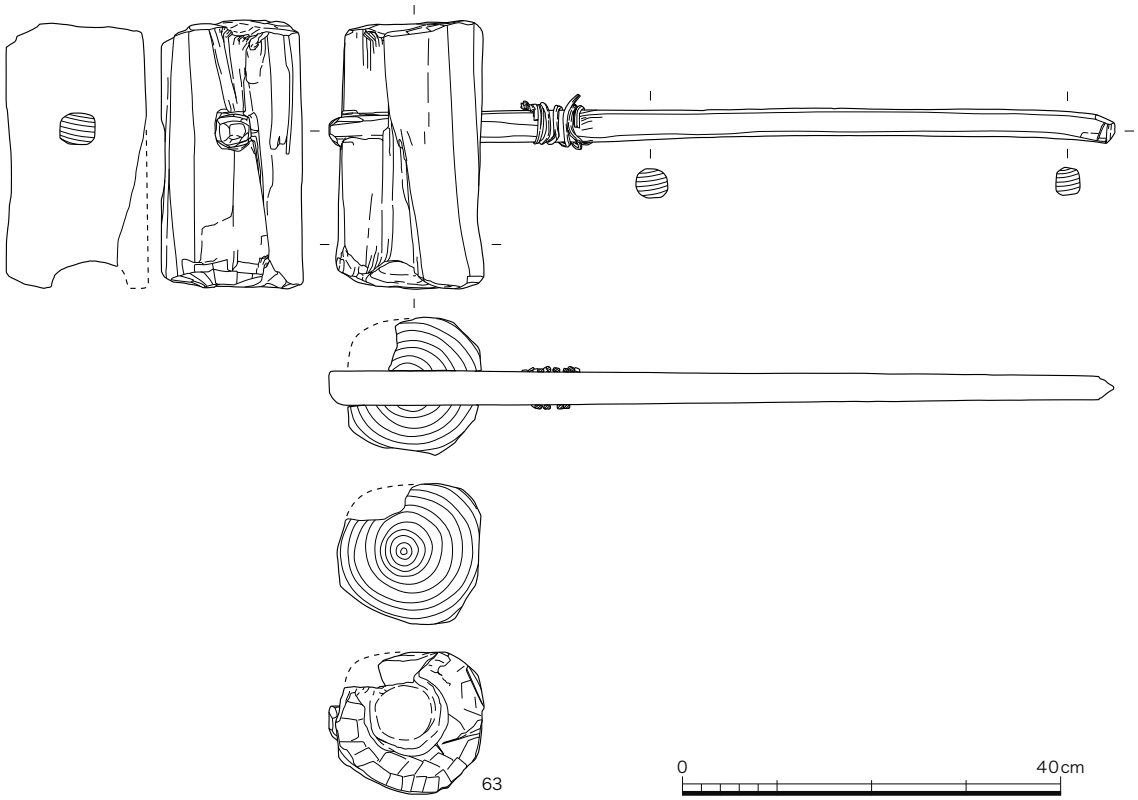


第 59 図　堀 SX09 他出土遺物実測図（1/4）

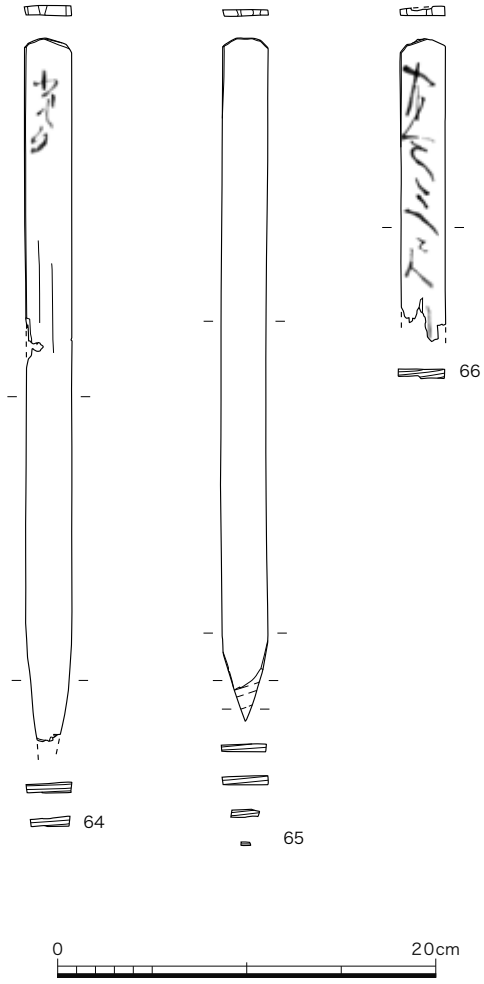
角形に整形されている。頭部の一部は剥離していて、直径 3 cm の柄を通すための孔が頭部の中央ではなく、片方に偏って穿たれている。このため頭部の打面は一方のみで、杭などを打ち込んだと見られる直径 8 cm、深さ 3 cm の円形の窪みが残る。柄は、長さ 83.0cm、直径 2.5 ～ 3.8cm で頭部側が太く、徐々に細くなっている。頭部側から 24cm 付近には折損部を蔓で補修した痕跡が残されている。材質は頭部が杉、柄が樫である。



第 60 図　井戸 SE71、水溜 SK108 出土遺物実測図（1/4）



第 61 図　堀 SX09 出土掛矢実測図（1/8）



第 62 図　堀 SX09 出土木簡実測図（1/4）

64 ～ 66 は掛矢と共に出土した木簡である。64 は中央付近で折損し、先端をわずかに欠失しているが、ほぼ全形の判明するもので、長さ 37.2cm、幅 2.5cm、厚さ 0.5cm の非常に長い木簡である。一面の上端付近に 3 文字ほどが確認できるが、それより下に文字は認められない。また文字は判読できなかった。65 はほぼ同型の完形のもので、長さ 36.2cm、幅 2.5cm、厚さ 0.5cm である。両面共に文字は確認できなかった。66 はおそらく同型と見られる木簡の上半部で、上端から 5・6 文字が確認できる。中央付近には「三」とみられる文字が判読できるがそれ以外は判読不能である。現存長 15.8cm、幅 2.5cm、厚さ 0.5cm である。

今回出土した木簡に類似するものとして、神奈川県鎌倉市北条小町邸跡から出土した木簡がある[25]。時代は鎌倉～南北朝時代とやや古いものであるが、細長い木簡の上半部のみに何かの長さと人名を記したものである。これは若宮大路側溝の普請に伴い工事区間の割り当てを表示したものと考えられ、地面に刺して使用するために細長く、上部のみに墨書されていたものとみられる。したがって今回の調査で出土した木簡も、その類似性から堀の掘削に関する工事区間の割り当てを表示した可能性も考えられる。掛矢と共に出土しているのも、工事関連の木簡を連想させる。また木簡 66 に書かれた「三」とみられる文字も、北条小町邸跡から出土した木簡と同様に、工事の割り当て区間の長さを表した可能性もあるが、他の文字が判読できないため現在のところ不明である。

水溜 SK27 出土遺物（第 59 図）　43 は、陶器の擂鉢。底部中央にも櫛目を施す。44 は、いわゆる唐津産の溝縁皿。外面は露胎。45 は、天目茶碗の高台。外面に 3 箇所重ね焼きの痕跡が残る。これらの遺物は、17 世紀前半に比定される。

落ち込み SX89 出土遺物（第 59 図）　46 ～ 48 は、唐津産の溝縁皿。内外面を施釉しており、48 は高台が露胎する。砂目積み。49･50 は、天目茶碗。50 は、内外面に灰を被り、光沢がない。高台内に糸切り痕が残る。貼り付け高台。これらの遺物は、17 世紀前半に比定される。

井戸 SE105･107 出土遺物（第 59 図）　51 は、網目文の肥前産染付碗。52 は、唐津産の皿。砂目積み。井戸 SE105 から出土した遺物は、17 世紀後半に比定される。53 は、戦国期の土師器皿。内外面と割れた断面に油煙が付着する。54 は、平安時代の緑釉陶器皿。削り出しの輪高台で、内外面に施釉する。硬質。山城産とみられる。

井戸 SE71、水溜 SK108 出土遺物（第 60 図）　軒平瓦（55 ～ 62）は、中心飾りに三葉文、左右に反転する唐草文を配するものが多い。55 は、線描き風の細い唐草文であるが、他のものは肉太で蔓草の先端が玉になる。色調は、62 が淡黄色、その他は燻し銀を呈する。61 は、文様が左右非対称である。詳細は不明。図示できたもの以外に、桟瓦、袖瓦などが出土している。江戸時代後期に比定される。

B．平安時代の遺物

掘立柱建物 SB92 出土遺物（第 71 図）　柱掘形内から少量出土している。図示したのはいずれも須恵器で、197 は杯 A、198・199 は杯 B の小片である。

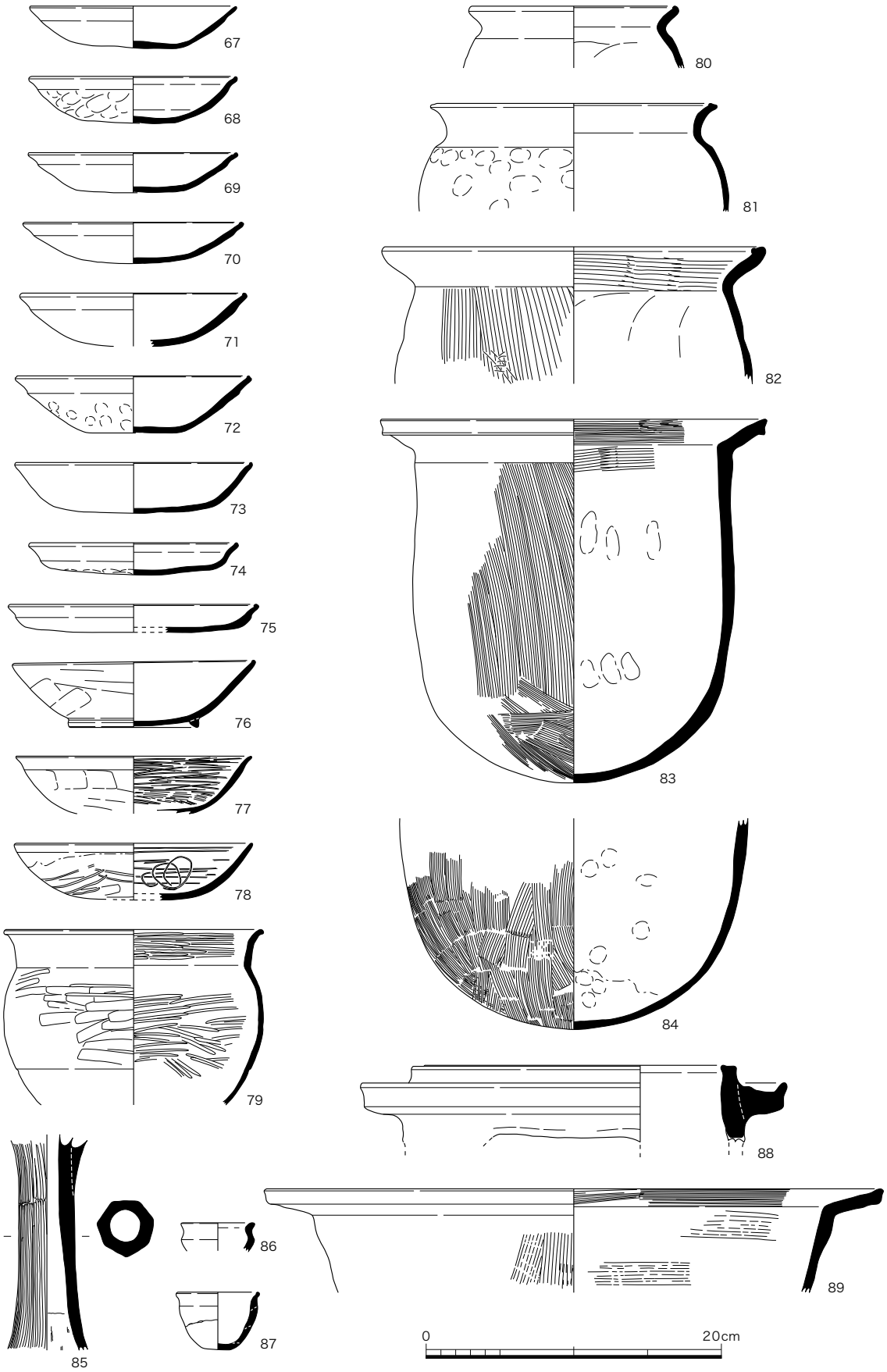
井戸 SE83 出土遺物（第 63 ～ 65 図）　上層出土遺物は井戸の最終的な埋土で、礫と共に大量に出土している。土師器の食器類は、内面と口縁部をヨコナデし他はオサエでしあげる e 手法である。椀 A（67 ～ 69）は口径 14.0 ～ 14.2cm、器高 2.8 ～ 3.2cm、杯 A（70 ～ 73）は口径 15.0 ～ 16.1cm、器高 2.8 ～ 4.0cm、皿 A は口径 14.2cm、器高 2.2cm（74）と口径 17.0cm、器高 1.9cm（75）のものがある。杯 B（76）は底部に断面三角形の貼り付け高台を持ち、外面はヘラケズリの後ナデ、口径 16.5cm、器高 4.5cm である。高杯（85）は七角形に面取りした脚部を縦方向にヘラミガキしている。甕には球形の体部と外反する口縁部からなり端部を上方に突出させるもの（80 ～ 82）と、長胴で直線的に屈曲する口縁部を持つもの（83・84）があり、前者には外面ハケメのもの（82）とオサエのみのもの（80・81）がある。他には分厚い鍔を巡らせる竈（88）や大型の鍋（89）、ミニチュアの甕（86・87）などがある。

須恵器の食器類は杯 A（90）、杯 B（91・92）があるが数は少ない。91 は口縁端部に灯火器としての使用痕跡が見られる。ほかに壺 L（94･99 ～ 101）、壺 M（95）、壺 Q（102）、壺 A（103）、平瓶（104）などがある。このうち 94・95 は底部を糸切りする。

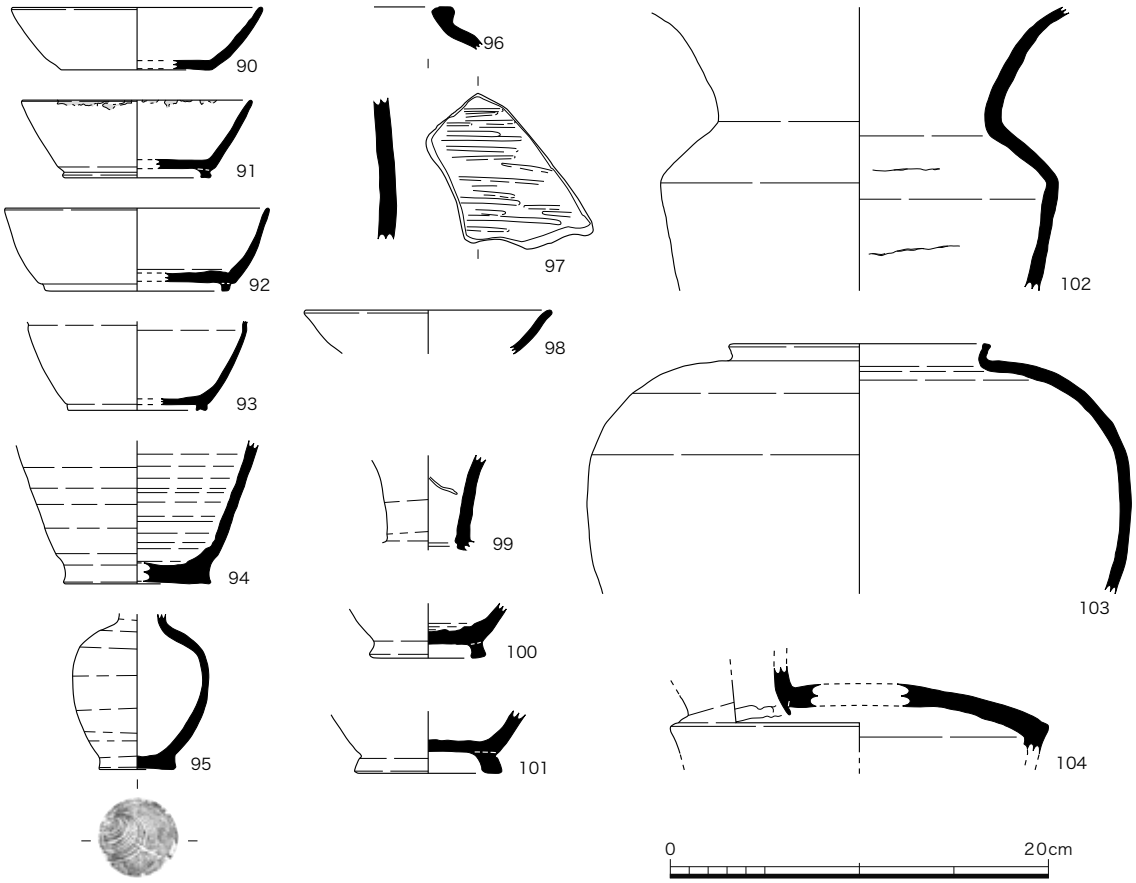
黒色土器には杯（77・78）と甕（79）がある。77 は内面ヘラミガキ、外面はヘラケズリ、78 は外面ヘラケズリの後粗いヘラミガキ、内面は粗いヘラミガキと螺旋状暗文を施す。内のみ黒色化する A 類である。甕は口縁部が上方に立ち上がった後に端部が外反し、端部は丸く納める。体部は球形で、底部付近には圧痕がわずかに残る。体部外面はヘラケズリ、内面および口縁部はヘラミガキである。内外面とも黒色化する B 類である。

緑釉陶器は火舎（96･97）と皿（98）がある。いずれも軟質で灰白色の素地に淡緑色の釉がかかる。96 は口縁端部、97 は体部と見られるもので、ヘラミガキの後に施釉している。一方、皿にはヘラミガキは認められない。これらの遺物は平安京の編年における京都Ⅱ期中～新段階にあたるものである。

下層出土遺物は量的には少ない。土師器皿（105）は口縁部のみヨコナデする e 手法である。



第 63 図　井戸 SE83 上層出土遺物実測図– 1 （1/4）



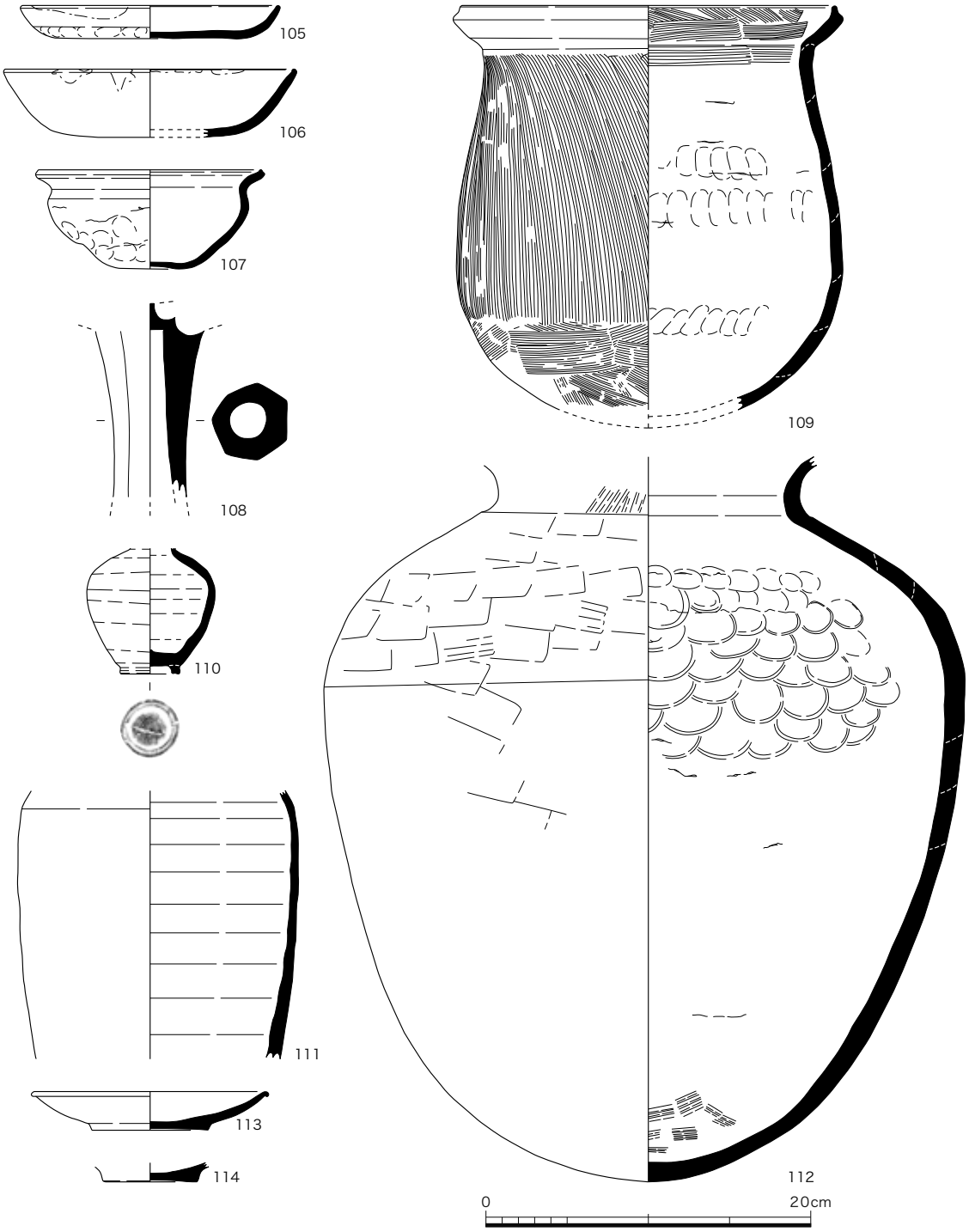
第 64 図　井戸 SE83 上層出土遺物実測図－２（1/4）

杯（106）は灯火器に使用されていて、口縁部に煤が付着する。摩滅するがｃ手法と見られる。壺Ｂ（107）はいわゆる墨書人面土器として使用されるものであるが、墨書は確認できない。高杯（108）は脚部七角形に面取りする。甕（109）は外反する体部とやや下ぶくれの長胴を持つもので、内面には接合痕が残る。

須恵器壺Ｍ（110）は底部糸切りの後に高台を貼り付け、ヘラ記号を刻む。111 は大型の壺体部で、内外面ロクロナデで薄く仕上げられている。甕（112）は口縁端部を欠くが体部は完形で、釣瓶として使用されていた可能性がある。焼成軟質で内面に円形の当て具痕、外面にはタタキ痕がわずかに残る。

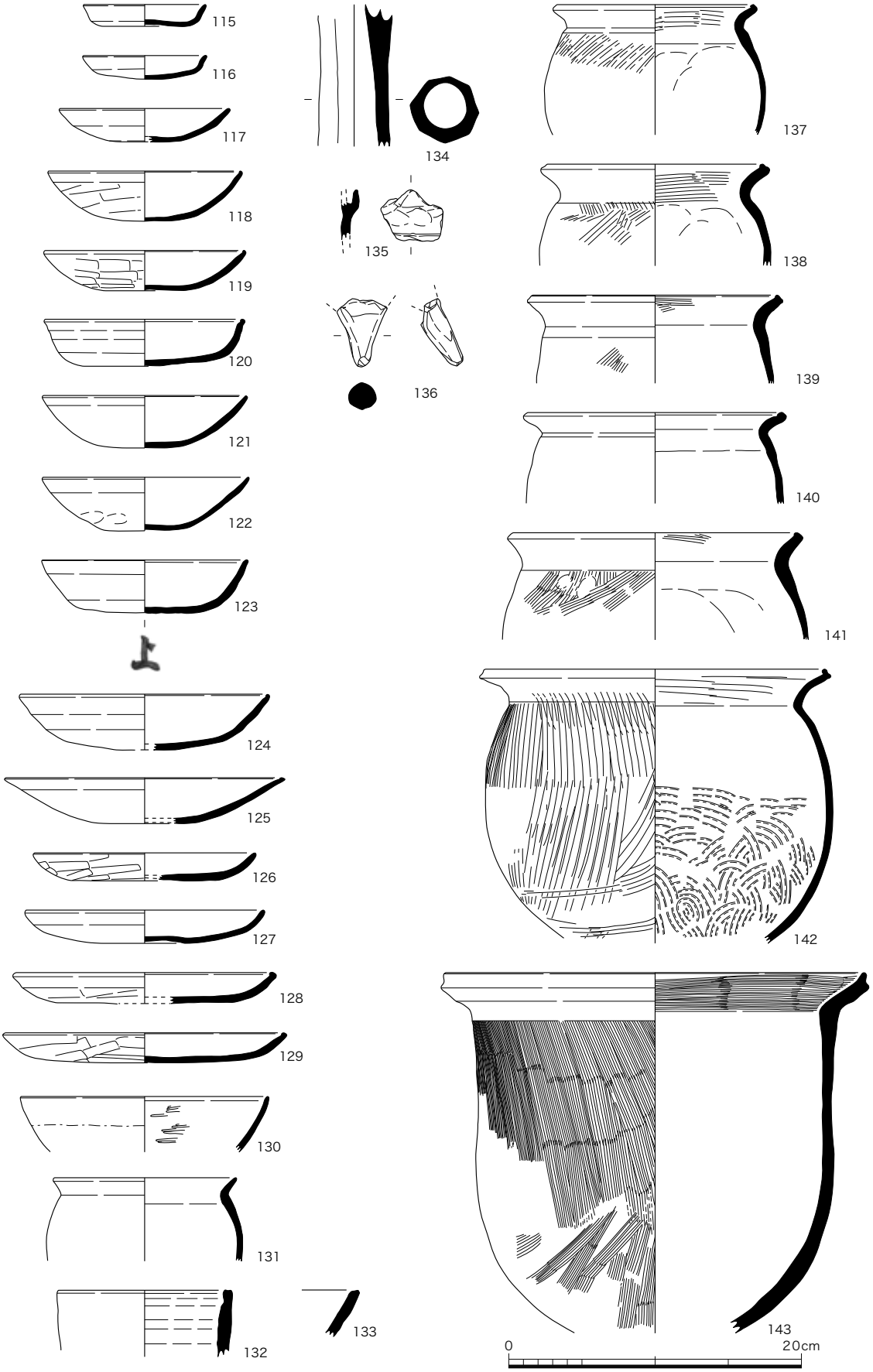
緑釉陶器皿（113・114）はいずれも削り出し高台のもので、非常に軟質である。口縁端部は外側の突出していて、薄い鶯色の釉がかかる。これらは一部に古い様相を持つものも見られるがおおむね平安京の編年における京都Ｉ期新段階にあたるものである

井戸 SE116 出土遺物（第 66・67・80 図）　遺物のほとんどは最終的な埋土である上層出土で占められ、最下層から出土した遺物は非常に少なく、図示できたのは杯Ａ（123）のみである。土師器の食器類は外面全体をヘラケズリするｃ手法のものと、口縁端部と内面をナデ調整し、他はオサエのままのｅ手法のものがある。115・116 は口径 8.2 ～ 8.5cm の皿Ｃである。ｅ手法。椀Ａは口径 11.7 ～ 14.1cm で、ｅ手法（117・121・122）とｃ手法（118・119）のものがある。

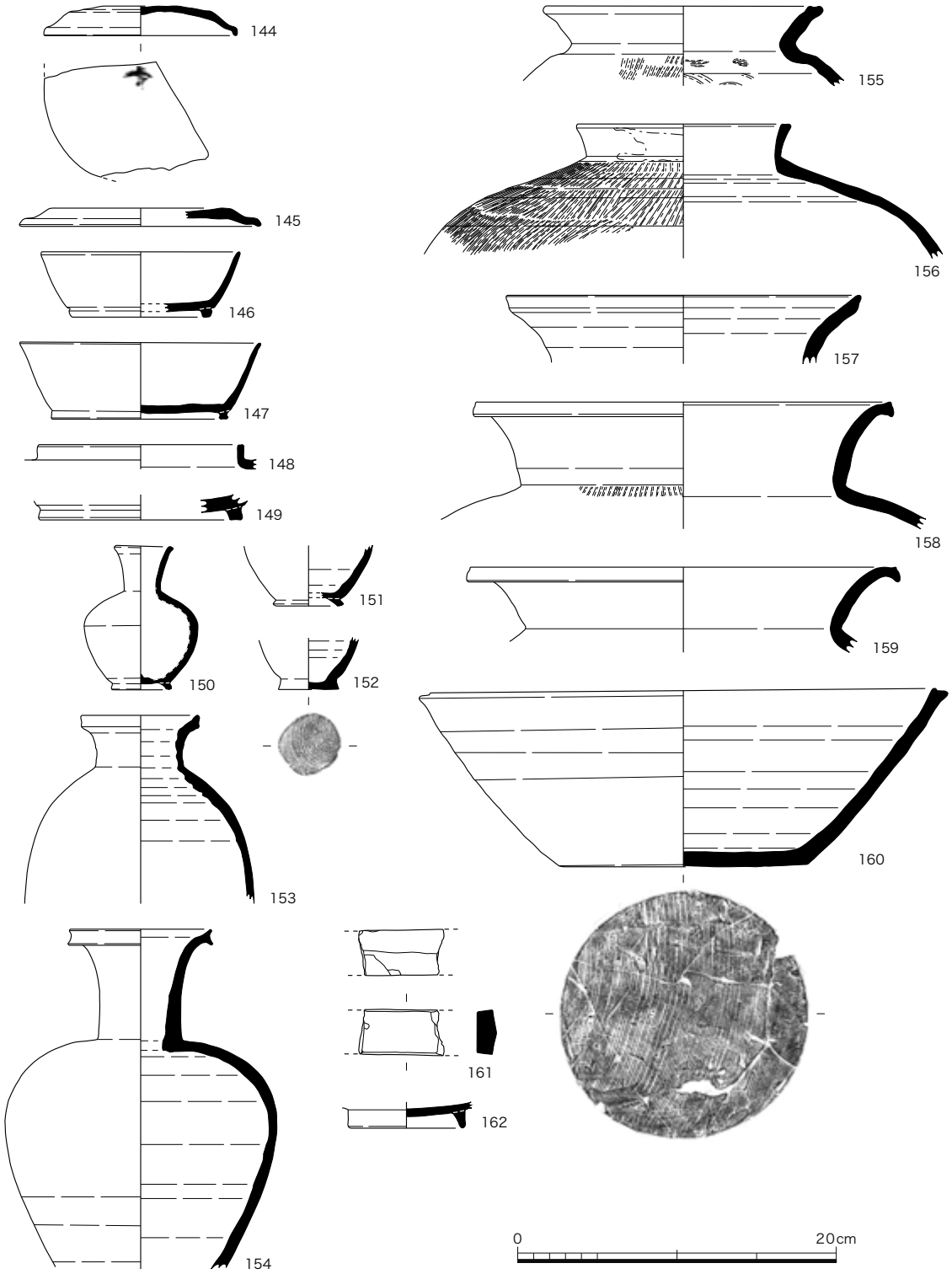


第 65 図　井戸 SE83 下層出土遺物実測図（1/4）

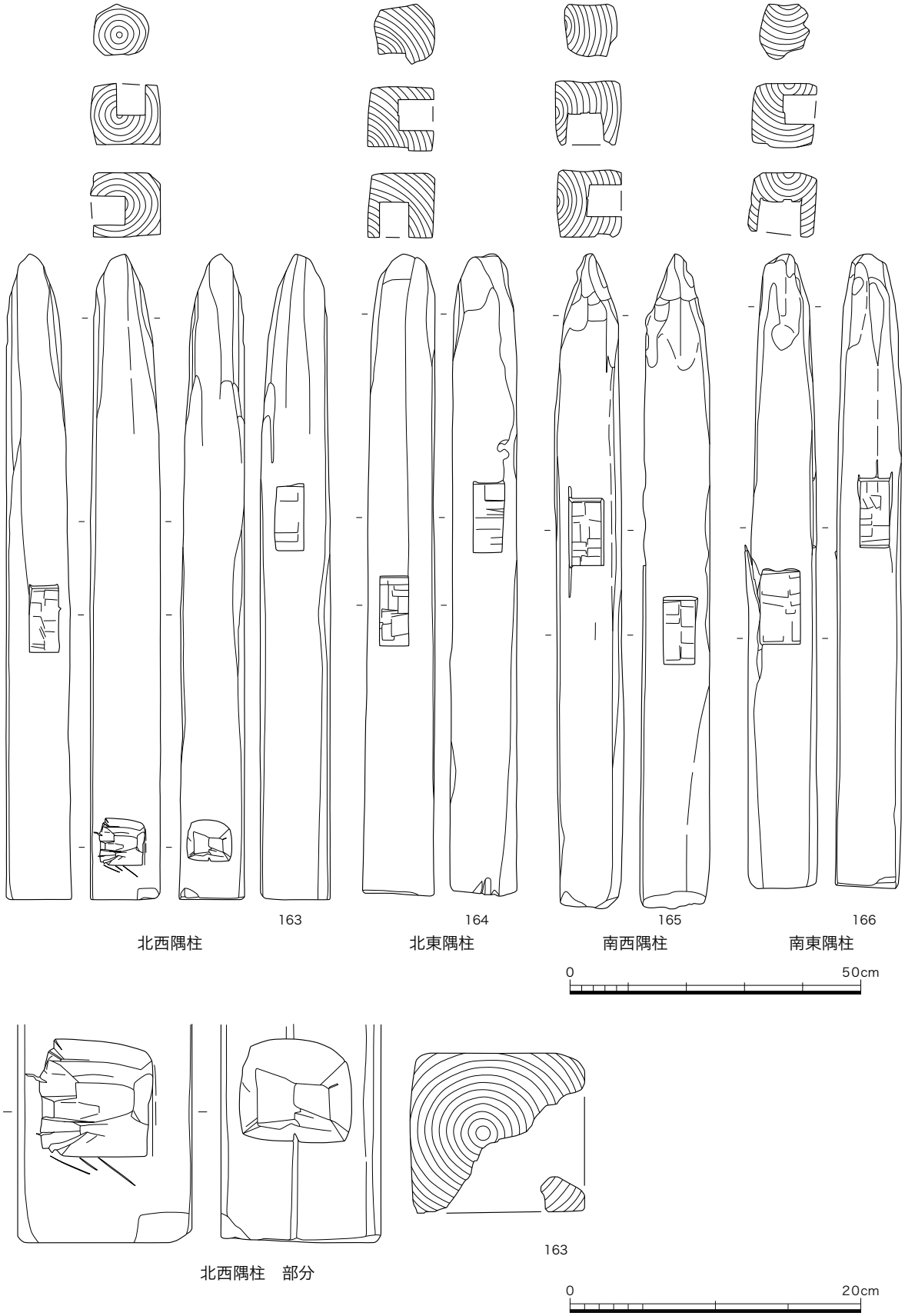
120・123 は古い様相を持つ杯 A で、口縁部と内面ナデ調整、底部外面不調整の b 手法である。最下層出土の 123 には底部外面中央に「上」の墨書が認められる。杯 A は口径 17.1cm、器高 3.8cm のやや深いもの（124）と、口径 19.2cm、器高 3.2cm で口縁部が開き、浅いもの（125）がある。皿 A は口径 15.2 ～ 16.4cm（126・127）と口径 18.0 ～ 19.4cm（128・129）があり、c 手法（126・128・129）と e 手法のもの（127）がある。 c 手法のうち 128 はケズリが端部まで及ばないものである。134 は八角形に面取りする高杯脚部片、135 は甕体部に貼り付けられた三角



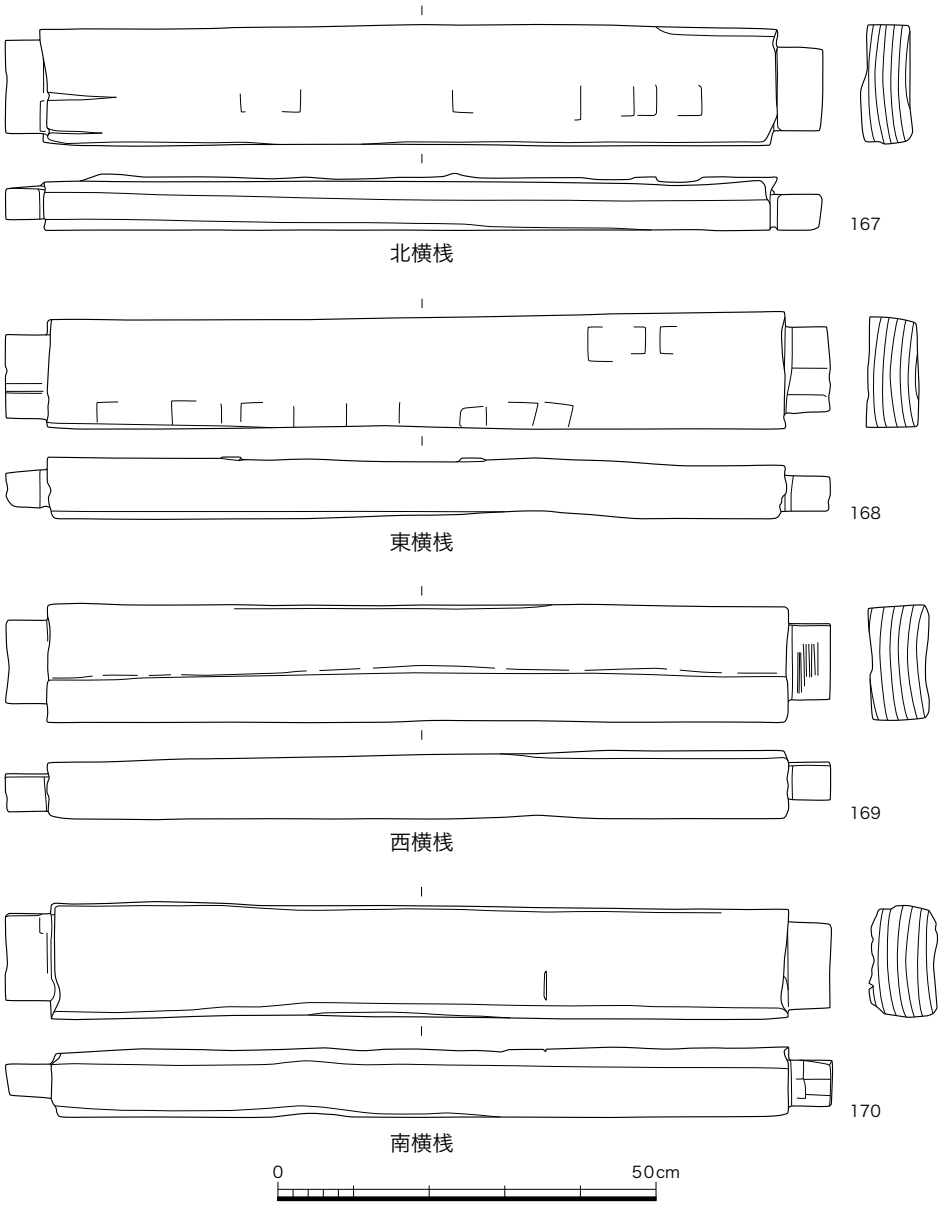
第 66 図　井戸 SE116 出土遺物実測図－１（1/4）



第 67 図　井戸 SE116 出土遺物実測図－２（1/4）



第 68 図　井戸 SE116 隅柱実測図（1/4・1/10）

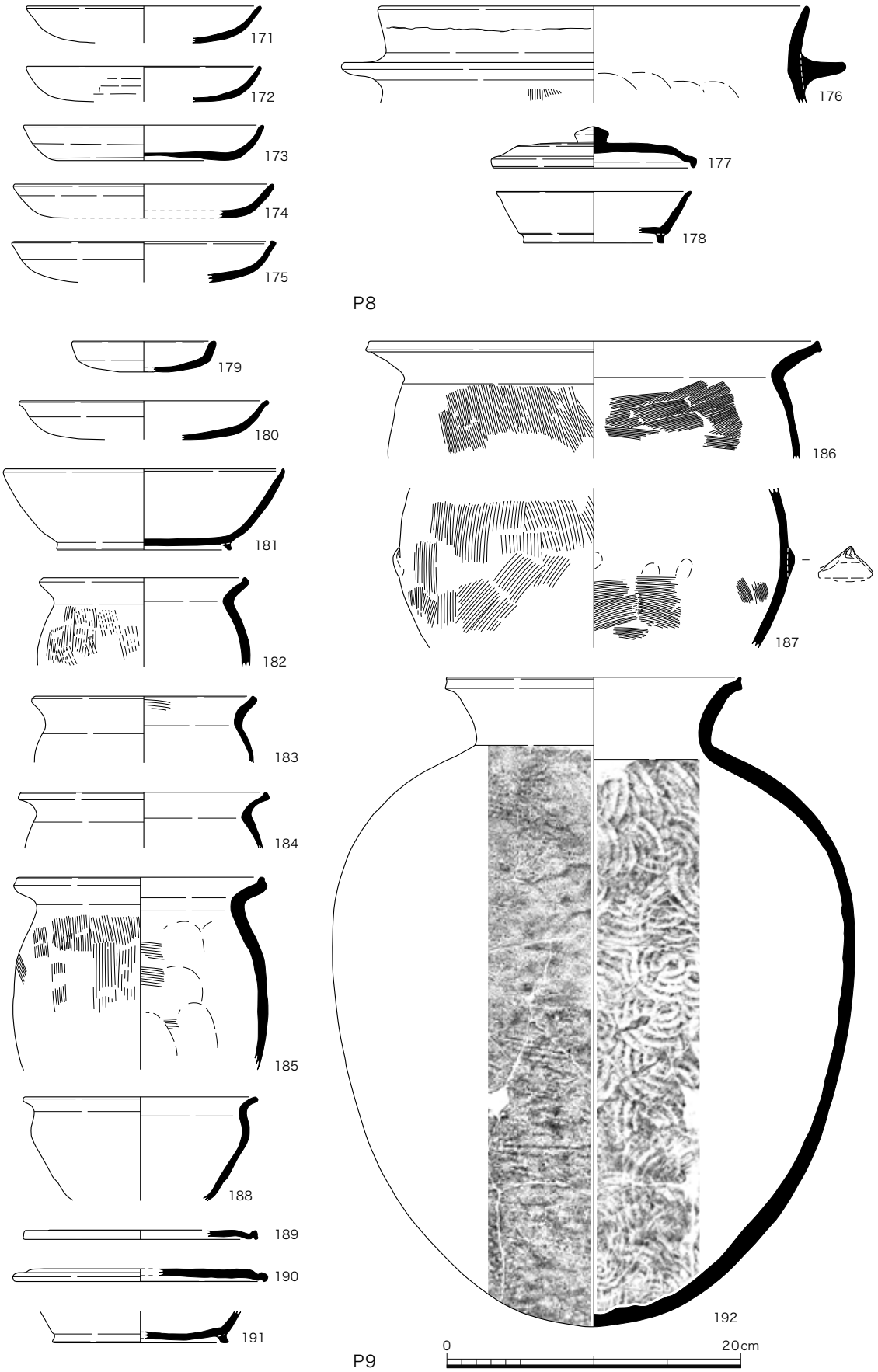


第 69 図　井戸 SE116 横桟実測図（1/10）

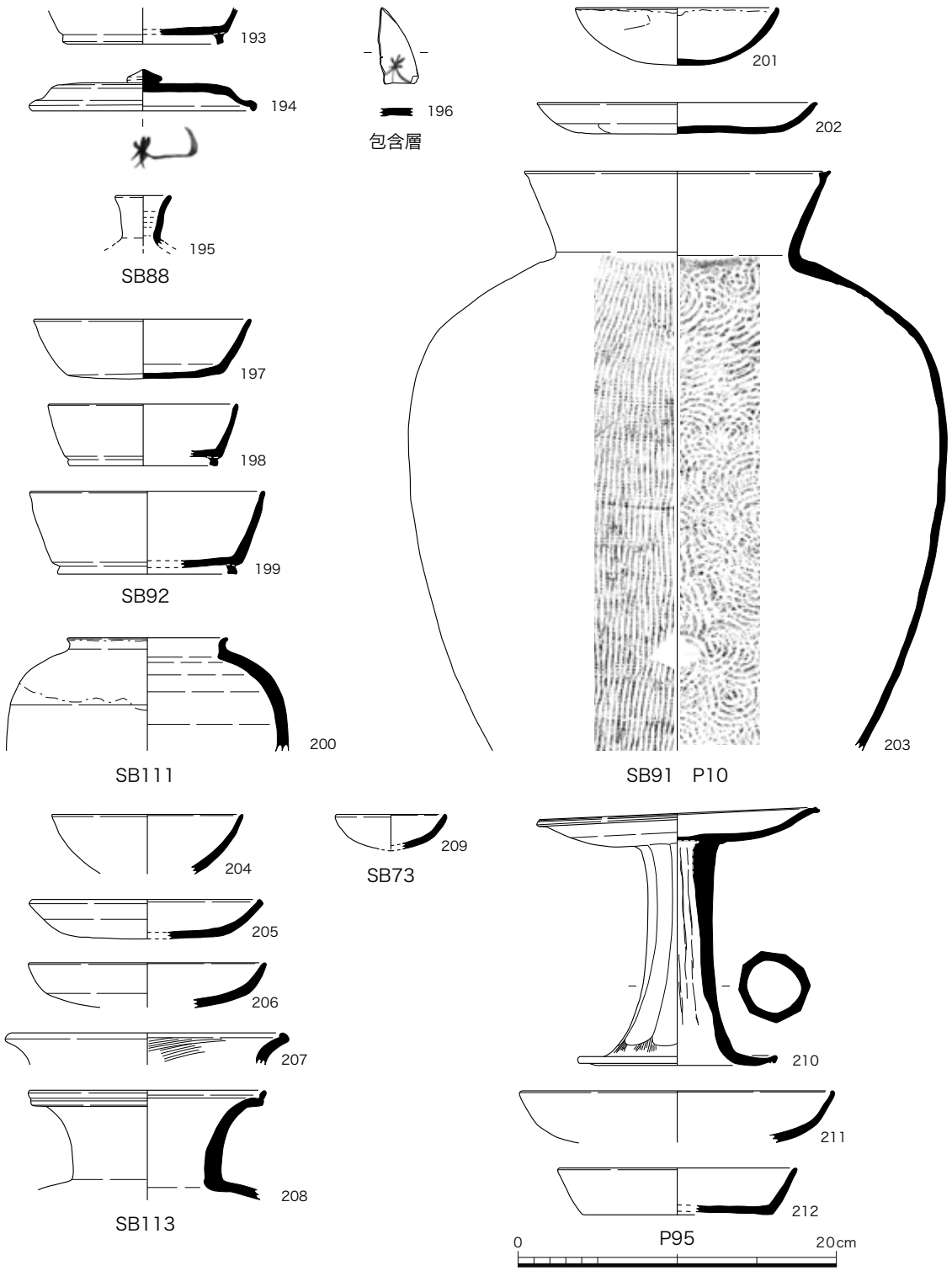
形の把手部分である。この他に製塩土器口縁部片（132･133)、土馬の脚部片（136）などがある。土師器の甕は球形の体部を持つものと長胴のものがあり、球形の体部を持つものは口径 13.9 ～ 24.0cm で、外面にタタキ痕を持つもの（137)、内面に当て具の痕跡を持つもの（137・138・141)、同心円の当て具痕跡を持つもの（142）がある。長胴の甕（143）は丸い底部と直線的な体部からなり、口縁部は屈曲して外反する。口縁部内面と体部外面をハケメ調整する。

黒色土器椀（130）は内面ミガキ、外面は摩滅していて調整不明であるが、粘土紐の接合痕が残る。黒色土器の甕（131）は短く外反する口縁部と球形の体部からなり、内外面黒色化している。

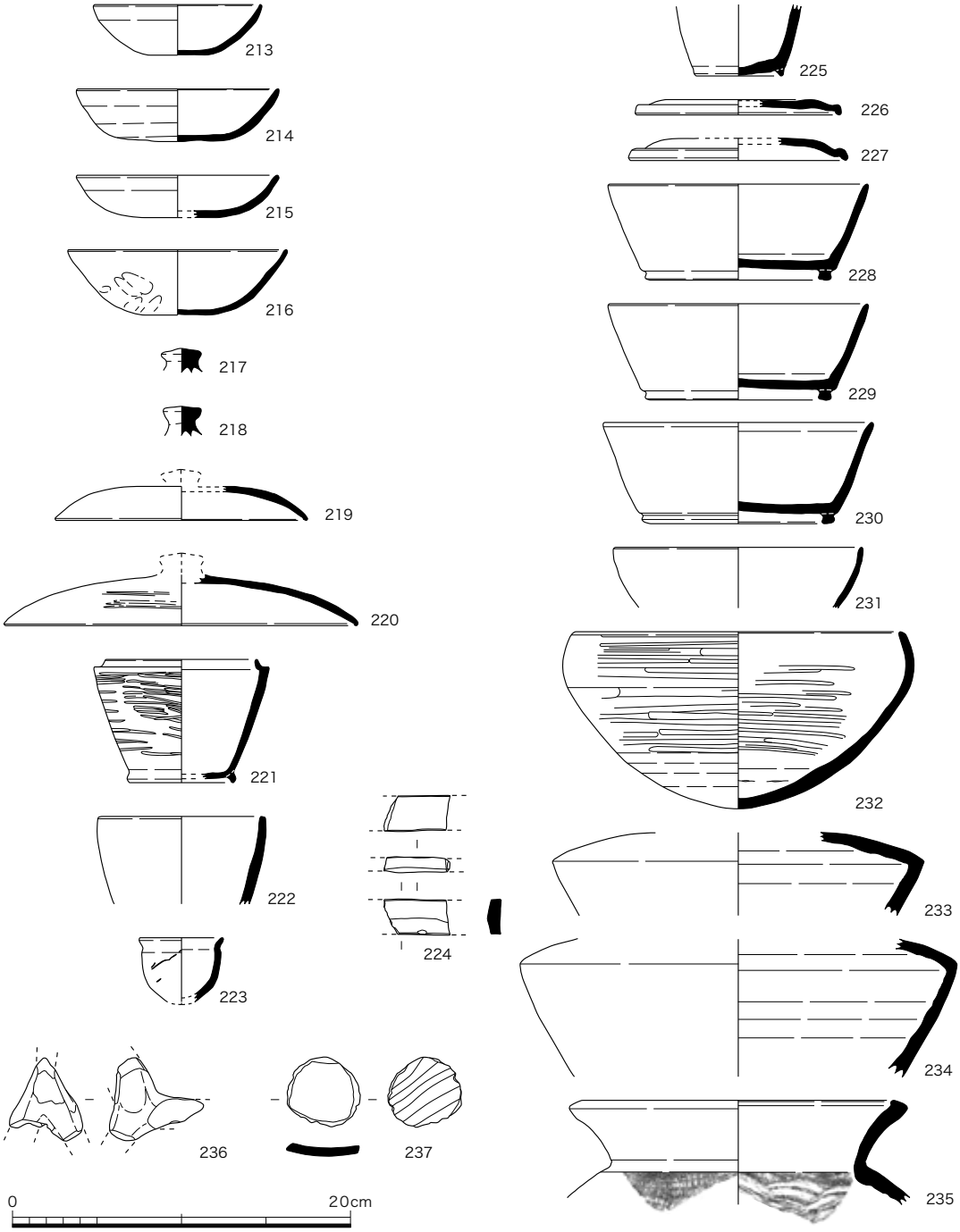
須恵器食器類は少量で、杯Ｂ（146・147）と蓋（144・145）がある。144 は頂部につまみを持たないもので、内面中央には墨書があるが判読できない。壺類には壺Ｍ(150 ～ 152)、壺(153)、壺Ｌ（154）があり、他に平瓶の把手（161）が出土している。壺Ｍは底部に貼り付け高台を持



第 70 図　掘立柱建物 SB91 出土遺物実測図（1/4）



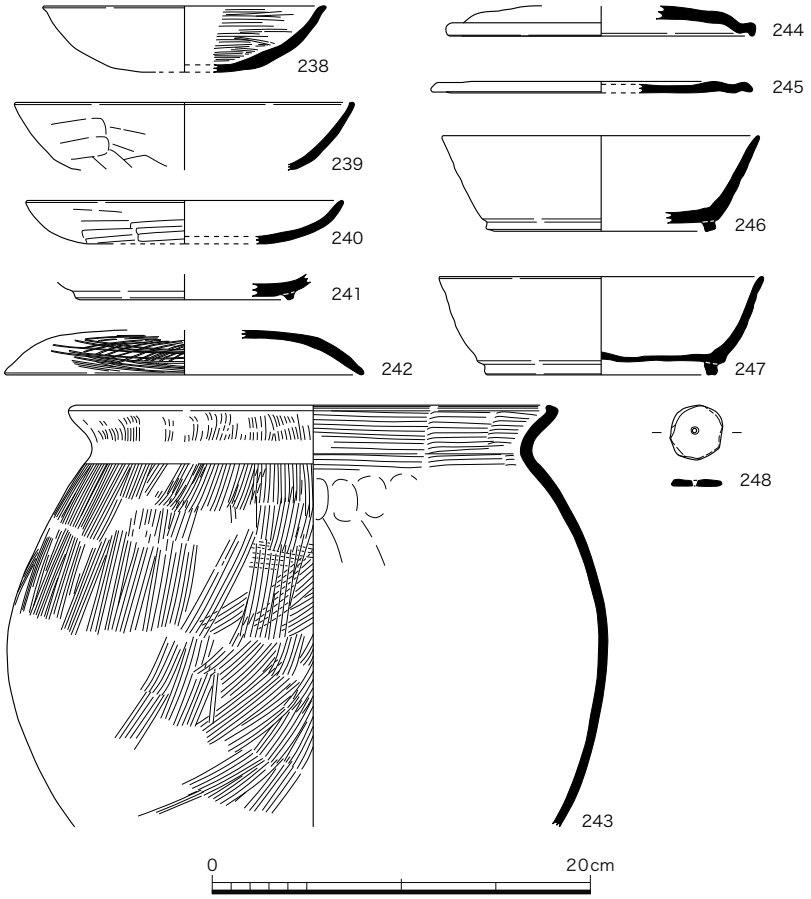
第 71 図　掘立柱建物、小穴他出土遺物実測図（1/4）



第 72 図　井戸 SE114 出土遺物実測図（1/4）

つものと（150・151）、糸切りのままのもの（152）がある。甕は口縁部が外反するもの（155・157）、直立するもの（156）、外反して端部を拡張させるもの（158・159）がある。160 は大型の盤で底部には静止糸切りの痕跡が明瞭に残る。162 は灰釉陶器の底部片で、内面に施釉する。突出する高い貼り付け高台を持つ。この他最下層からは櫛の破片（369）と曲物の樺紐片（370）が出土している。

これらの遺物はやや時期幅を有するが、平安京の編年における京都Ⅰ期新～Ⅱ期古段階に相当する。



第 73 図　溝 SD82 出土遺物実測図（1/4）

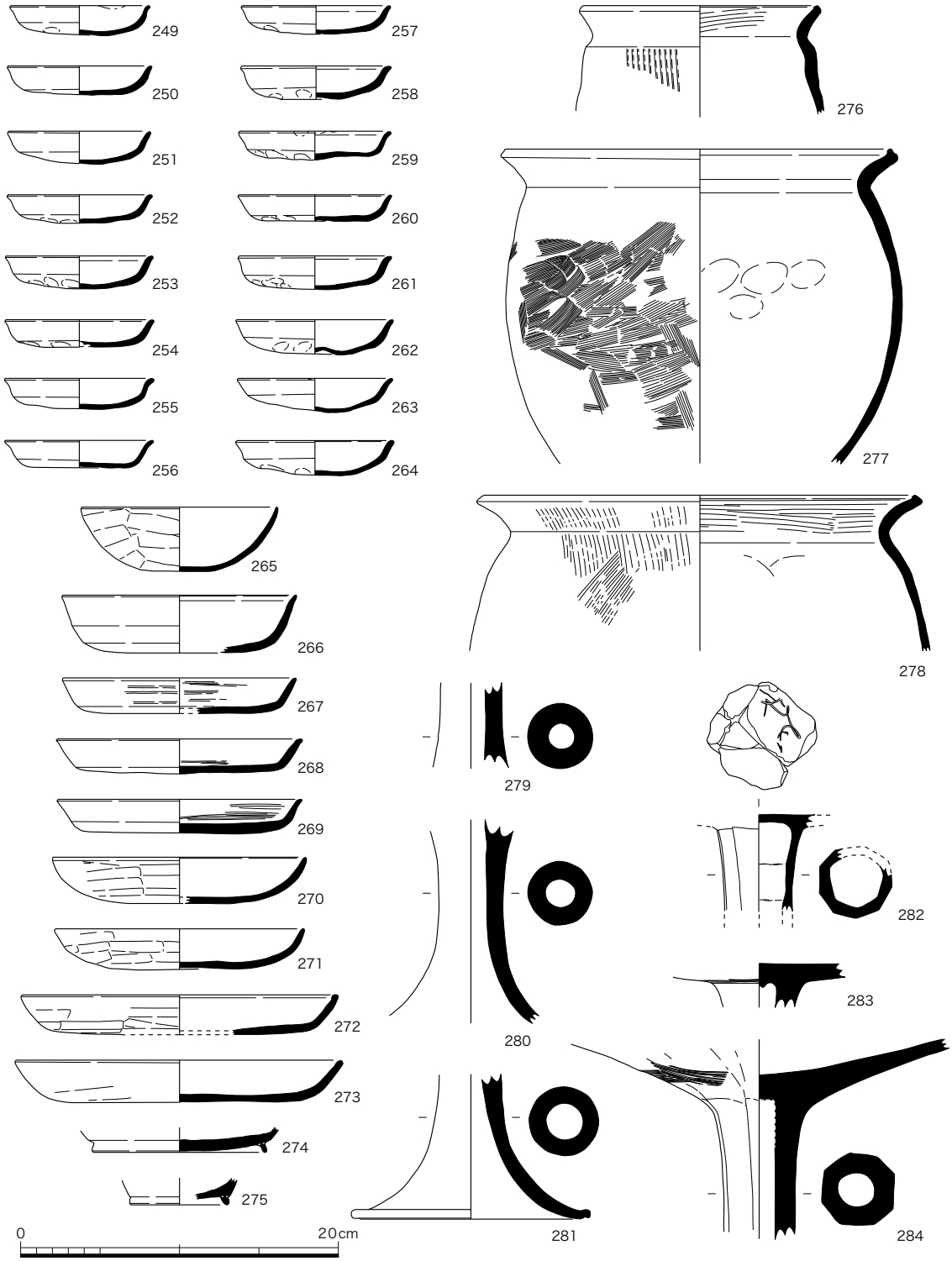
井戸 SE116 隅柱・横桟（第 68・69 図）　井戸側に関しては検出遺構で述べているため、そちらを参照されたい。なお北西の隅柱には端部から 6 ～ 7cm のところに一辺 7 ～ 8cm の方形の筏孔が穿たれている。

C. 長岡京期の遺物

掘立柱建物 SB88 出土遺物（第 71 図）　内部に甕据え付け穴を持つ建物であるが、出土遺物は非常に少ない。建物内部の円形穴のうち KP10 と KP21 から出土した須恵器杯 B 片は接合関係にある(193)。また KP9 からは須恵器杯蓋の完形品(194)が出土している。内面中央には「米」と見られる墨書が認められる。196 は掘立柱建物 SB88 上面付近の包含層から出土した須恵器 A または B の底部片である。外面の中央付近に同じく「米」の墨書が確認される。検出遺構でも述べたごとく大型の須恵器甕を据え付けた穴を持った建物は、主に酒造りを行っていたと見られることから、「米」墨書土器はそれに関連するものと思われる。柱掘形内の遺物では壺 M の口縁部片（195）が唯一図示できたものである。

掘立柱建物 SB91 出土遺物（第 70・71 図）　建物東側柱列の P8 ～ 10 から多くの遺物が出土している。P8 では小片が多く、土師器皿（171 ～ 175）の他に羽釜の口縁部（176)、須恵器杯 B と蓋（177・178）のセットなどが出土している。

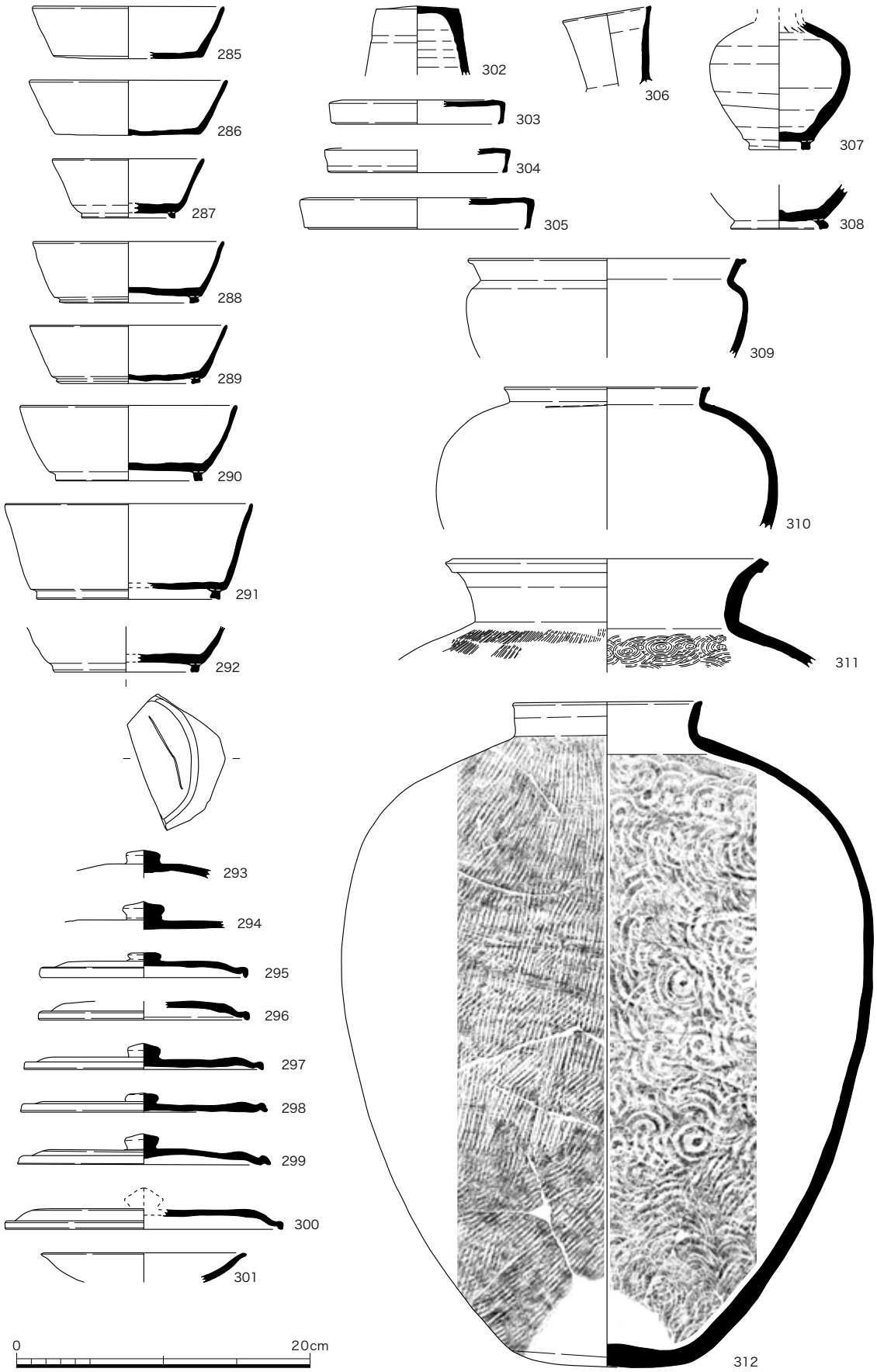
P9 はもっとも多くの遺物が出土しており、土師器皿 A（180)・皿 C（179)・杯 B（181)・



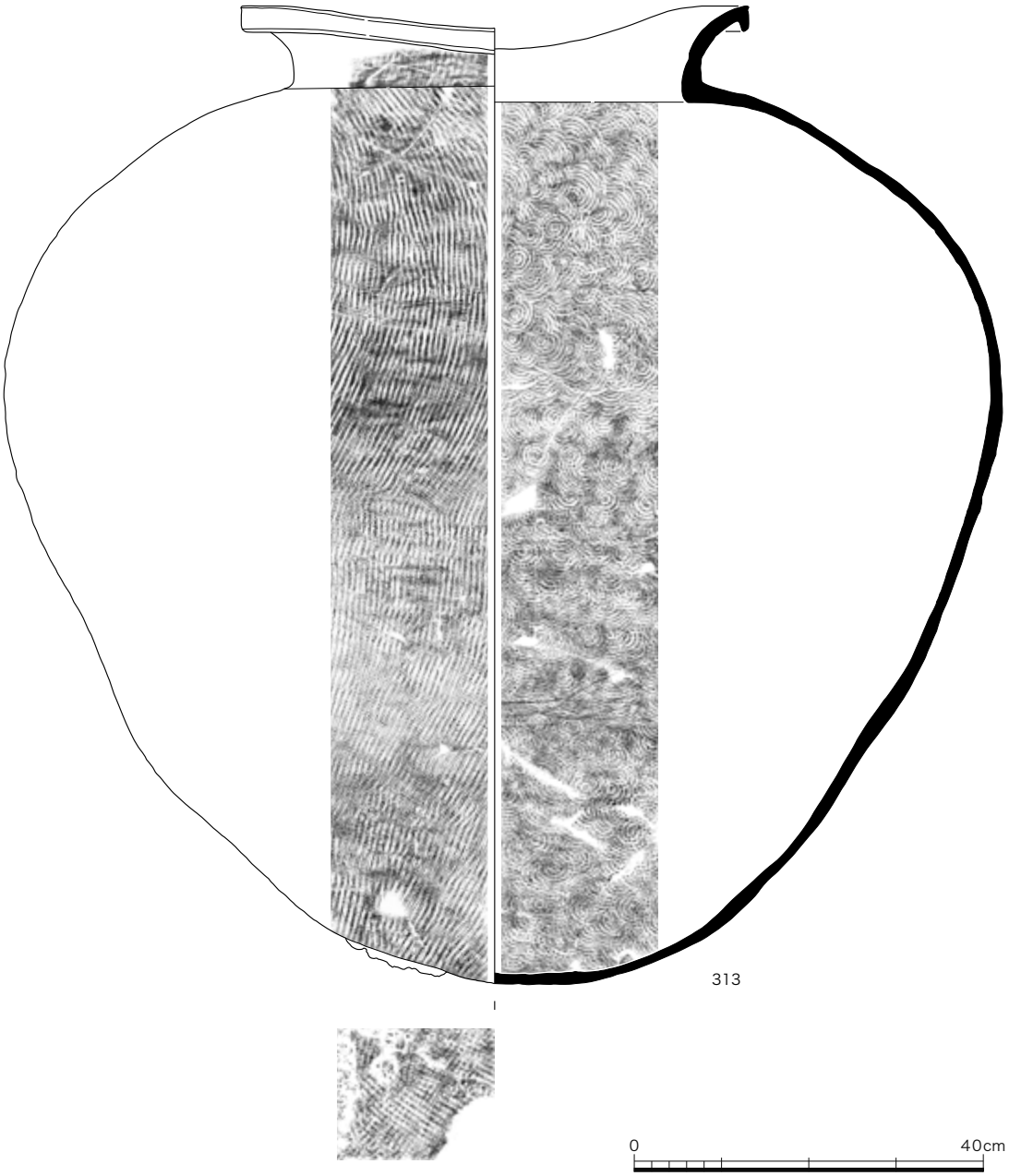
第 74 図　溝 SD84 出土土師器実測図（1/4）

甕 A（182 ～ 185）・甕 B（186・187）・壺 B（188）、須恵器杯 B（191）と蓋（189・190）・小型の甕（192）など非常に多種多様な遺物がひとつの柱掘形内に投棄されていた。特に須恵器の小型甕は、ほぼ全形が復元できる資料であり、柱掘形内出土の資料としては珍しいものである。

P10 からは土師器椀 A（201）・皿 A（202）、須恵器小型甕（203）等が出土している。201



第 75 図　溝 SD84 出土須恵器実測図– 1 （1/4）



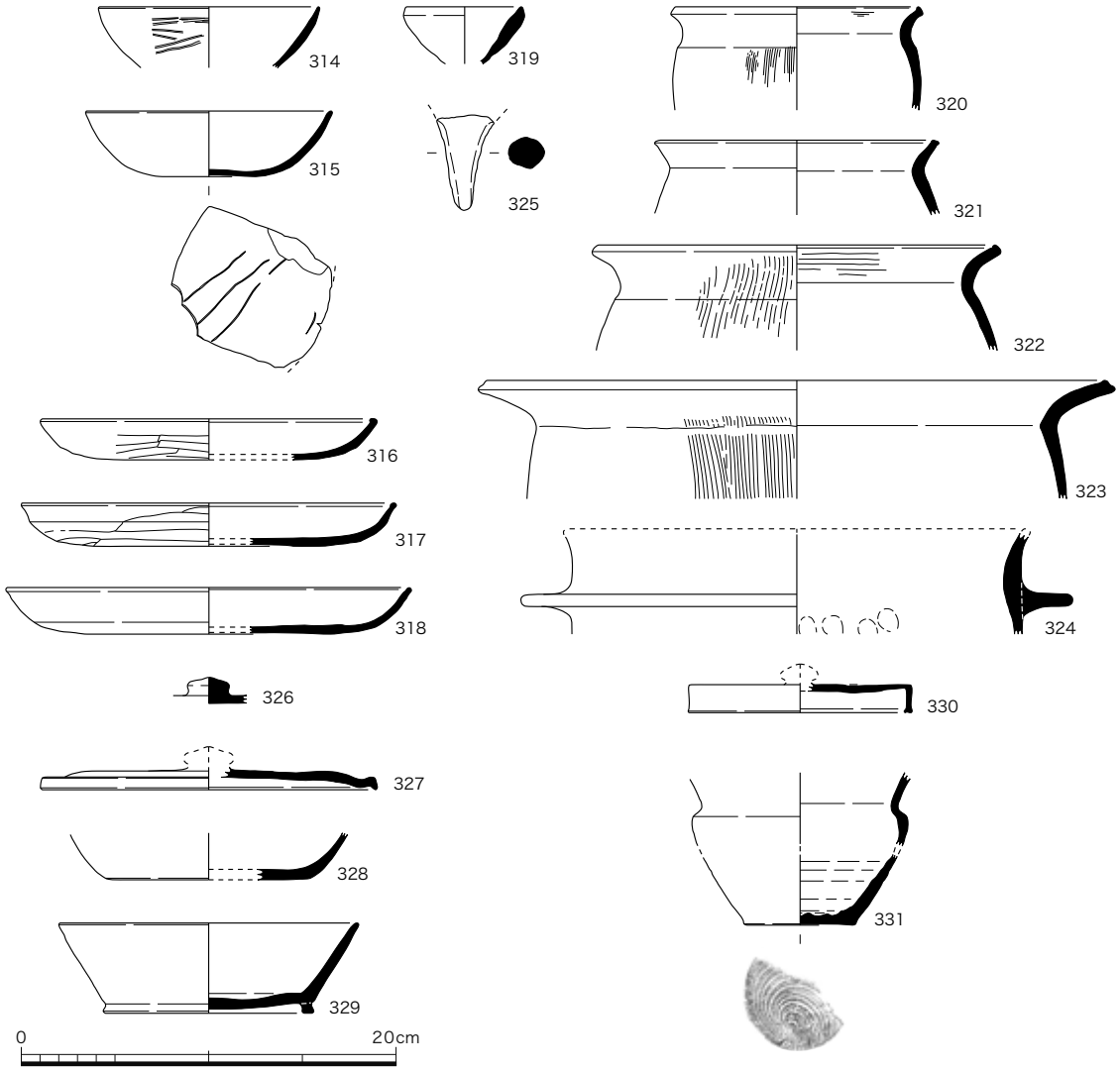
第 76 図　溝 SD84 出土須恵器実測図– 2（1/8）

は口縁部に油煙が付着しており灯火器としての使用が認められる。203 は底部を欠失するもののやはり全形が窺える資料である。

掘立柱建物 SB111 出土遺物（第 71 図）　200 は東側の棟持柱 P7 の柱痕から出土した壺 A である。口縁部と肩部が残り、全体ににぶい黄色の自然釉がかかっている。猿投産と見られる。図示できたのはこれのみである。

掘立柱建物 SB113 出土遺物（第 71 図）　1 間 × 1 間の小規模建物であるが、南東隅の柱掘形 P4 からまとまって遺物が出土している。土師器椀 A（204）、皿 A（205・206）、甕口縁部（207）、須恵器壺口縁部（208）などがある。他の柱掘形にはまったく遺物は含まれていなかった。

小穴 P95 出土遺物（第 71 図）　甕据え付け穴を持つ掘立柱建物 SB88 の北東部に隣接する小



第 77 図　溝 SD85 出土遺物実測図（1/4）

穴から倒立状態で土師器高杯（210）が出土している。脚端部を欠失するがほぼ完形で、平坦な杯部と緩やかに開く口縁からなり、端部は外傾する面を持つ。脚部は粘土紐の巻き上げで、外面は九角形に面取りしていて、内面には絞り痕が残る。他に土師器皿（211）と須恵器杯A片（212）が出土している。掘立柱建物 SB88 に関連する祭祀遺構と見られる。

井戸 SE114 出土遺物（第 72・80 図）　遺物は最終的な埋土である上層に多く、中層・最下層には少ない。土師器の椀 A は口径 10.0cm のもの（213）と口径 13.0cm のもの（216）があり、いずれも e 手法である。杯 A は口径 12.0cm で、器高が 3.1cm のやや深いもの（214）と 2.5cm の浅いもの（215）がある。これも e 手法である。217 ～ 220 は土師器杯 B 蓋である。219 は直径 15.0cm、220 は 21.0cm に復元される。217・218 のみ最下層。221 は最下層出土の土師器壺 E で、外面はヘラケズリ後粗いヘラミガキを行う。222 は製塩土器の口縁部片で、石粒を含む細かい胎土である。223 はミニチュアの甕で、外面に粘土紐痕を残す。236 は土馬の頸部～前足付近の破片。237 は土師器の食器を円形に打ち欠いたもので、一方はヘラケズリする。直径

4.1 ～ 4.3cm である。223・237 は最下層出土である。

225 は須恵器のコップ形土器で、底部には断面三角形の高台を貼り付ける。須恵器の杯類で図示できたものには杯Ｂと蓋がある。蓋（226・227）は直径 12.2 ～ 13.0cm、杯Ｂ（228 ～ 230）は口径 15.4 ～ 16.0cm である。232 は鉄鉢型の須恵器で、口径 19.8cm、胴部径 20.8cm、器高 10.5cm で底部は尖っている。底部外面はヘラケズリしており、上半部は横方向のヘラミガキを施している。224・233・234 は須恵器平瓶で、224 は把手の一部、他は体部片である。体部片はいずれも自然釉が付着しており、234 は猿投産と見られる。234 のみ最下層出土。235 は小型の須恵器甕口縁部片である。外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。この他最下層からは木製遺物が少量出土しており、箸（366）、曲物底板（367）、曲物側板（368）がある。曲物底板は同一個体と見られ側面に釘痕が残る。側板は残存する高さ 1.9cm で、幅３mm の樺紐による綴じ痕が残る。

溝 SD82 出土遺物（第 73 図）　甕据え付け穴を持つ掘立柱建物 SB88 の周囲に掘られた溝のうち最も西側に位置する溝である。238 はロクロ土師器の椀で、外面は回転ケズリの後ナデ、内面は回転を利用したヘラミガキを施す。土師器杯Ａ（239）・皿Ａ（240）はいずれも小片で、c 手法で仕上げている。241 は杯Ｂ高台部片。断面三角形の高台を貼り付ける。242 は杯Ｂ蓋で外面ヘラミガキする。243 は口径 25.9cm の大型の土師器甕である。球形の体部と外反する口縁部からなり、端部は内上方に突出する。須恵器には杯Ｂと蓋がある。蓋（244・245）は口径 16.2 ～ 17.0cm、杯Ｂ（246・247）は口径 16.6 ～ 17.2cm である。248 は土師器食器類の底部を直径 2.7 ～ 2.9cm の円形に打ち欠き、中央に直径２mm の孔を穿ったものである。紡錘車として利用したものであろうか。この他に製塩土器の破片も出土している。

溝 SD84 出土遺物（第 74 ～ 76 図）　掘立柱建物 SB88 の周囲を画する溝のうち、西側を画する幅の広い南北方向の溝で、区画溝の中では最も多くの遺物が出土している。

土師器には皿Ａ・皿Ｃ・椀Ａ・杯Ａ・杯Ｂ・ロクロ土師器皿・壺Ｅ・甕・高杯などがある。

皿Ｃ（249 ～ 264）は検出遺構でも述べたが、溝の南半部東肩付近に重なり合って出土したもので、上部には黄色の粘土がのっていた。いずれも内面と口縁部をナデ調整し、他はオサエのみの e 手法で、口径 8.8 ～ 10.0cm、器高 1.7 ～ 2.25cm である。完形品が多く、灯火器使用痕を残すもの（249・259）もある。出土状況から何らかの意図を持って固めて投棄したと見られ、祭祀の可能性もあるが断定できない。椀Ａ（265）は唯一図示できたもので、口径 12.3cm、器高 4.1cm。外面全体をヘラケズリする c 手法である。杯Ａ(266)は口径 14.8cm、器高 3.6cm で、摩滅のため調整不明であるが、ｂ手法と見られる。267 ～ 269 はロクロ土師器である。ロクロ整形された平坦な底部と屈曲して直線的に開く口縁部からなり、ロクロナデの後内外面にヘラミガキを行う。口径 14.7 ～ 15.4cm、器高は 2.2 ～ 2.25cm である。胎土は砂質で、橙色～明赤褐色を呈する特徴的なものである。皿Ａには口径 15.8 ～ 16.0cm のもの（270・271）と口径 20.0 ～ 20.7cm のもの（272・273）があり、いずれも外面ヘラケズリする c 手法である。274 は杯Ｂ、275 は壺Ｅの底部片で、やや外方に広がる貼り付け高台を持つ。甕には口径 14.7cm の

小型のもの（276）と 24.7 ～ 28.1cm の大型のもの（277・278）がある。

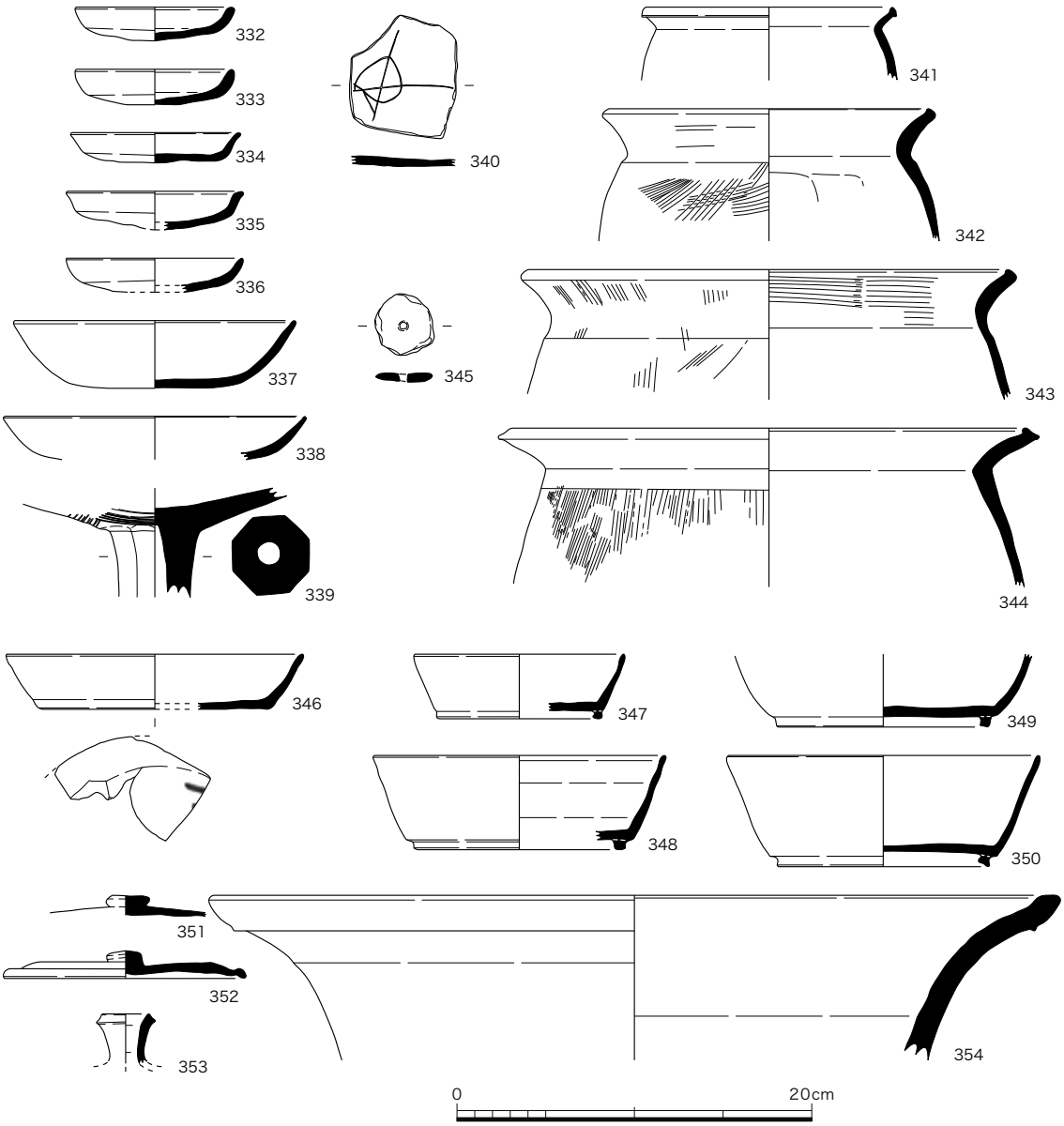
279 ～ 281 の高杯は脚部心棒作りで、外面は面取りをせず円柱状に作るものである。内外面はナデ調整する。282 は脚部を粘土紐の巻き上げで作るもので、外面は九角形に面取りし、内面には粘土紐痕が残る。杯部の内面には粗い螺旋状暗文が認められる。283・284 は脚部心棒作りのものである。284 は脚部を八角形に面取りしており、杯部は縦方向にヘラケズリを行った後に横方向にヘラミガキしている。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺蓋・平瓶・壺Ａ・壺Ｌ・壺Ｍ・鉢Ｄ・甕などがある。

杯Ａ（285・286）は平坦な底部と直線的に開く口縁部からなる。口径 13.1 ～ 13.2cm、器高 3.6 ～ 3.8cm で灰白色のやや軟質な焼成が特徴である。杯Ｂには口径 10.4cm の小型もの(287)、13.0 ～ 14.8cm の中型のもの（288 ～ 290)、16.9cm の大型のもの（291）がある。292 は底部の破片で、外面には焼成前のヘラ記号が残る。杯Ｂ蓋には直径 14.2 ～ 14.4cm のもの（295・296)、16.4 ～ 17.2cm のもの（297 ～ 299)、19.0cm のもの（300）がある。302 は壺Ｂの蓋である。コップ形を呈し、上面はヘラケズリしており外面には自然釉が付着する。壺Ａの蓋は口径 11.8cm のもの（303・304）と 15.4cm のもの（305）があり、いずれも口縁部のみの破片でつまみは欠失している。口縁端部は細く下方に突出させている。平瓶（306）は直線的に延びる口縁部を持ち、端部は平坦面をなす。口径は 5.9cm である。壺Ｍ（307）は胴部最大径 9.4cm で、底部は糸切りの後高台を貼り付けている。壺Ｍ（308）は底部のみの破片で、底部はヘラ切りの後外方に広がる高台を貼り付けている。鉢Ｄ（309）は短く屈曲する口縁部で、端部は水平な面を作る。口径 19.0cm。壺Ａ(310)は短く立ち上がる口縁部と水平な面を持つ端部からなり、肩部が張る球形の体部を持つ。口径 14.0cm で、肩部には蓋の重ね焼き痕跡が残る。311 は小型の甕で、大きく開く口縁部を持ち、端部は拡張させて断面方形を呈している。外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕を残す。312 も小型の甕で、ほぼ全形が窺えるものである。口縁部は短く直立して、端部はやや内傾する平坦面を作る。体部は倒卵型で底部は平坦である。焼成は上半部は青灰色で硬いが、底部付近は白灰色で軟質である。外面に平行タタキ、内面に同心円の当て具痕を残す。口縁部の形状から壺Ａのような蓋を持つものと考えられ、311 のような広がる口縁部を持つ甕とは用途が異なるものとおもわれる。

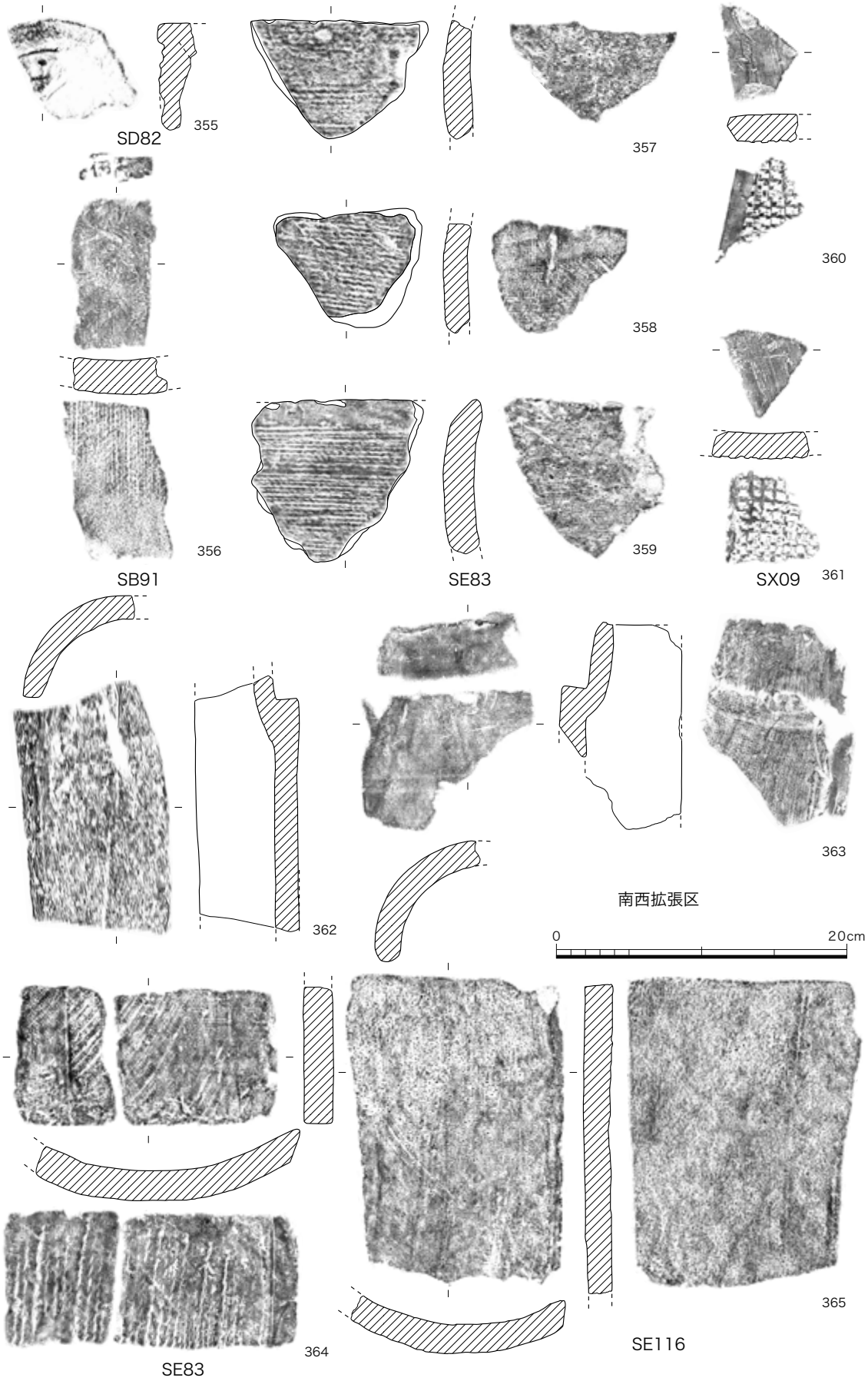
313 は大型の甕である。溝 SD84 の遺物の大半はこの大甕の破片で占められていた。破片は 9 割近くが残っており、全形が復元できる非常に珍しいものである。口径 58cm、器高 112cm、体部最大径 114cm で、現在図面やデータなどが公表されている須恵器大甕の中では最大クラスのものである。ちなみに復元前にすべての破片の重量を計測したところ、約 90kg であった。破片がすべて揃っていればおそらく総重量は 100kg 近くになると見られる。

口縁部は外反しながら大きく開き、口縁端部は下方に垂下して約 2.5cm 幅の面を作っている。この口縁部の特徴は陶邑で作られた甕であることを示している。口縁部はナデ調整されるが、外面にはタタキの痕跡が残る。体部は約 2/3 のところに最大径があり、その部分で内面の同心円当て具痕の密度が変化していて作業工程の段階が判る。同様に下から 1/3 付近にも当て具痕が密に

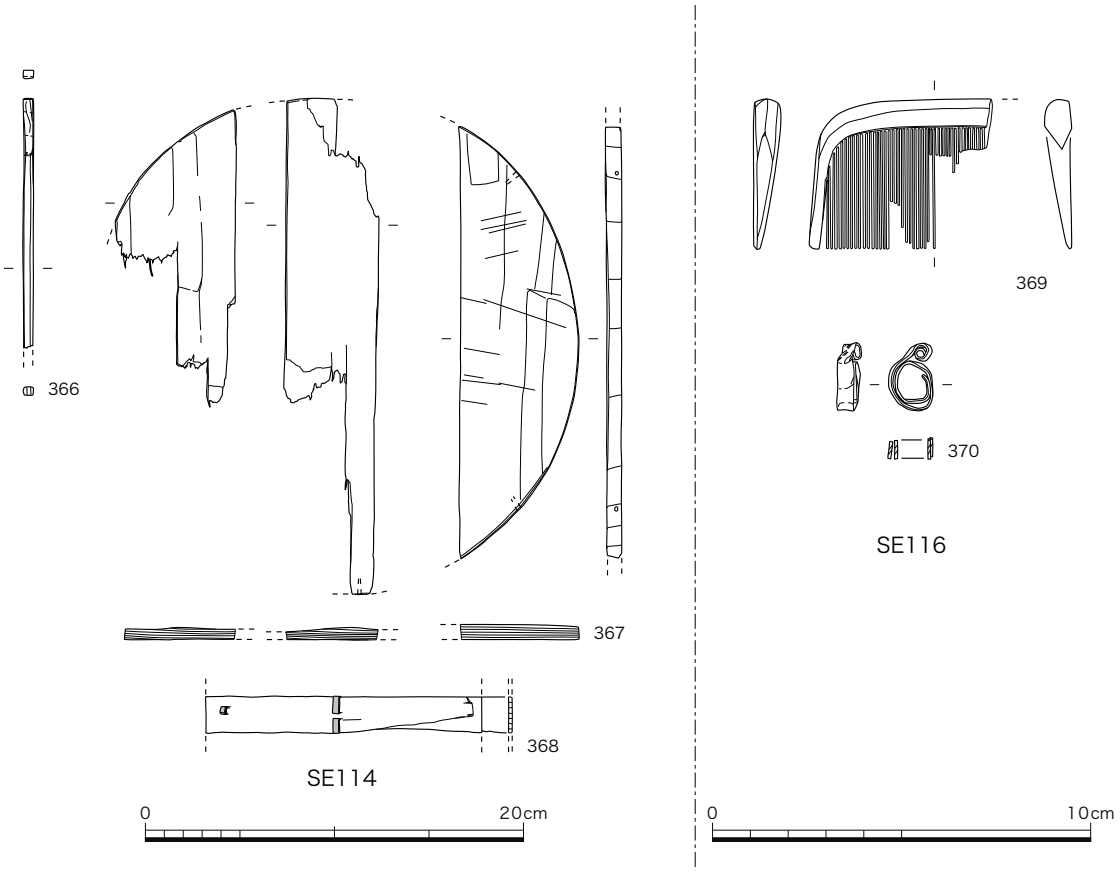


第 78 図　溝 SD90 出土遺物実測図（1/4）

重なる様子が横方向に看取され、これも作業単位と見られる。この部分では器壁が若干厚くなっており、粘土の重ね合わせの結果と思われる。外面の平行タタキ痕も内面に対応して変化しているが、内面ほど明瞭ではない。このように見るならば体部の成形は大きく三段階で行われたようである。その後口縁部を接合するが、接合部には口縁部側の粘土を肩部の内側に巻き込むように貼り付け、再度同心円の当て具を押しつけている。底部付近には窯内で大甕を支えていた道具の痕跡が明瞭に残されている。甕の一番下の個所には直径約 20cm の円形の台座のような痕があり、その上方側面 6 個所に円形の支えの痕跡が残されている（図版 32 下）。陶邑の窯跡内には大甕を支えるための石が円形に配されている例があり、まさにその痕跡と見られる。子細に見るとこれらの痕跡には植物と見られる細かい繊維状の痕が付着していて、「×」状になっているものも認められる。窯内で支えとの溶着を防ぐために施された措置であろう。なお底部付近には窯



第79図　2トレンチ出土瓦実測図（1/4）



第 80 図　井戸 SE114・116 出土木製品実測図（1/2・1/4）

壁の一部が付着している。体部の表面には自然釉が付着するが、全体に光沢を持った釉が認められるのは甕の半分であり、こちらが窯内で焚口側を向いていた面である（図版 33 上）。この正面の個所はもっとも自然釉が厚く、肩部から体部下半にかけて垂れた自然釉が三角形に剥離した痕跡が明瞭に残る。同様にこの面の口縁端部にも自然釉の剥離痕が残っている。また肩部には落下した窯壁が付着しており、この部分に溜まった自然釉が窯内の火炎流によって反対側に運ばれていった様子が筋状に残されている（図版 33 下）。なお大甕の焚口側と反対側には肩部に降灰が認められるが光沢のある自然釉は無い（図版 32 上）。また復元時に判明したことだが、肩部と口縁部の接合部の一部には亀裂が入っており、その部分がわずかに陥没していた。この部分の断面には自然釉が染み込んでいることからこの亀裂は焼成時に生じたものである。おそらくこの部分の亀裂は貯蔵に影響が無いことから製品として出荷されたものと見られる。そしてこの亀裂が甕を移動する際の破損につながり、ここに投棄される要因となったと考えられる。

溝 SD85 出土遺物（第 77 図）　掘立柱建物 SB88 の北西側を画する浅い溝である。炭片などと共に遺物が出土しているが細片が多く、図示できるものは限られる。

土師器には椀 A・皿 A・杯 B 蓋・甕・羽釜などがある。314 は椀の破片で、内外面ヨコナデ調整し、外面には粗いヘラミガキを施している。315 は外面ヘラケズリする c 手法である。底部外面には焼成後に平行する 3 条の線刻を行っている。皿 A は口径 18.0cm のもの（316）と 20.0 ～ 21.5cm のもの（317・318）がある。このうち 316・317 は c 手法、318 は底部のみへ

ラケズリするｂ手法である。326は杯Ｂ蓋で、図示できないが杯Ｂの小片も出土している。甕はいずれも口縁部のみの破片で、口径13.4～15.2cmの小型のもの（320・321）、21.8cmの中型のもの（322）、34.0cmの大型のもの（323）がある。このうち323は長胴タイプの甕と見られ、他は球形の胴部を持つものである。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺Ｈ・壺Ａ蓋などがある。杯Ａ（328）は底部の破片で、灰白色を呈する焼成軟質のものである。杯Ｂ（329）は口径16.0cm、器高4.8cmで、口縁部は大きく開く。壺Ａ蓋（330）は口縁部の破片である。壺Ｈ（331）は口縁部を欠くが体部と底部片から図上復元したものである。底部の回転糸切り痕が明瞭に残されている。

溝SD90出土遺物（第78図）　掘立柱建物SB88の東側を画する南北溝である。埋土上層から遺物が出土しているが、溝SD84に比べると多いものではない。

土師器には杯Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・杯Ａ・高杯・甕などがあり、他に土製円盤、線刻土器がある。皿Ｃ（332～336）は口径9.0～10.0cm、器高1.7～2.3cmで、溝SD84のようにまとまって出土したものではないが、比較的多く出土している。灯火器使用痕は確認できなかった。杯Ａ（337）は摩滅のため調整不明であるが、口径16.0cm、器高3.8cmである。皿Ａ（338）は口径17.0cmに復元される口縁部片である。高杯（339）は脚部心棒作りのもので、八角形に面取りする。杯部外面はケズリの後ヘラミガキを行う。340は土師器の食器内面に「○」と「×」を線刻したものである。甕は口径14.2cmの小型のもの（341）、18.6cmの中型のもの（342）、27.9～30.6cmの大型のもの（343・344）がある。344は口縁部の特徴から長胴のもの、他は球形の胴部を持つものである。345は土師器の食器類を円形に打ち欠いて中央に円孔を開けたもの。直径3.4～3.5cmである。

須恵器には杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺Ｍ・甕などがあるが数は少ない。杯Ａ（346）は16.8cmの口径に比して器高が器高3.1cmと低いタイプのもの。底部外面に墨書が認められるが、欠失部分が多く判読できない。杯Ｂは口径11.9cm（347）、16.6cm（348）、17.8cm（350）がある。杯Ｂ蓋は口径13.7cmの小型のもの（352）が出土している。353は壺Ｍの口頸部で、端部は外傾面を持つものである。354は大型の甕の口縁部である。口径48.0cmで端部は受け口状に作る。灰黄色の特徴的な胎土で、外面には自然釉がかかる。これも甕据え付け穴に据えられていた大甕のひとつである可能性がある。

２トレンチ出土瓦（第79図）　355は溝SD82から出土した軒丸瓦の破片で、外区内縁部に１ヶ所珠文が認められるのみで、型式は不明である。356は掘立柱建物SB91から出土した平瓦で、端面に「伊」字の刻印が押されている。印面は17mm角の方形である。

堀SX09出土の360・361はいずれも格子目叩きの平瓦である。格子の大きさ、胎土、焼成の特徴から、調査地南西に所在した白鳳期寺院・鞆岡廃寺に伴う瓦であることがわかる。他に井戸SE83からは面戸瓦片（357～359）、丸瓦片（362）、平瓦片（364）が出土している。364の凹面には布目痕の下に糸切り痕が認められる。363は南西拡張区から出土した丸瓦玉縁部。365は井戸SE116出土の平瓦で、凸面には離れ砂が多く付着している。

３　３トレンチ

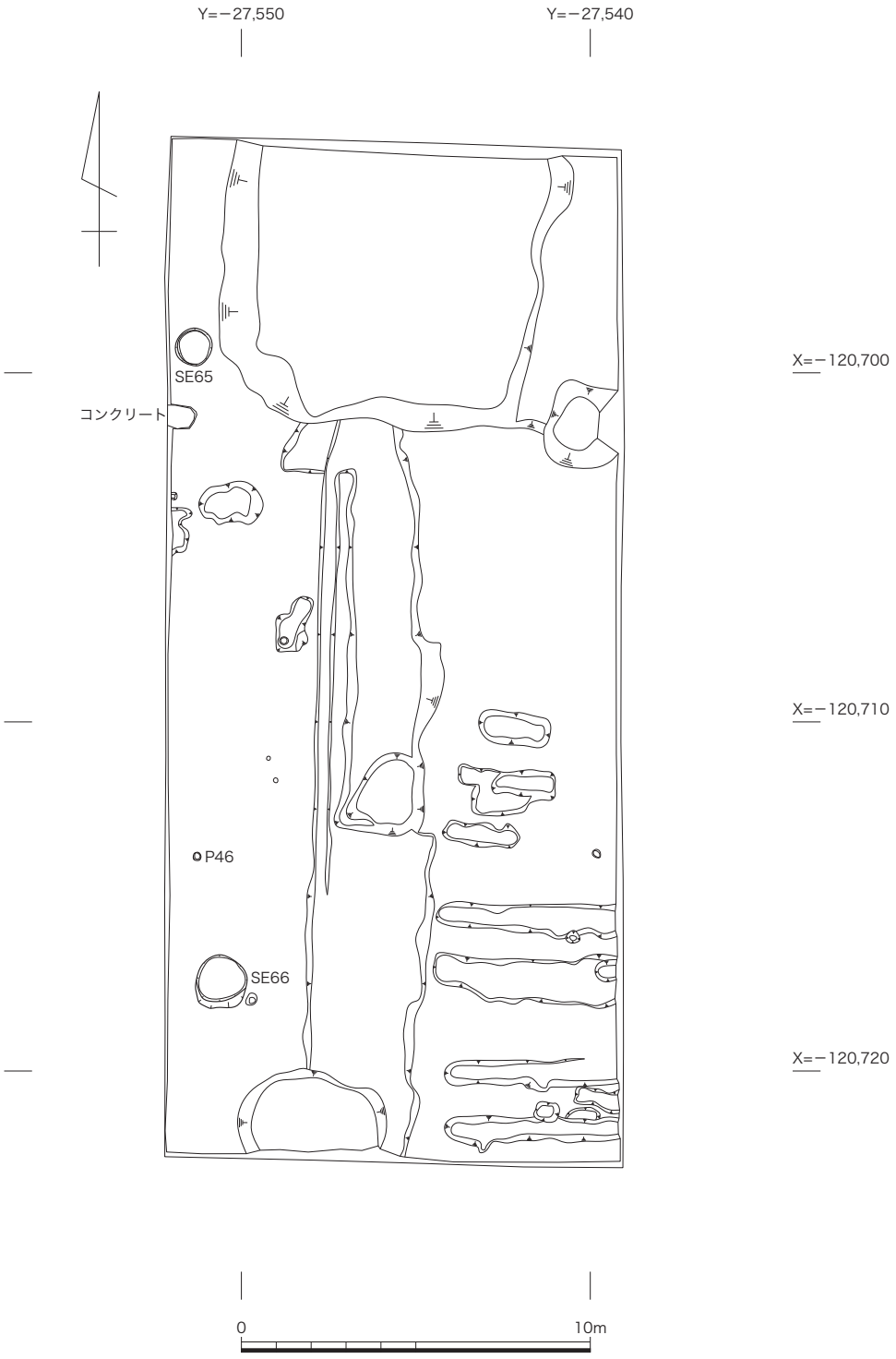
３トレンチは、調査対象地の中央北部にあたるバスケットボールのコートに利用されていた地点に設定した調査区で、試掘２トレンチの南側にあたる。東西約 29 m、南北約 13 mの規模があるこのトレンチでは、後世の撹乱によって破壊された部位が多く認められた。北端部にある撹乱坑は東西約 9.5 m、南北８m以上、深さが１mほどある大きなもので、そこから南に向かって派生する幅約 3.5 mの撹乱溝と、その南端部に東西約５m、深さ１m以上の撹乱坑がある。また、トレンチ南東部にある東西方向の撹乱溝群は、いずれも内部に栗石が多量に埋没していた。このトレンチ中心の国土座標値は、X＝−120,707.5、Y＝−27,545 である。

３トレンチの層序は、上から表土、盛土ないし撹乱土の順で堆積し、地表下 0.2 ～ 0.4 mで地山面に至っていた。地山は、上部が低位段丘を構成する段丘礫層であり、下部は大阪層群であることを確認することができた。地山面の標高は、トレンチ北端で 20 m、南端で 19.6 mを測り、おおむね北から南に向かって緩やかに傾斜しており、この地山面上で検出した遺構は、近世と考えられる井戸２基と小穴が１基検出できたにすぎなかった。

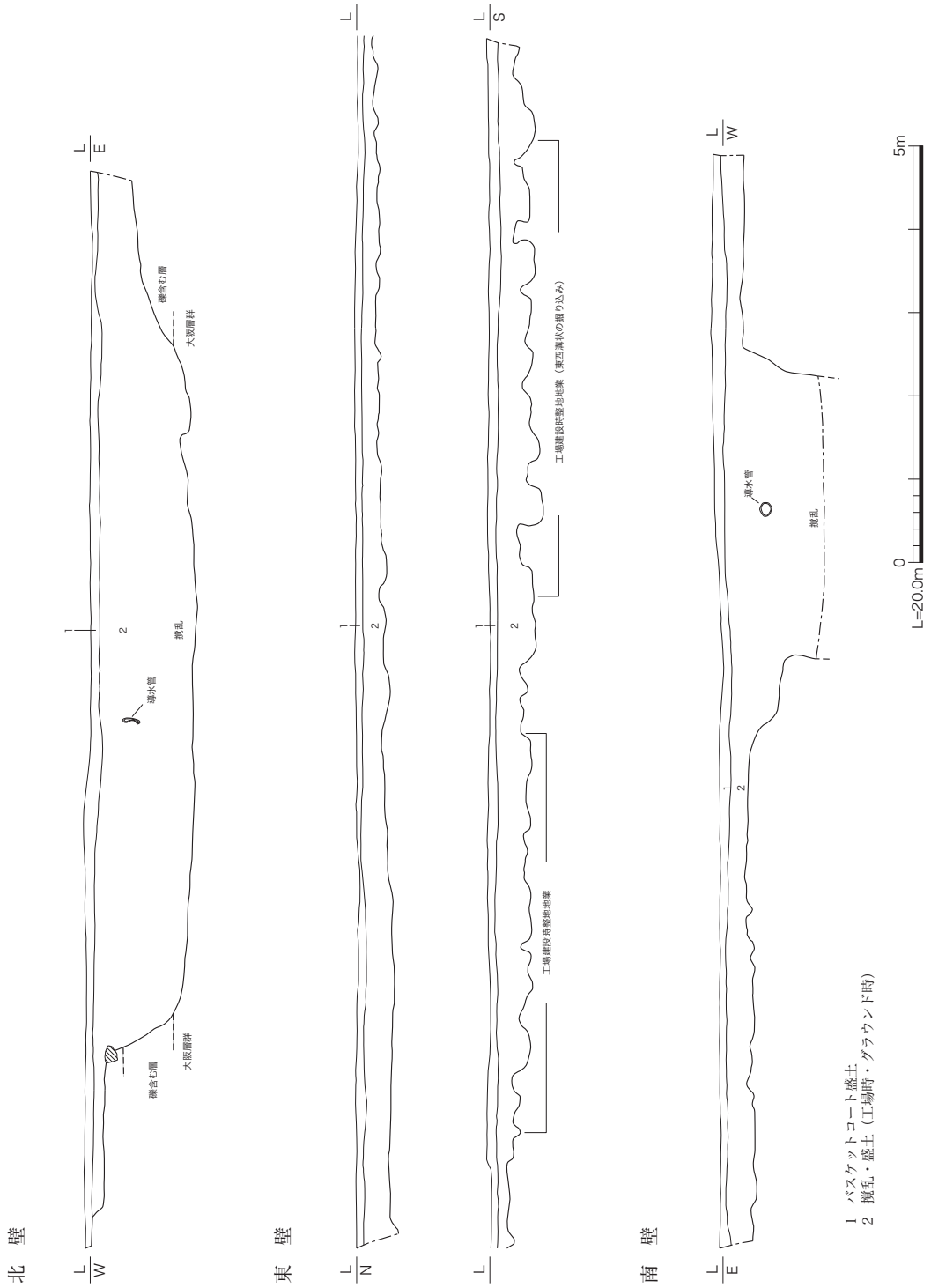
（１）検出遺構

井戸 SE65　トレンチの北西部において検出した平面が楕円形を呈する素掘りの井戸である。径 1.1 mほどの規模があり、約 1.1 mの深さまで掘削したが、それ以上掘り下げることを断念した。井戸内からは、土師器や陶器の破片が少量出土したのみである。

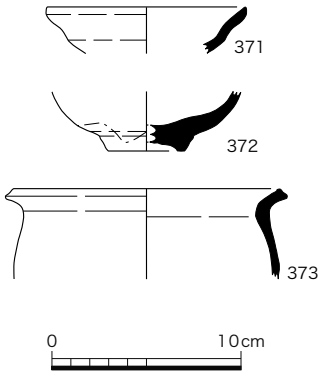
第 81 図　井戸 SE66 全景（西から）



第82図　3トレンチ検出遺構図（1/200）



第 83 図　3 トレンチ土層図（1/80）



第84図　3トレンチ出土遺物実測図(1/4)

井戸 SE66（第81図）　トレンチの南西部で検出した楕円形を呈する素掘りの井戸である。径1.5 mほどの規模があり、約0.9 mの深さまで掘削したが、それ以上掘り下げることはしていない。この井戸からも陶器の細片が少量出土している。

小穴 P46　SE66の北側で検出した径0.2 m程度の小さな穴であるが、単独で出土しているため、建物などになるか否かは不明である。

（2）出土遺物

このトレンチでは、遺構の数量が乏しいことに比例して、出土した遺物も極端に乏しかった。井戸SE65とSE66から陶器や土師器の破片が少量出土しているが、以下では図示したSE65出土遺物について簡単に説明する。

井戸 SE65 出土遺物　371は肥前陶器（唐津）の皿の口縁部片、372は肥前陶器（唐津）の椀の底部片、373は土師器の甕の口縁部片である。373は、内面にお焦げ状のものが付着している。371と372のような肥前陶器は、各トレンチの井戸や溝、土坑などからも出土しており、江戸時代前期にあたる17世紀の前半頃のものと推察される。

４　４トレンチ

４トレンチは、調査対象地南西部の体育館建設予定地に設定した調査区で、地表面はコンクリートの擁壁を隔てた東側のグラウンドよりも 1.7 mほど高くなっていた。1 トレンチのすぐ西側に位置しており、貯水池の部分を除外するなどしたため、不整な形態の調査区になってしまった。また、東辺部は試掘 1 トレンチの一部と重複している。このトレンチ中心の国土座標値は、X＝−120,810、Y＝−27,555 である。

４トレンチでは、東部で東に向かって落ち込む段と、中央部で南に落ち込む段が認められたため、それらの段を境にして基本層序が若干異なっていた（第 86 図）。まず北西域では、上から盛土１、盛土２、耕作土の順で堆積しており、その直下に黄褐色系の粘質土層（第３層）である地山面が現れる。盛土１は大学建設時、盛土２はそれ以前の工場建設時に施されたものと考えられる造成土である。次に東部では、上から盛土１、盛土２、耕作土、にぶい黄褐色土（第２層）、にぶい黄褐色土と黄褐色土が混じった土層（第５・６層）などが堆積し、また、南部では上から盛土１、盛土２、耕作土、にぶい黄褐色砂泥（第 35・41 層）などが堆積し、その下が地山面になっていた。遺構には、江戸時代をはじめ長岡京期から平安時代、そして時期を決めかねるものなどがあり、その大半は地山面上において検出したが、遺構の遺存状況を考慮するならば、地山面は後世に大きく削平を受けている可能性が濃厚である。

ちなみに、地山上面の標高を見ると、トレンチ北西隅で約 20 m、北東隅で約 19.2 m、南東隅で 19.15 m程度、南西隅で約 19.6 mとなり、おおむね北西から南東に向かって緩やかに傾斜していること知られた。

（１）検出遺構

Ａ．江戸時代の遺構

掘立柱建物 SB4001（第 87 図）　トレンチの南東部において検出した東西２間、南北６間の規模がある総柱の南北棟建物で、建物の方位はほぼ座標北を示している。柱掘形は、径 0.3 ～ 0.4 m前後の楕円形を呈しており、深さは 0.2 ～ 0.4 m程度遺存していた。柱掘形内には、径 0.2 mほどの柱痕跡の残るものが多く認められた。柱間寸法は、桁行、梁行ともおおむね２m等間であるが、西側柱列の北から１間目が 2.3 mと広く、２間目が 1.6 mと逆に狭くなっていた。床面積は、約 47.2㎡に復元することができた。柱掘形内から出土した遺物が乏しいため、明確な時期を決めがたいが、２トレンチで検出した掘立柱建物や柵などの遺構群と同様に、おおむね江戸時代前期に比定することができる。

柵 SA4002（第 88 図）　調査区中央で検出した東西方向に延びる柱列で、さらに東側の調査区域外に延びるようである。方位は、おおむね座標の東西に一致しているようである。柱掘形は、一辺が 0.3 ～ 0.6 mの楕円形を呈しており、柱間は不揃いであるため、建て替えがあった可能性が考えられる。

柵 SA4003（第 89 図）　調査区の北東部において検出した南北方向に延びる柱列で、８間分

を確認することができたが、北側は調査区域外に延びているようである。柱列の方位は、掘立柱建物 SB4001 と同様に、おおむね座標の北に一致している。柱掘形は、径 0.3 ～ 0.4 m程度の楕円形を呈しており、その中に径 0.1 m前後の柱痕跡をとどめていた。柱間寸法は、北から 1.4 m、1.6 m、1.5 m、1.5 m、1.7 m、1.6 m、1.4 m、1.5 mと不揃いである。

柵 SA4004（第 89 図）　トレンチの南中央において検出した南北方向に延びる柱列で、7 間分を確認したが、南側は調査区域外に続いている。柱列の方位は、おおむね座標北に一致している点は掘立柱建物 SB4001 や柵 SA4003 と同じである。柱掘形は、径 0.3 ～ 0.4 m前後の楕円形で、その中に径 0.1 m前後の柱痕跡をとどめるものがあった。柱間寸法は、北から 1.5 m、1.5 m、1.6 m、1.6 m、1.5 m、1.5 m、1.5 mであった。

溝 SD401　トレンチの中央で検出した東西方向に延びる素掘りの溝で、井戸 SE636 と重複しており、それよりも新しいことを確認した。この溝は、直線的ではなく、緩やかな円弧を呈していた。溝の幅は 0.1 ～ 0.15 m、深さ約 0.2 mの規模があり、埋土は灰黄褐色土と黄褐色土が混じった土層であった。

溝 SD402　溝 SD401 から南に約 1 mの所で、それと平行して延びる東西方向の素掘り溝である。西半部は削平を受けて南肩部は遺存していなかった。幅約 0.7 m、深さは 0.4 mほどの規模があり、断面はU字形で、埋土はにぶい赤褐色砂礫と褐色土であった。

溝 SD403　トレンチの西部で検出した南北方向の素掘り溝で、南端は SD401 に接しており、断続しつつもトレンチの北端にまで延びている。方位はおおむね座標の北を向けており、幅 0.3 ～ 0.5 m、深さ約 0.2 mの規模で、断面はU字状を呈している。

溝 SD404　溝 SD403 より 5.5 m前後東で検出した南北方向の素掘り溝で、長さ 35.5 m分を確認することができた。溝の幅は 0.4 ～ 0.6 m前後、深さは 0.15 mほどの規模があり、断面はU字形を呈している。

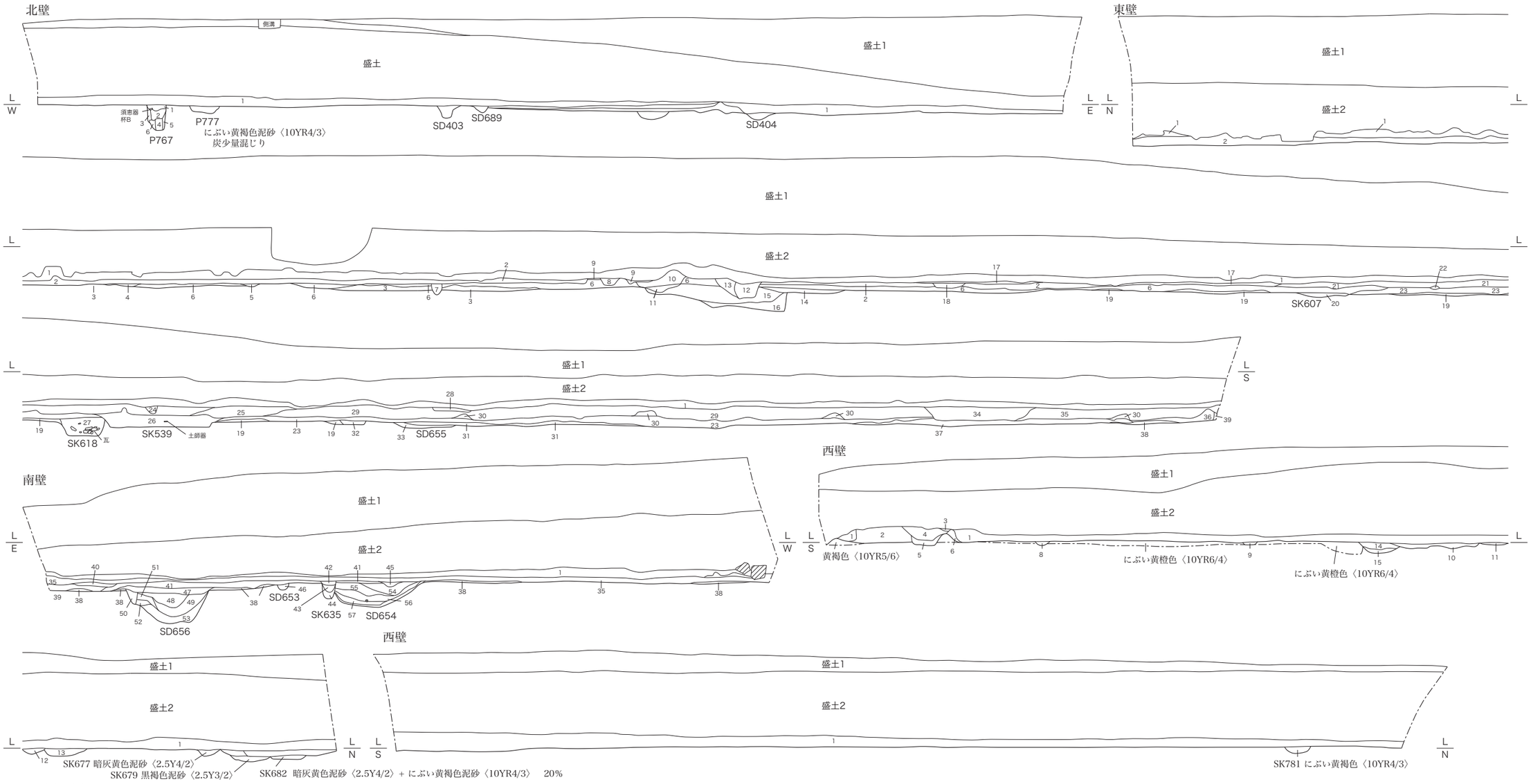
溝 SD405　溝 SD404 の東約 7 mに位置する南北方向に延びる素掘り溝で、南北に約 10.3 m分を検出した。溝幅は約 0.7 m、深さ 0.1 m前後あって、断面はU字状を呈していた。

溝 SD423　溝 SD401 の北約 1.7 mにある東西方向に延びる素掘りの溝で、途切れつつも東西に約 22 m分を確認することができた。溝幅は 0.4 ～ 0.7 m前後、深さ約 0.1 mあり、断面はU字状を呈していた。

溝 SD638（第 90 図）　トレンチ中央のやや北寄りで確認した東西方向に断続しながら延びる素掘り溝で、方位は東で南に 6° 程度振れている。溝 SD403 ～ 405 と重複しており、それらよりも古いことが明らかになった。溝の幅は 0.8 ～ 1.4 m前後、深さ 0.6 ～ 1.1 m程度の規模があり、断面は逆台形を呈している。底部は西から東へ緩やかに傾斜していた。埋土は、褐色泥砂と明黄褐色土が混じった土、にぶい黄褐色泥砂と明黄褐色土が混じった土、明黄褐色泥砂とにぶい黄褐色土が混じった土に分けることができた。

溝 SD642（第 90 図）　溝 SD638 から南へ 4 mほど離れ、それと平行して延びる素掘りの溝である。この溝も断続的に途切れつつ延びている。埋土は、基本的に上から褐色泥砂、にぶい黄

第 85 図　4 トレンチ検出遺構図（1/200）



東壁・南壁共通

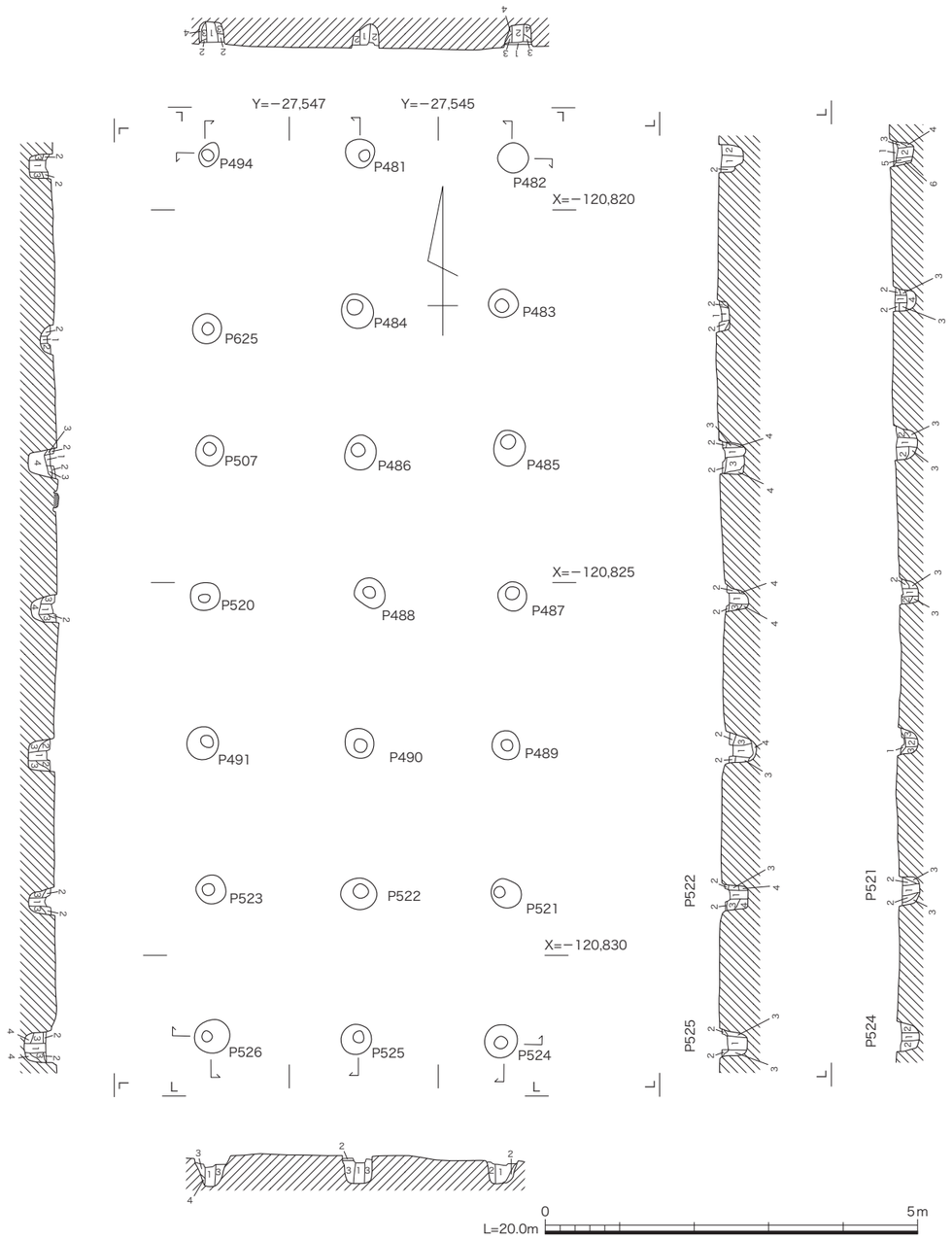
1 灰黄褐色〈10YR5/2〉（旧耕土）
2 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3 黄褐色〈10YR5/6〉（地山）
4 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋黄褐色〈10YR5/6〉 30%
5 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋黄褐色〈10YR5/6〉 30%
6 黄褐色〈10YR5/6〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 20%
7 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉（SD617）
8 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
9 黄褐色〈10YR5/6〉＋灰黄褐色〈10YR5/2〉 30%
10 明褐色砂泥〈7.5YR5/6〉
11 灰黄褐色〈10YR5/2〉＋黄褐色〈10YR5/6〉 10%（SD401）
12 にぶい赤褐色砂礫〈2.5YR4/4〉 φ1～5cm ｝（SD403）
13 褐色〈10YR4/4〉
14 にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
15 にぶい黄橙色砂泥〈10YR6/4〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 10% ｝（SD656）
16 にぶい黄褐色〈10YR5/3〉＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉 20%
17 にぶい黄褐色〈10YR5/4〉＋灰黄褐色〈10YR5/2〉 20%
18 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋にぶい黄褐色〈10YR5/4〉 10%
19 にぶい黄橙色砂泥〈7.5YR6/4〉粘質（地山）
20 褐色〈7.5YR4/3〉（SK607）
21 褐色砂泥〈10YR4/4〉粘質＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 20%
22 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉やや粘質 ブロック
23 褐色〈7.5YR4/3〉粘質 炭少量含む
24 21＋φ2～5cm礫
25 褐色砂泥〈7.5YR4/6〉（客土）
26 暗褐色泥砂〈10YR3/4〉＋にぶい黄橙色〈7.5YR6/4〉 10%（SK539）
27 暗褐色砂泥〈10YR3/3〉5～15cm角礫含む（SK618）
28 灰黄褐色泥砂〈10YR4/2〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 20%
29 明褐色砂泥〈7.5YR5/6〉
30 にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉φ1～3cm礫
31 暗褐色砂泥〈10YR3/3〉粘質
32 褐色砂泥〈10YR4/6〉粘質 炭少量（SK676）
33 褐色泥砂〈10YR4/4〉やや粘質 炭極少量含む（SD655）
34 暗褐色砂泥〈10YR3/4〉 ｝まだらな土
褐色砂泥〈7.5YR4/6〉
35 にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉
36 褐色泥砂〈10YR4/4〉
37 にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉 炭少量
38 褐色砂泥〈7.5YR4/4〉（地山）
39 褐色泥砂〈10YR4/4〉
40 褐色砂泥〈10YR4/4〉
41 にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉 炭少量（37と同じ）
42 暗褐色泥砂〈10YR3/4〉
43 暗褐色〈10YR3/4〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 30% ｝（SK635）
44 褐色砂泥〈10YR4/6〉炭少量
45 褐色砂泥〈10YR4/4〉粘質
46 にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉（SD653）
47 にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
48 にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉＋明褐色〈7.5YR5/6〉 40% 炭少量
49 にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
50 褐色泥砂〈10YR4/4〉
51 黄褐色砂泥〈10YR5/6〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 10% （SD656）
52 明褐色〈7.5YR5/6〉
53 黄褐色砂泥〈10YR5/6〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 10%
54 にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉炭少量
55 褐色泥砂〈10YR4/6〉 やや粘質 炭少量
56 黄褐色砂泥〈10YR5/6〉＋褐色〈10YR4/6〉 20%
57 黄褐色砂泥〈10YR5/6〉＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉 10% （SD654）
58 にぶい黄橙色〈10YR6/4〉＋褐色〈10YR4/6〉 10%＋黄褐色〈10YR5/6〉 10%

西壁

1 褐色〈10YR4/4〉 φ2～5cm礫多い（SD403）
2 明褐色砂泥〈7.5YR5/6〉
3 灰黄褐色〈10YR5/2〉＋明褐色〈7.5YR5/6〉 20%
4 灰黄褐色〈10YR5/2〉＋明褐色〈7.5YR5/6〉 30% ｝（SD401）
5 にぶい黄橙色砂泥〈10YR6/4〉
6 灰黄褐色〈10YR5/2〉＋明褐色〈7.5YR5/6〉 10%
7 灰黄褐色〈10YR5/2〉（旧耕土）
8 灰黄褐色〈10YR5/2〉＋黄褐色〈10YR5/6〉 10%
9 にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉
10 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
11 にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
12 オリーブ褐色〈2.5Y4/3〉＋褐色〈7.5YR4/3〉 30%（SK417）
13 オリーブ褐色〈2.5Y4/3〉＋褐色〈7.5YR4/3〉
14 灰黄褐色〈10YR4/2〉＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉 20% ｝（SD638）
15 にぶい黄橙色〈10YR6/4〉＋灰黄褐色〈10YR4/2〉 10%

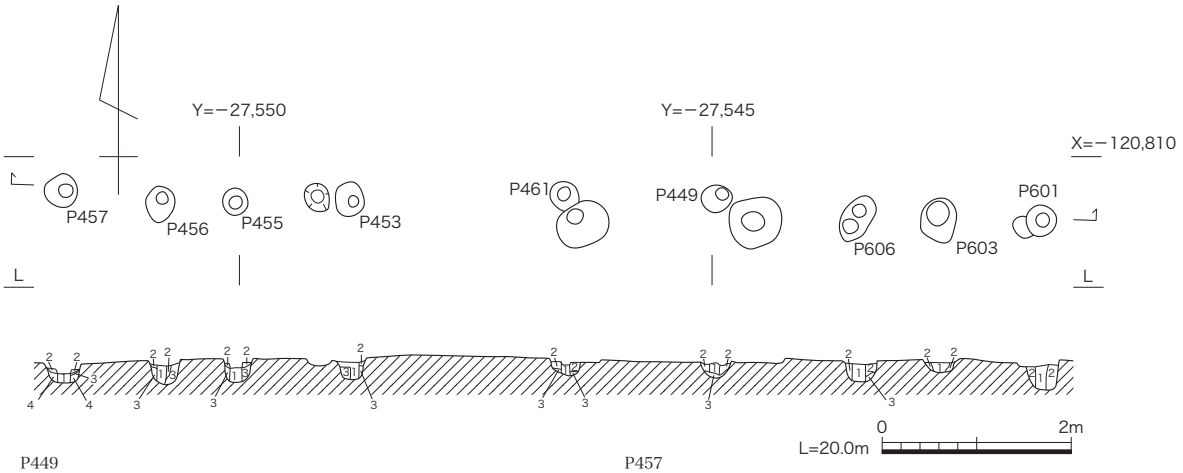
L=20.0m 0 5m

第86図 4トレンチ土層図（1/80）



第 87 図　掘立柱建物 SB4001 実測図（1/80）

P481
1　褐色〈10YR4/4〉　炭少量
2　褐色〈10YR4/4〉+ 橙色〈7.5YR6/6〉40%
P482
1　褐色〈10YR4/4〉
2　褐色〈10YR4/4〉
3　褐色〈10YR4/4〉+ 黄褐色〈10YR5/6〉40%
4　褐色〈10YR4/4〉
5　褐色〈10YR4/4〉+ にぶい黄褐色〈10YR5/4〉30%
6　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
P483
1　褐色〈10YR4/4〉
2　褐色〈10YR4/4〉+ 0.2～1.0cm礫　60%
3　褐色〈10YR4/4〉+ 礫　80%
4　褐色〈10YR4/4〉+ にぶい黄橙色〈10YR6/4〉10%
P484
1　褐色〈10YR4/4〉
2　褐色〈10YR4/4〉+ 〈10YR4/5〉30%
P485
1　褐色〈10YR4/4〉+ にぶい黄色〈2.5Y6/4〉20%
2　褐色〈10YR4/4〉+にぶい橙色〈2.5YR6/4〉30%　炭少量
3　褐色〈10YR4/4〉+ にぶい橙色〈2.5YR6/4〉20%
P486
1　褐色〈10YR4/4〉+ にぶい黄褐色〈10YR5/3〉50%
2　褐色〈10YR4/4〉+ にぶい褐色〈7.5YR5/3〉30%
3　褐色〈7.5YR4/4〉+ 褐色〈10YR4/4〉30%
4　褐色〈7.5YR4/4〉
P487
1　褐色〈10YR4/4〉
2　褐色〈10YR4/4〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉20%
3　褐色〈7.5YR4/4〉+ 褐色〈10YR4/4〉20%
P488
1　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉やや粘質
2　褐色〈7.5YR4/4〉+ にぶい黄褐色〈10YR4/3〉20%
3　褐色〈7.5YR4/4〉
4　黄褐色粘質土〈10YR5/6〉
P489
1　褐色〈10YR4/4〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉30%
2　褐色〈7.5YR4/4〉
3　褐色〈7.5YR4/6〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉30%
P490
1　褐色〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　褐色〈7.5YR4/4〉
4　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
P491
1　褐色〈10YR4/4〉
2　褐色〈7.5YR4/3〉+明褐色〈7.5YR5/6〉 40%
3　暗褐色〈7.5YR3/4〉
P494
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉+ にぶい黄褐色〈10YR4/3〉30%
3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
4　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
P507
1　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　褐色〈10YR4/4〉
4　褐色〈10YR4/4〉
P520
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+にぶい褐色〈7.5YR5/4〉10%
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+にぶい褐色〈7.5YR5/4〉 30%
4　褐色〈7.5YR4/4〉+ 橙色〈7.5YR6/6〉20%
P521
1　褐色〈7.5YR4/4〉
2　褐色〈7.5YR4/4〉+ 褐色〈7.5YR4/6〉30%
3　褐色〈7.5YR4/6〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉30%
P522
1　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　黄褐色粘質土〈10YR5/6〉+にぶい黄褐色〈10YR4/3〉20%
4　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+褐色〈10YR4/6〉20%
P523
1　にぶい褐色〈7.5YR5/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 明褐色〈7.5YR5/6〉50%
3　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
P524
1　褐色〈7.5YR4/4〉
2　褐色〈7.5YR4/4〉+ 明褐色〈7.5YR5/6〉30%
P525
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ にぶい褐色〈7.5YR5/4〉10%
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉炭少量
3　褐色〈10YR4/4〉
P526
1　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉+ 明褐色〈7.5YR5/6〉20%
4　明褐色〈7.5YR5/6〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉20%
P625
1　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
2　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉+にぶい黄褐色〈10YR4/3〉20%



P449
1　にぶい黄橙色泥砂〈10YR6/4〉
2　明黄褐色泥砂〈10YR6/6〉＋にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉20%
3　明黄褐色〈10YR6/6〉
P453
1　灰黄褐色泥砂〈10YR4/2〉
2　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/3〉＋にぶい黄橙色〈7.5YR6/4〉20%
3　にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/3〉
P455
1　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉＋にぶい黄橙色砂泥〈7.5YR6/4〉30%
2　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉＋にぶい黄橙色〈7.5YR6/4〉10%
3　にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/3〉
P456
1　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/3〉
2　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉＋にぶい黄橙色泥砂〈10YR6/3〉30%
3　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉＋φ1〜3cm礫　60%
P457
1　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉
2　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉＋にぶい黄橙色粘質土〈10YR7/3〉30%
3　にぶい黄橙色砂泥〈10YR6/4〉
4　にぶい黄色砂泥〈2.5Y6/4〉＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉　20%
P461
1　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/4〉20%
P601
1　にぶい黄橙色砂泥〈10YR6/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉
P603
1　褐色泥砂〈10YR4/4〉
2　褐色〈10YR4/4〉＋にぶい黄褐色〈10YR5/4〉30%
P606
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋にぶい黄橙色砂泥〈10YR6/3〉20%
2　明黄褐色〈10YR6/6〉＋にぶい黄橙色〈10YR6/3〉30%
3　にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/4〉

第 88 図　柵 SA4002 実測図（1/80）

橙色砂泥、暗灰黄色泥砂、にぶい黄褐色砂泥と暗灰黄色泥砂に分けられた。この溝と北側の溝 SD638 は、通路の側溝である可能性も考えられないわけではないが、東側の 1 トレンチでは未検出であるため、ここでは可能性だけを指摘しておきたい。

溝 SD687　トレンチの東部で検出した南北方向の素掘り溝で、東側に落ち込む段の直下に施されていた。

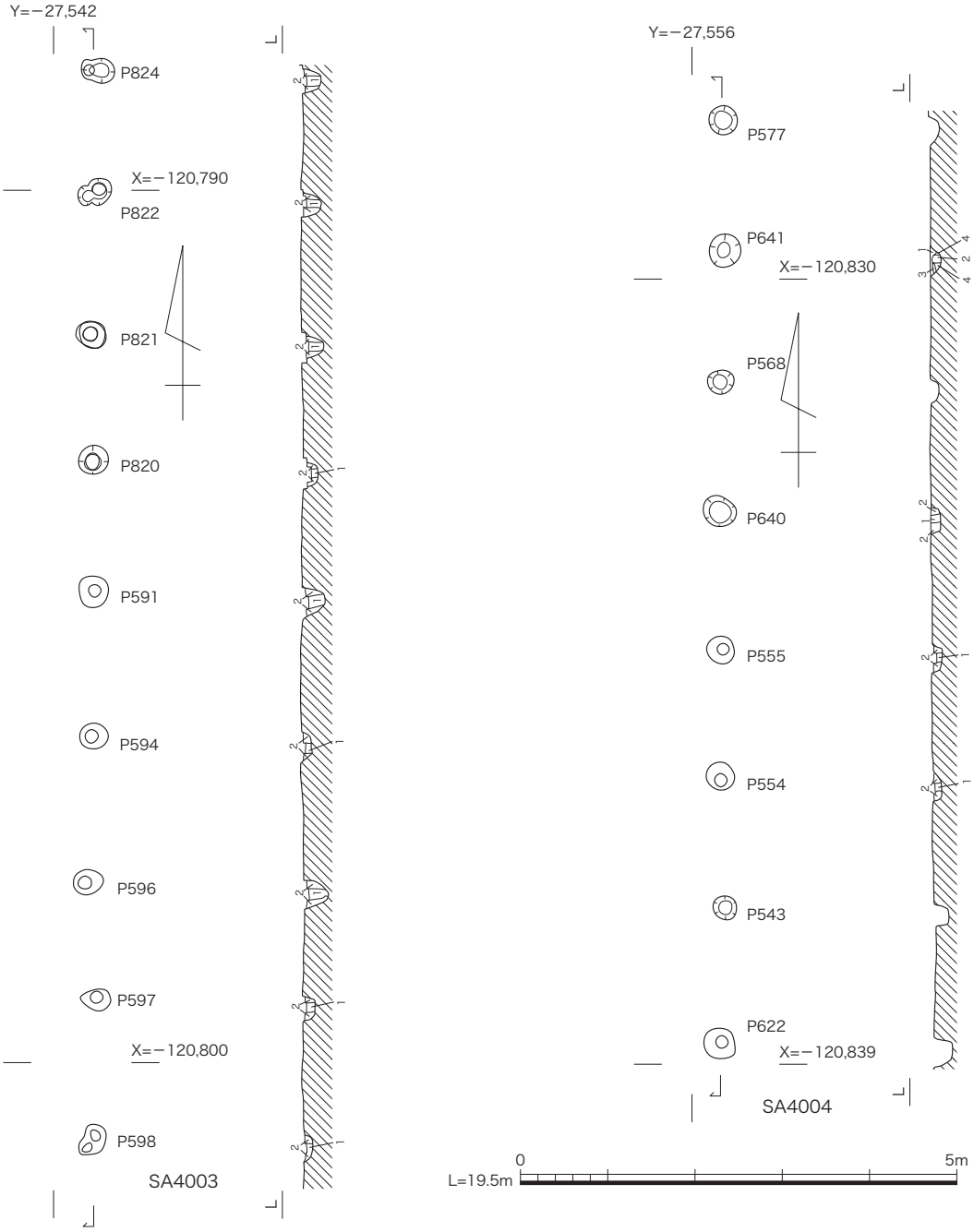
溝 SD691　溝 SD404 の西約 1 mで検出した南北方向の素掘り溝で、長さ約 4.7 m分を検出した。幅は 1 m前後の規模がある。

溝 SB693　溝 SD691 の西約 2 mの地点で検出した長さ 3.7 mほどある南北方向の素掘り溝である。溝幅は約 0.7 mある。

井戸 SE480　掘立柱建物 SB01 のすぐ東側で検出した素掘りの井戸である。平面形は、径約 1.1 mの楕円形を呈しており、約 1 mの深さまで掘削したが、それより下は砂礫の厚い堆積が認められた。

B．長岡京期〜平安時代の遺構

掘立柱建物 SB4005（第 91 図）　調査区の中央で検出した梁行 2 間、桁行が 4 間ある南北棟建物であるが、北東隅の柱は SD642 によって破壊され、南側柱列は削平によって遺存していない。このため、桁行は 5 間に復元できるのかも知れない。建物の主軸は、北で東に 20° 程度大きく振れているが、2 トレンチ検出の掘立柱建物 SB91 に近似している。柱掘形は、一辺約 0.5 mの隅円方形で、径約 0.2 mの柱痕跡をとどめている。柱間寸法は、桁行が 1.7 〜 2 m前後、梁

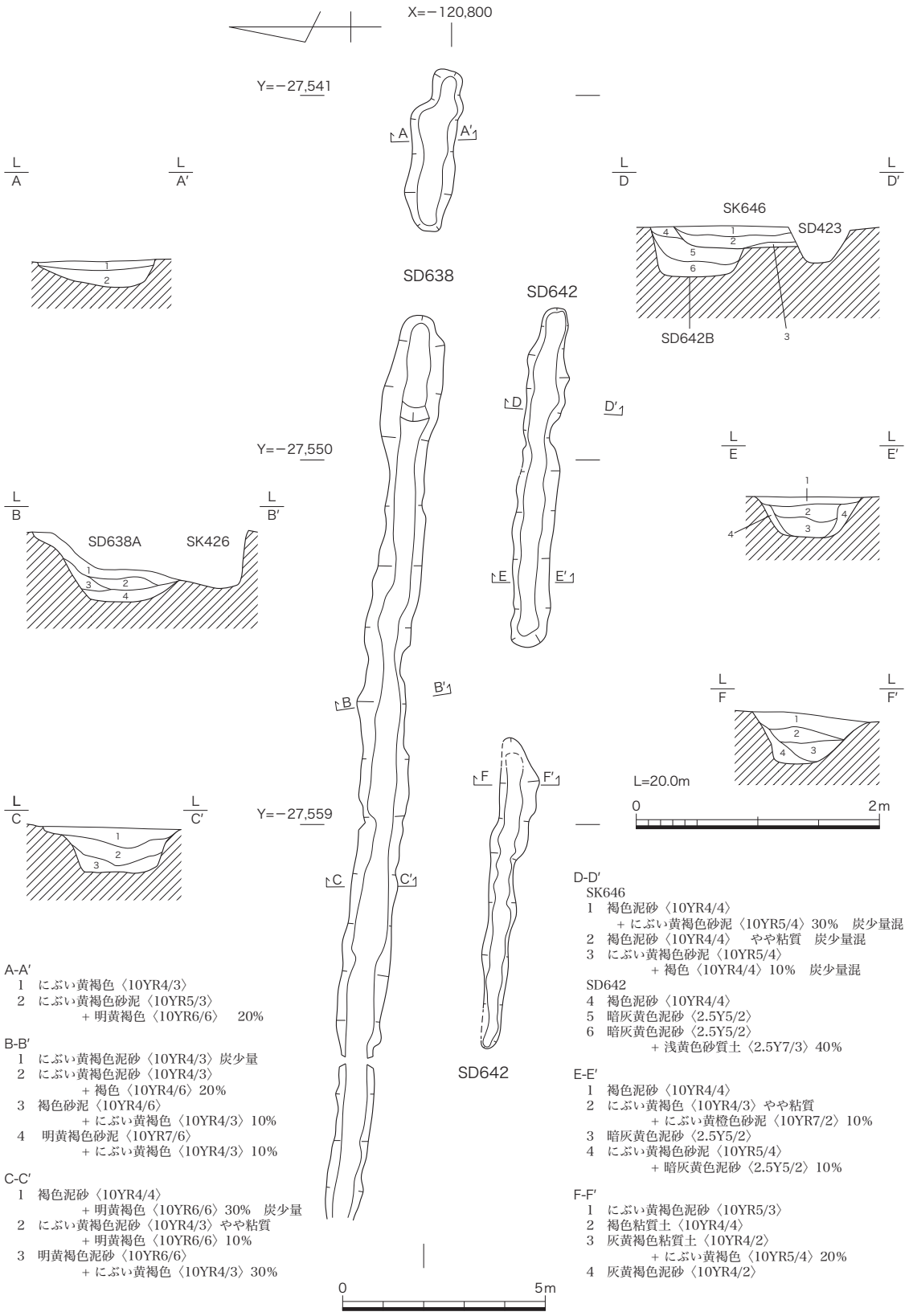


P591
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋橙色〈7.5YR6/6〉　10%
P594
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋橙色〈7.5YR6/6〉　10%
P596
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋橙色〈7.5YR6/6〉　30%
P597
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈10YR4/4〉30%＋橙色〈7.5YR6/6〉10%
P598
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋橙色〈7.5YR6/6〉　20%
P820
　1　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈10YR4/6〉　10%
P821
　1　褐色〈10YR4/4〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉　10%

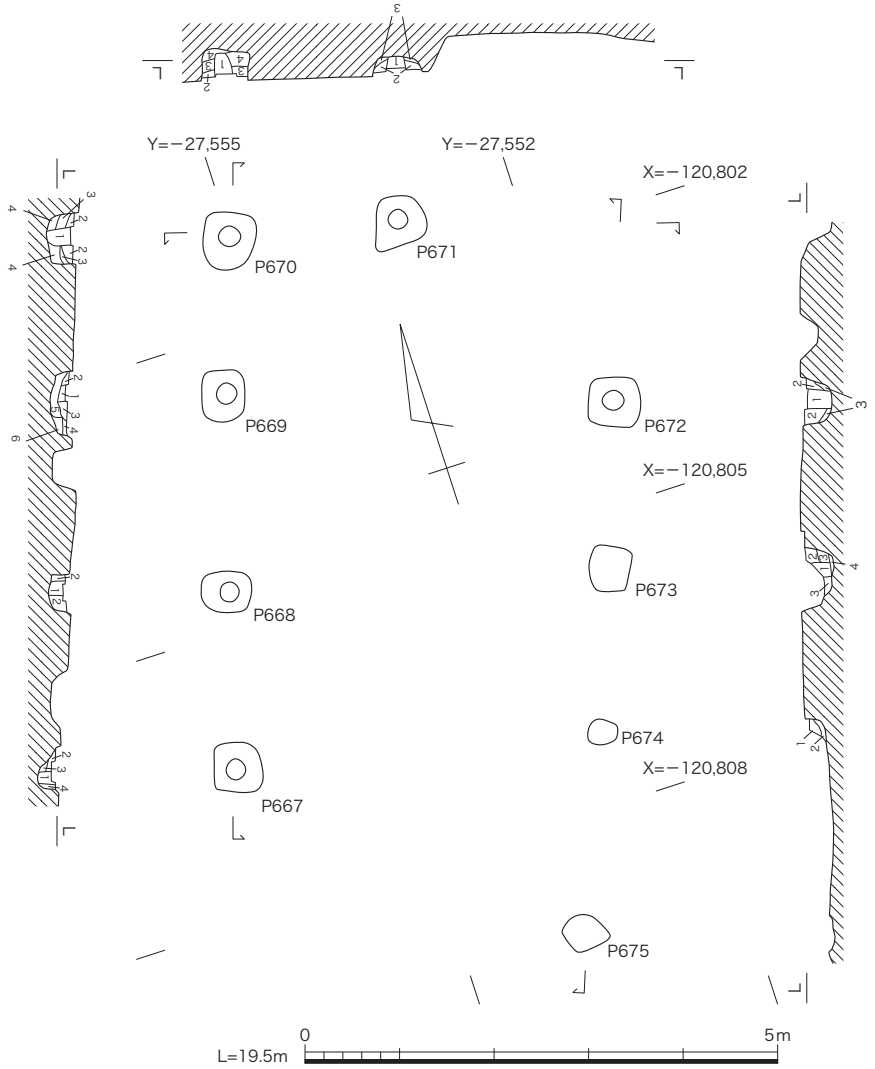
P822
　1　褐色〈10YR4/4〉　炭少量
　2　褐色〈10YR4/4〉＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉　20%
P824
　1　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉＋褐色〈10YR4/4〉　ブロック
　2　褐色〈10YR4/4〉　0.5〜1.0cm礫混じり

P554
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋にぶい黄褐色〈10YR5/4〉　30%
P555
　1　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋にぶい黄褐色〈10YR5/4〉　20%
P640
　1　褐色〈10YR4/4〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
P641
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　褐色〈10YR4/4〉
　3　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉
　4　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉　やや粘質

第89図　柵SA4003・4004実測図（1/80）



第 90 図　溝 SD638・642 実測図（1/50・1/150）

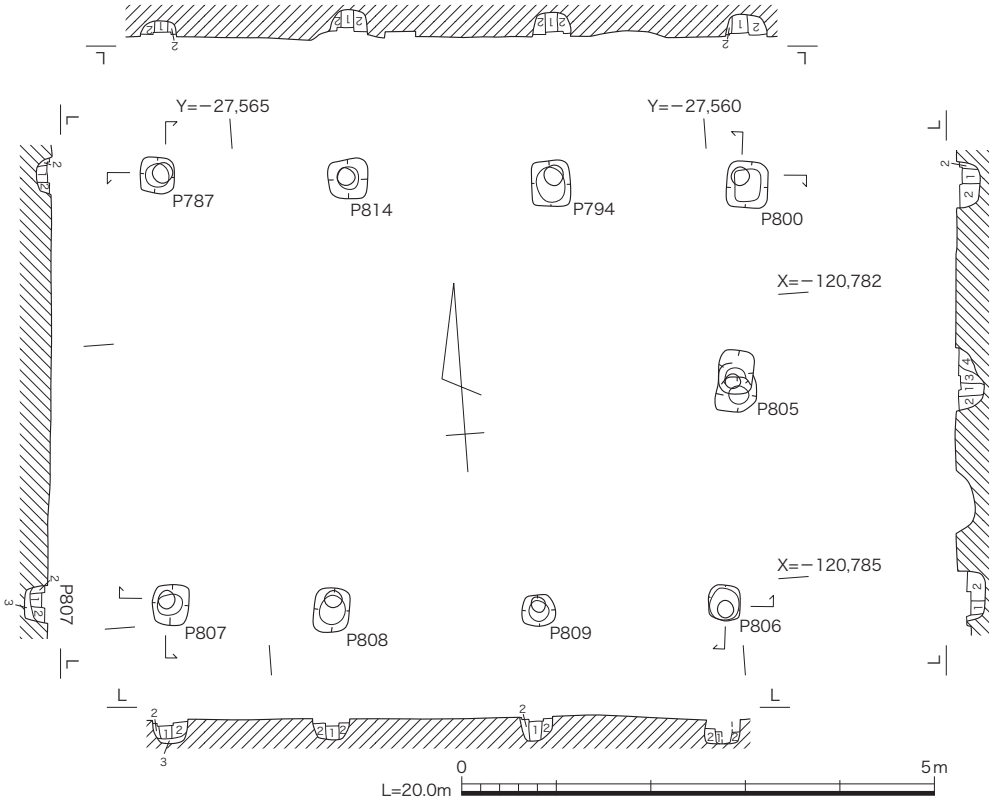


P667
1　灰黄褐色〈10YR4/2〉
2　灰黄褐色〈10YR4/2〉+ にぶい黄褐色砂混じり〈10YR5/4〉30%
3　にぶい黄褐色砂混〈10YR5/4〉 + 暗褐色〈10YR3/4〉10%
4　暗褐色〈10YR3/4〉+ にぶい褐色〈7.5YR5/4〉10%
P668
1　灰黄褐色〈10YR4/2〉
2　暗褐色〈10YR3/4〉+ 黄褐色〈10YR5/6〉
P669
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　灰黄褐色〈10YR4/2〉 + 黄褐色〈10YR5/6〉20%
3　暗褐色〈10YR3/4〉
4　暗褐色〈10YR3/4〉+ 黄褐色〈10YR5/6〉20%
5　黄褐色〈10YR5/6〉+ 暗褐色〈10YR3/4〉10%
6　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
P670
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　灰黄褐色〈10YR4/2〉+ にぶい黄褐色〈10YR5/4〉30%
3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉 + 灰黄褐色〈10YR6/2〉10%
4　暗褐色〈10YR3/4〉+ にぶい黄褐色〈10YR5/4〉30%
P671
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　暗褐色〈10YR3/4〉+にぶい黄褐色〈10YR5/4〉10%
3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉+ 暗褐色〈10YR3/4〉10%
P672
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 黄褐色〈10YR5/6〉20%
3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉+ 暗褐色〈10YR3/4〉20%
P673
1　灰黄褐色〈10YR4/2〉 + にぶい黄褐色〈10YR5/4〉30%
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ にぶい黄褐色〈10YR5/4〉40%　炭少量
3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉+ 暗褐色〈10YR3/4〉20%
4　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/4〉
P674
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ にぶい黄褐色〈10YR5/4〉30%
2　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉+ にぶい黄褐色〈10YR4/3〉30%

第 91 図　掘立柱建物 SB4005 実測図（1/80）

行が 1.8 ～ 2 m程度に復元できる。

掘立柱建物 SB4006（第 92 図）　トレンチの北西部で検出した桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物であるが、西側妻部の柱掘形は未検出であり、東側妻部の柱掘形は重複していた。建物主軸の方位は、北で東に 7° ほど振れている。柱掘形は、一辺 0.4 ～ 0.5 mの隅円方形を呈しており、深さは 0.2 ～ 0.3 m程度が遺存していた。柱間寸法は、桁行約 2.1 m、梁行が約 2.2 m等間と推



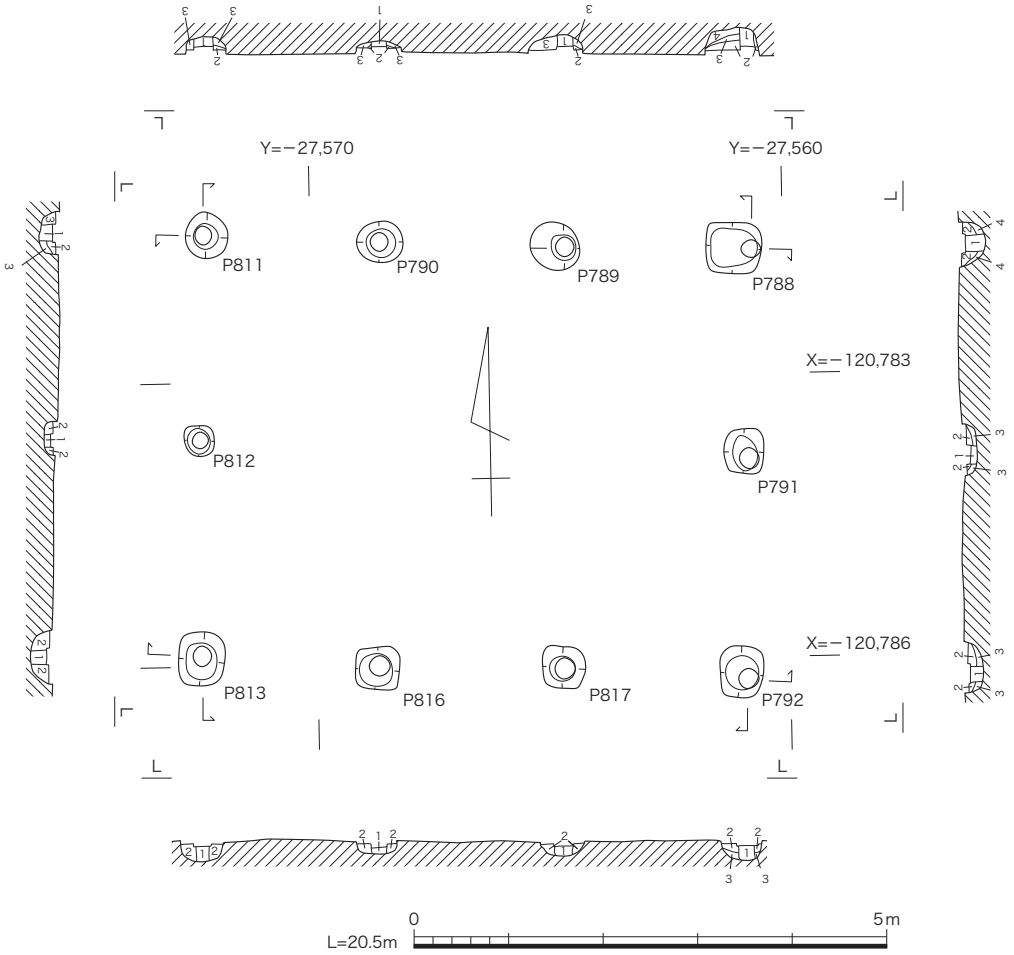
P787
　1　暗褐色〈10YR3/3〉
　2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈10YR4/4〉30%
P794
　1　暗褐色〈10YR3/4〉＋褐色〈10YR4/6〉30%
　2　暗褐色〈10YR3/4〉＋褐色〈7.5YR4/4〉
P800
　1　褐色〈10YR4/6〉
　2　暗褐色〈10YR3/3〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉20%　炭、土師器
P805
　1　暗褐色〈10YR3/4〉＋褐色〈7.5YR4/6〉10%
　2　灰黄褐色〈10YR4/2〉＋褐色〈7.5YR4/6〉10%
　3　褐色〈10YR4/6〉
　4　褐色〈7.5YR4/4〉
P806
　1　暗褐色〈10YR3/3〉
　2　褐色〈7.5YR4/4〉
P807
　1　褐色〈10YR4/4〉
　2　褐色〈10YR4/6〉
　3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
P808
　1　褐色〈7.5YR4/6〉
　2　褐色〈7.5YR4/4〉＋〈10YR4/5〉20%
P809
　1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
　2　褐色〈10YR4/4〉炭混じり
P814
　1　褐色〈10YR4/6〉
　2　褐色〈7.5YR4/4〉

第 92 図　掘立柱建物 SB4006 実測図（1/80）

察される。床面積は、約 27.6㎡に復元することができた。

掘立柱建物 SB4007（第 93 図）　掘立柱建物 SB4006 のすぐ西側で、それと重複関係にある桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物であるが、SB4006 との新古関係を確認することができなかった。建物主軸の方位は、北で東に約 3° 振れていた。柱掘形は、一辺 0.3 ～ 0.6 mの隅円方形を呈しており、径 0.2 mほどの柱痕跡をとどめている。柱間寸法は、桁行が約 2 m、梁行が約 2.2 m等間と推察される。床面積は、約 25.5㎡に復元することができる。

掘立柱建物 SB4008（第 94 図）　掘立柱建物 SB4007 の東約 2.4 mに位置する桁行 3 間、梁行 2 間の東西棟建物である。SB4007 と柱筋や方位を揃えて建てられているが、西側の妻柱は確認できなかった。柱掘形は、一辺 0.45 ～ 0.6 mほどの隅円方形を呈しており、深さは浅いもので 0.2 m、深いもので 0.45 m程度が遺存していた。柱痕跡は、いずれも径 0.2 mほどである。柱間寸法は、桁行が 1.8 m等間、梁行は 2.3 m等間である。床面積は、約 24.8㎡に復元するこ



P788
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　褐色〈7.5YR4/3〉
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
4　褐色〈7.5YR4/6〉

P789
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　灰黄褐色〈10YR4/2〉
3　褐色〈10YR4/4〉

P790
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉
3　褐色〈10YR4/5〉

P791
1　褐色〈7.5YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈7.5YR4/4〉20%
3　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉

P792
1　褐色〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈7.5YR4/4〉30%
3　褐色〈10YR4/6〉

P811
1　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
2　黄褐色〈2.5Y5/3〉
3　黄褐色〈2.5Y5/4〉

P813
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　黄褐色〈2.5Y5/3〉

P812
1　褐色〈7.5YR4/6〉
2　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉

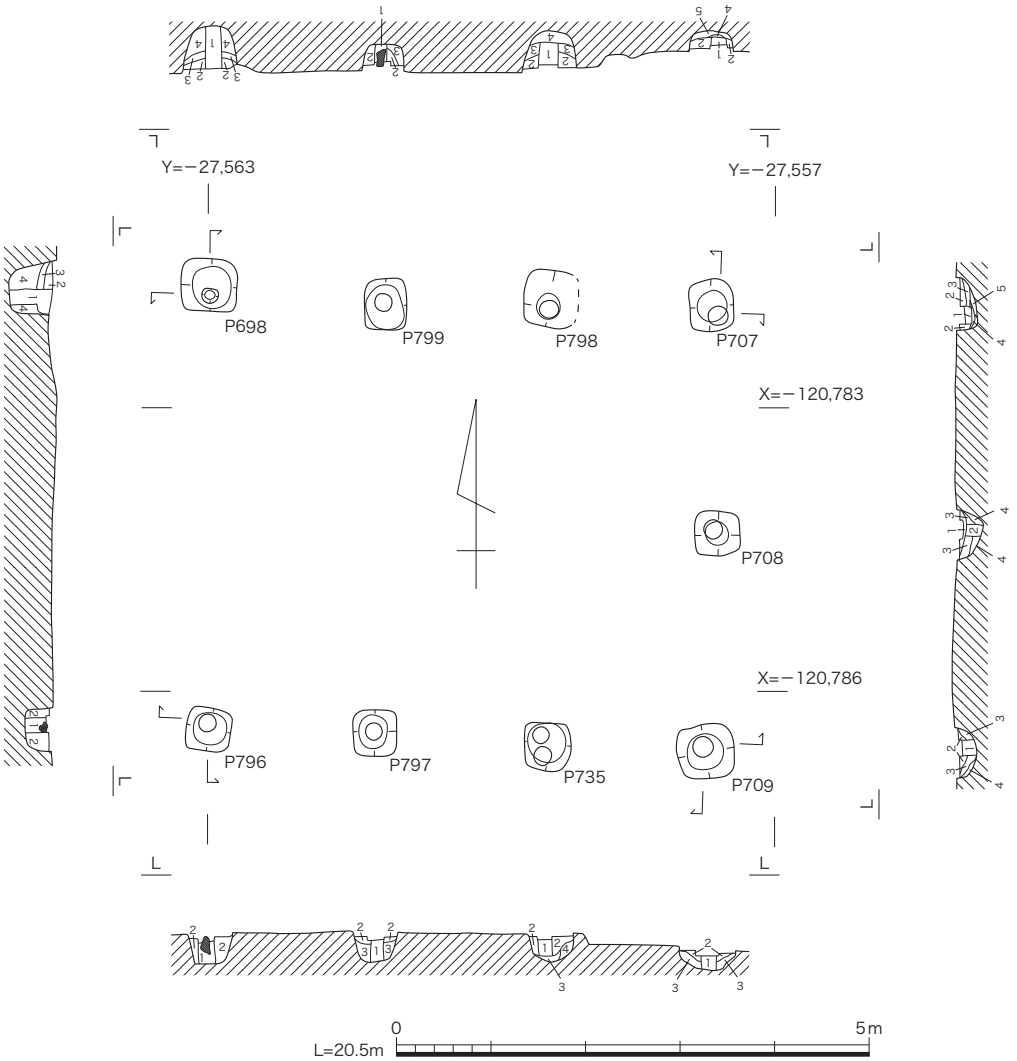
P816
1　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
2　褐色〈10YR4/6〉

P817
1　にぶい褐色〈7.5YR5/4〉
2　褐色〈10YR4/6〉

第93図　掘立柱建物SB4007実測図（1/80）

とができるが、SB4007と同じ建物になる余地を残す。

掘立柱建物SB4009（第95図）　トレンチの北西隅で検出した桁行3間、梁行2間の南北棟建物である。建物主軸の方位は、北で7°程度東に振れており、SB4006と同じであることから同時期に建っていた可能性が濃厚である。柱掘形は、一辺0.4～0.5 mの隅円方形ないし径0.4 m前後の楕円形を呈しており、深さは0.4 mほど遺存していた。各柱掘形内には、径0.2 m前後の柱痕跡をとどめていた。柱掘形内からは、丸瓦などの破片が出土している。柱間寸法については、桁行が北から1間目が1.9 mで、他は2 mであった。梁行は、約2.3 m等間である。床面積は、約28.8㎡に復元することができる。



P698
1　暗褐色〈10YR3/4〉
2　暗褐色〈7.5YR3/4〉
3　暗褐色〈7.5YR3/4〉＋褐色〈7.5YR4/6〉20%　炭混じり
4　褐色〈7.5YR4/4〉

P707
1　暗褐色〈10YR3/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋にぶい黄褐色〈10YR5/4〉20%
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈10YR4/4〉20%
4　黄褐色やや粘質〈2.5Y5/3〉
5　にぶい黄褐色粘質〈10YR5/4〉

P708
1　暗褐色〈10YR3/4〉
2　褐色〈7.5YR4/4〉
3　褐色〈10YR4/4〉
4　褐色〈10YR4/6〉

P709
1　暗褐色〈10YR3/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉＋灰黄褐色〈10YR4/2〉10%
3　褐色粘質〈10YR4/4〉
4　褐色〈10YR4/4〉炭少量

P735
1　暗褐色〈10YR3/4〉
2　暗褐色〈10YR3/4〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉30%
3　褐色〈7.5YR4/4〉＋褐色〈10YR4/4〉30%
4　褐色粘質〈10YR4/4〉

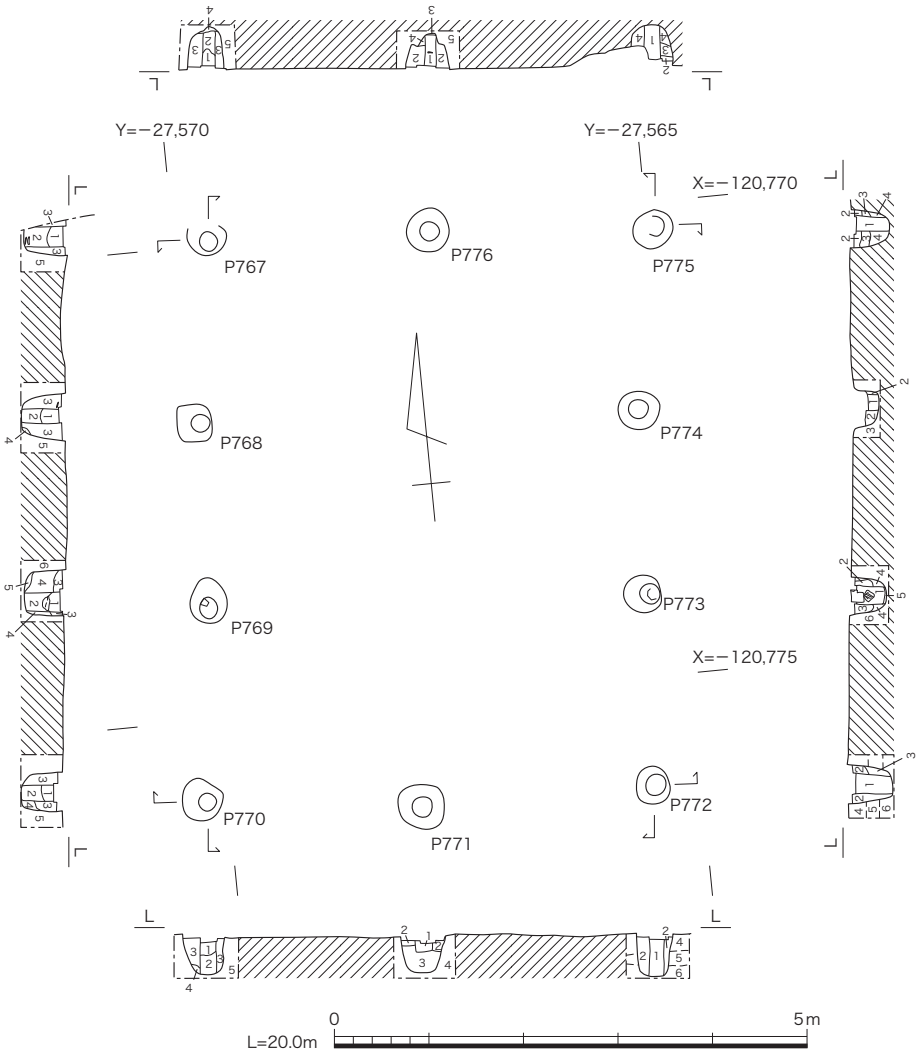
P796
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉

P797
1　褐色〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　褐色〈10YR4/6〉

P798
1　暗褐色〈10YR3/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈10YR4/6〉30%
3　褐色〈10YR4/4〉
4　褐色〈10YR4/6〉＋暗褐色〈10YR3/4〉20%

P799
1　暗褐色〈10YR3/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋灰黄褐色〈10YR4/2〉20%
3　褐色〈10YR4/6〉

第 94 図　掘立柱建物 SB4008 実測図（1/80）



P767
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 黄褐色〈2.5Y5/4〉30%　炭混じり
2　にぶい黄褐色粘質〈10YR4/3〉　土器
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉炭混じり
4　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 灰オリーブ色〈5Y5/3〉30%
5　灰オリーブ色〈5Y5/3〉（地山）

P768
1　暗褐色〈10YR3/4〉炭混じり
2　灰黄褐色〈10YR4/2〉
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 暗灰黄色〈2.5Y4/2〉20%　炭混じり
4　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 黄褐色〈2.5Y5/4〉30%
5　黄褐色〈2.5Y5/4〉（地山）

P769
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　灰黄褐色〈10YR5/2〉
3　灰黄褐色〈10YR4/2〉
4　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
5　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉
6　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉（地山）

P770
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 暗灰黄色〈2.5Y5/2〉20%　炭混じり
2　黄褐色〈2.5Y5/4〉+灰オリーブ色〈7.5Y5/2〉20%
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
4　黄褐色〈2.5Y5/3〉（地山ブロック）
5　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉（地山）

P771
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉　炭混じり
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ にぶい黄褐色〈10YR5/4〉10%
3　褐色〈10YR4/6〉
4　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉（地山）

P772
1　暗褐色〈10YR3/4〉+ 褐色〈10YR4/4〉　10%
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
4　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/4〉（地山）
5　黄褐色砂礫〈2.5Y5/4〉（地山）
6　褐色砂泥〈10YR4/6〉（地山）

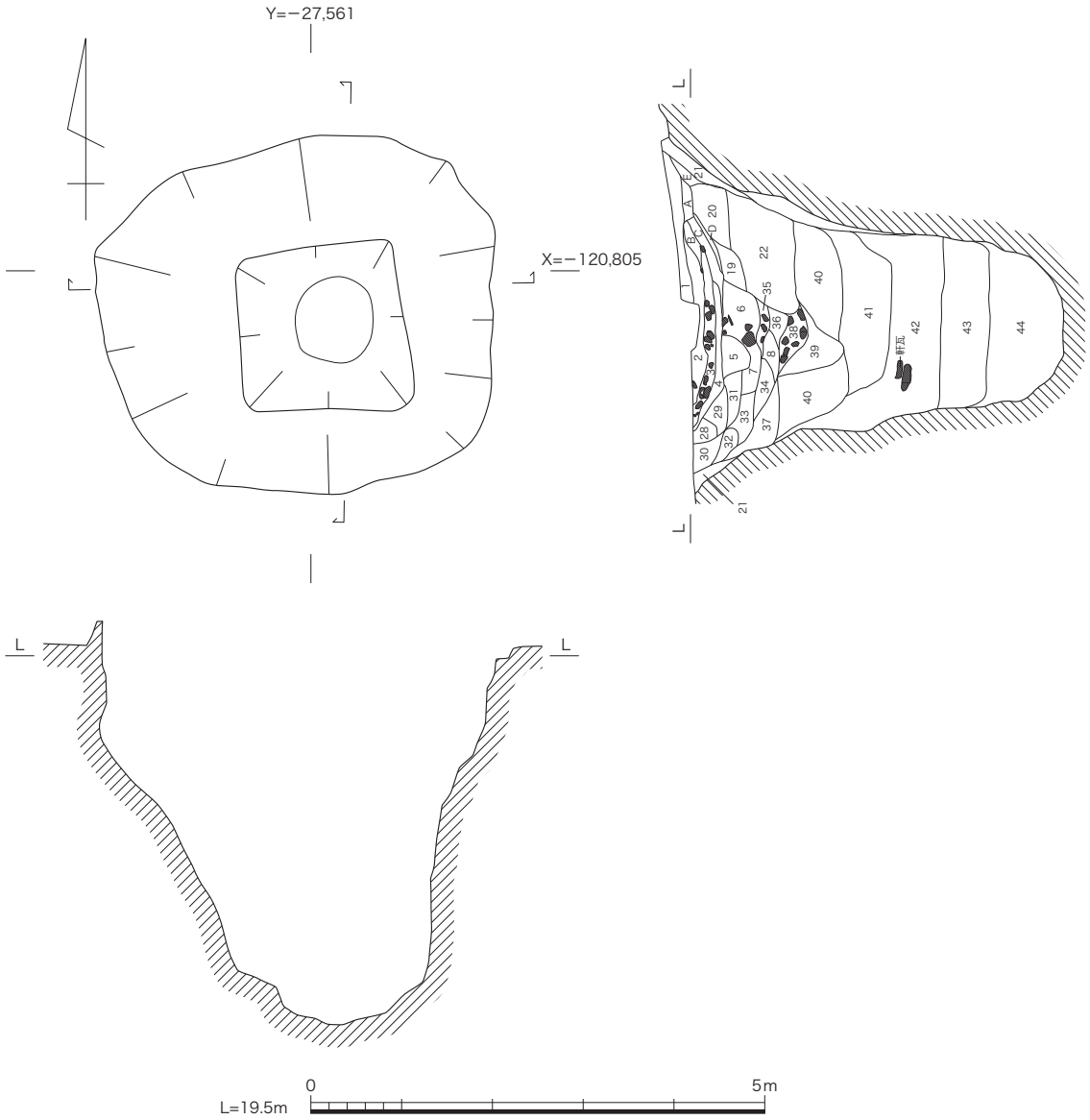
P773
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 褐色〈10YR4/6〉10%　石・瓦
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 + 褐色〈10YR4/6〉30%
4　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
5　黄褐色〈2.5Y5/4〉
6　褐色〈10YR4/6〉（地山）

P774
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉 + 褐色〈10YR4/6〉40%
3　褐色〈10YR4/6〉

P775
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉 + 褐色〈10YR4/6〉20%
2　灰黄褐色〈10YR4/2〉
3　褐色〈7.5YR4/6〉
4　にぶい黄褐色粘質〈10YR5/4〉

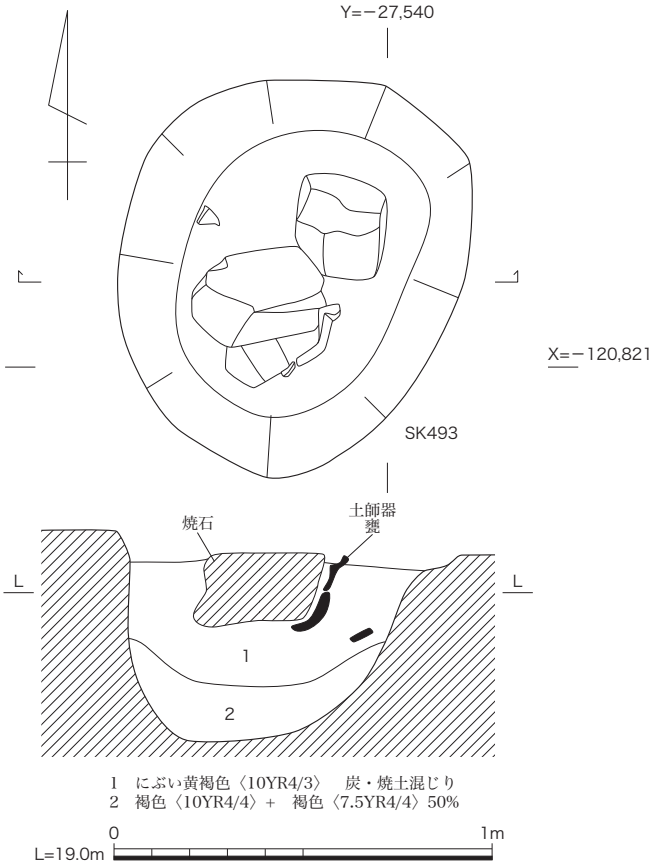
P776
1　褐色〈10YR4/4〉土師片　炭混じり
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉　炭混じり
3　灰オリーブ色粘質〈5Y5/3〉
4　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 黄褐色〈10YR5/6〉20%
5　黄褐色〈10YR5/6〉（地山）

第95図　掘立柱建物 SB4009 実測図（1/80）

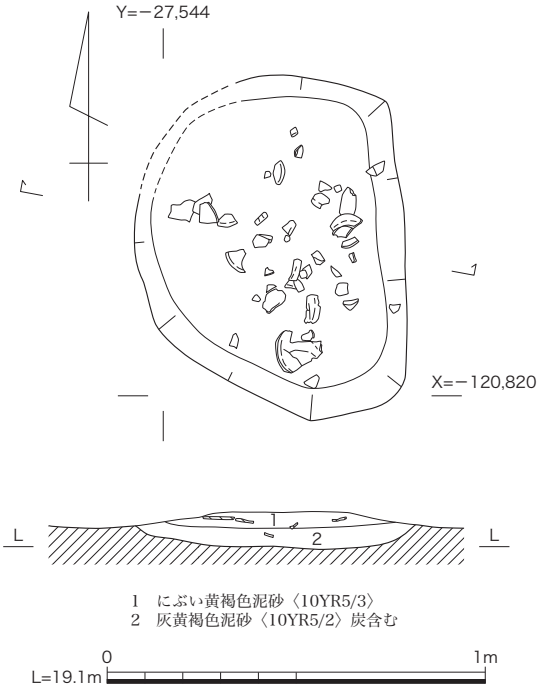


1　褐色泥砂〈7.5YR4/4〉＋褐色〈10YR4/4〉礫含む
2　褐色泥砂〈10YR4/4〉
3　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/3〉
　φ5〜10cm礫多く含む
4　灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉
5　灰黄褐色泥砂〈10YR5/2〉　やや粘質
6　灰黄褐色泥砂〈10YR5/2〉
　+灰褐色泥砂〈7.5YR4/2〉
7　明赤褐色〈5YR5/6〉＋灰褐色〈7.5YR4/2〉　マンガン含む
8　灰黄褐色〈10YR5/2〉
9　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
10　オリーブ褐色〈2.5Y4/3〉　φ2〜5cm礫少量
11　暗褐色〈10YR3/4〉
12　暗灰黄色〈2.5Y4/2〉　やや粘質
13　褐色〈7.5YR4/4〉　やや粘質
14　褐色〈7.5YR4/3〉
15　灰色粘土〈5Y5/1〉
16　褐色〈10YR4/4〉　φ1〜3cm礫　マンガン
17　褐色〈7.5YR4/4〉　やや粘質
18　17 +黄褐色〈10YR5/6〉　30%
19　褐色〈7.5YR4/4〉　17より粘質　10cm礫少量含む
20　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉　粘質＋黄褐色〈10YR5/6〉　40%
21　黄褐色砂泥〈10YR5/6〉
22　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉　20より粘質
23　にぶい黄褐色〈10YR5/3〉
24　褐色〈7.5YR4/4〉　やや粘質強い
25　褐色〈10YR4/4〉　やや粘質
　＋黄褐色〈10YR5/6〉　10%　φ5〜10cm礫少量
26　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉　やや粘質　マンガン少量
27　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉　やや粘質　φ5〜15cm礫　瓦片
28　黄褐色〈10YR5/6〉　やや粘質（掘形埋土か）
28　褐色〈7.5YR4/4〉
29　褐色〈7.5YR4/4〉　やや粘質
30　褐色〈10YR4/4〉＋黄褐色〈10YR5/6〉　20%　やや粘質
31　褐色〈10YR4/4〉＋灰褐色〈7.5YR4/2〉　20%　やや粘質
32　灰黄褐色〈10YR6/2〉　粘質
33　灰黄色〈2.5Y6/2〉　粘質
34　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉　やや粘質　φ5〜15cm礫混じり
35　灰黄褐色粘質土〈10YR5/2〉　10cm角礫多い
36　暗灰黄色粘質土〈2.5Y5/2〉　8と似る　礫少量
37　にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/4〉
38　にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/3〉　10cm程度の角礫多い
39　灰黄色〈2.5Y6/2〉　礫泥土混じり　10cm程度の角礫60%
40　灰黄色粘質土〈2.5Y6/2〉
41　10cm前後の角礫　暗灰黄色泥土〈2.5Y4/2〉混じり
42　暗灰黄色泥土〈2.5Y5/2〉　1〜5cmの礫多く含む
43　暗灰黄色泥土〈2.5Y5/2〉　砂礫（7〜10cm）混じり
44　暗灰黄色泥土〈2.5Y4/2〉　φ2〜5cm礫混じり
A　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
B　にぶい褐色砂泥〈7.5YR5/4〉
C　褐色泥砂〈10YR4/4〉　やや粘質
D　褐色泥砂〈7.5YR4/4〉＋φ1〜3cm礫多い
E　黄褐色砂泥〈10YR5/6〉＋にぶい黄褐色泥砂〈10YR5/4〉　30%

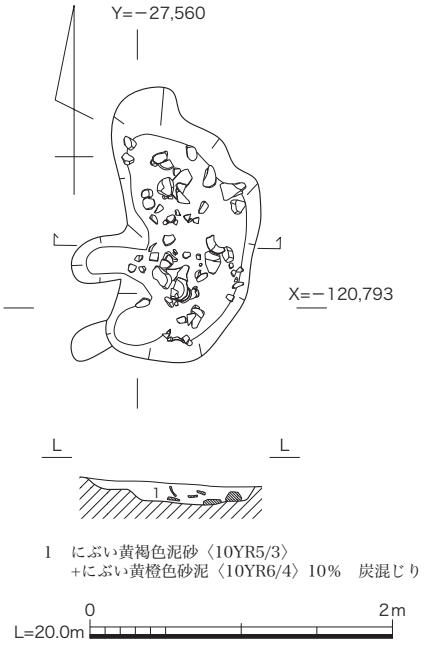
第 96 図　井戸 SE636 実測図（1/80）



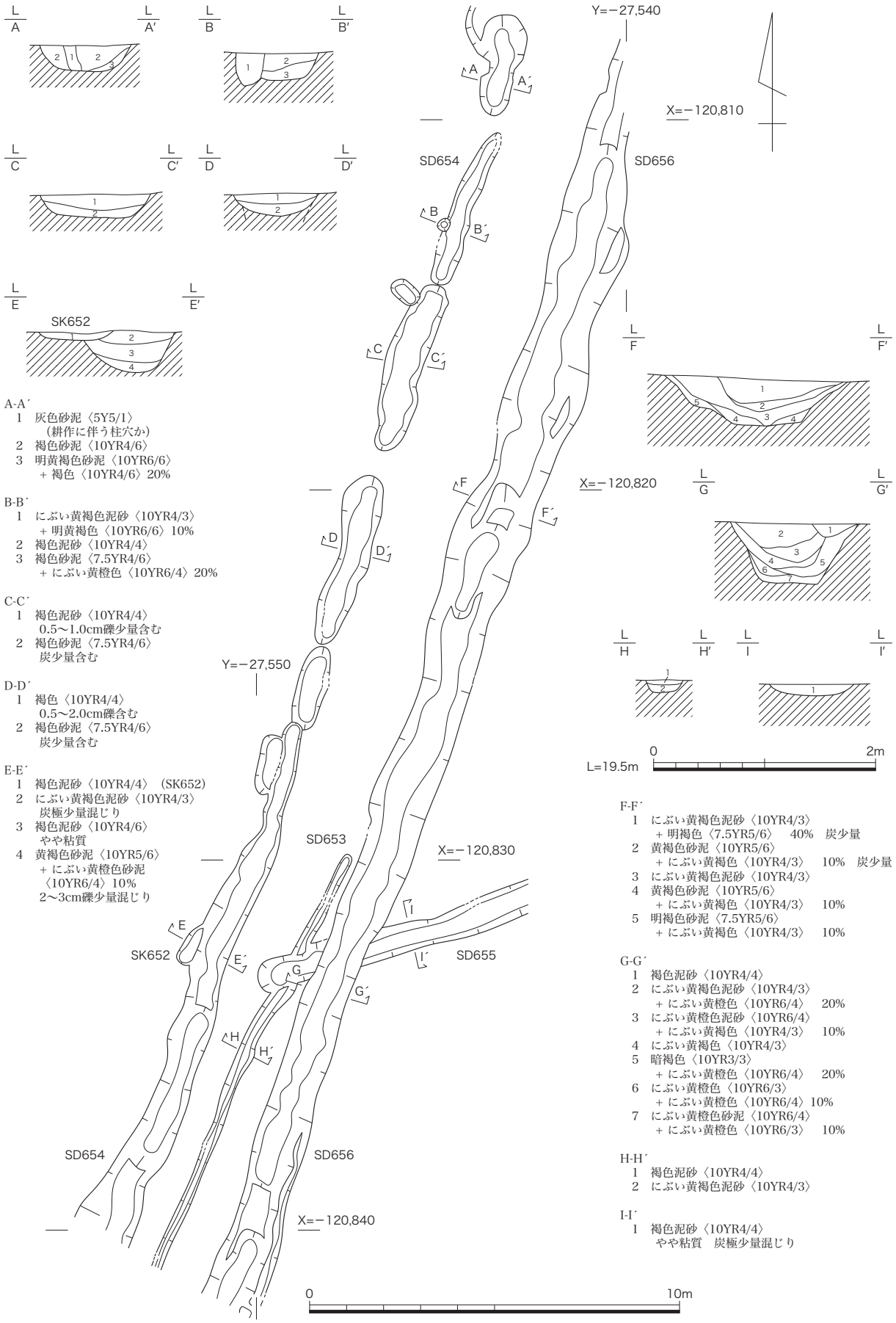
第 97 図　土坑 SK493 実測図（1/20）



第 98 図　土坑 SK645 実測図（1/20）



第 99 図　土坑 SK819 実測図（1/50）



A-A´
1　灰色砂泥〈5Y5/1〉
　(耕作に伴う柱穴か)
2　褐色砂泥〈10YR4/6〉
3　明黄褐色砂泥〈10YR6/6〉
　＋褐色〈10YR4/6〉20%

B-B´
1　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
　＋明黄褐色〈10YR6/6〉10%
2　褐色泥砂〈10YR4/4〉
3　褐色砂泥〈7.5YR4/6〉
　＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉20%

C-C´
1　褐色泥砂〈10YR4/4〉
　0.5〜1.0cm礫少量含む
2　褐色砂泥〈7.5YR4/6〉
　炭少量含む

D-D´
1　褐色〈10YR4/4〉
　0.5〜2.0cm礫含む
2　褐色砂泥〈7.5YR4/6〉
　炭少量含む

E-E´
1　褐色泥砂〈10YR4/4〉（SK652）
2　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
　炭極少量混じり
3　褐色泥砂〈10YR4/6〉
　やや粘質
4　黄褐色砂泥〈10YR5/6〉
　＋にぶい黄橙色砂泥
　〈10YR6/4〉10%
　2〜3cm礫少量混じり

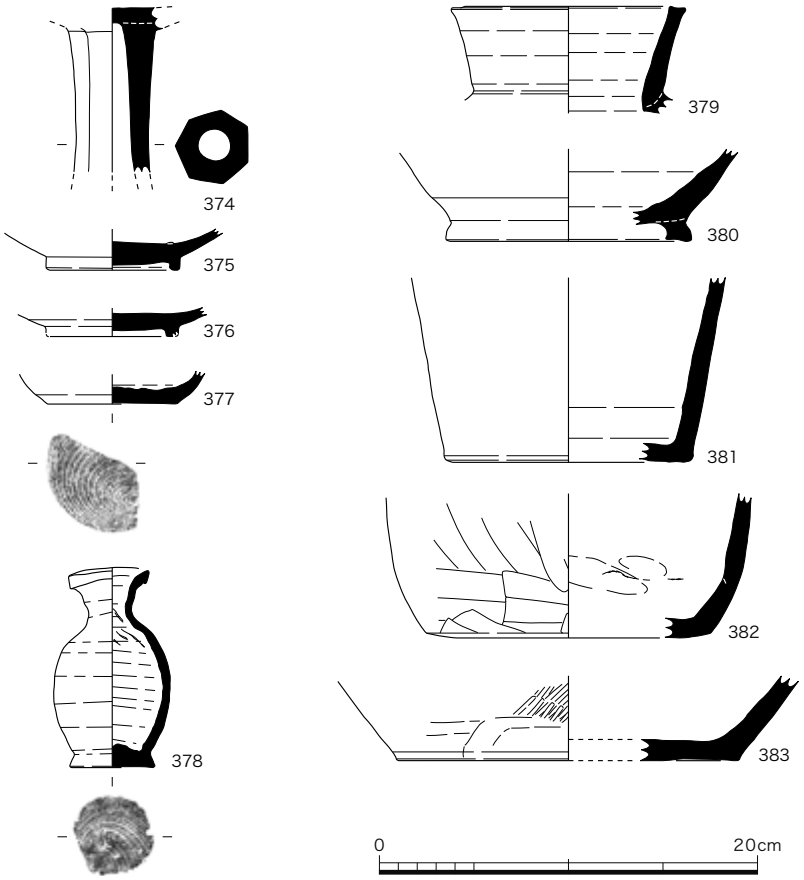
F-F´
1　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
　＋明褐色〈7.5YR5/6〉　40%　炭少量
2　黄褐色砂泥〈10YR5/6〉
　＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉　10%　炭少量
3　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
4　黄褐色砂泥〈10YR5/6〉
　＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉　10%
5　明褐色砂泥〈7.5YR5/6〉
　＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉　10%

G-G´
1　褐色泥砂〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉
　＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉　20%
3　にぶい黄橙色泥砂〈10YR6/4〉
　＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉　10%
4　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
5　暗褐色〈10YR3/3〉
　＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉　20%
6　にぶい黄橙色〈10YR6/3〉
　＋にぶい黄橙色〈10YR6/4〉10%
7　にぶい黄橙色砂泥〈10YR6/4〉
　＋にぶい黄橙色〈10YR6/3〉　10%

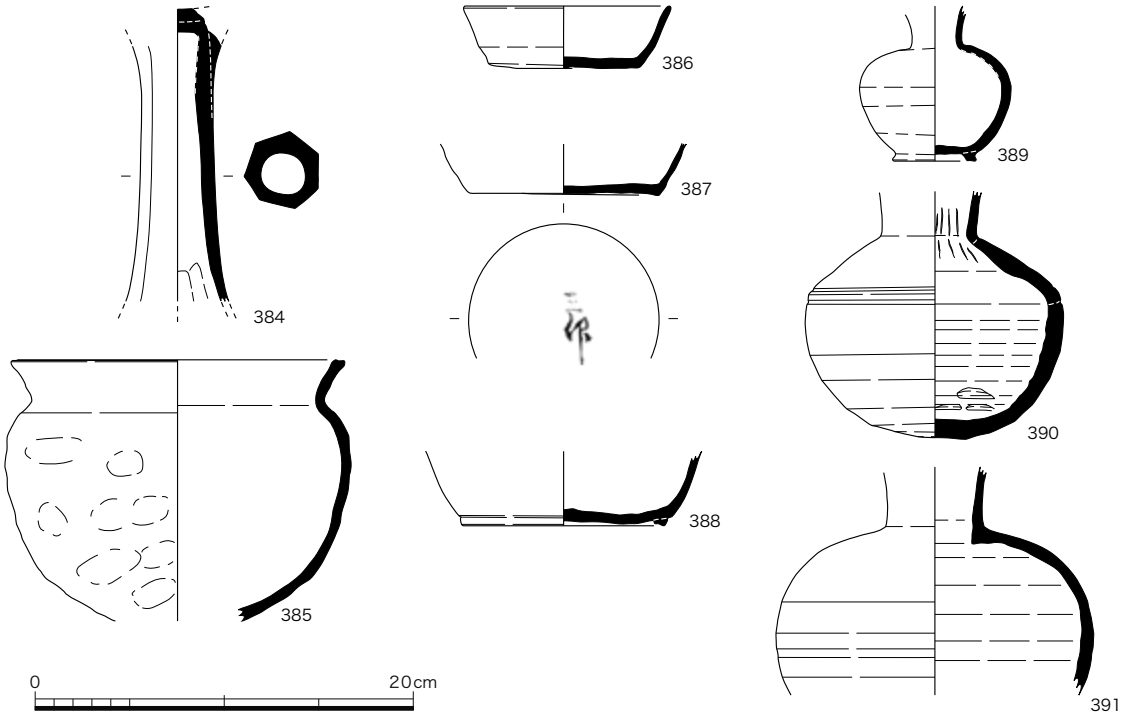
H-H´
1　褐色泥砂〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色泥砂〈10YR4/3〉

I-I´
1　褐色泥砂〈10YR4/4〉
　やや粘質　炭極少量混じり

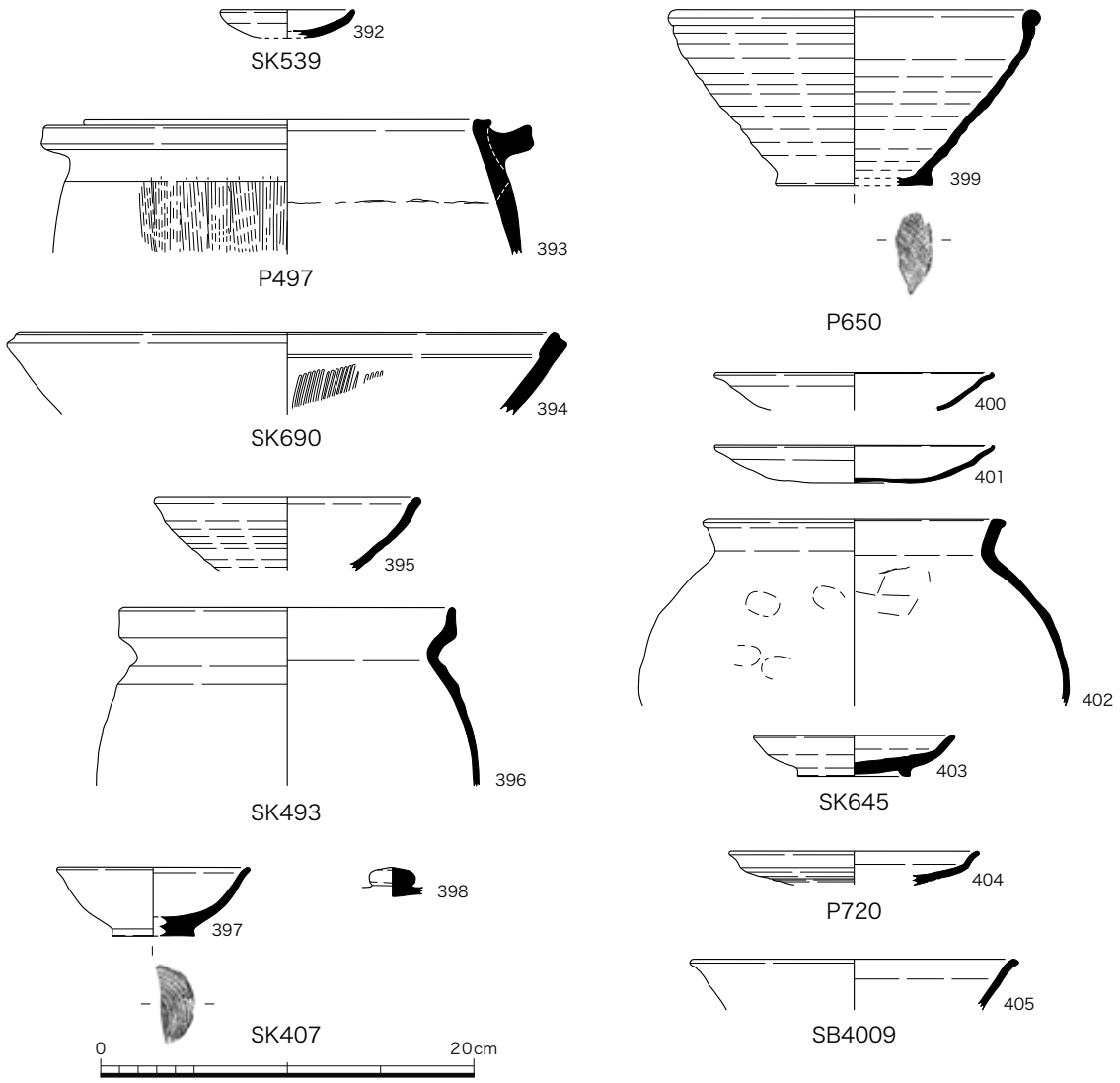
第 100 図　溝 SD653 〜 656 実測図（1/50・1/150）



第101図　井戸SE636上層出土遺物実測図（1/4）



第102図　井戸SE636下層出土遺物実測図（1/4）

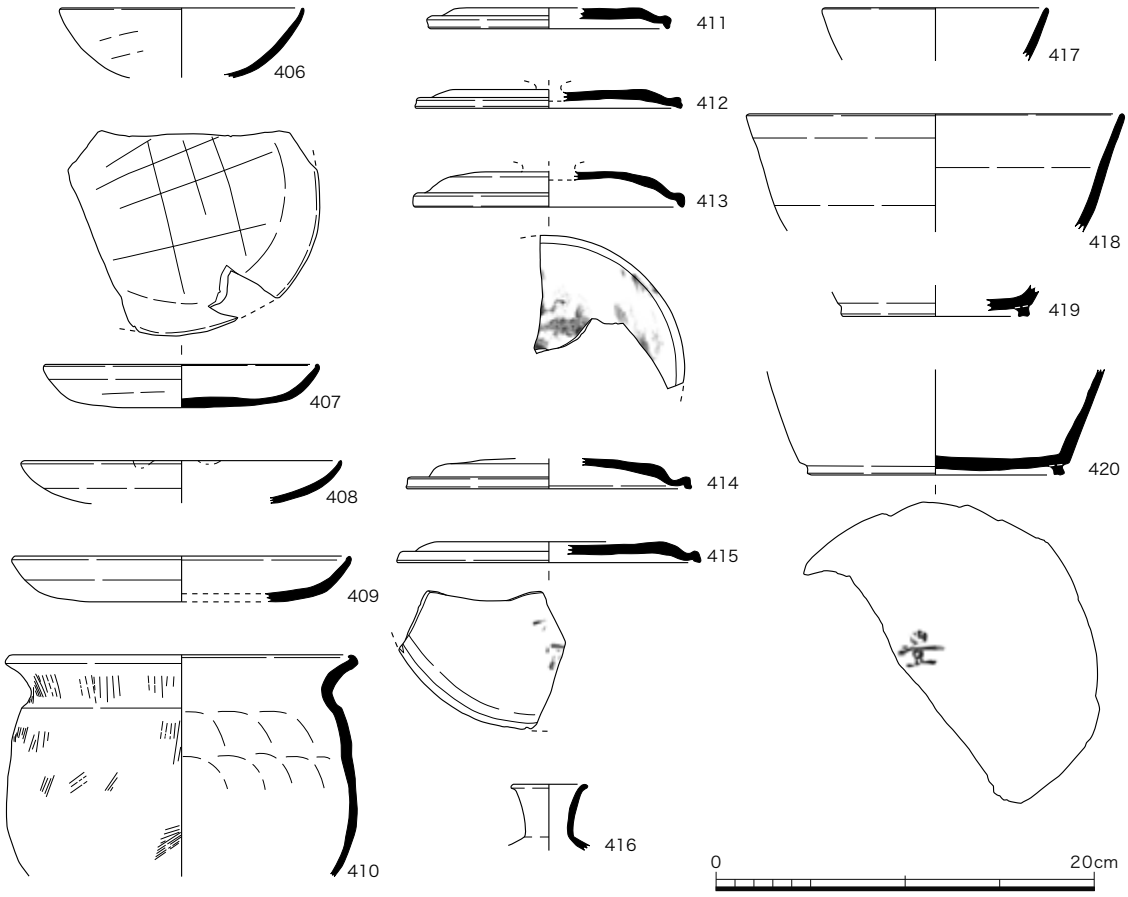


第 103 図　土坑 SK539 他出土遺物実測図（1/4）

井戸 SE636（第 96 図）　調査区中央部のやや西寄りで検出した井戸である。上面での径約４m、深さ約 4.5 mの規模がある大型井戸で、底部付近では約３m四方の方形を呈していた。井戸側は、すべて抜き取られて遺存していなかった。井戸の埋土は、第１～41 層までが上層、第 42 ～ 44 層までを下層に大別したが、上層には平安時代前期にあたる９世紀後半代の遺物を含んでいるが、底部付近には長岡京期と推察される遺物が多量に埋没していた。したがって、この井戸は、長岡京期に井戸としての機能を有していたが、平安時代の前期に埋没して廃棄されたものとみて大きな間違いはないものと推察できる。

土坑 SK493（第 97 図）　楕円形を呈する小土坑で、長径 1.05 m、短径約 0.9 m、深さは 0.55 m程度の規模がある。埋土は、炭化物や焼土を含むにぶい黄褐色土、褐色土の上下２層に分けられ、焼成を受けた礫や土師器の甕片などが出土している。

土坑 SK645（第 98 図）　トレンチ南東部で検出した不整形な小土坑で、北西部は掘立柱建物 SB4001 の柱掘形によって破壊されていた。長径約 0.9 m、短径約 0.7 m、深さは 0.2 mほどの



第 104 図　土坑 SK819 出土遺物実測図（1/4）

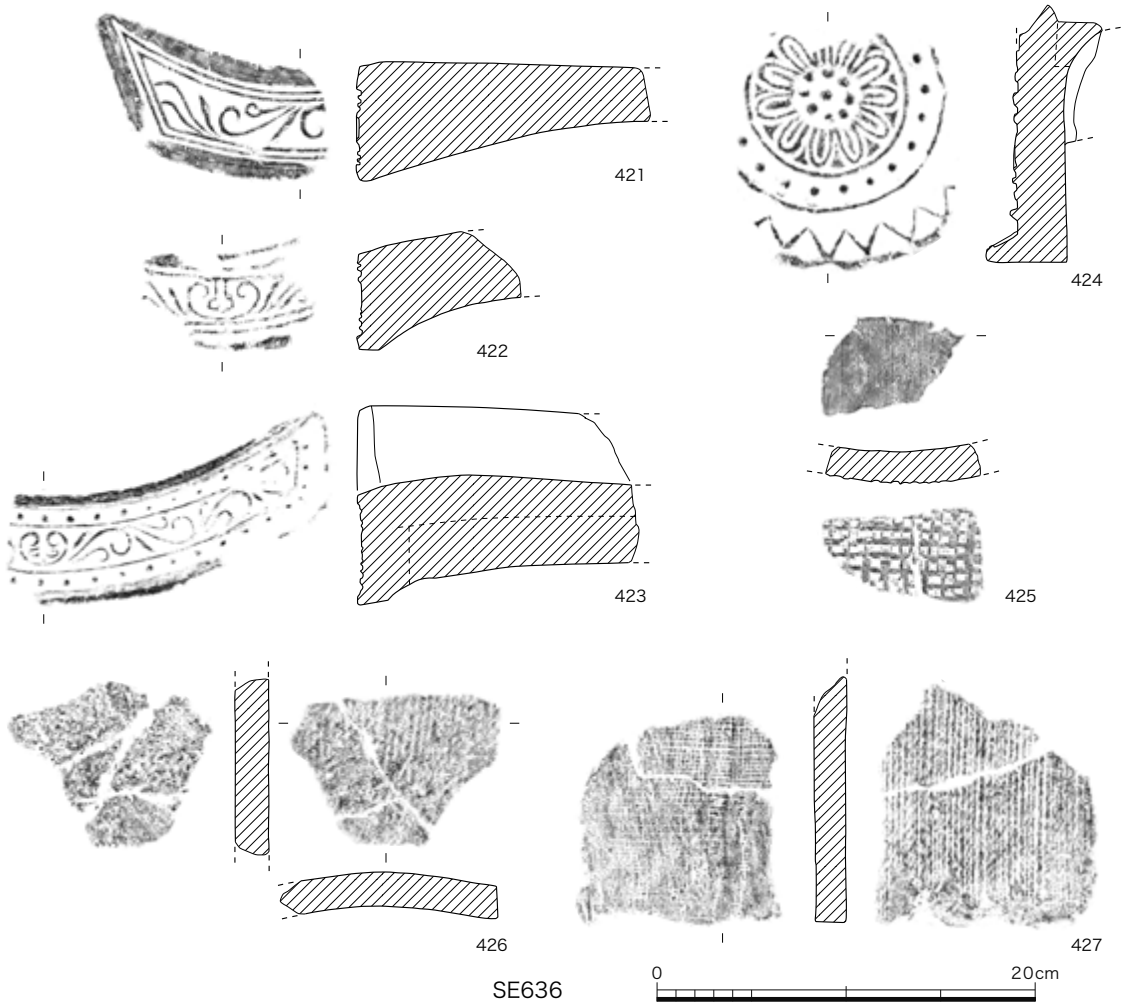
規模があり、埋土はにぶい黄褐色泥砂と炭化物を含む灰黄褐色泥砂に分けられた。土坑内からは、土師器や須恵器などの遺物が出土している。廃棄土坑であろう。

土坑 SK819（第 99 図）　溝 SD404 のすぐ西側で検出した不整形な土坑である。東西約 1.2 m、南北約 1.8 m、深さは 0.14 m程度の規模がある。埋土は、にぶい黄褐色泥砂とにぶい黄橙色砂泥を混えた土層で、多量の礫とともに土師器や須恵器などの遺物が埋没していたことから、廃棄土坑であると考えられる。

C．時期不明の遺構

溝 SD654（第 100 図）　トレンチ南東部で検出した北東から南西に向かって断続的に延びる素掘りの溝である。溝幅は、0.6 ～ 1.7 m前後、深さ 0.2 ～ 0.4 mほどの規模があり、U字状の断面形を呈する。出土した遺物がほとんどないため、明確な時期を決めかねる。

溝 SD656（第 100 図）　溝 SD654 の東約 2 mの地点をそれと平行しながら延びる素掘りの溝である。幅 1.2 ～ 2.1 m、深さは 0.4 ～ 0.5 mの規模で、断面は逆台形、底部には凹凸が認められた。この溝からも、出土した遺物がほとんどないため、時期を決めかねるが、土坑 SK645 によって切られていることからみて、長岡京期～平安時代以前の可能性が高いものと推察される。また、この溝と SD645 の間が通路である可能性も考えられるが、確証はない。



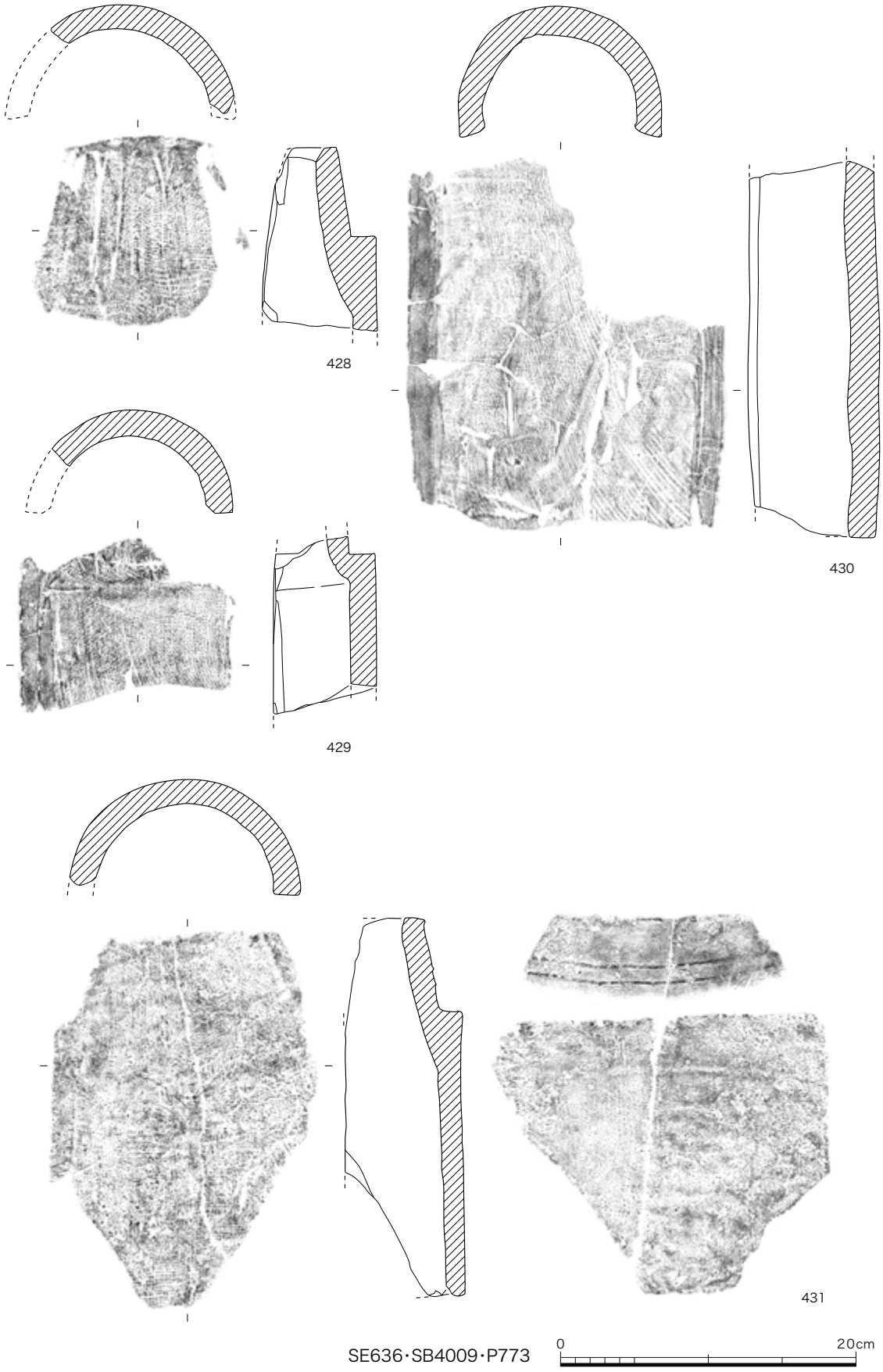
第 105 図　４トレンチ出土瓦実測図－１（1/4）

（２）出土遺物

Ａ．長岡京期～平安時代の遺物

井戸 SE636 出土遺物（第 101・102・105・106 図）　この井戸からは、土師器、須恵器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦など多彩な遺物がまとまって出土している。検出遺構の項でも述べたように、この井戸の埋土は上層と下層に大きく分けることができたが、以下では層位ごとに説明したい。

まず、上層では土師器の高杯、須恵器の椀・瓶子・壺、緑釉陶器の椀、灰釉陶器の杯などが出土している。土師器の高杯（374）は、芯棒に粘土を巻き付けて脚柱状部を成形したもので、ケズリを施して七角形に面取りして仕上げている。須恵器の椀（375）は、内外面をミガキによって調整し、ケズリで輪高台を成形している。硬質に焼成されており、施釉する前の素地と考えられる。瓶子（378）は、口縁部が焼き歪んでいる小型品である。底部は平底で、回転糸切りの痕跡をとどめている。379 は壺の口縁部片、380 ～ 382 は壺の底部片である。380 は底部に高台を貼り付けており、内外面に自然釉の付着が認められる。壺Ｌであろうか。381・382 の底部は平底で、381 の外面に自然釉が付着しており、382 は体部下半をヘラケズリ調整して仕上げて



第106図　4トレンチ出土瓦実測図－2（1/4）

いる。383 は猿投産の平底の甕である。緑釉陶器（376）は、椀または皿の底部片で、削り出しによって輪高台を形成している。硬質に焼成されており、内外面に施された釉薬は、黄緑色を呈している。灰釉陶器（377）の椀は、底部に糸切りの痕跡をとどめている。

次に、下層からは土師器の高杯・甕、須恵器の杯Ａ・杯Ｂ・壺M、墨書土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦などが出土している。土師器の高杯（384）は、粘土紐を巻き上げて脚柱状部を成形したもので、ケズリを施して七角形に面取りしている。甕（385）は、内面と口縁部外面をナデ調整するが、体部外面は未調整である。須恵器の杯Ａ（386・387）は、平底の底部をもつ形態で、387 の底部外面には不鮮明だが「三□」と読める墨書が認められる。389 は須恵器壺M、390 は底部が丸底の壺で、肩部の外面に２条の沈線を巡らし、体部下半には回転ヘラケズリを施す。頸部内面に絞り痕をとどめ、内外面に自然釉の付着が認められる。瓦類には、唐草文軒平瓦（421～423）と蓮華文軒丸瓦（424）の他、平瓦（425･427）、丸瓦（428･429･431）、面戸瓦（426）などがある。421 は、瓦当左半部の破片である。全体に摩滅しているが、凸面は縄タタキ痕、凹面にはケズリと布目痕が残る。直線顎で、6663A 型式に比定できる。422 は、瓦当中心飾り付近の破片で、全体に摩滅している。凹面には、横方向のケズリ痕が認められた。曲顎で、6663C 型式に相当ものと理解できる。423 は、中心飾りから右半部にかけての破片である。外区の文様は珠文、脇区は珠文３、曲顎で、6691A 型式に比定することができる。424 は、瓦当面の約 1/3 ほどが残る破片である。子葉のある単弁 11 葉で、中房の蓮子数は１＋８である。内縁の珠文は 11 個以上、外縁には凸線鋸歯文を巡らせる。6134 C型式と考えられる。425 は、凸面に格子のタタキ痕、凹面はケズリを施しているようである。胎土は精良で、淡い灰褐色を呈する。427 は縄目のタタキ痕をとどめる。428・429・431 は、いずれも玉縁をもつ丸瓦の破片で、428 は土師質に焼成されている。429 は、凸面を横方向にケズリ、凹面には布目痕が明瞭に残る。側面は、ケズリをほどこして面取りする。431 は軟質に焼成され、凸面はケズリ、凹面には布目痕をとどめる。玉縁には、２条の凸線が施されている。面戸瓦（426）は、凸面に縄タタキ、凹面に布目痕をとどめており、土師質に焼成されている。

上記の遺物は、上層からの出土品については平安京編年の京都Ⅰ期新～Ⅱ期古段階に、また下層出土品については長岡京期に相当するものと推察される。

土坑 SK539 出土遺物（第 103 図）　土師器皿Ｃ（392）は、口径 7.2cm の小皿で、内面と口縁部外面のみをナデ調整するｅ手法で作られている。

掘立柱建物 SB4009 出土遺物（第 103・106 図）　405 は、柱掘形 P775 から出土した緑釉陶器である。椀の口縁部ではないかと考えられる破片で、硬質に焼成され、淡い黄緑色の釉薬を塗布している。平安時代前期のものであろう。430 は、柱掘形 P773 から出土した丸瓦である。現存長 25.5cm、幅は 13.7cm を測り、凸面は横方向にケズリを施し、凹面には布目痕跡をとどめている。茶褐色を呈しており、火を受けた可能性がある。

土坑 SK645 出土遺物（第 103 図）　この土坑からは、土師器や緑釉陶器などが少量出土している。400・401 は、口縁端部を屈曲させた形態の土師器皿で、口径 15cm 前後、器高 2cm ほ

どあり、内面と口縁部外面をヨコナデし、他を調整しないｅ手法で仕上げている。402は土師器の甕で、く字状に屈曲する口縁部の端部を外側に肥厚させている。全体に摩滅が進んでいるため、調整手法は不明であるが、ナデであろうか。緑釉陶器の皿（403）は、稜のつく小型品で、高台は削り出しによる輪高台。

これらの遺物は、平安時代前期にあたる９世紀の前半に相当するものと考えられる

土坑SK493出土遺物（第103図）　須恵器の鉢（395）は、体部外面を強くナデ調整することによってロクロ目が明瞭に残り、軟質に焼成されている。土師器の甕（396）は、受け口状の口縁部をもつ形態で、全体に摩滅を受けているため、明確な調整手法は不詳である。

土坑SK407出土遺物（第103図）　土坑SK407は、溝SD403と溝SD404の間にある東西約0.9 m、南北約1.3 mの小土坑である。397は、口径10.3cm、器高3.7cmほどの小型の椀で、平底の底部には静止糸切りの痕跡をとどめている。形態的にこの椀は、釉薬を施す以前の素地であろう。398は、須恵器杯Ｂ蓋のつまみ片である。

小穴P497・650・720出土遺物（第103図）　P497は掘立柱建物SB4001の北から１間目の内部で検出した小穴で、土師器羽釜（393）が出土している。口縁端部の直下に短く突出させた鍔を貼り付けた形態で、体部外面には縦方向のハケメが施されている。内外面には、煤の付着が認められることから、煮炊具として使用されたことが知られる。P650は、溝SD642のすぐ北側で検出した小穴で、須恵器の鉢（399）が出土した。内外面を強くナデ調整することによってロクロ目が明瞭に残り、口縁端部は丸く肥厚させている。平底の底部外面に糸切りの痕跡、口縁部外面には重ね焼きの痕跡をとどめる。軟質に焼成されている。P720は、溝SD405の北側にある小穴で、緑釉陶器の皿（404）が出土した。底部を欠損するが、稜を有する形態で、口径13.3cmに復元できる。硬質に焼成され、口縁部外面に黄緑色をした釉薬の痕跡をわずかにとどめていた。

土坑SK819出土遺物（第104図）　土師器、須恵器、墨書土器などの遺物がまとまって出土している。

土師器には、椀Ａ・皿Ａ・甕Ａなどがある。椀Ａと皿Ａは、いずれも口縁端部までヘラケズリするｃ手法で調整しているようである。407には、内面に格子状の線刻が施されている。408の口縁端部に油煙の痕跡が認められるので、灯火器として利用されたものと考えられる。甕Ａ（410）は、口径が18.6cmに復元できるもので、口縁端部を内側に折り曲げて肥厚させる。外面に縦方向のハケメ痕、内面には当て具の痕跡をとどめている。

須恵器には、杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺Ｍなどがある。杯Ｂ蓋は、いずれもつまみを欠損しているが、口縁端部が屈曲する形態で、413の内面には赤色顔料の付着が認められることから、硯に転用された可能性が考えられる。また、415の内面には、字体不明の墨書が残っている。杯Ｂは、口径12cmと小型品（417）と20cmの大型品（418）がある。420は高台径13.6cmもある大型品で、底部外面には「豊」の墨書が認められる。壺Ｍ（416）は、口縁部の破片で、端部を丸く納めている。これらの遺物は、おおむね長岡京期に比定することができる。

5　5トレンチ

5トレンチは、校舎建設予定の北西部分にあたる。調査開始時は大阪成蹊大学のテニスコートとして使用されていた。その後学園祭の終了を待って、トレンチの設定を行っている。なおトレンチの東辺は試掘１トレンチに重なっており、またトレンチ北西隅は1986年に行った大阪成蹊大学以前の成安短期大学移転時の右京第217次調査トレンチと一部重なっている[26]。調査は南北25 m、東西30 mでトレンチを設定し、その後遺構の検出に伴って西側と南側で拡張を行っている。トレンチ中心の国土座標は、X＝−120,745、Y＝−27,555である。

5トレンチ周辺では大学移転時と以前の工場建設時の盛土が1.8～2.6 mの厚さで堆積しており、その下に旧耕作土である灰黄褐色砂泥と床土の黄灰色砂泥が約0.15～0.2cmの厚さで堆積している。この下の面で近世と平安時代の遺構（上層）が検出された。さらにその下には土師器片などを含んだにぶい黄褐色砂泥が0.2 mの厚さで堆積しており、これらを除去すると長岡京期～平安時代の遺構群が検出される（下層第１面）。これらの遺構には切り合いが認められる。またトレンチ中央～東部には灰褐色砂泥が薄く堆積していて、これらを除去した段階（下層第２面）で小穴や落ち込み、溝などが検出された（第107図）。

（１）検出遺構

A．江戸時代の遺構

上層遺構として図示したうちの大半がこの時期に含まれる。溝、土坑、井戸、小穴などがあり、そのうち溝群は調査地の東部と南部に、小穴などは北西部に集中している。

第107図　5トレンチ下層第２面全景（南東から）

溝 SD1059　調査地東部で検出された南北方向の溝である。幅 0.3 ～ 0.7 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mで、北から約 5 mで一度途切れたのち再び南に延びている。約 17 mにわたって検出された。ちょうどこの部分で水田面が一段下がっており、畔に並行して掘られた溝とみられる。

溝 SD1039・1075　調査地南西隅で検出された南北方向の溝で、水田の畦に平行して掘られた溝である。この溝を境にして遺構面は全体に東側は約 0.4m 低くなっている。溝 SD1039 は幅 0.8 ～ 1.0 m、深さ 0.3 mで北側に向かって浅くなり、 5 m 分が検出された。溝 SD1075 は溝 SD1039 に切られており、幅 0.5 ～ 1.0 m以上、深さは 0.2 mである。

溝 SD1290・1292　調査地南西拡張区で検出された東西方向の平行する溝である。こちらも水田の境に掘られた溝で、ここを境に南に 0.2 ～ 0.3 m低くなっている。方位は東で北に振れており、北側の溝 SD1290 は幅 0.6 ～ 1.2 m、深さ 0.3 m、南側の溝 SD1292 は幅 0.6 ～ 0.8 m、深さ 0.4m で、西側で途切れている。溝 SD1290 からは焼締陶器、施釉陶器などが、溝 SD1292 からは染付磁器、陶器、土師器の細片などが出土している。なお両溝の検出場所は長岡京の八条条間小路北側溝推定位置にあたるため、両溝の検出時より慎重に調査を行ったが周辺ではその痕跡は確認できなかった。

土坑 SK1288・1289（第 120 図）　調査地南西拡張区で検出された平面方形の浅い土坑で、土坑 SK1288 が土坑 SK1289 を切っているが、同規模・同形態であり、一連の遺構とみられる。土坑 SK1288 は東西 2.5m、南北 2.3m、深さ 0.25m、土坑 SK1289 は東西 2.6 m、南北 2.3m、深さ 0.15 mである。遺構の性格は不明であるが、土師器片、須恵器片、近世瓦片などが少量出土している。

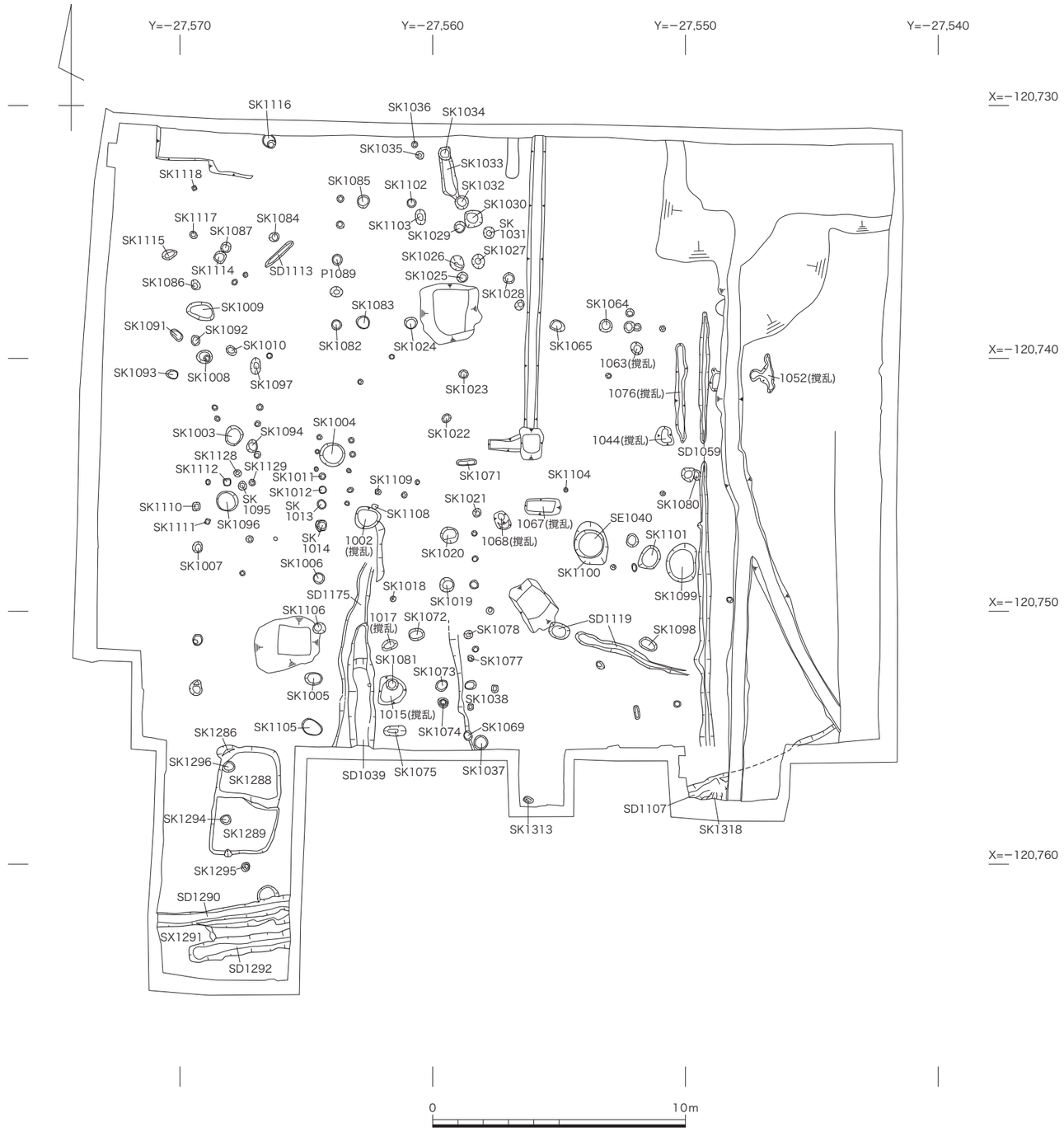
井戸 SE1040　調査地中央南東寄りで検出された平面円形井戸である。調査地内の他のトレンチでは多数の円形井戸や水溜が検出されているが、5 トレンチでは数は少なく、これが唯一の井戸である。直径 1.2m で、深さ 1.5m まで掘り下げを行っている。埋土内からは土師器片、瓦の小片などが出土している。

B．長岡京期～平安時代の遺構

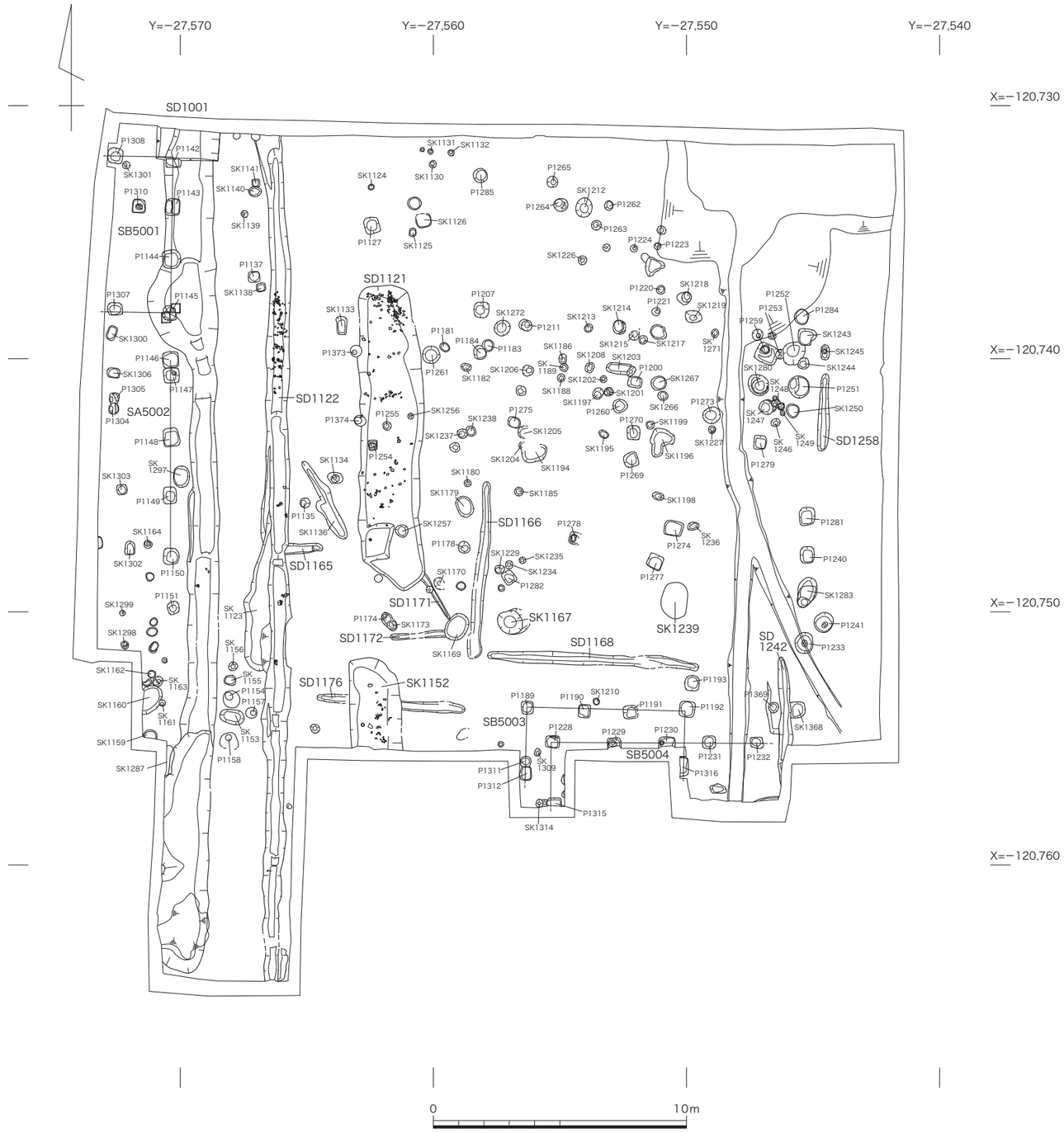
溝 SD1119　調査地南東部で検出された西北西～東南東方向に延びる溝である。幅 0.3 ～ 0.5m、深さ 0.2 mで、西側では部分的に途切れ、東側で浅くなって終わる。灰釉陶器の椀や緑釉陶器の椀、土師器、須恵器片などが出土しており、平安時代の遺構である。

小穴 P5　調査地東辺部にあたる試掘 1 トレンチで確認されていた小穴である。柱掘形は直径 0.5 mの円形で、内部には直径 0.2m の柱痕がある。柱痕からは頂部につまみを持たない須恵器杯蓋が出土している。周囲には建物としてセットとなるような柱掘形は確認できなかった。おそらく他にも同時期の小穴が存在するとおもわれるが、遺物のないものが多く、また土師器・須恵器の小片のみでは、時期の決定は困難である。

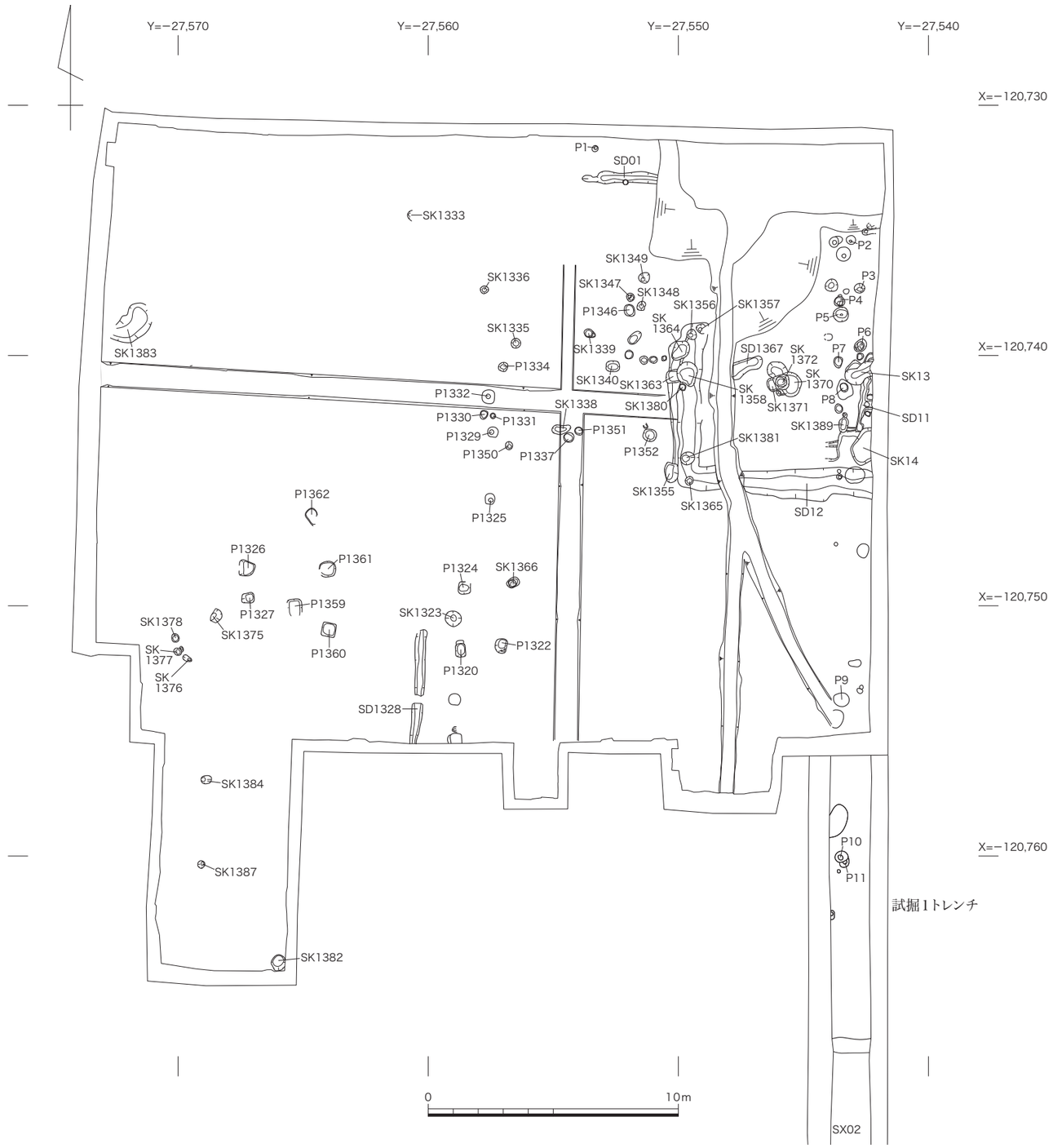
掘立柱建物 SB5001（第 112 図）　調査地北西部で検出された南北棟建物で、南北 3 間、東西 2 間と見られる。柱掘形は一辺 0.5 ～ 0.7 mの隅円方形で、深さは 0.3 ～ 0.5 mである。掘形内部には直径 0.2 mの柱痕があり、柱間は南北が北から 1.8m、2.0m、2.3 mと不揃いで、東西は 2.1



第 108 図　5 トレンチ上層検出遺構図（1/200）

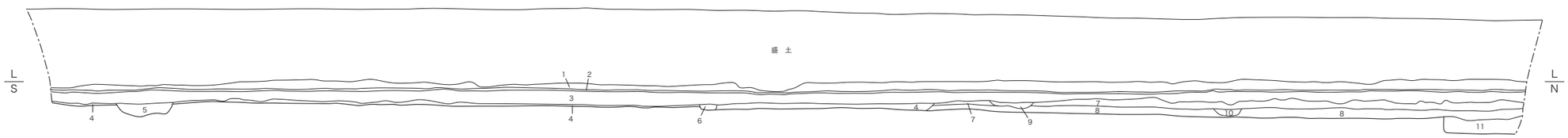


第 109 図　5 トレンチ下層第 1 面検出遺構図（1/200）



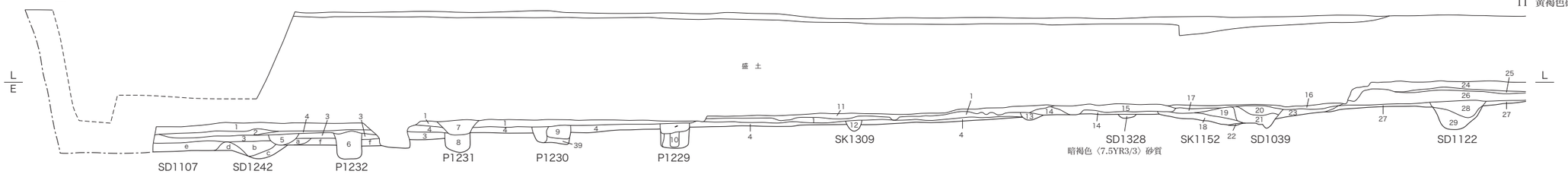
第 110 図　5 トレンチ下層第 2 面検出遺構図（1/200）

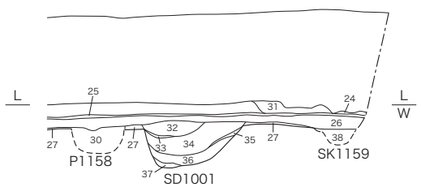
西　壁



西壁
1　灰黄褐色砂泥〈10YR5/2〉
2　黄灰色砂泥〈2.5Y5/1〉
3　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/3〉
　土師片少量含む
4　にぶい褐色砂泥〈7.5YR5/3〉
5　褐色砂泥〈7.5YR4/3〉
6　褐色砂泥〈10YR4/4〉
7　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉
8　にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉
9　灰褐色砂泥〈7.5YR4/2〉
　+明黄褐色砂泥〈10YR6/6〉10%
10　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉
11　黄褐色砂泥〈10YR5/6〉

南　壁

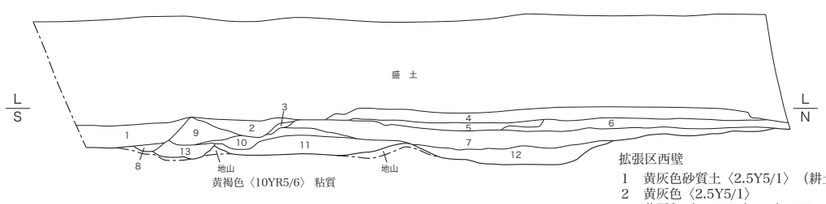




南壁
1　灰黄褐色砂泥〈10YR4/2〉土師片、炭少量含む
2　にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉
3　褐色砂泥〈7.5YR4/3〉
4　灰褐色砂泥〈7.5Y4/2〉
5　暗褐色砂泥〈10YR3/3〉
6　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉
7　黄褐色砂泥〈2.5Y5/3〉
8　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉
9　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉
10　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉
11　暗オリーブ灰色砂泥〈2.5GY4/1〉
12　暗褐色砂泥〈10YR3/3〉
13　褐色砂泥〈10YR4/4〉
14　にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉
15　黄褐色砂泥〈2.5Y5/3〉
16　灰オリーブ色砂泥〈5Y5/2〉
17　暗灰黄色砂泥〈2.5Y4/2〉炭少量含む
18　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉土師片、炭少量含む
19　灰褐色砂泥〈7.5YR4/2〉
20　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/3〉土師片、炭少量含む
21　にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉土師片、炭少量含む
22　灰黄褐色砂泥〈10YR5/2〉
23　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/3〉
24　灰黄褐色砂泥〈10YR5/2〉
25　黄灰色砂泥〈2.5Y5/1〉
26　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/3〉
27　にぶい褐色砂泥〈7.5YR5/3〉
28　にぶい褐色砂泥〈7.5YR5/3〉
　+橙色砂泥〈7.5YR7/6〉10%　土師片少量含む
29　褐色砂泥〈7.5YR4/3〉
　+橙色砂泥〈7.5YR7/6〉5%　炭少量含む
30　暗灰黄色砂泥〈2.5Y5/2〉
31　黄灰色砂泥〈2.5Y4/1〉
32　褐色砂泥〈10YR4/6〉
33　灰オリーブ色粘土〈5Y6/2〉+　砂泥〈10YR4/6〉10%
34　暗褐色砂泥〈10YR3/4〉φ1～20cm礫多量に含む
35　にぶい黄褐色砂泥〈2.5Y5/4〉
36　にぶい黄褐色砂泥〈10YR4/3〉土師片、炭少量含む
37　褐色砂泥〈10YR4/6〉
38　灰黄褐色砂泥〈10YR5/2〉
39　褐色〈7.5YR4/4〉

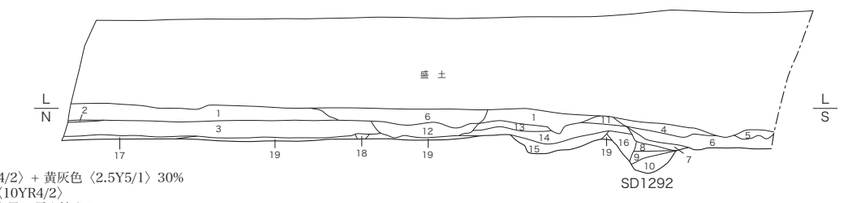
a　褐色〈7.5YR4/4〉0.5～3cm礫多く含む
b　暗褐色〈7.5YR3/4〉やや粘質
c　褐色〈7.5YR4/3〉やや粘質
d　褐色〈7.5YR4/4〉0.5～3cm礫混じりやや粘質
e　褐色〈7.5YR4/3〉やや粘質
f　明褐色〈7.5YR5/6〉粘質

拡張区西壁



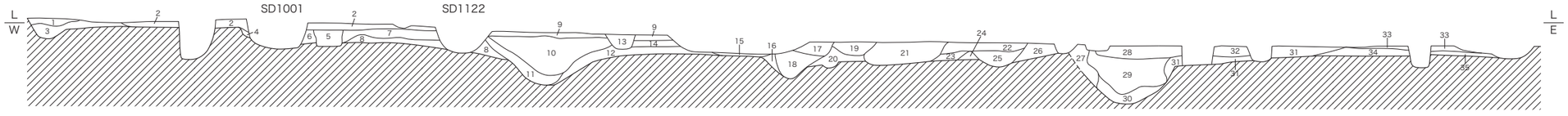
拡張区西壁
1　黄灰色砂質土〈2.5Y5/1〉（耕土）
2　黄灰色〈2.5Y5/1〉
3　黄灰色〈2.5Y5/1〉+〈7.5YR4/4〉10%
4　黄灰色砂泥〈2.5Y5/1〉南壁25と同一
5　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉やや粘質
6　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/3〉南壁26と同一
7　暗褐色〈10YR3/3〉
8　灰黄褐色〈10YR4/2〉+ 黄灰色〈2.5Y5/1〉30%
9　灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉
　+ φ1～10cm礫多量、硬く締まる
10　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉
11　暗褐色〈10YR3/4〉やや粘質
12　暗褐色〈10YR3/4〉+〈7.5YR4/4〉5%
13　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉やや粘質

拡張区東壁



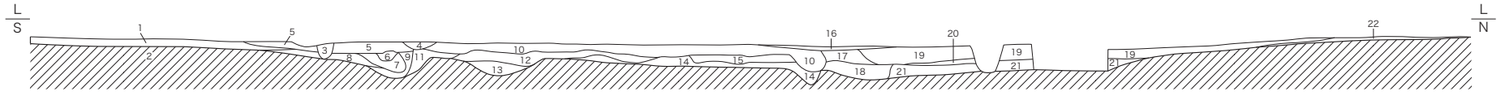
拡張区東壁
1　灰黄褐色砂泥〈10YR5/2〉南壁24と同一
2　黄灰色砂泥〈2.5Y5/1〉南壁25と同一
3　にぶい黄褐色砂泥〈10YR5/3〉南壁26と同一
4　灰色砂質土〈5Y4/1〉（旧耕土）
5　4と同一
6　灰色砂質土〈5Y5/1〉（旧耕土）
7　灰黄褐色〈10YR5/2〉砂質　φ1～5cm礫混じり
8　にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉
9　褐色〈7.5YR4/4〉粘質土
10　にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉
　+褐色粘質土〈7.5YR4/4〉　5%
11　灰黄褐色砂質土〈10YR5/2〉φ1～3cm礫含む
12　灰黄褐色砂質土〈10YR5/2〉
13　灰黄褐色砂質土〈10YR5/2〉φ1～3cm礫含む
14　灰黄褐色砂質土〈10YR5/2〉
15　にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉（SD1290）
16　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉
17　にぶい褐色砂泥〈7.5YR5/3〉南壁27と同一
18　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉やや砂質
19　黄褐色粘質土〈10YR5/6〉（地山）

中央東西断割断面図



1　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉
2　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉
3　にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉
4　黄褐色粘質土〈10YR5/6〉
5　暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉
6　褐色粘質土〈10YR4/4〉
7　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉
8　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉φ1～3cm礫多く含む
9　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉φ1～５cm礫混じり
10　黒褐色粘質土〈7.5YR3/2〉
11　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉
12　褐色粘質土〈10YR4/4〉
13　黒褐色〈7.5YR3/2〉やや砂質
14　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉
15　褐色粘質土〈7.5YR4/3〉φ1～5cm礫混じり
16　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉
17　褐色〈7.5YR4/4〉+暗褐色〈7.5YR3/3〉
18　暗褐色〈10YR3/4〉φ1～3cm礫混じり
19　褐色〈7.5YR4/3〉φ1～3cm礫混じり
20　褐色〈7.5YR4/4〉
21　暗褐色〈10YR3/4〉
22　暗褐色〈10YR3/4〉やや砂質
23　暗褐色〈10YR3/3〉
24　明褐色〈7.5YR5/6〉
25　暗褐色〈10YR3/3〉
26　褐色〈10YR4/6〉φ1～5cm礫混じり
27　褐色〈10YR4/6〉
28　暗褐色〈10YR3/3〉
29　暗褐色〈7.5YR3/3〉
30　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉
31　褐色粘質土〈10YR4/6〉
32　暗褐色〈7.5YR3/4〉やや砂質　φ1～3cm礫混じり
33　暗褐色粘質土〈7.5YR3/4〉φ0.5～1cm礫混じり　硬く締まる
34　にぶい赤褐色粘質土〈5YR4/4〉
35　にぶい赤褐色〈5YR4/4〉非常に硬い

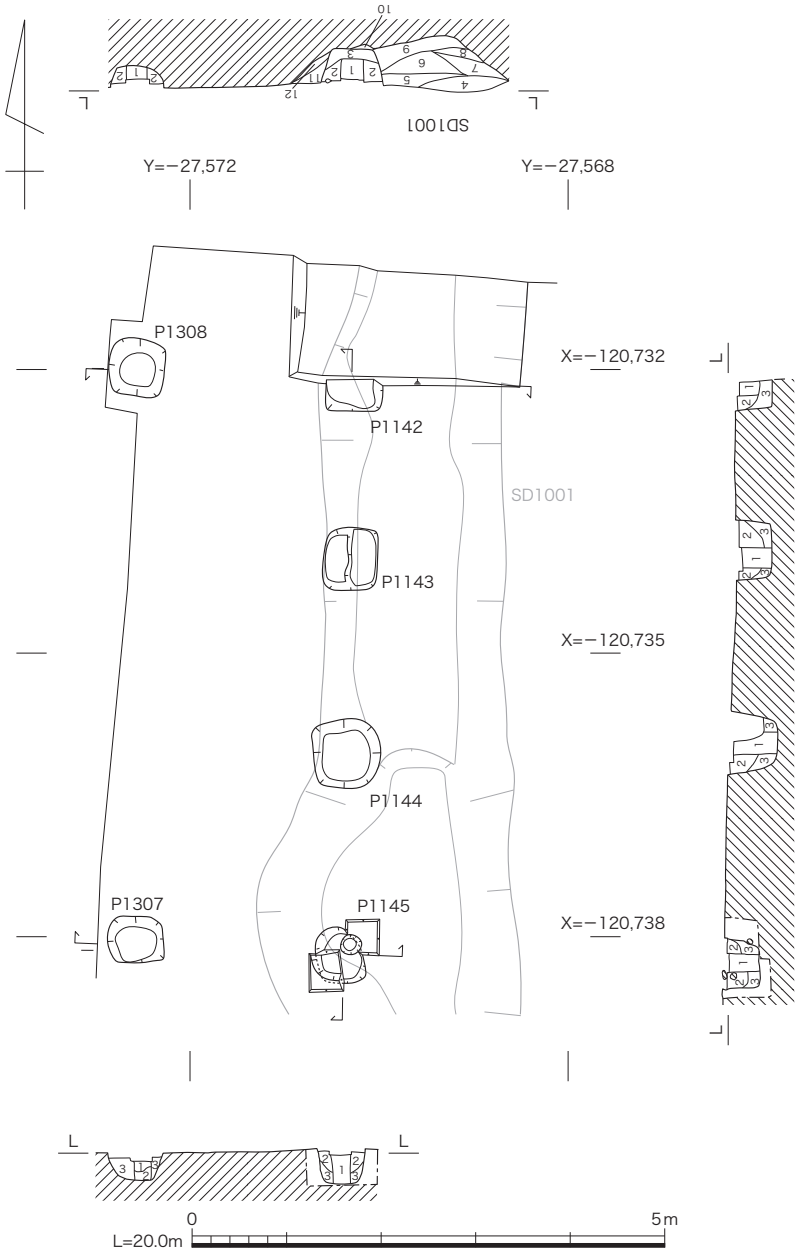
中央南北断割断面図



1　暗褐色粘質土〈10YR3/4〉
2　褐色粘質土〈10YR4/6〉
3　暗褐色〈10YR3/4〉
4　褐色〈10YR4/4〉
5　暗褐色粘質土〈10YR3/3〉非常に硬い
6　暗褐色〈10YR3/4〉
7　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
8　褐色〈10YR4/4〉
9　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
10　暗褐色〈10YR3/3〉硬く締まる
11　褐色〈10YR4/4〉
12　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
13　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉
14　褐色〈7.5YR4/4〉
15　暗褐色〈7.5YR3/3〉
16　暗褐色〈7.5YR3/3〉硬く締まる
17　褐色〈7.5YR4/4〉+ 暗褐色〈7.5YR3/3〉
18　暗褐色〈10YR3/4〉φ1～3cm礫混じり
19　褐色〈7.5YR4/3〉φ1～3cm礫混じり
20　褐色〈10YR4/4〉φ1～3cm礫混じり
21　暗褐色〈10YR3/4〉
22　黒褐色粘質土〈7.5YR3/2〉φ1～3cm礫多く含む

L=20.5m　0　5m

第 111 図　5トレンチ土層図（1/80）



P1142
1　褐色〈7.5YR4/3〉
2　暗褐色〈10YR3/3〉＋にぶい赤褐色〈2.5YR5/4〉20%
3　黒褐色砂泥〈10YR3/2〉＋褐色〈10YR4/6〉10%
4　暗褐色〈10YR3/3〉炭　遺物 多く含む
5　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
6　褐色〈10YR4/4〉＋褐色〈10YR4/6〉30%
7　褐色砂泥〈10YR4/6〉＋にぶい黄褐色〈10YR4/3〉30%
8　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
9　暗褐色〈10YR3/3〉
10　黒褐色〈10YR3/2〉
11　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
12　褐色〈10YR4/4〉

P1142
SD1001

P1143
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　暗褐色〈10YR3/3〉＋明黄褐色〈10YR6/6〉10%
3　暗褐色〈10YR3/4〉＋明黄褐色〈10YR6/6〉20%

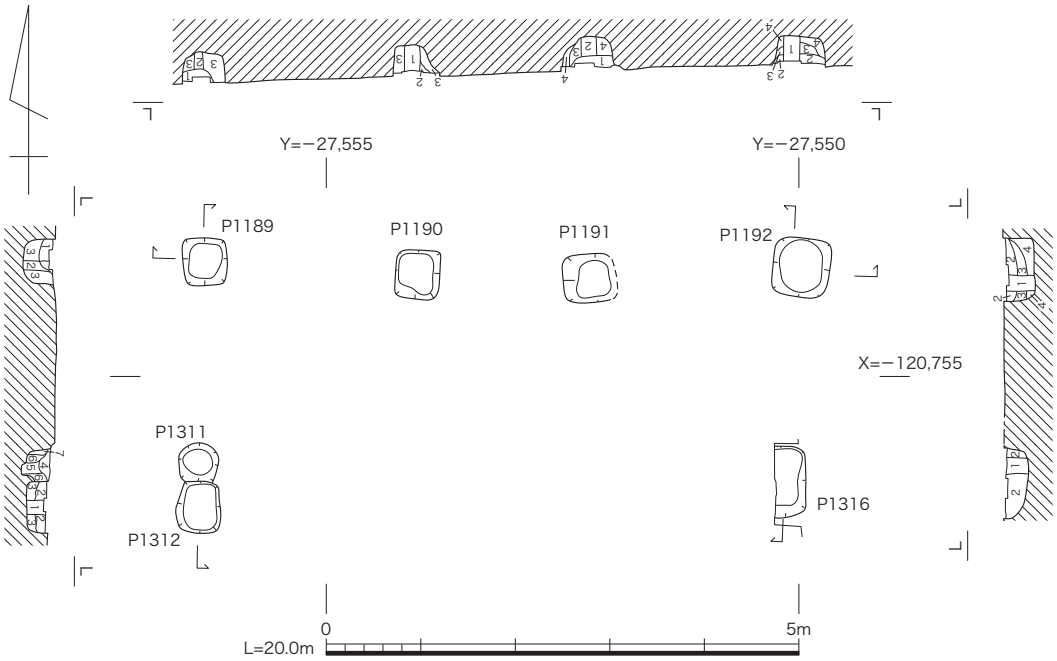
P1144
1　暗褐色〈10YR3/4〉
2　暗褐色〈10YR3/3〉＋明黄褐色〈10YR6/6〉40%
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋明黄褐色〈10YR6/6〉20%

P1145
1　褐色〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋明黄褐色〈10YR6/6〉20%
3　暗褐色〈10YR3/4〉＋明黄褐色〈10YR6/6〉　10%

P1307
1　褐色〈10YR4/4〉
2　褐色〈10YR4/6〉φ1~3cm礫
3　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉

P1308
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉＋褐色〈10YR4/6〉20%

第 112 図　掘立柱建物 SB5001 実測図（1/80）



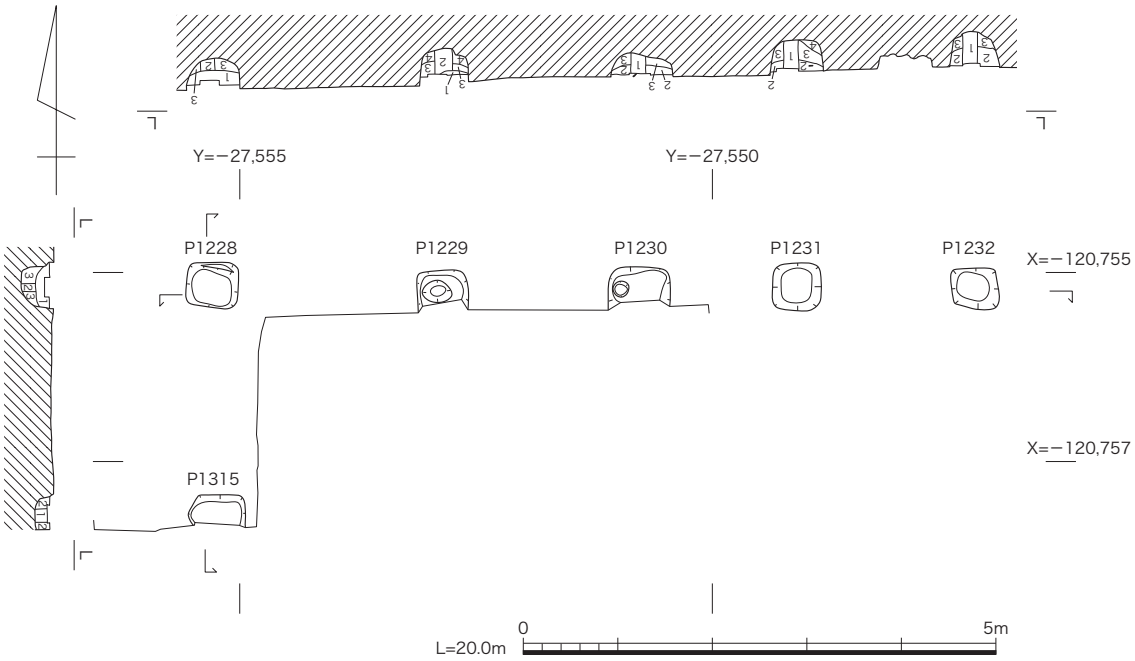
P1189
1　暗褐色〈10YR3/4〉炭小量
2　暗褐色〈10YR3/3〉
3　褐色粘質土〈10YR4/6〉
P1190
1　暗褐色〈10YR3/4〉+ 暗褐色〈10YR3/3〉10%
2　暗褐色〈10YR3/4〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉20%
3　暗褐色〈10YR3/3〉
P1191
1　暗褐色〈10YR3/4〉炭・土師器小片 やや粘質
2　褐色〈10YR4/6〉+ 暗褐色〈10YR3/4〉30% やや粘質
3　褐色〈10YR4/6〉+ 暗褐色〈10YR3/4〉10% やや粘質
4　褐色粘質土〈10YR4/4〉
P1192
1　暗褐色〈10YR3/4〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉10%　炭・土師器小片　やや粘質
2　暗褐色〈7.5YR3/3〉やや粘質
3　暗褐色〈7.5YR3/3〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉10%　やや粘質
4　褐色〈7.5YR4/4〉
P1311・P1312
1　褐色〈7.5YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ にぶい褐色〈7.5YR5/4〉20%　P1312
3　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉粘質
4　褐色〈7.5YR4/4〉+ 橙色〈7.5YR6/6〉20%
5　褐色〈7.5YR4/4〉
6　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 橙色〈7.5YR6/6〉10%　P1311
7　橙色〈7.5YR6/6〉+ にぶい褐色〈7.5YR5/4〉10%
P1316
1　暗褐色〈7.5YR3/3〉
2　暗褐色〈7.5YR3/3〉+ 褐色〈7.5YR4/4〉20%

第 113 図　掘立柱建物 SB5003 実測図（1/80）

～ 2.2 mである。この建物の東側柱列は南側にある柵 SA5002 と柱筋を揃えていることから一連の施設と考えられる。ただ掘立柱建物 SB5001 の東側柱列は、長岡京期の区画溝 SD1001 を埋め立てた後に作られていることから、現段階では長岡京期内での前後関係と考えているものである。

掘立柱建物 SB5003（第 113 図）　調査地南部で検出された東西 3 間、南北 2 間と見られる東西棟建物で、南に拡張を行って規模を追求している。柱掘形は一辺 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.3 m の隅円方形で、直径 0.15 mの柱痕が残る。柱間は東西が 2.2m、1.8m、2.2 m、南北が 2.0 ～ 2.1m とかなりばらつきがある。後述する掘立柱建物 SB5004 と重なっており、長岡京期内での前後関係ないしは長岡京期～平安時代初頭の幅で収まるものとおもわれる。

掘立柱建物 SB5004（第 114 図）　同じく調査地南部で検出された東西棟建物で、掘立柱建物 SB5003 とは重なっているが、直接切り合う個所が無いため前後関係は不明である。柱掘形は一辺 0.4 ～ 0.7 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mで、柱痕の直径は 0.1 ～ 0.15 mである。東西方向の柱間は東から 1.9m、1.6m、2.0m、2.5 mと不等間で、南北は 2.4m である。柱掘形内からは明確な時期を決定できる遺物が無いため、上述したごとく長岡京期内での前後関係ないしは長岡京期～平安時代初頭の幅で考えている。

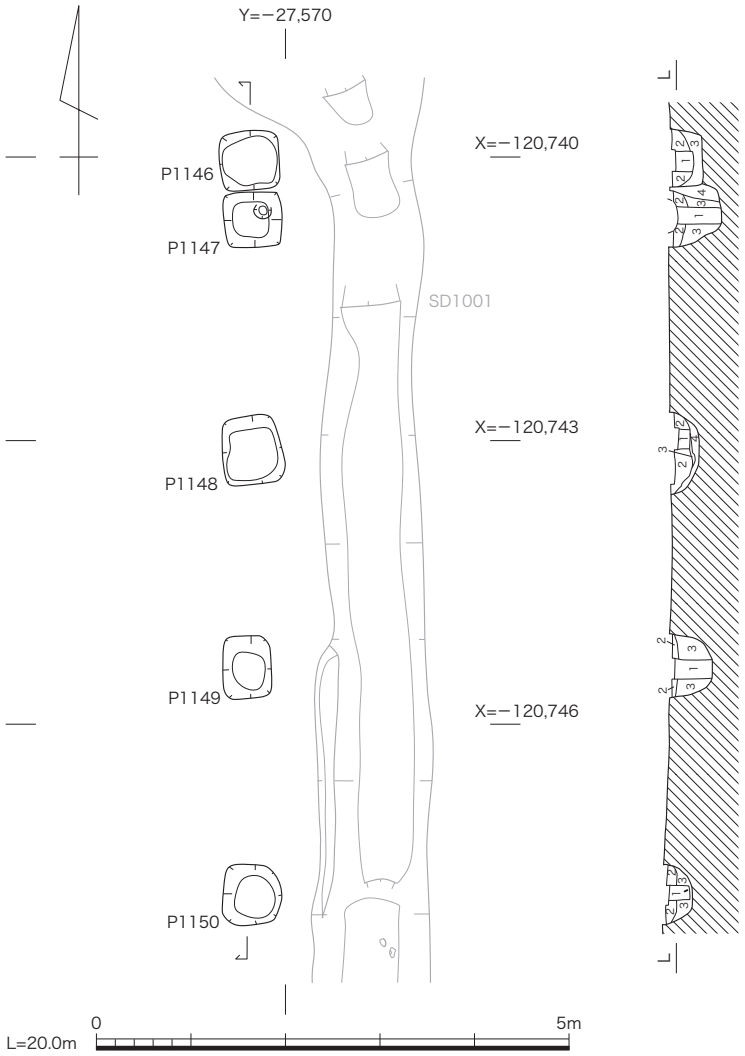


P1228
1　暗褐色〈10YR3/3〉炭混じり
2　褐色〈10YR4/6〉
3　褐色〈10YR4/4〉
P1229
1　暗褐色〈10YR3/4〉＋褐色〈10YR4/6〉40%
2　暗褐色〈10YR3/4〉炭・土師器混じり
3　暗褐色〈10YR3/4〉＋褐色〈10YR4/6〉10%
4　褐色〈10YR4/6〉粘質
P1230
1　暗褐色〈10YR3/4〉須恵器
2　褐色〈7.5YR4/3〉炭混じり
3　褐色〈7.5YR4/4〉
P1231
1　黒褐色〈7.5YR3/2〉炭少量
2　暗褐色〈7.5YR3/3〉炭少量　須恵器
3　暗褐色〈7.5YR3/4〉＋褐色〈7.5YR4/4〉20%
4　褐色〈7.5YR4/4〉
P1232
1　暗褐色〈7.5YR3/3〉＋褐色〈7.5YR4/4〉10%
2　褐色〈7.5YR4/4〉＋暗褐色〈7.5YR3/3〉30%
3　暗褐色〈7.5YR3/3〉＋褐色〈7.5YR4/4〉20%
P1315
1　暗褐色〈10YR3/3〉炭混じり
2　暗褐色〈10YR3/4〉

第 114 図　掘立柱建物 SB5004 実測図（1/80）

柵 SA5002（第 115 図）　調査地西辺部で検出された南北方向の柱列である。掘立柱建物 SB5001 の東側柱列の南側延長部にあるため、柱筋を揃えた南北棟建物の可能性があることから西側にトレンチ拡張を行った。しかし西側で棟持ち柱は検出されなかったことから、南北方向の柵列と判断したものである。柱掘形は平面隅円方形で、一辺 0.5 ～ 0.7 m、深さ 0.3 ～ 0.5 m。柱痕は 0.15 ～ 0.2m で、柱間は 2.4 m等間である。柵 SA5002 の 0.3 ～ 0.5m 東側には区画溝と見られる溝 SD1001 が存在し、この溝 SD1001 は柵 SA5002 と平行した後に北部で幅を西側に広げており、ちょうど柵 SA5002 を避けるように作られていることから、同時期の遺構と考えられる。おそらくこの両者で西側に存在した施設の東側を区画していたものとおもわれる。ただし前述のごとく柵 SA5002 と柱筋を揃えた北側の掘立柱建物 SB5001 は溝 SD1001 埋め立て後に作られており、これらの状況から長岡京期内での前後関係と見ている。

溝 SD1121、土坑 SK1152（第 116 図）　溝 SD1121 は調査地の中央付近で検出された南北方向の溝である。幅 2.0 ～ 2.5m、長さ 12m、深さ 0.2 ～ 0.4m の幅広のもので、南から北に向かって徐々に深くなっている。規模や形状は、2 トレンチで検出されている内部に甕据え付け穴を持つ掘立柱建物 SB88 を囲む区画溝群と類似したものであるが、調査地内では規模の大きな



P1146
1　褐色〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ にぶい黄橙色〈10YR6/4〉30%
3　褐色〈10YR4/6〉+ にぶい黄橙色〈10YR6/4〉10%

P1147
1　褐色〈10YR4/6〉
2　褐色〈10YR4/4〉
3　暗褐色〈10YR3/4〉+ にぶい黄橙色〈10YR6/4〉20%
4　にぶい黄橙色〈10YR6/4〉+ 暗褐色〈10YR3/4〉5%

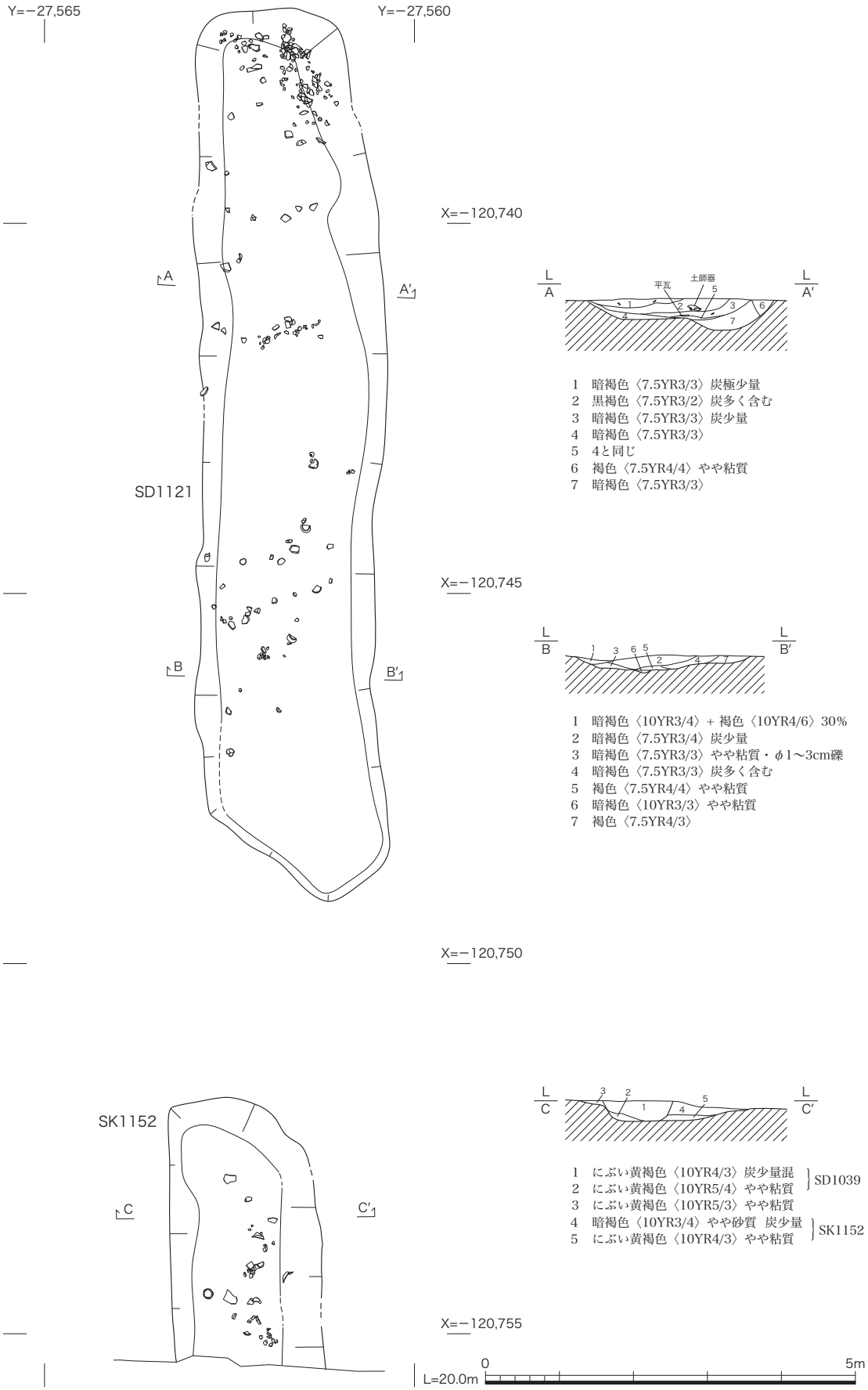
P1148
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉+ 褐色〈10YR4/6〉20%
3　褐色〈10YR4/6〉
4　にぶい黄褐色〈10YR5/4〉+ 褐色〈10YR4/4〉20%

P1149
1　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉
2　褐色〈10YR4/4〉
3　褐色〈10YR4/6〉+ 褐色〈10YR4/4〉　10%

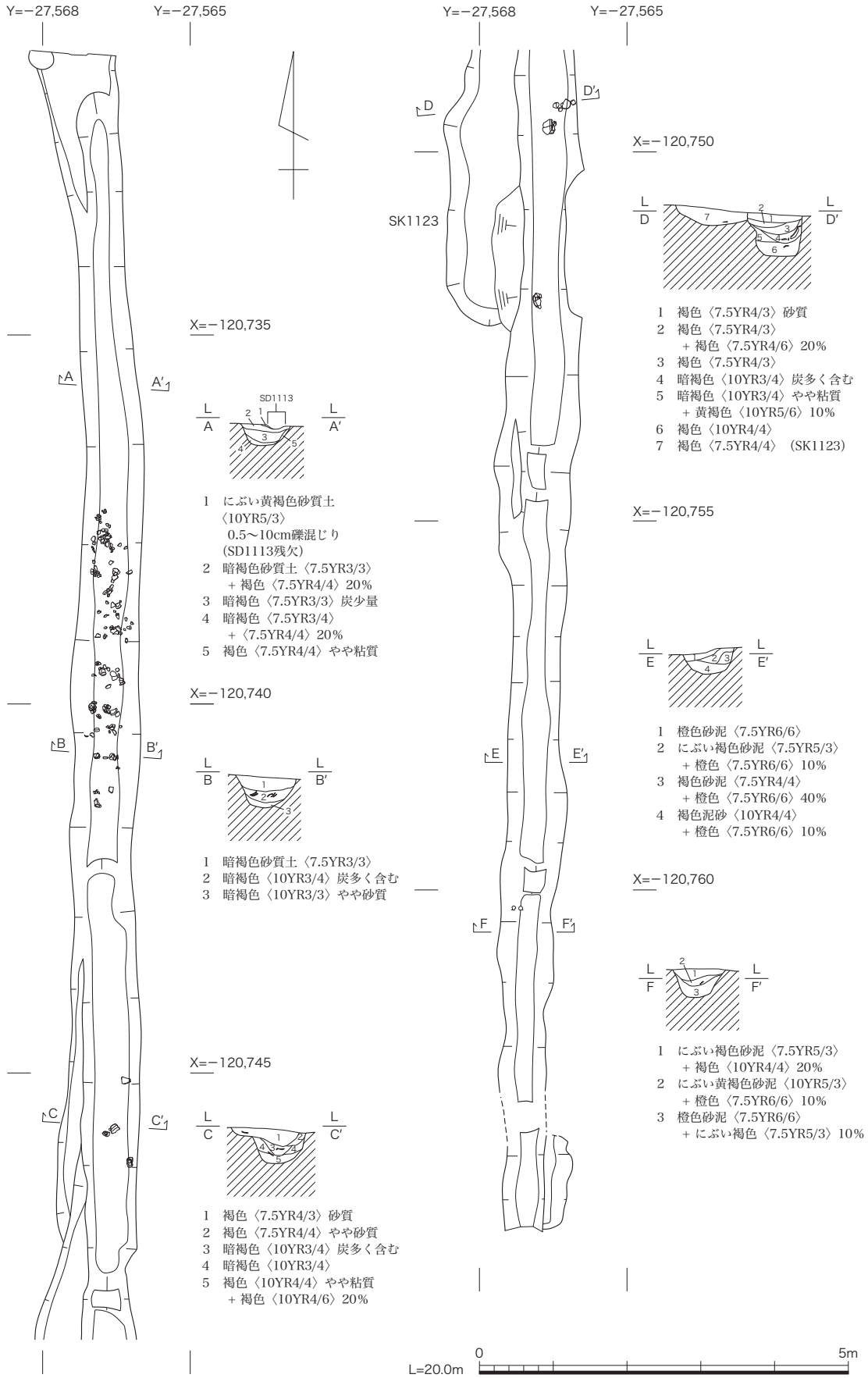
P1150
1　褐色〈10YR4/4〉
2　にぶい黄褐色〈10YR4/3〉+ 褐色〈10YR4/6〉30%
3　暗褐色〈10YR3/4〉+ 褐色〈10YR4/6〉50%

第115図　柵SA5002実測図（1/80）

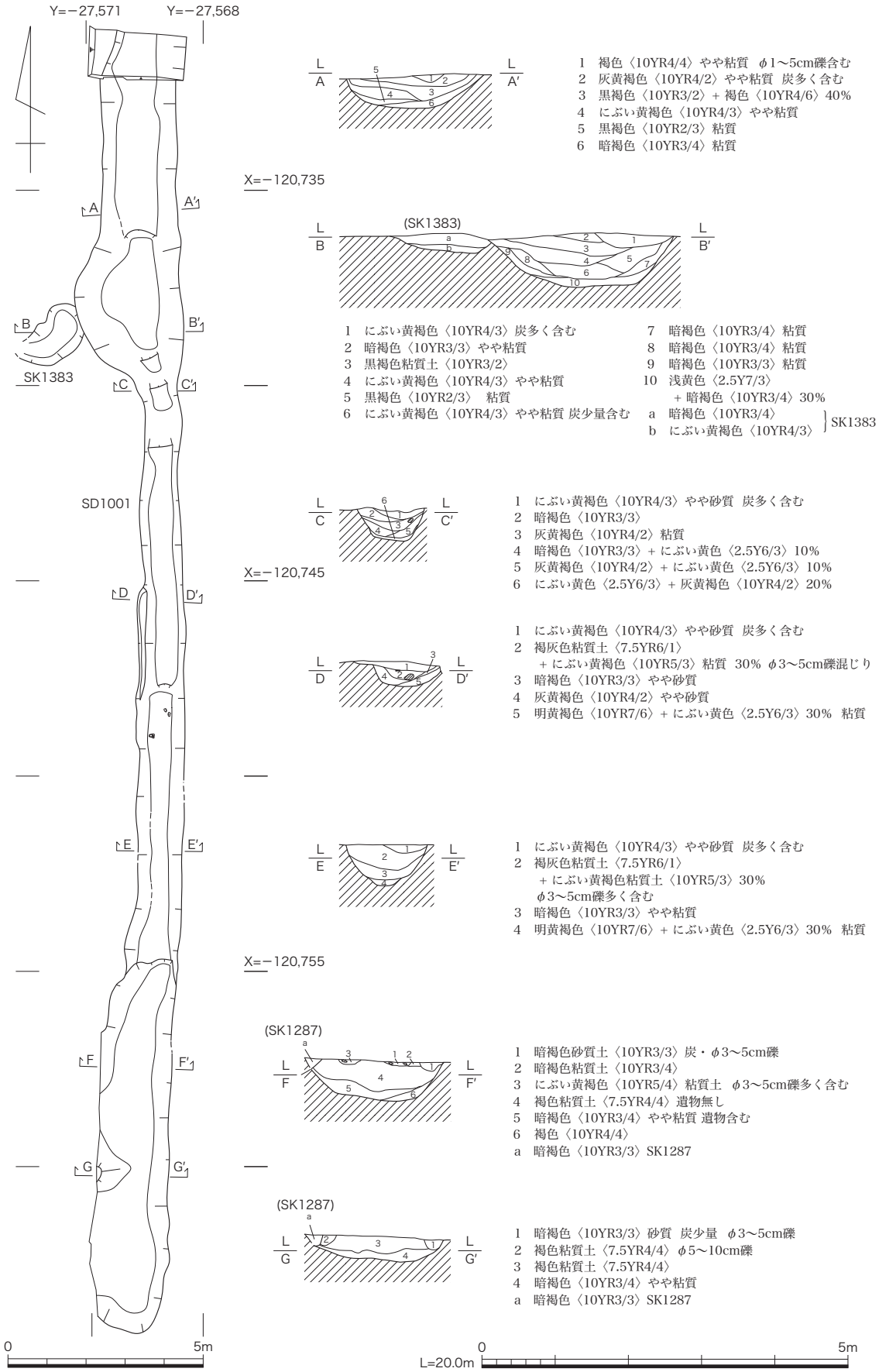
掘立柱建物は確認できていない。西側に何らかの施設が存在した可能性がある。出土遺物は長岡京期の遺物が大半であるが、一点平安時代のものが含まれる。土坑SK1152は溝SD1121の南2.5mで検出された落ち込みである。幅2.0m、深さ0.3mで、長さ3.6 m分が検出され、南側は調査地の外に延びている。近世溝SD1039に切られており、水田の段差が存在するため、東肩は浅くなっている。したがって本来の幅はもう少し広いとおもわれる。土坑としたが、溝SD1121と同形態となる区画溝の可能性が高い。



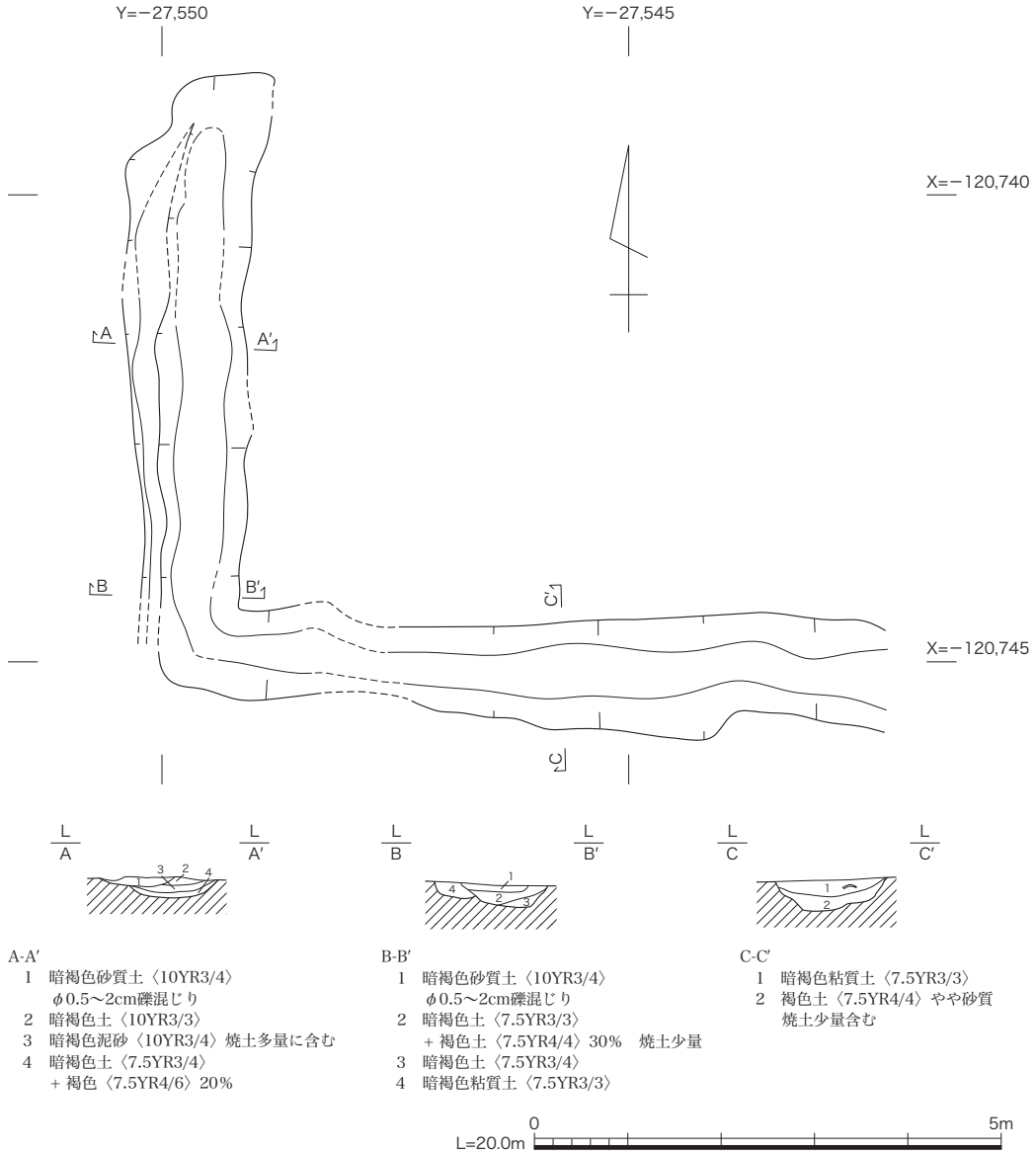
第 116 図　溝 SD1121、土坑 SK1152 実測図（1/80）



第117図　溝SD1122実測図（1/80）



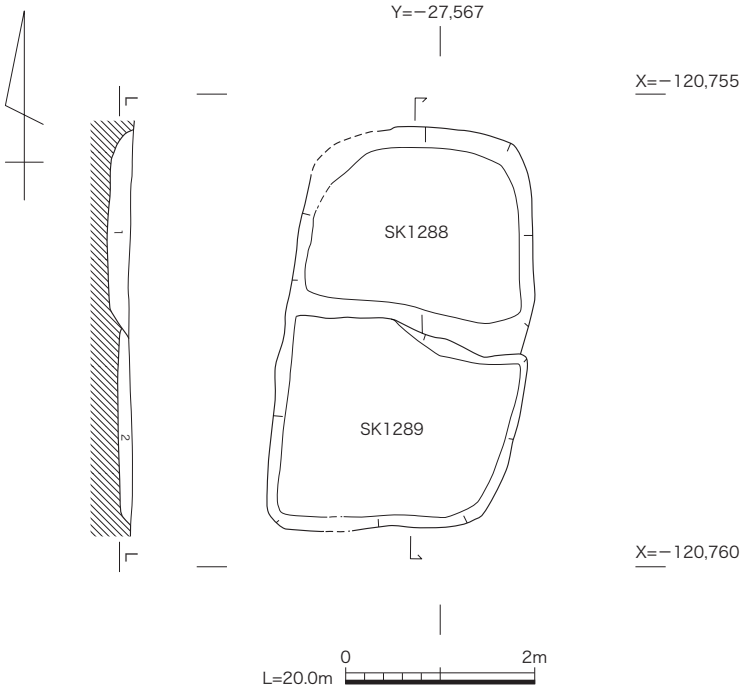
第 118 図　溝 SD1001 実測図（1/80・1/150）



第 119 図　溝 SD12 実測図（1/80）

溝 SD1122（第 117 図）　調査地西部で検出された南北方向の溝である。南側で拡張を行い、33.5 m分が検出された。溝 SD1121 の西肩から 2.5 〜 3.0m、柵 SA5002 からは 3.8 mの距離にある。幅は 0.5 〜 1.0 mで、深さは北から南に 0.3 〜 0.6 mと徐々に深くなる個所と段を持って深くなる個所があり、中央付近でもっとも深くなった後、南側では 0.3 〜 0.4m となる。長岡京期の遺物が中層付近に多く出土している。これも溝 SD1121 などと同様に西側に存在する施設を区画する溝とみられる。

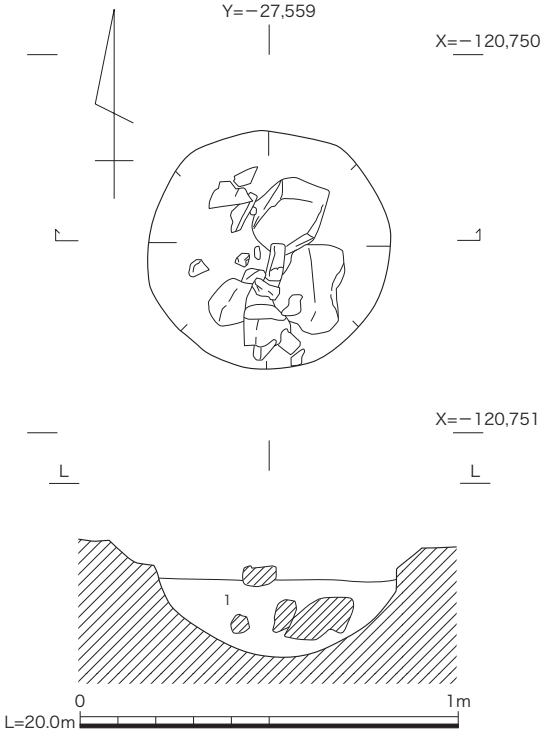
溝 SD1001（第 118 図）　調査地西辺で検出された南北方向の溝である。先述した溝 SD1122 の西側、溝芯々間距離で 3m の位置にある。南側拡張部を含めて 33.3 mが検出されたが、このうち北側の 1.2 m分は右京第 217 次調査と重複する個所である。北側 9m までは幅 1.8 〜 2.8 mと広く、深さは北端で 0.4 m、南側の幅がもっとも広がる部分では 0.7m である。これより南に行くと溝幅は東肩寄りに狭くなり、幅 0.9 〜 1.4 mとなり、深さは溝幅が狭くなった約 15m



1 にぶい黄褐色〈10YR5/3〉やや粘質 + 橙色粘質土〈7.5YR6/6〉20%
2 黄褐色粘質土〈10YR5/6〉+ 橙色粘質土〈7.5YR6/6〉10% + にぶい黄褐色〈10YR5/4〉やや砂質 10%

第 120 図　土坑 SK1288・1289 実測図（1/80）

のうちの北半部で 0.3 ～ 0.4 m、南半部で 0.5m である。これより南では溝は再び西側に広く、また深くなり、幅 1.8m 以上、深さは 0.5m である。南端はやや浅くなり丸くなって終わっている。このうち溝幅が狭く、浅い北半部の西側の個所に先述した柵 SA5002 が存在していて、ちょうどこれを避けるような状況で作られていることから、同時期に存在した遺構としたものである。これと同様の状況は北西部で行われた右京第 217 次調査[27]においても看取される。右京第 217 次調査では南北 3 間、東西 10 間、南に 1 間の廂を持つ長大な掘立柱建物（SB41）が検出された（第 9 図）。中央で間仕切りされた内部には西側に 31 個、東側に 20 個の甕据え付け穴を持っており、長岡京内において最大の規模を有するものである。この建物の東



1 褐色〈7.5YR4/3〉炭少量　土師器細片少量

第 121 図　土坑 SK1323 実測図（1/20）

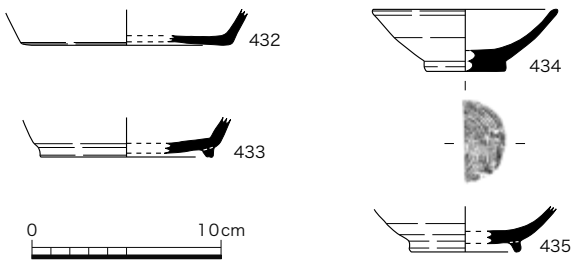
側には今回検出された溝 SD1001 の北側延長部分（SD39）が見つかっている。この溝は建物北東部で最大幅 2.6 m、深さ 0.3 mと広くなっているが、建物東側では幅を減じて幅 0.9 ～ 1.5 m となり、建物南東部で再び西側に幅を広げて、今回の調査地内の溝 SD1001 へと続いている。溝はちょうど身舎部分を避けるように作られており、今回検出された溝 SD1001 と柵 SA5002 との状況に酷似している。さらに柵 SA5002 は右京第 217 次調査で検出された長大な掘立柱建物 SB41 の東側柱列と柱筋を揃えていて、一連の遺構と考えられる。一方掘立柱建物 SB41 の南側の廂は小規模な円形のものからやや大きい隅円方形のものに作り替えられているが、作り替えの廂掘形は東側の溝が埋められた後に作られている。この状況も東側の柱筋を揃えた掘立柱建物 SB5001 が溝 SD1001 埋め立て後に作られていることと一致しており、これらの遺構が一連のものと考える理由である。したがって、現段階では最初に作られた南北方向の区画溝 SD1001 が何らかの理由ですぐに埋め立てられ、東側で柱筋を揃えた建物群が整備される。そして溝SD1001 に変わる区画溝として同様の規模を持つ溝 SD1122 が 3 m 東側に作り直されたと考えている。

この他に幅 0.5 m前後、深さ 0.2m 前後の小規模な溝が調査地南東部で検出されている。南北方向のもの（溝 SD1166・1258・1242）と東西方向のもの（溝 SD1165・1168・1176）があり、このうち東西方向の溝 SD1165 と溝 SD1176 は南北方向の溝 SD1122 と土坑 SK1152 に切られている。また南北方向の溝 SD1242 からは緑釉陶器の小片が出土しており、時期差が存在している。

C．下層第２面の遺構

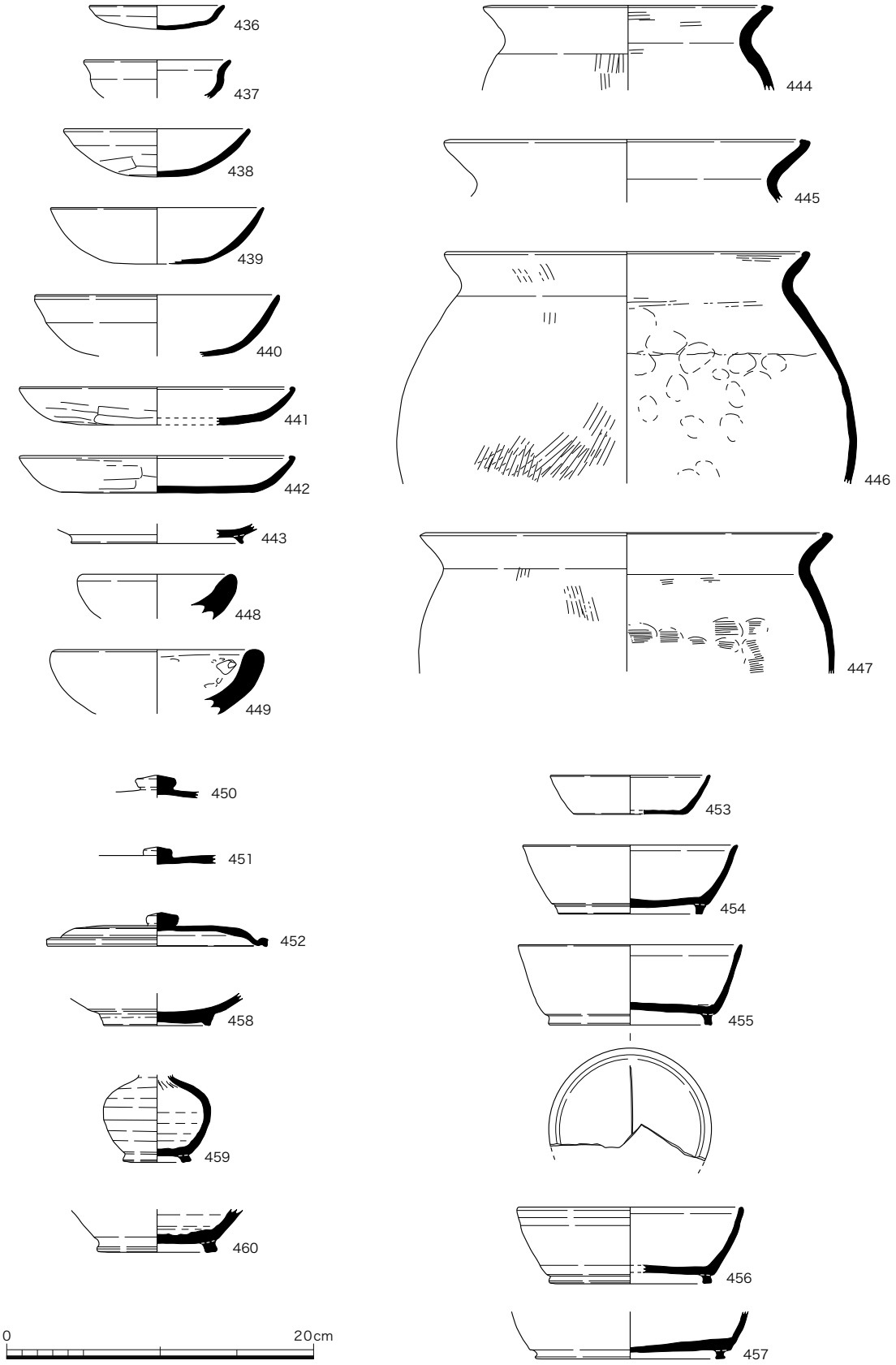
調査地の中央～東部に薄く堆積していた灰褐色砂泥を除去した段階で検出されたものを下層第２面の遺構群としている。これらは上面で明確に確認できなかったものも含んでおり、すべて古い時期のものではない。また試掘トレンチで検出されたものも含めている。主に調査地中央南寄りと、北東部に集中している。

溝 SD12（第 119 図）　調査地東部で検出された正方位を指向する「L」字形に折れ曲がる溝で、東部は試掘トレンチで東西方向の溝として確認されていたものである。幅 0.8 ～ 1.3m、深さ 0.2 ～ 0.3m で、南北 6.6m、東西 7.8 m分が検出されている。埋土は２～４層で、下層から中層にかけて内部に焼土を多く含んでいる。遺物は奈良時代後期のものとみられる土師器高杯、須恵器杯 B などが出土しているが量は少ない。遺構の性格については判然としないが奈良時代の遺構としては唯一のものである。

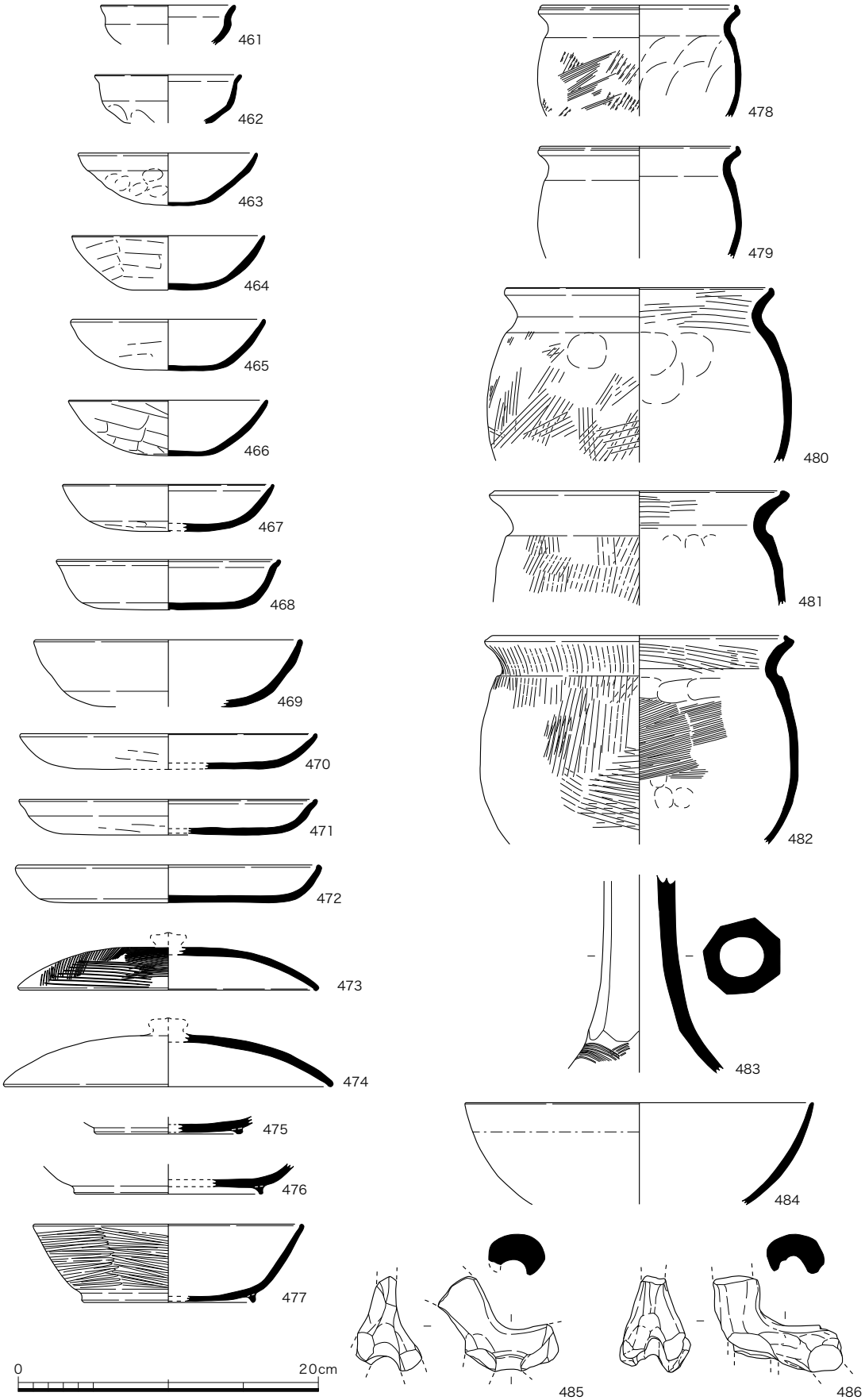


第 122 図　溝 SD1119 出土遺物実測図（1/4）

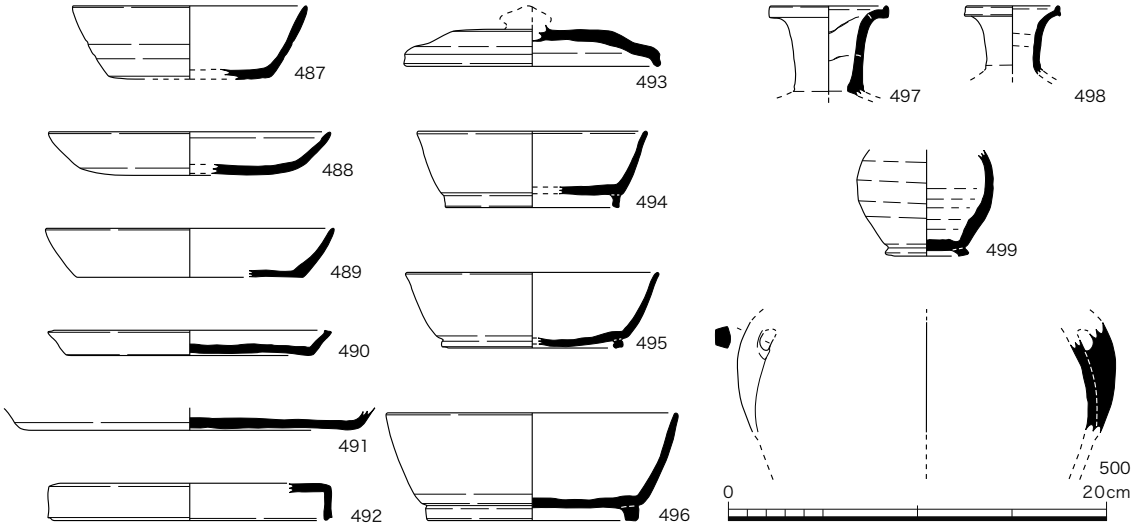
土坑 SK1323　調査地中央南寄りで検出された平面円形の土坑である。直径 0.64 m、深さ 0.25m で、断面は半球形である。内部には 0.05 ～ 0.23 mの礫が多く含まれており、埋土には炭が混じっている。遺物は土師器の小片が出土したのみで明確に時期は確定できない。



第 123 図　溝 SD1121 出土遺物実測図（1/4）



第 124 図　溝 SD1122 出土土師器実測図（1/4）



第 125 図　溝 SD1122 出土須恵器実測図（1/4）

（２）出土遺物

Ａ．長岡京期～平安時代の遺物

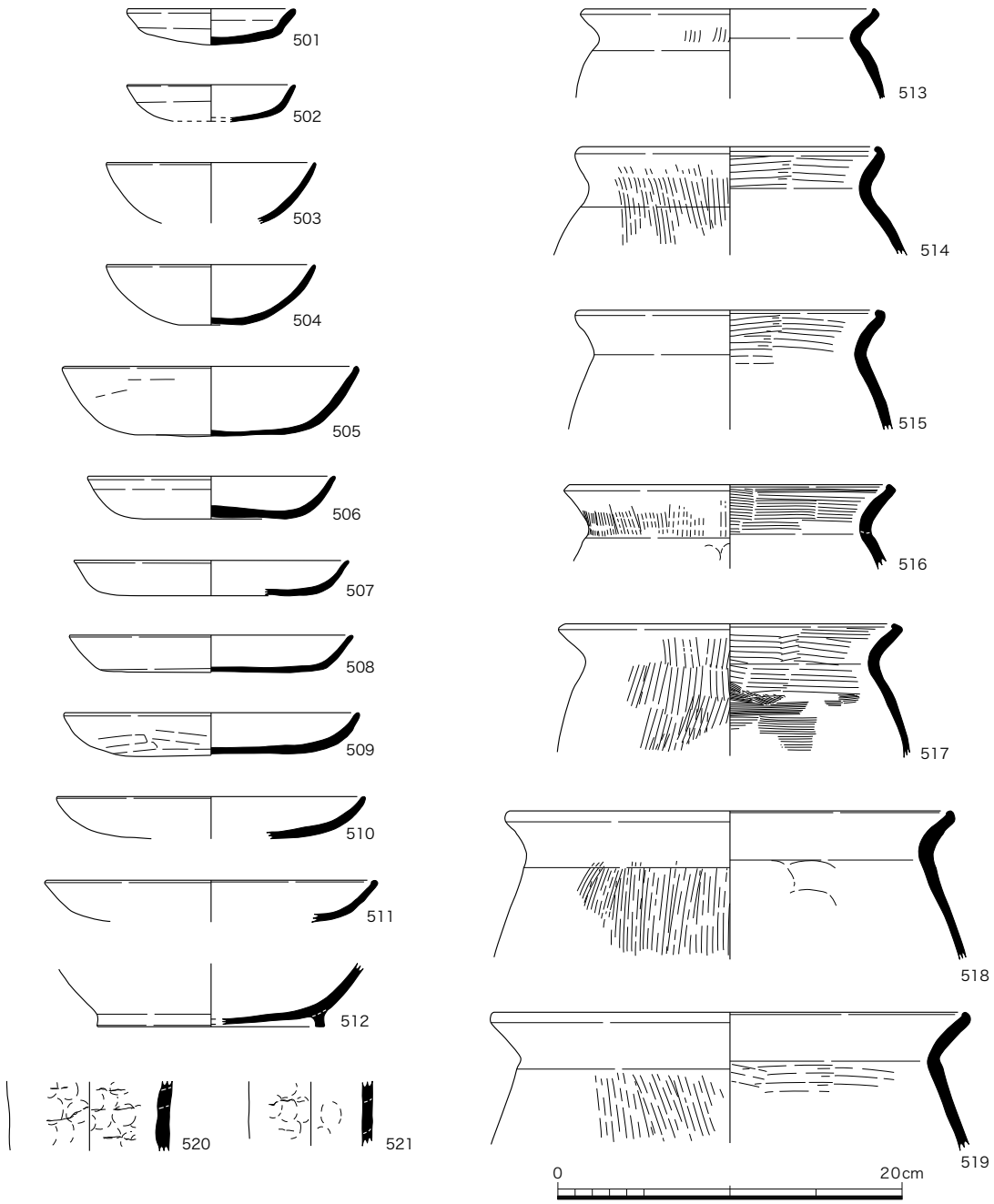
溝 SD1119 出土遺物（第 122 図）　この溝は、トレンチ南東部の上層で検出した西北西から東南東にのびる斜行溝で、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器など平安時代前期の遺物が少量出土している。須恵器には、杯Ａ（432）と杯Ｂ（433）があり、緑釉陶器の椀（434）は、径 9.8cm の小型品である。底部は平高台で、糸切りの痕跡をとどめている。硬質に焼成されており、緑灰色の釉薬が塗布されている。

上記の遺物は、平安時代前期のものである。

溝 SD1121 出土遺物（第 123 図）　この溝は、トレンチ中央のやや西寄りで検出した南北方向の溝で、土師器、須恵器、灰釉陶器、とりべ、丸瓦などの遺物がまとまって出土している。なお、瓦類については、別項をもうけて他の遺構と共にまとめて説明する。

土師器には、杯Ａ・杯Ｂ・椀Ａ・皿Ａ・皿Ｃ・壺Ｃ・甕Ａなどの器種がある。杯Ａ（440）は口縁部、杯Ｂ（443）は底部の破片で、底部に低くて断面三角形を呈する高台を貼り付けている。椀Ａ（438・439）は、438 がｃ手法で調整している。皿Ａ（441・442）は、口縁端部を内側に肥厚させ、外面を口縁端部までヘラケズリするｃ手法で調整する。皿Ｃ（436）、壺Ｃ（437）ともｅ手法で調整している。甕Ａ（444 ～ 447）は、口径 19cm 前後のもの（444）と 24 ～ 27cm のもの（445 ～ 447）に分けられ、446 の内面には白色の付着物が認められた。

須恵器には、杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・壺Ｍ・壺Ｌなどの器種がある。杯Ａ（453）は、軟質に焼成され、灰白色を呈する。杯Ｂ（454 ～ 457）は、口径 14 ～ 14.8cm、器高 4.5 ～ 5.2cm ほどの法量があり、いずれも硬質に焼成される。454 の外面に自然釉が付着し、455 の底部外面には焼成前に線刻が施されている。杯Ｂ蓋（450 ～ 452）のうち、全形がわかる 452 は、内面が平滑化されていることから、転用硯とみられる。459 は口縁部が欠損した壺Ｍ、460 は壺Ｌと考えられる底部片である。



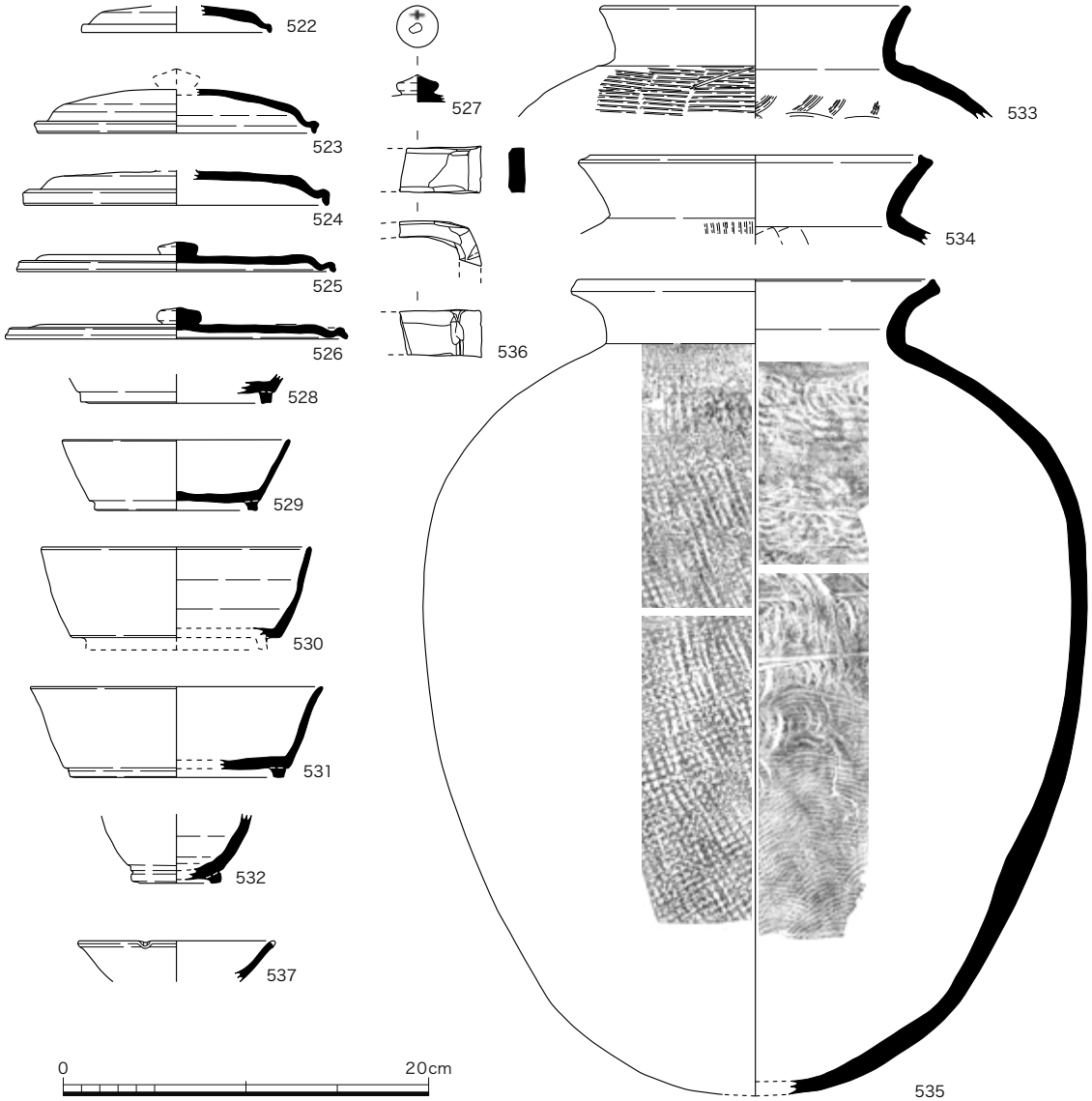
第 126 図　溝 SD1001 出土土師器実測図（1/4）

緑釉陶器（458）は椀ないし皿の底部片で、ケズリによって輪高台を成形している。軟質に焼成され、淡い黄緑色の釉薬が認められた。

448・449 は、ともに底部を欠損しているが、厚手の椀形の容器で、とりべと考えられるものである。内面には、鉱滓物が厚く付着していた。

上記の遺物の大半は、長岡京期に比定できるものであるが、458 のように一部平安時代前期のものを含んでいる。混入品であろうか。

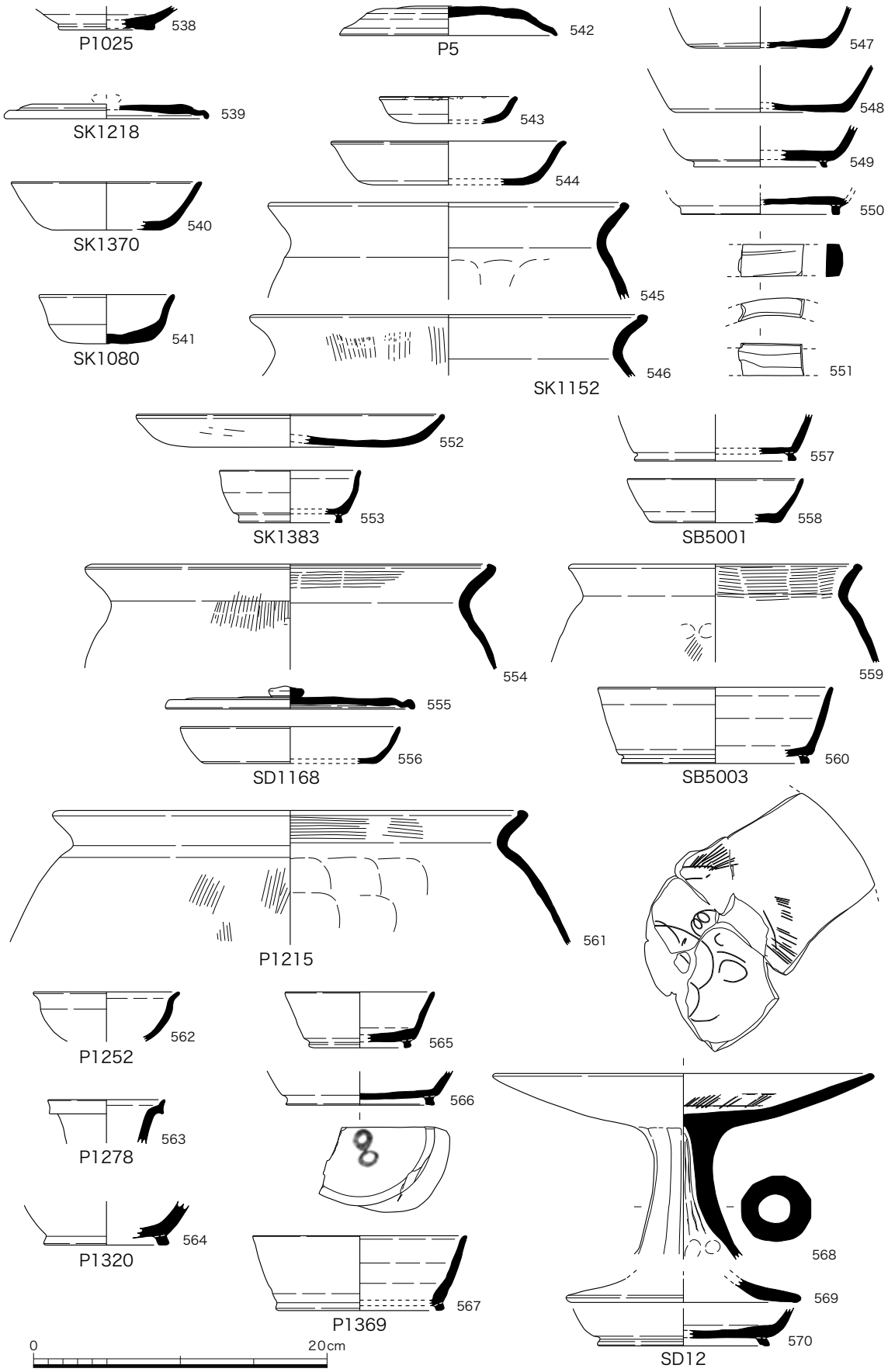
溝 SD1122 出土遺物（第 124・125 図）　この溝は、溝 SD1121 のすぐ西側の下層第 1 面で検出した南北溝で、土師器、須恵器、黒色土器、土馬、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、鉄製品などが出



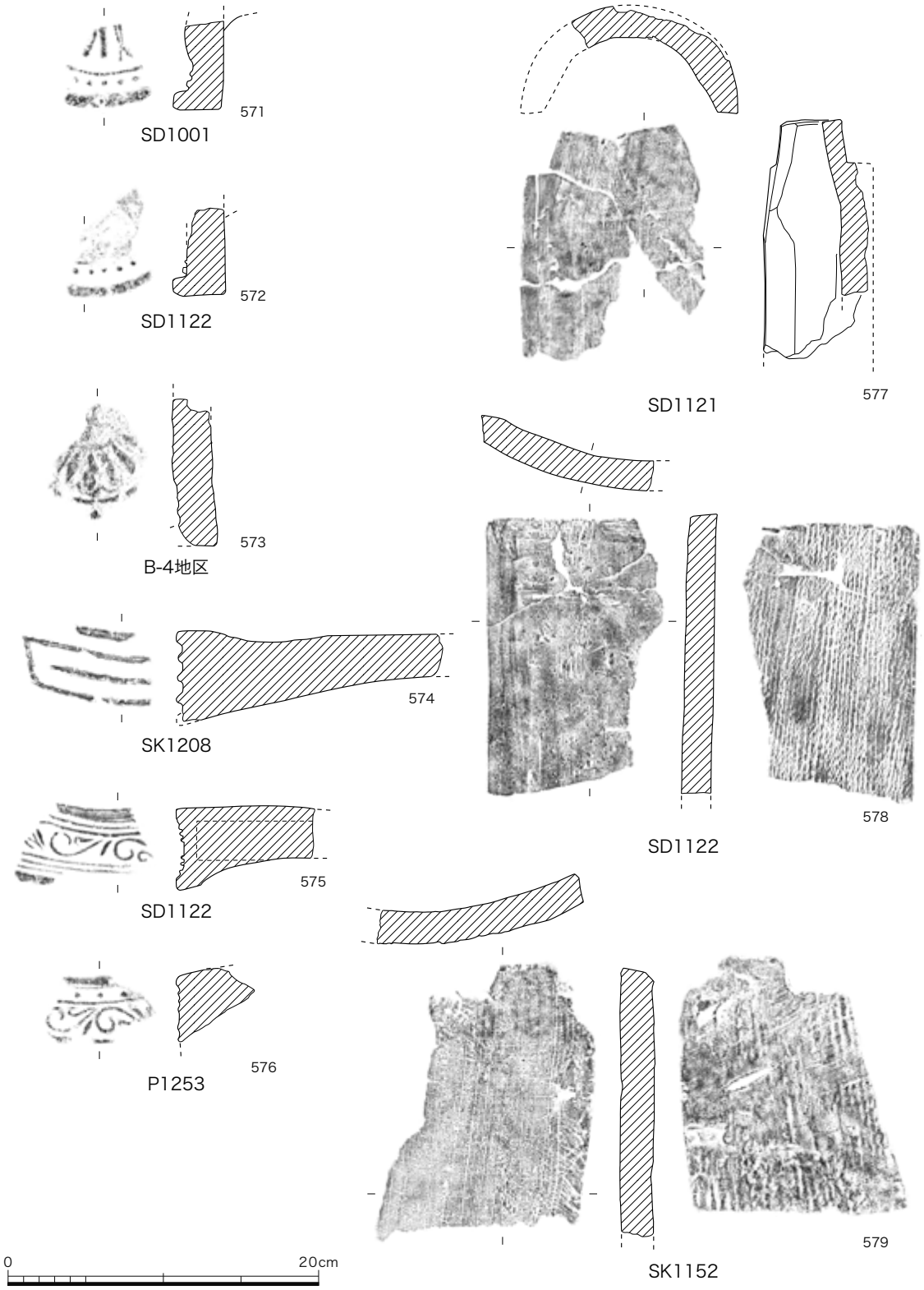
第 127 図　溝 SD1001 出土須恵器・灰釉陶器実測図（1/4）

土している。

土師器には、杯Ａ・杯Ｂ・杯Ｂ蓋・椀Ａ・椀Ｃ・皿Ａ・壺Ｃ・高杯・甕Ａなどの器種がある。杯Ａ（467 ～ 469）は、外面調整が底部のみをヘラケズリするｂ手法（467）、口縁端部にまで及ぶｃ手法（468）がある。杯Ｂ（475 ～ 477）は、杯Ａの底部に高台を貼り付けた形態で、477 の外面にはヘラミガキで調整した痕跡が残っている。杯Ｂ蓋（473･474）は、笠形の形態で、口縁端部をわずかに肥厚させる。473 の天井部は、ヘラミガキを密に施して仕上げている。椀Ａ（464 ～ 466）は、口径 3.5cm 前後あり、いずれもｃ手法によって調整している。椀Ｃ（463）は、内面と口縁部外面のみをナデ調整し、底部外面を調整しないｅ手法で作っている。470 ～ 472 は皿Ａで、470・472 は口縁端部までヘラケズリするｃ手法で調整するが、471 は口縁端部までヘラケズリが及んでいないものである。高杯（483）は、粘土紐を巻き上げて成形した脚柱状部をケズリによって八角形に面取りする。下方に広がる裾部の外面は、ヘラミガキ調整する。甕Ａ



第128図　各遺構出土遺物実測図（1/4）



第 129 図　５トレンチ出土瓦実測図（1/4）

は、口径が13cm前後の小型品（478・479）と、20cmほどの中型品（480～482）がある。口縁端部を折り曲げて、上方ないし内側に突出させる。口縁部内面は横方向のハケメ、体部外面に縦方向のハケメが残る。479と481の外面には、煤の痕跡が認められる。

須恵器には、杯A・杯B・杯B蓋・皿A・壺A蓋・壺M・壺L・壺Nなどの器種がある。杯Bは、口径12.1～13.2cmのもの（494・495）と15.4cm前後のもの（496）がある。杯B蓋（493）は、前者の杯Bと組み合う法量であり、内面が平滑であることから、硯に転用された可能性が考えられる。皿A（488～491）は、489～491の底部は平底であるが、488はやや丸みを帯びている。壺A蓋（492）は、天井部が扁平で、口縁端部は下方に突出させる。497・498は壺Lの口縁部で、口縁端部は受け口状を呈する。499は、壺Mと考えられる体部から底部にかけての破片で、高台を貼り付ける。壺N（500）は、肩部に耳状の把手を貼り付けた形態の壺で、外面はケズリを施す。双耳壺ないし四耳壺であろう。

黒色土器（484）は、口径が23.2cmほどある大型の杯で、内面と口縁部外面を黒色化した黒色土器A類である。全体に摩滅しているため、調整手法は不明瞭である。

土馬（485・486）は、いずれも頸部から胴部にかけての破片で、胴部の断面は逆U字形になっている。

上記の遺物は、おおむね長岡京期に属するものと考えられる。

溝SD1001出土遺物（第126・127図）　トレンチ西辺部に沿って検出した東西方向の溝で、土師器、須恵器、灰釉陶器、製塩土器、軒丸瓦などが出土している。

土師器には、杯A・杯B・椀A・皿A・皿C・甕Aなどの器種がある。杯A（505）は、外面を口縁端部までヘラケズリするc手法で仕上げる。椀A（503・504）は、口径12.1cm、器高3.5cmほどあり、全体に摩滅しているため、調整手法は不明である。皿A（506～511）は、平底形態の皿で、外面の調整はc手法であるものが多いが、e手法によるもの（506）もある。皿C（501・502）は、e手法で調整した口径が9.8cmほどの小型皿である。甕Aは、口径17.4～20cmほどの中型品（513～517）と、25.6～27.5cm前後の大型品（518・519）がある。いずれも口縁端部を内側に折り曲げて突出させる。口縁部内面はヨコハケ、体部外面はタテハケによって調整する。

須恵器には、杯B・杯B蓋・壺M・平瓶・甕などの器種がある。杯B蓋（522～527）は、いずれも口縁端部が屈曲する形態であるが、天井部が笠形をなすもの（522～524）と扁平なもの（525・526）とに分けられる。524・525は、内面が平滑であることから、硯として再利用された可能性が強い。また、つまみ（527）の外面に、「十」の墨書が残るものがある。536は、平瓶の把手と考えられる破片で、ケズリによって細かく面取りしている。甕（533～535）のうち、535は完形に復元できた長胴の甕で、口径20.2cm、体部最大径36.4cm、器高は44.6cm前後ある。体部外面に格子状のタタキを施した後、肩部にはカキメを加えて仕上げる。内面には同心円の当て具の痕跡が残り、外面には自然釉が付着している。

灰釉陶器の椀（537）は、口径が10.6cmあり、口縁端部に輪花を施している。

製塩土器（520・521）は、ともに体部の破片で、指圧によって成形している。比較的器壁の薄い小型品で、内外面には粘土紐の接合痕が残る。

上記の遺物は、土師器、須恵器の大半が長岡京期の特徴を備えているが、537 の灰釉陶器椀のみが新しい様相を呈している。混入品である可能性が考えられる。

溝 SD1168・1353 出土遺物（第 128 図）　溝 SD1168 からは、須恵器の杯Ｂ蓋（555）や杯Ａ（556）などが出土した。溝 SD1353 からは、土師器の高杯（568・569）、須恵器の杯Ｂ（570）などが出土している。568 は、杯部の内面に螺旋状と放射状の暗文を施し、脚柱状部は 11 角形に細かく面取りする。脚柱状部の内面には、絞り目の痕跡が認められる。

土坑 SK1080・1152・1218・1370・1383 出土遺物（第 128 図）　土坑 SK1152 は、溝 SD1121 のすぐ南側で検出した土坑で、土師器、須恵器、平瓦などが出土している。土師器皿Ｃ（543）は、口縁端部に油煙の痕跡が認められることから、灯火器として利用されたことが知られる。甕Ａ（545・546）は、口径 24.6 ～ 27.1cm ほどの大型品である。須恵器杯Ａ（547・548）、杯Ｂ（549・550）は、いずれも口縁部を欠損する底部の破片である。杯Ａは軟質に焼成され、灰白色を呈している。551 は、平瓶の把手の破片で、ケズリによって面取りする。土坑 SK1383 からは、土師器皿Ａ（552）や須恵器の杯Ｂなどが出土しており、前者はＣ手法で調整する。539 は土坑 SK1218 から出土した須恵器杯Ｂ蓋、540 は土坑 SK1370 出土の土師器杯Ａ、541 は土坑 SK1080 から出土した須恵器杯Ｇである。

小穴 P5・1025・1215・1252・1278・1320・1369 出土遺物（第 128 図）　538 は、小穴 P1025 から出土した緑釉陶器の椀ないし皿の底部片で、ケズリによって蛇の目高台を形成している。542 は、小穴 P5 から出土した須恵器の蓋で、つまみはなく、内面が平滑であることから、硯に転用された可能性がある。小穴 P1215 からは径が 32.4cm もある大型の土師器甕が出土した（561）。小穴 P1369 からは、須恵器の杯Ｂ（565 ～ 567）が出土している。565 は、口径 10.2cm の小型品、566 の底部外面には「８」の墨書が認められる。この他、小穴 P1252 から土師器壺Ｃ（562）、小穴 P1278 から須恵器壺Ｌ（563）、小穴 P1320 からも須恵器壺Ｌ（564）などが出土した。

溝 SD12 出土遺物（第 128 図）　溝 SD12 からは、土師器の高杯（568・569）、須恵器杯Ｂ（570）が出土している。568 は皿状の杯部と比較的短い脚柱状部をもち、内面にはしぼり目が、外面は 11 面ほどに細かく面取りしている。奈良時代までさかのぼるものであろう。

瓦類（第 129 図）　５トレンチでは、遺構や堆積層などから軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦などの瓦類が少量出土している。

軒丸瓦（571 ～ 573）は、いずれも蓮華文軒丸瓦である。571 は、溝 SD1001 から出土した瓦当面の小片で、外区には珠文が、内区は複弁と考えられる蓮華文であるが、型式は不詳である。572 は、溝 SD1122 から出土した瓦当面の小片で、全体に摩滅しているが、文様構成や胎土などから 571 と同一型式、同一個体である可能性が考えられる。573 は、堆積層から出土した瓦当面の破片で、摩滅が顕著であるが、内区は複弁とみられる。型式は不明。

軒平瓦には、唐草文軒平瓦（575・576）と重圏文軒平瓦（574）がある。575は、溝SD1122から出土したもので、6663 C型式ではないかと考えられる。576は、小穴P1253出土の瓦当小片で、外区に珠文を配している。6682型式系統の可能性が考えられる。574は、土坑SK1208から出土したもので、一重の郭線内に単線を1本加えた6574型式に比定できるものと考えられる。

平瓦は、578が凸面に縄タタキ、凹面には布目痕をとどめており、側面をヘラケズリして面取っている。溝SD1122から出土した。579は、SK1152からの出土品で、凹面には布目痕をとどめており、凸面は縄タタキの後に横方向にケズリを加えて調整している。

丸瓦（577）は、玉縁を有する形態で、凹面には布目痕をとどめ、外面は横方向にケズリを施している。

６　６トレンチ

６トレンチは、２トレンチのすぐ北側、校舎建設予定部分の北辺にあたる調査個所である。この個所は大阪成蹊大学の駐車場としての利用がなされていたため、駐車場の移転後に南北 6m、東西 42m の調査トレンチを設定した。調査地は２トレンチよりも 1m ほど高くなっており、これは以前の工場造成時の名残である。したがって２トレンチでは削平を受けていた遺構面は６トレンチでは比較的良好に残されていた。調査の結果、２トレンチで検出された堀 SX09 の北側延長部を始め長岡京期～平安時代の小穴、近世の小穴・落ち込みなどを検出した。

調査地の基本層序は、造成時の盛土が 0.3 ～ 0.5m あり、その下に耕作土・床土が 0.2 ～ 0.3 mの厚さで２～４層堆積している。またトレンチ東辺から約 10 m付近には幅約１m、高さ 0.2 ～ 0.3 mの以前の水田の畦畔が確認される。これらを除去すると地山面に至り、この面で遺構が検出されている。遺構検出面の標高は、トレンチ西側で 19.8 m、東側で 19.4 mである。またトレンチ中心の国土座標は、X＝−120,670、Y＝−27,515 である。

（１）検出遺構

A．江戸時代の遺構

落ち込み SX97（第 132 図）　調査地西側で検出された平面不整三角形を呈する落ち込みである。長軸は北西～南東方向を向き、長さ 4.8 m、幅は 2.4m、深さ 0.35m である。埋土は２層で、上層には直径 0.1 ～ 0.2 mほどの礫が多く含まれていた。礫は主に南東部に集中していて、一部北西付近に分布する。遺物は北西部から擂鉢の小片が出土したのみで、遺構の性格については不明である。

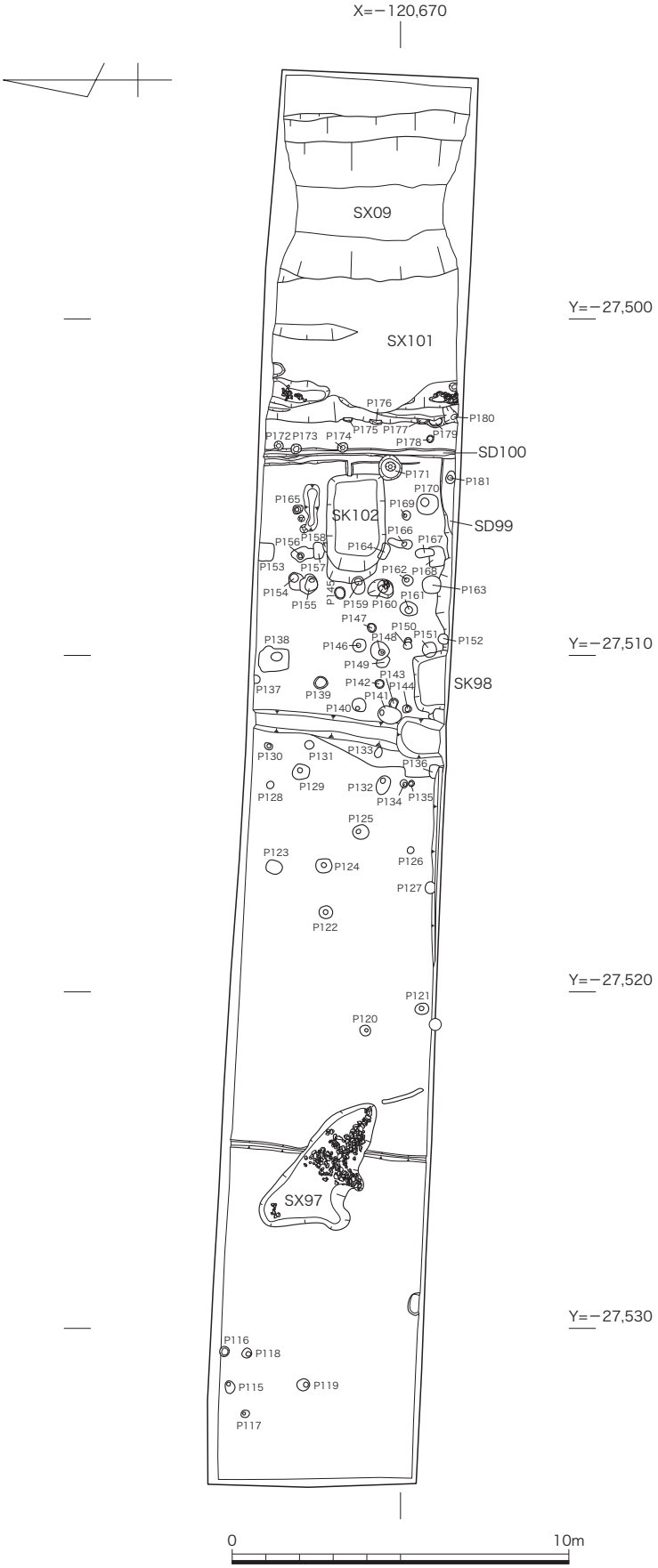
土坑 SK98　調査地中央の南辺で検出された平面方形を呈する落ち込みで、東西 1.7 m、南北１m以上、深さ 0.3 mである。近世の遺物が少量出土している。

土坑 SK102　調査地東部中央で検出された東西方向の長方形落ち込みである。東西 3.2 m、南北 1.7m、深さ 0.4 mで、内部には礫混じりの土が堆積していたが、棺などを設置したような痕跡はなく、これも性格不明である。軒丸瓦やミニチュアの土師器などが出土している。

この他に調査地西部と東部において平面円形を呈する小穴が多数検出されており、これらが江戸時代に含まれる可能性がある。このうち小穴 P134・144・150・161・162・166・169 は直径 0.1 ～ 0.4 m、深さの 0.1 ～ 0.2 mの小規模な円形掘形が東西に並ぶもので、ほぼ 2m 前後の間隔で並んでいる。遺物の出土はないが、形状や埋土から江戸時代の遺構と考えられる。

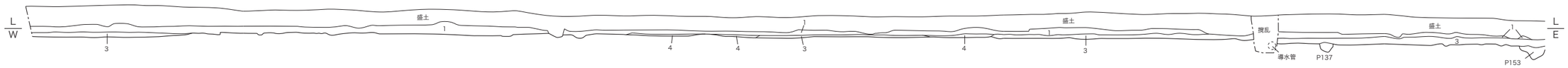
B．戦国期の遺構

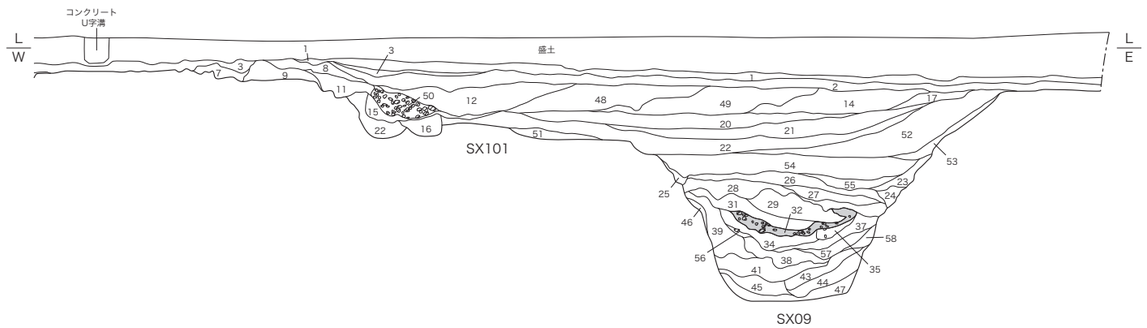
堀 SX09、落ち込み SX101（第 130 図）　２トレンチで検出された堀 SX09 の北側延長部にあたるものである。調査地の東端で約６m分が確認されており、２トレンチ検出分と合わせて約 68 mにわたって検出された。冒頭で述べたように本トレンチは２トレンチほど削平を受けていないため、堀 SX09 の残りも良好である。ここでは一連の遺構と見られる落ち込み SX101 と合わせて述べたい。



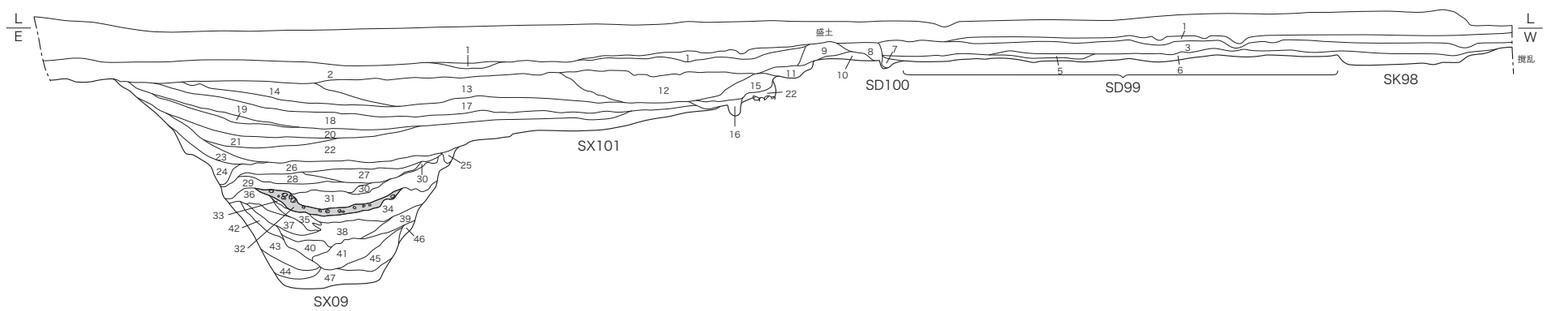
第130図　6トレンチ検出遺構図（1/200）

北　壁





南　壁



SX09上面
1 耕作土（水田）
2 耕作土（畑土）
3 床土Ⅰ
4 床土Ⅱ
5 灰黄褐色砂質土〈10YR5/2〉礫（φ10cm）混じり
6 灰黄褐色粘土〈10YR6/2〉マンガン混じり

SD100埋土
7 にぶい黄橙色粘質土〈10YR6/4〉

畦畔
8 褐色砂質土〈7.5YR4/3〉マンガン混じり
9 暗灰黄色砂質土〈2.5Y5/2〉
10 灰黄色砂質土〈2.5Y6/2〉

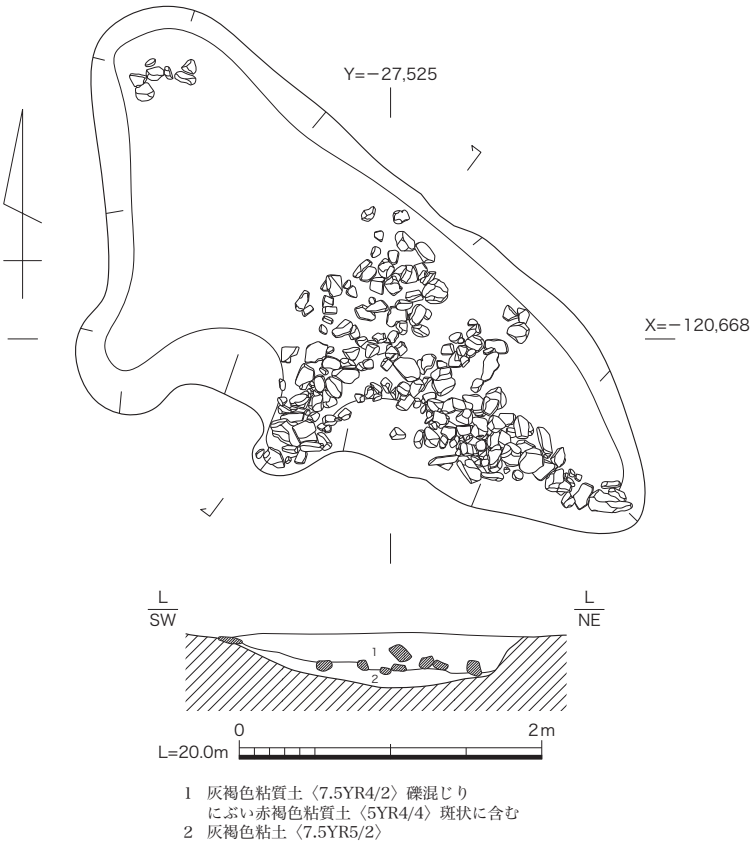
SX09上層
11 にぶい黄褐色砂質土〈2.5Y6/3〉小礫混じり
12 にぶい褐色粘質土〈7.5YR5/4〉礫混じり
13 黒褐色粘質土〈7.5YR3/2〉＋　明黄褐色粘質土〈10YR7/6〉
14 にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/3〉小礫混じり
15 灰黄褐色砂質土〈10YR4/2〉小礫混じり
16 灰黄褐色粘質土〈10YR5/2〉
17 にぶい黄褐色粘質土〈10YR4/3〉砂礫混じり
18 明黄褐色粘質土〈10YR6/0〉砂礫混じり
19 暗褐色粘質土〈7.5YR3/3〉礫混じり
20 灰褐色砂質土〈7.5YR4/2〉小礫混じり
21 褐色砂質土〈7.5YR4/3〉小礫混じり
22 灰黄褐色粘質土〈10YR4/2〉小礫混じり
23 褐色砂質土〈7.5YR4/4〉小礫混じり
24 にぶい黄褐色砂質土〈10YR4/3〉
25 にぶい黄褐色粘質土〈10YR5/3〉

SX09中層
26 明黄褐色粘質土〈10YR7/6〉
27 にぶい黄褐色粘質土〈10YR6/3〉鉄分含む
28 にぶい黄褐色砂質土〈10YR6/4〉鉄分含む
29 灰黄褐色粘質土〈10YR6/2〉鉄分含む
30 明黄褐色シルト〈10YR7/6〉鉄分含む
31 褐灰色粘土〈10YR6/1〉鉄分含む
32 灰褐色粘土〈7.5YR6/2〉礫（φ5cm）混じり、鉄分含む
33 褐灰色粘質土〈10YR6/1〉鉄分含む

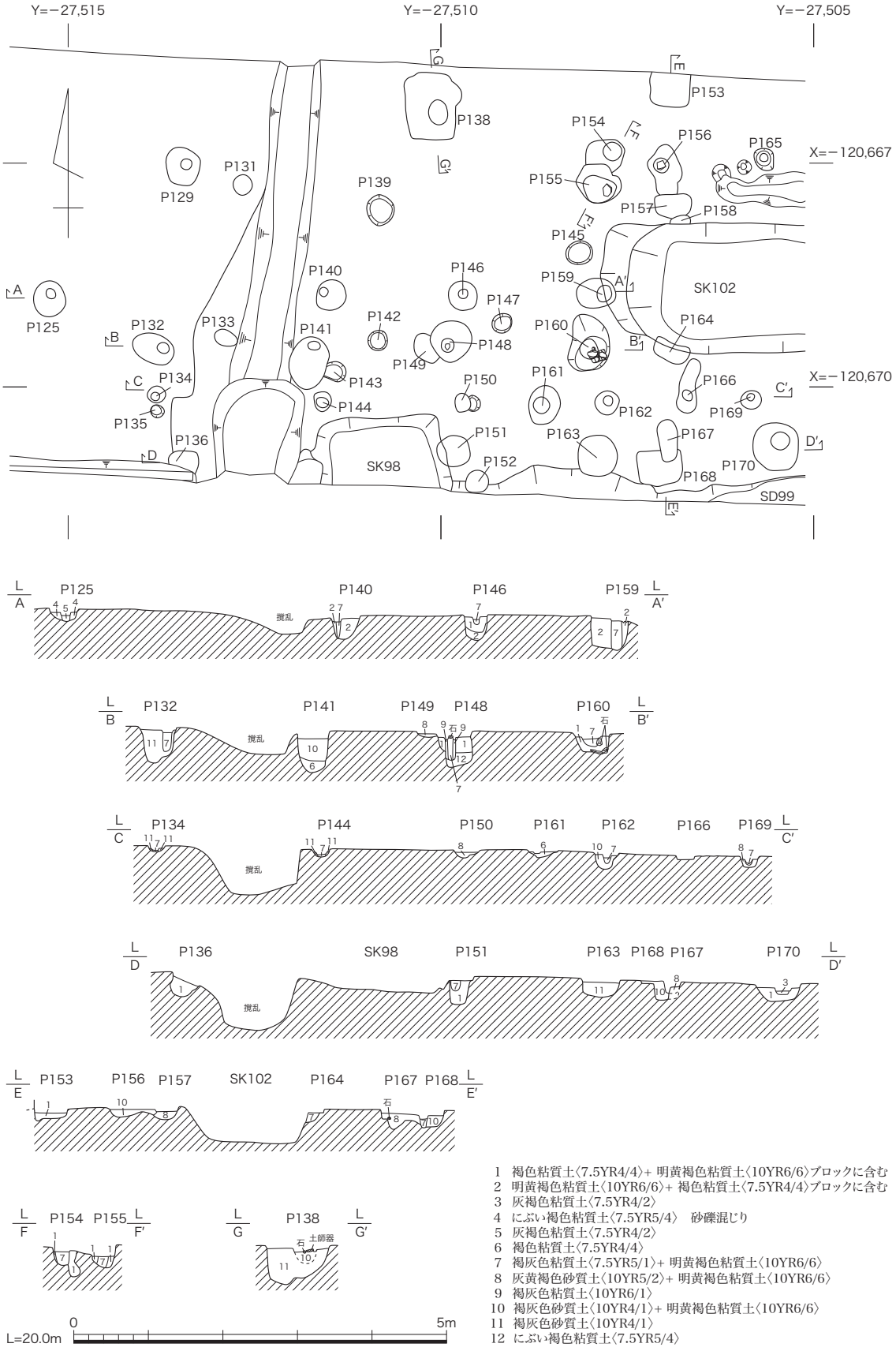
SX09下層
34 黄灰色粘土〈2.5YR6/1〉
35 にぶい赤褐色礫〈5YR4/4〉粘土混じり
36 にぶい橙色粘土〈7.5YR6/4〉鉄分含む
37 緑灰色粘土〈7.5GY6/1〉砂礫混じり
38 灰色粘土〈10Y5/1〉小礫含む
39 灰色粘質土〈10Y6/1〉
40 オリーブ灰色シルト〈5GY6/1〉
41 緑灰色粘土〈7.5GY5/1〉砂混じり
42 オリーブ灰色シルト〈5GY5/1〉
43 青灰色粘土〈5BG5/1〉砂混じり　軟質
44 オリーブ灰色粘土〈5GY5/1〉砂混じり　軟質
45 オリーブ灰色粘土〈2.5GY5/1〉砂混じり　軟質
46 緑灰色シルト〈10GY5/1〉
47 黄褐色粘土～シルト〈10YR5/6〉小礫混じり
48 にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉礫（φ1～3cm）混じり
49 褐色粘質土〈7.5YR4/3〉小礫混じり
50 褐灰色礫〈10YR5/1〉粘土混じり（φ3～8cm）
51 暗褐色粘質土〈10YR3/3〉＋　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉
52 暗褐色粘質土〈10YR3/3〉＋　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉
＋　にぶい黄褐色砂質土〈10YR5/3〉
53 褐色粘質土〈7.5YR4/3〉礫含む
54 暗褐色砂質土〈7.5YR3/3〉小礫混じり
55 暗褐色粘質土〈7.5YR3/4〉小礫混じり
56 黄褐色シルト〈2.5Y5/4〉
57 オリーブ灰色粘土〈2.5GY5/1〉砂混じり
58 灰色粘土〈10Y5/1〉砂混じり

第 131 図　6 トレンチ土層図（1/80）

堀 SX09 の西側肩は、幅 4 ～ 4.5m、深さ 0.5 ～ 0.9 mにわたって一段深く掘り込まれている（落ち込み SX101）。この状況は２トレンチ北部で部分的に確認できていたものであるが、６トレンチでは削平が少ないため、良好に看取できる。この落ち込み SX101 は堀 SX09 に向かって徐々に深くなっていて、これを含めると、溝の東西幅は約 9 m となる。堀 SX09 はこの落ち込み SX101 が存在するため、東西の肩部は 0.7 ～ 0.9 mの段差が生じる。このため堀の幅は、堀 SX09 東側の肩部上段と落ち込み SX101 内での西肩の距離で 4.5 m、落ち込み SX101 内西肩から堀の東斜面までの水平距離は約 3.5 mとなる。また堀の底までの深さは東側で 2.8 m、西側で 1.9 ～ 2.0 mである。堀の断面は逆台形を呈しており、底部は平坦で、幅は 1.2 ～ 1.4m である。これらの状況から見れば西側からの攻撃に対する防御が考慮されていたと見られる。堀内下層には底部から約 0.9 mまで、主に灰色系の粘土・シルト・砂礫を中心とした堆積が認められ（図版 25）、堀のこの付近では常時湧水があったようである。下層の直上には直径5cm前後の小礫を多く含んだ灰褐色の粘土層（32層）が堆積していて、２トレンチで確認されたのと同じく一時期はこのような埋没状況であったものと見られる。ただし６トレンチではその上面に黄褐色系の粘質土を中心とした堆積（中層）が 0.6 ～ 0.7 mの厚さで堆積していて、ほぼ落ち込み SX101 の底部付近まで埋没していたと見られる。その後、堀 SX09 と落ち込み SX101 は江戸時代頃に２トレンチと同様一気に埋め立てられているが（上層）、断面観察では東側から西側に向かって順次埋め立てられる状況が明瞭に残されている（第 131 図・図版 25 －下）。当地周辺は埋め立て後水田として利用されることとなるが、落ち込み SX101 の西肩部分を踏襲して畦畔が築かれていて（第８～ 10 層）、これにより航空写真にも明瞭に堀の痕跡が残されている。ところでこれら大量の埋め立て土は果たしてどこから用意されたものであろうか。先述した昭和 21 年米軍撮影の航空写真では、堀の痕跡と平行して堀の東側に細い土地利用の痕跡が看取される個所がある。可能性のひとつとして堀の東側に土塁状



第 132 図　落ち込み SX97 実測図（1/50）



1　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉+ 明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉ブロックに含む
2　明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉+ 褐色粘質土〈7.5YR4/4〉ブロックに含む
3　灰褐色粘質土〈7.5YR4/2〉
4　にぶい褐色粘質土〈7.5YR5/4〉　砂礫混じり
5　灰褐色粘質土〈7.5YR4/2〉
6　褐色粘質土〈7.5YR4/4〉
7　褐灰色粘質土〈7.5YR5/1〉+ 明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉
8　灰黄褐色砂質土〈10YR5/2〉+ 明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉
9　褐灰色粘質土〈10YR6/1〉
10　褐灰色砂質土〈10YR4/1〉+ 明黄褐色粘質土〈10YR6/6〉
11　褐灰色砂質土〈10YR4/1〉
12　にぶい褐色粘質土〈7.5YR5/4〉

第133図　6トレンチ各遺構実測図（1/80）

のものが存在していて、埋め戻しの土はそれを崩したものと考えられる。もう一つは東に存在する恵解山古墳の墳丘を切り崩して埋め戻しに利用した可能性である。恵解山古墳の墳丘裾は大きく削られており、その削平時期に関しては不明な点が多い。あるいは堀の埋め立て時にこれらの削平が行われたとも考えられる。いずれにせよ江戸時代末期頃には堀は完全に埋め戻され、上面を耕作土が覆うこととなる。

Ｃ．長岡京期～平安時代の遺構

調査地東半部を中心に多くの小穴が検出されているが、このうち平面形が隅円方形に近いものを長岡京期～平安時代の遺構と判断している。遺物の出土したものはある程度時期の決定ができるが、大半は不明なものが多い（第 133 図）。

小穴 P138　小穴群のうち最も北側で検出された長方形掘形のもので、検出された柱掘形では最も大きいものである。中央に柱痕を持つが、対応する柱掘形が確認できないため、単独の小穴としている。南北 0.8 m、東西 0.7m、深さ 0.5m で、柱痕は直径 0.2 ～ 0.3 mの楕円形、深さは 0.3m である。この柱痕からは比較的多くの遺物が出土していて、土師器食器類・甕、須恵器食器類、土馬などがある。長岡京期である。

小穴 P155　小穴 P138 の南東で検出された平面不整形な掘形で、すぐ北側の小穴 P154 を切っている。直径約 0.5m、深さ 0.3m で、直径 0.15m の柱痕が残る。製塩土器が出土しており、長岡京期と判断したものである。

小穴 P125・140・146・159　小穴群の中央で東西方向に並ぶ柱掘形である。平面は不整方形ないし円形を呈し、直径 0.4 ～ 0.5m、深さ 0.2 ～ 0.4m である。内部には直径 0.2 前後の柱痕が残り、柱間は西から 3.7m、1.9m、1.9 mである。柵列となる可能性もあるが東西にこれ以上延びていないため断定はできない。小穴 P146 からは土師器の皿・甕が出土しており、長岡京期と見られるものである。

小穴 P132・141・148・160　小穴群の中央やや南寄りで同じく東西方向に並ぶ柱掘形である。平面は不整円形を呈し、直径 0.3 ～ 0.7m、深さ 0.3 ～ 0.5m の比較的深い掘形を持つ一群である。柱痕は直径 0.1m と細いが、内部に石が入ったものが多い。柱間は 2.0m、1.8m、1.9 mである。長岡京期～平安時代。

小穴 P136・151・163・170　小穴群の南端で検出された東西方向の柱掘形列である。平面不整方形ないし円形を呈し、直径 0.3 ～ 0.6m、深さ 0.3 ～ 0.4m、柱間は 3.8m、2.0m、2.4 mである。遺物が少なく、長岡京期～平安時代としている。

小穴 P153・157・164・168　小穴群で唯一南北方向に並ぶ柱掘形である。近世遺構に切られているが、平面隅円方形を呈し、一辺 0.3 ～ 0.5 m、深さ 0.1 ～ 0.2m で、柱痕は明瞭に確認できなかったため柱間は不明であるが、約 1.8 m前後である。遺物はなく、柱掘形の形状から長岡京期～平安時代の範囲でとらえている。

（２）出土遺物

Ａ．江戸時代の遺物

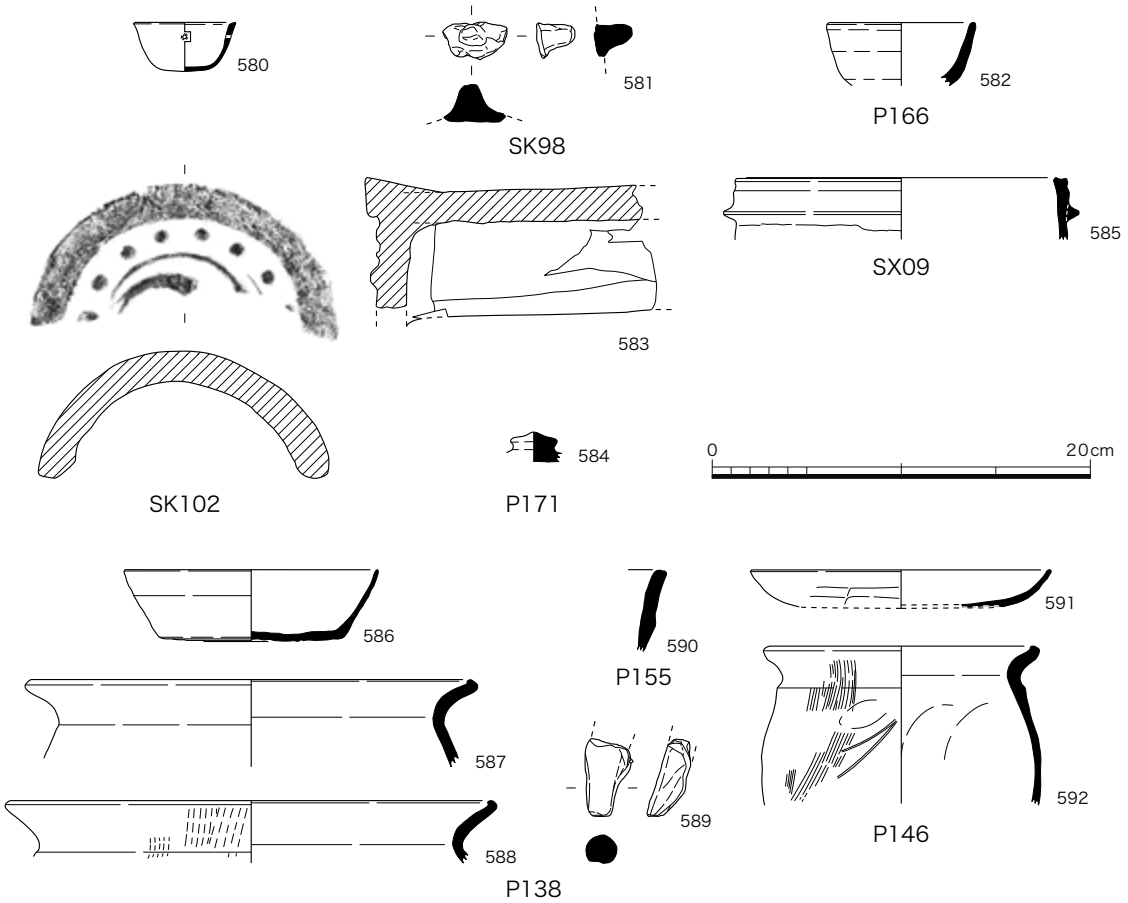
土坑 SK98・102、小穴 P166 出土遺物（第 134 図）　581 は土坑 SK98 から出土した土師質の把手ないし脚部と見られる小片である。大きさから実用品ではなくミニチュアと見られる。580 は土坑 SK102 出土の土師器ミニチュア椀で、口径 5.4 cm、器高 2.4 cm、口縁部に直径 0.1cm の穿孔がある。583 は土坑 SK102 出土の巴文の軒丸瓦で、直径 16.8 cm。582 は小穴 P166 出土の肥前系陶器椀で、口径 7.9cm、外面に灰黄色の釉がかかる。

B．戦国期の遺物

堀 SX09 出土遺物（第 134 図）　図示したのは下層出土の羽釜（585）である。直立する口縁部に短い三角形の鍔を貼り付ける。外面に炭素の吸着は認められない。口径 14.4㎝。

C．長岡京期の遺物

小穴 P138 ・146・155・171 出土遺物（第 134 図）　小穴 P138 からは須恵器杯 A、土師器甕、土馬が出土している。須恵器杯 A（586）は口径 13.4cm、器高 3.9cm で、体部は薄く仕上げる。土師器甕（587・588）は口縁部のみの破片で、口径 24.0 ～ 26.0㎝に復元される。土馬（589）は脚部の破片で、他の部分は出土していない。小穴 P146 出土の土師器皿 A（591）は口径 16.0cm で、外面をヘラケズリする c 手法。土師器甕（592）は口径 14.6cm。球形の体部を持ち、外面はハケメ調整する。これらの他に小穴 P155 からは製塩土器口縁部片（590）、小穴 P171 からは須恵器杯 B 蓋のつまみ部分が出土している。



第 134 図　6トレンチ出土遺物実測図（1/4）

7　石器・金属器

（１）石器・石製品（第 135・136 図）

今回の調査では、石器や石製品が各トレンチから出土しているが、数量的には多くない状況であった。

石器　石器には、打製石鏃、楔形石器、石核、剥片などがある。打製石鏃は、凹基式（593 ～ 595）と凸基式（596）がある。いずれもサヌカイト製で、593 は四角形、594 と 595 は二等辺三角形を呈しているが、594 は片側の逆刺を、595 は両側の逆刺を欠損している。593 ～ 595 は５トレンチ、596 は２トレンチのそれぞれ堆積層から出土した。

削器（599）と楔形石器（600）は、ともにサヌカイト製で、前者の表面は風化が顕著に認められた。いずれも５トレンチの堆積層から出土した。

石核（605）は、サヌカイト製で、半分に剥離面が認められる。新鮮面は乏しく、表面全体が風化している。

剥片（597・598・601 ～ 604・606）は、いずれもサヌカイト製で、風化しているものが多い。597・598・605・606 は２トレンチの堆積層、601 は１トレンチの堆積層、602 は溝 SD1059 から出土している。

以上の石器類は、縄文時代ないし弥生時代のものであろうが、今回の調査では縄文土器や弥生土器は出土しておらず、ましてや遺構の存在も何ら確認されていない。

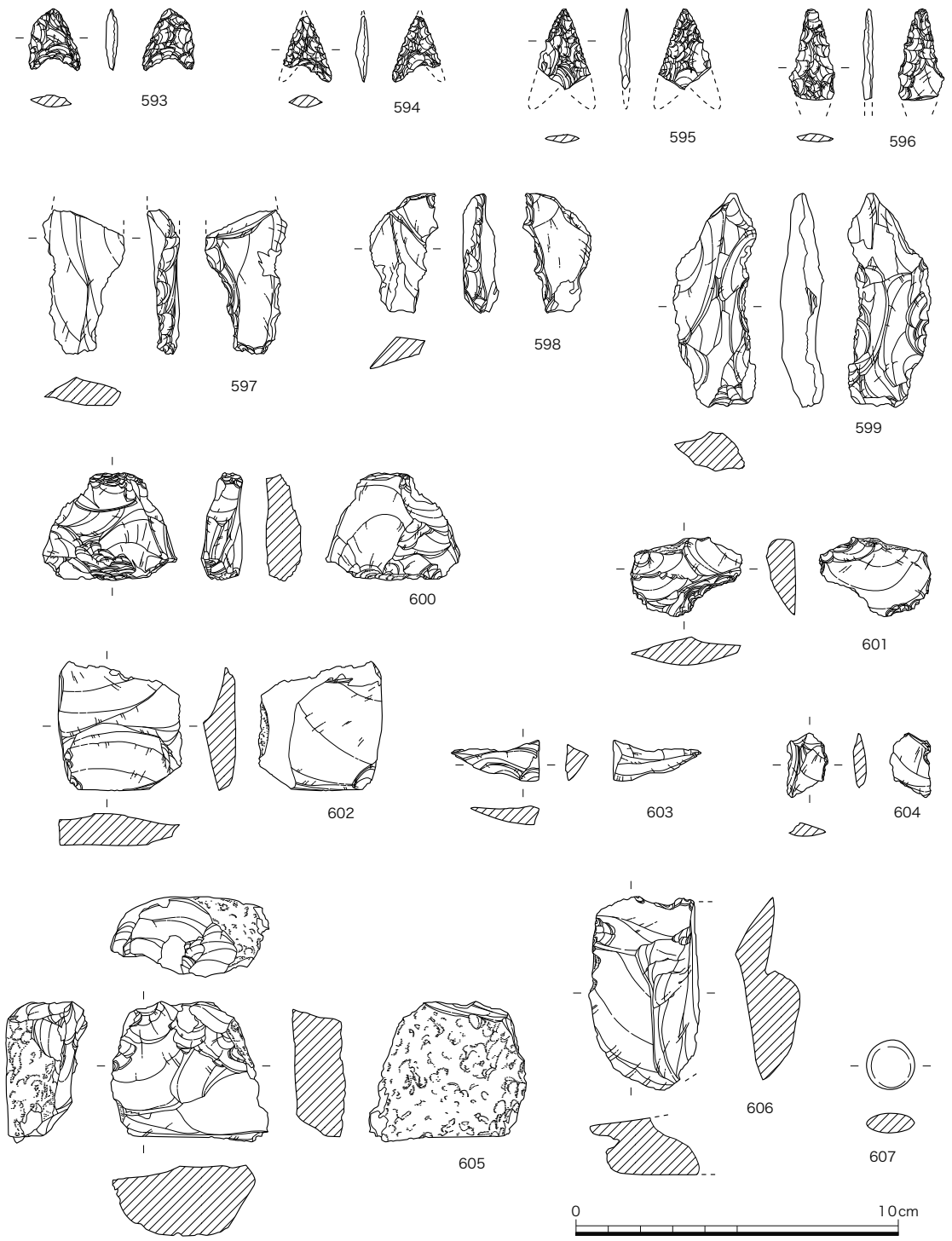
石製品　石製品には、砥石、水晶玉などがある。砥石（608 ～ 614）は、大小様々なものがある。608 は、４面に使用痕が認められる大型品で、砂岩製と考えられ、井戸 SE116 上層から出土。609 も、井戸 SE116 上層から出土したもので、使用痕の認められる面は３面ある。610 と 612 は石材が同じで、612 は短測の１面のみに使用痕が認められた。610 は井戸 SE636 の下層、612 は溝 SD90 からの出土。611 は、扁平な１面のみに使用痕があり、井戸 SE83 の上層から出土。613 は、砂岩製とみられ、６面ともに使用痕が認められた。６トレンチの小穴 P160 から出土した。614 は、611 と同じ石材で、使用痕は１面認められた。５トレンチの小穴 P1368 から出土した。

水晶玉（607）は、中央部がやや膨らんだ正円に近い形態で、表面は比較的滑らかに仕上げられている。半透明で、穿孔はなく、５トレンチの堆積層から出土しているため、明確な時期を押さえられない。

（２）金属製品（第 137・138 図）

各トレンチから金属製品が出土しているが、その数量はそれほど多くはなかった。金属製品は、銅製品、鉄製品、鉛製品などその材質によって分けることができ、遺構に伴うものと堆積層から出土したものがある。

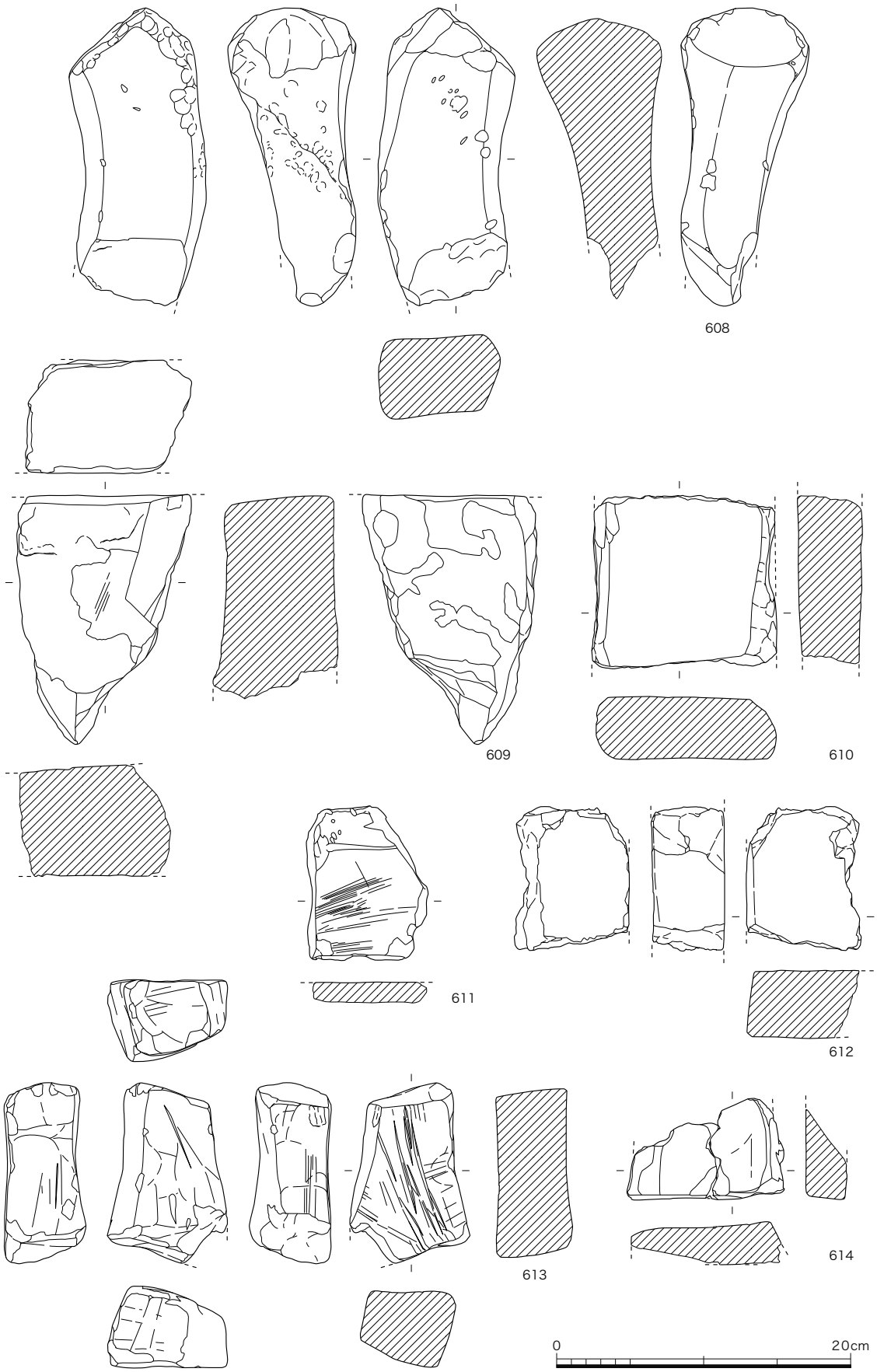
銅製品　銅製品は、銭貨とその他の製品に分けることができる。銭貨は、和同開珎（636）と神功開寶（637）、寛永通寶（638）がある。いずれも残存状況は良好ではなく、緑錆に覆われた



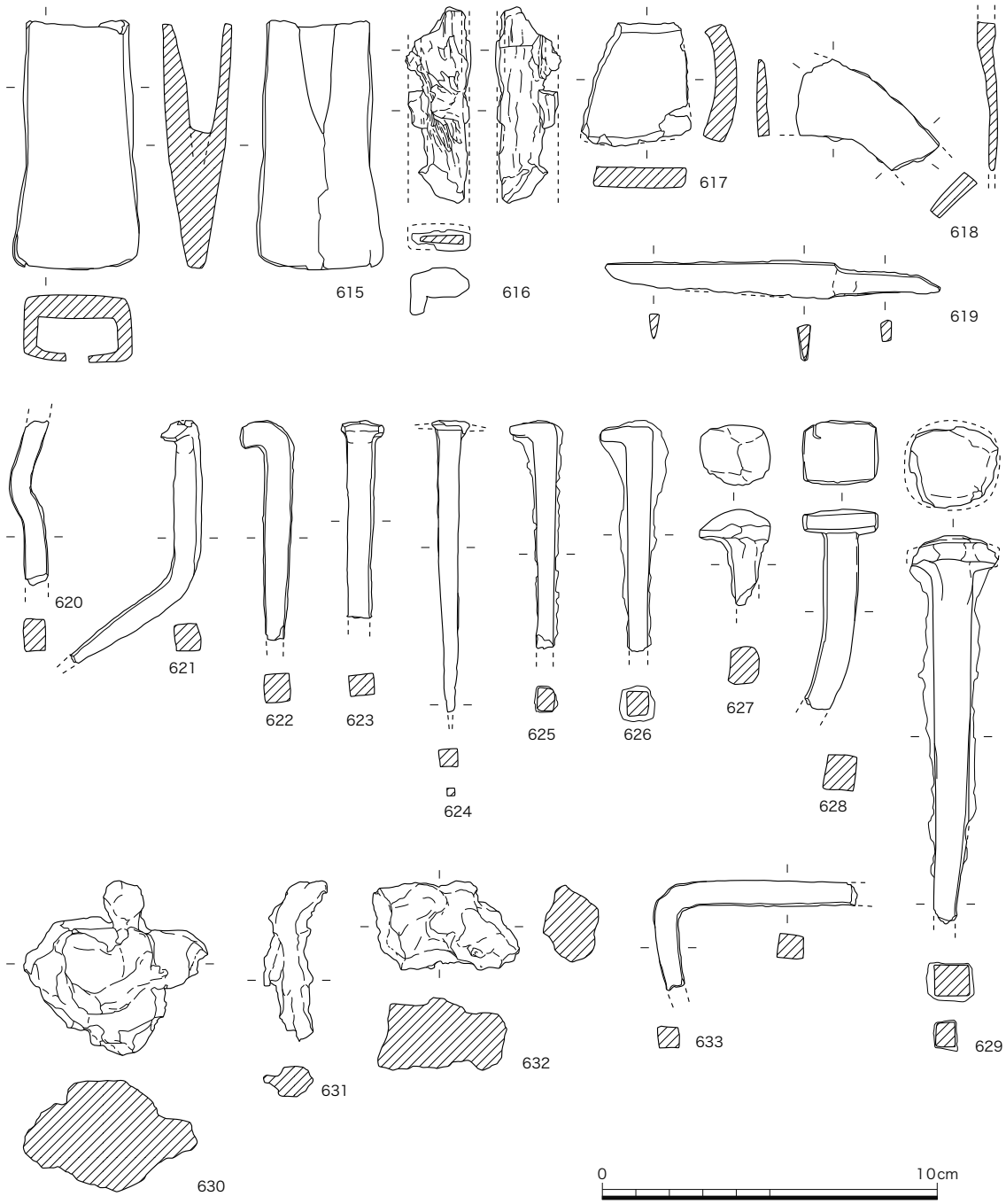
第 135 図　石器・石製品実測図（1/2）

状態であった。和同開珎、神功開寶はともに径が約 2.4cm であり、２トレンチの井戸 SE114 から長岡京期の土師器、須恵器などと共に出土した。寛永通寶は、４トレンチの南北溝 SD403 から出土したもので、残存する径は約 2.2cm である。

634 は、車輪状の形態をなす製品で、外径は約 7.1cm、内径は約 4.8cm あり、外縁部には 1.3cm 程度の間隔で小孔が開けられていた。２トレンチの井戸 SE122 から出土したもので、襖の引き



第 136 図　石製品実測図（1/4）



第 137 図　鉄製品実測図（1/2）

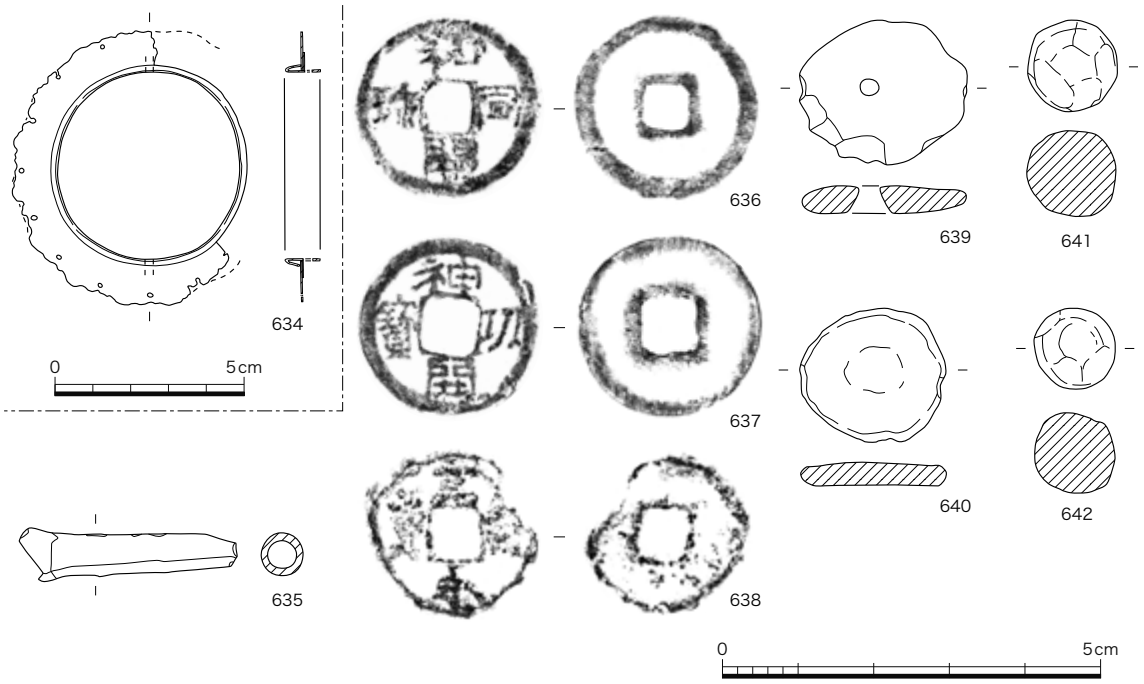
手ではないかと考えられる。時期は、江戸時代に比定することができる。

635 は、キセルの吸い口と考えられる筒形の破損品である。堀 SX09 の上層から出土したもので、江戸時代のものであろう。

鉄製品　鉄製品には、斧、刀子、釘、鎌、鎹などがある。

斧（615）は、着柄部が袋状をなすいわゆる有袋鉄斧である。袋部は長方形で、裏面には合わせ目を有する。5 トレンチの 1 層から出土しているため、明確な時期を決めかねる。

刀子（619）は、全長が 10cm 程度の小型品である。関の形状は刃部と峰の両側にある両関式で、



第 138 図　銅製品・鉛製品実測図（1/1・1/2）

柄は断面長方形、目釘の孔は確認できなかった。井戸 SE636 の上層から出土したもので、平安時代の所産と考えることができる。

溝 SD1122 から出土した 618 は、鎌の柄から刃部にかけての破片と考えられるものである。長岡京期のものであろう。

釘（620 ～ 629）は、すべて断面が四角い角釘で、小型品（620 ～ 626）と大型品（627 ～ 629）とに分けることができる。小型品は、L 字状に折り曲げて頭部を形成した折頭釘で、頭部、脚部とも大きさは変わらない。溝 SD84 から出土した 620 と掘立柱建物 SB91 の柱掘形 P10 から出土した 624 は、長岡京期の可能性が濃厚である。また、622 は堀 SX09、623 は土坑 SK1273 から出土している。これに対して、大型品は方頭釘（628・629）と円頭釘（627）があり、627 と 628 は 5 トレンチの堆積層、629 は 5 トレンチの小穴 P1369 から出土した。いずれも明確な時期の決め手に欠ける。

鋲（633）は、断面が方形の棒をコの字状に折り曲げたもので、620 と同じく掘立柱建物 SB91 の柱掘形 P10 から出土した。長岡京期に比定できるであろう。

630・631 は、溝 SD1121 から出土した鉱滓と考えられるものである。この溝からは、坩堝ないし取瓶と考えられる遺物も出土しているので、金属製品の生産をうかがい知る遺物との評価が可能になろう。

鉛製品　最後に鉛製品については、銃弾と用途が不明な製品がある。銃弾（641・642）は、ともに火縄銃の弾と考えられる製品である。球形に近い形態をなしているが、表面は平滑ではなく、細かい面状になっている。小型品の割には重量感があり、641 は 5 トレンチの撹乱坑から、642 は 4 トレンチの土坑 SK698 から出土したものである。

639・640 は、ともに扁平な円盤状の形態をなしている。平面はいびつな楕円形を呈しており、639 の中央部近くには円孔が穿たれていた。重量が先に述べた銃弾と大きな差がないため、銃弾を打ち叩いて扁平な形態にしたものとも考えられるが、確証はなく、またその用途も不明といわざるを得ない。639 は 1 トレンチの溝 SD30、640 は試掘トレンチ 3 から出土したものである。

第３章　ま と め

今回の調査では主に江戸時代、戦国期、平安時代、長岡京期の遺構・遺物が検出され、多くの成果を得ることができた。以下時代ごとに主な遺構について述べておきたい。

１　江戸時代

江戸時代後期の遺構には建物・柵・土坑・井戸等がある。建物は２トレンチ南半部と４トレンチ南半部で検出された南北方向の総柱建物があり、東西・南北方向の柵列が伴っている。建物の密度は高くないが、柵列などを合わせると広範囲に土地利用がなされていたことが判明する。ただそれぞれの具体的な性格については不明である。その後に周辺一帯は耕作地が広がるようで、井戸・水溜などが多く検出されている。このうち最も注目される遺構として、土管を埋設した井戸と溝を組み合わせた灌漑施設があげられる。これは数基の井戸同士を地下約３ｍに埋設した土管でつないだもので、湧水の見られる井戸と、汲み上げ用の井戸があり、これらを地下の土管でつなぐことによって複数個所での汲み上げを意図したものと考えられる。調査地内では２トレンチと１トレンチで確認されているが、西側の３～５トレンチと北側の６トレンチでは確認できない。ただ１トレンチで検出された土管埋設遺構 SX39 と２トレンチで検出された土管埋設遺構 SX52 はともに東側に延びていて、現在の JR 東海道線の下になっている。このことから東側にも同様の施設が広がることは確実であり、さらにこれが鉄道建設以前のものであることも判明する。またこれらの施設は堀 SX09 が埋め立てられ、周辺が水田化された後に作られていて、出土した遺物からも江戸時代末頃のものと考えられる。当地周辺は水の便が悪く、土管埋設遺構以外にも多くの灌漑用の円形井戸と水溜が存在しているが、その中でも極めて特異な施設といえる。土管を使った施設には水道や排水管として埋設したものが知られ、乙訓地域でも数例の出土がある。しかしこのような地下約３ｍに埋設した施設はいまのところなく、他の地域における類例も寡聞にして知らない。はたしてこれだけの手間と費用をかけただけの効果がどれほど得られたかは疑問であるが、先人の苦労が忍ばれる遺構である。なお今回出土した土管のうち、長いタイプのものには「ヤマカ」と「カネセン」の屋号の墨書が確認されていて、今後これらの店について何らかの手がかりが得られる可能性も残されている。

２　戦国期

２トレンチと６トレンチで検出された南北方向の堀 SX09 は今回の調査で初めてその存在が明らかとなったものである。今回の調査では合わせて 68m 分が検出されているが、航空写真の痕跡から約 400 m近くの長さがあったと推定される。堀は幅約４ｍ、深さは約２ｍで、これを大規模とみるか、小規模とみるかは意見の分かれるところであるが、いずれにせよ形状から防御的な性格を持つものであることは間違いない。堀は北部に行くにつれ深くなり、西側の肩も一段深く、広くなっている（SX101）。この状況から見れば西側からの防御を意識したことは明らかで、

堀の東側に防御すべきものが存在したのであろう。次に堀の作られた年代であるが、堀内から出土した遺物のうち下層出土のものは量が少なく、古墳時代の埴輪片、飛鳥時代の瓦片、長岡京期、平安時代の土器片、戦国期（16 世紀末～ 17 世紀初頭頃）の土器片などが出土している。現状ではこれらの遺物のうち戦国期のものが堀の年代を示すものと考えている。問題となるのはその性格であるが、検出遺構でも述べたごとくこの堀の位置は調子と久貝の境にもあたり、地域間における争いの遺構という見解もある。ただ現段階では出土遺物から 16 世紀末～ 17 世紀初頭とみられること、調査地のすぐ東側にある恵解山古墳は後円部が曲輪状に改変されていて[28]、ここが山崎合戦（1582 年）の際に明智光秀の本陣が置かれた「おんぼう塚」にあたるとみられること、恵解山古墳の南約 400 mにある境野 1 号墳は江戸時代の絵図から、おなじく山崎合戦において明智方の津田与三郎の陣が置かれた可能性があり[29]、古墳の南西部では今回検出された堀と同形態の堀が見つかっていて[30]、一連の遺構の可能性があることなどから山崎合戦に関連する遺構ではないかと考えている。もちろん今後も検討が必要であることは言うまでも無い。

また堀の最下層から出土した木簡と掛矢も注目すべき遺物である。3 点出土した木簡のうち、文字の書かれたものは 2 点であったが、残念ながら判読できなかった。この木簡は非常に長く、その上端部分にのみ墨書されるという特徴を持っている。同じような特徴を持った木簡に神奈川県鎌倉市北条小町邸跡出土のものがあり[31]、これは若宮大路側溝の普請に伴い工事区間の割り当てを表示するために、地面に刺して使用したものとみられる。したがって今回出土の木簡も堀の掘削に関する工事区間の割り当てを表示した可能性が考えられる。事実、堀の南部では掘削単位を示すような痕跡が認められ、可能性は高いとおもわれる。また同時に出土した掛矢は堀の掘削作業に使用された道具のひとつとみられるが、全国的に出土例が少ないものであり、戦国期の遺物として貴重な成果といえよう。

3　平安時代

掘立柱建物、井戸などが検出されている。主に井戸内出土遺物から 9 世紀初頭～前半とみられるものと 9 世紀後半～末頃のものに大別できる。このうち掘立柱建物は 2・4・5 トレンチで検出されているが、いずれも規模の小さなものが大半で、大型のものや規則的に配置されたような遺構は確認できていない。また建物は遺物が少ないため、長岡京期との区別は困難なものがある。井戸は 2 トレンチで 2 基検出されており、南西部で検出された井戸枠を持たない井戸 SE83 では下層から 9 世紀初頭の遺物が、井戸廃絶時の最終的な埋土から 9 世紀後半～末頃の遺物が出土している。当地周辺は第 3 次山城国府の推定地のひとつであり[32]、当調査地の東側一帯においてそれに関連するとみられる遺構・遺物が多数検出されている。このうち当調査地の南西約 200 mで行われた右京 812 次調査では[33]、整地土内から大量の緑釉陶器が出土しており、1099 点の破片数はもちろん乙訓地域では最多であり、土師器を除く小型供膳形態の比率 34.8% も平安京内でのあり方に匹敵するものであった。また遺物の時期も 9 世紀後半～末頃のものであり、今回検出された井戸廃絶時期のものと一致している。

第３次山城国府は延暦 16（797）年に長岡京の南に移転し、その後貞観３（861）年〜延喜８（908）年に大山崎の河陽宮に移転（第４次山城国府）することが文献によって知られているが、今回検出された井戸 SE83 廃絶時期の出土遺物や他の遺構の遺物の年代、さらに右京 812 次調査出土遺物の年代は山城国府が河陽宮に移転する時期に相当する。このように考えると９世紀初頭〜前半の遺物は第３次山城国府移転時のもので、９世紀後半〜末頃の遺物は第４次山城国府移転時に廃棄されたものと考えられよう。したがって他の平安時代の遺構群も第３次山城国府に関連する遺構の可能性が高いとみられる。周辺の調査成果と合わせ、遺構の広がりや遺構の時期的な変遷など解明すべき課題も残されている。

４　長岡京期

１・２・４・５トレンチから掘立柱建物、柵、井戸、溝などが検出されている。このうち２・４・５トレンチでは、長岡京期の遺構にも前後関係が認められることからやや複雑な様相を呈しており、今後検討すべき課題は残されている。長岡京期の遺構で注目されるのは、２トレンチで検出された内部に円形穴を持った掘立柱建物 SB88 とそれを囲む区画溝群である。掘立柱建物 SB88 は内部に 22 基の円形穴を持つが、これは須恵器大甕を据えた痕跡とみられ、酒などの醸造を行っていたとおもわれる[34]。今回の調査では直接据えられた状態ではなかったものの、掘立柱建物 SB88 の西側にある区画溝 SD84 からはほぼ完形に復元できる須恵器大甕が出土した。おそらく掘立柱建物 SB88 に据えられていた甕を移動する際に破損・破棄されたものとみられるが、全容が判明する珍しい例である。口縁部の特徴から陶邑窯の製品で[35]、長岡京に供給されていた須恵器の生産地が明らかとなったのも貴重な成果である。また同時に出土した墨書土器には「米」と記されたものが二点あり、これも酒造りを行っていたことを示す遺物といえるだろう。

ところで当調査地の西側で 1986 年に行われた右京第 217 次調査では[36]、南北３間、東西 10 間、南に１間の廂を持つ長大な東西棟建物が見つかり、中央で間仕切りされた建物内部から 51 個もの円形穴が検出された（第９図）。この建物は長岡京内で見つかっている甕据え付け穴を持つ建物としては最大規模のもので、今回検出された建物と合わせると少なくとも２棟の甕据え付け穴を持った建物が右京八条二坊七町に存在したことになる。２棟の円形穴を合わせると 73 基となり、長岡京内で検出された中では一町内での最大の数となる。また５トレンチでの区画溝のあり方や、右京第 217 次調査で見つかった長大な建物と柱筋を揃えた建物、柵列が南側に存在することなどから、さらにもう１棟の甕据え付け穴を持った建物の存在も推定される。また南側の右京八条二坊六町（４トレンチ）においては、長岡京では最大規模の井戸が見つかっており、この井戸の水が酒の醸造に使用されていた可能性も考えられる。調査地内では八条条間小路と西二坊坊間東小路の側溝が検出されておらず、あるいは南北の六・七町ないしは東側の二町をも合わせた広い範囲でこれら醸造施設群が存在した可能性もあろう。このような施設が右京八条二坊という都の南辺に作られた理由としては、ここが醸造に適した水が得られる場所、また酒を運搬するための交通の利便性などが関連したものかもしれない。今後の検討課題としておきたい。

注１）恵解山古墳についての文献は多岐に及ぶが、以下の文献を代表として揚げておきたい。
長岡京市教育委員会『長岡京市報告書』第 62 冊　2012 年
２）岩﨑　誠「右京第 39 次調査概要」『長岡京市報告書』第 11 冊　1983 年
３）岩﨑　誠「右京第 121 次調査概要」『長岡京市センター報告書』第 1 集　1984 年
４）原　秀樹「右京第 570 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 9 年度　1999 年
５）岩﨑　誠「右京第 955 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 20 年度　2010 年
６）岩﨑　誠「右京第 473 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 6 年度　1996 年
７）原　秀樹他「右京第 964 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 20 年度　2010 年
８）木村泰彦「右京第 587 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 9 年度　1999 年
９）注 7 に同じ
10）岩﨑　誠「右京第 94 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 57 年度　1983 年
11）木村泰彦「右京第 812 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 16 年度　2006 年
12）岩﨑　誠「右京第 121 次調査概要」『長岡京市センター報告書』第 1 集　1984 年
13）小田桐　淳「右京 272 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 62 年度　1989 年
小田桐　淳「長岡京跡右京第 272 次調査」『長岡京市センター資料選』三　2013 年
14）木村泰彦他「右京第 139 次調査概要」『長岡京市センター報告書』第 2 集　1985 年
15）原　秀樹「右京第 530 次調査概要」『長岡京市センター報告書』第 13 集　1999 年
16）木村泰彦「右京第 419 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 4 年度　1994 年
17）注 11 に同じ
18）木村泰彦「右京第 453 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 5 年度　1995 年
19）山本輝雄他「右京第 95 次調査概要」『長岡京市センター報告書』第 1 集　1984 年
20）山本輝雄「右京 128 次調査概報」『長岡京市センター年報』昭和 58 年度　1984 年
21）山本輝雄「右京第 429 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 5 年度　1995 年
22）岩﨑　誠「右京第 430 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 5 年度　1995 年
23）木村泰彦「右京第 217 次調査略報」『長岡京市センター年報』昭和 63 年度　1987 年
24）試掘調査の成果に関しては、以下の文献で報告している。
木村泰彦「右京第 1019 次調査概報」『長岡京市センター年報』平成 22 年度　2012 年
25）岡　陽一郎「神奈川県・北条小町邸跡」木簡学会『木簡研究』第 18 号　1996 年
26）注 23 に同じ
27）注 23 に同じ
28）注 1 に同じ
29）大山崎町歴史資料館『第 10 回企画展　山崎合戦』展示図録　2002 年
30）久保哲正「右京第 15 次調査報告」『長岡京跡発掘調査研究所調査報告書』第 1 集　1979 年
31）注 25 に同じ
32）中川和哉「第 3 次山城国府に関する新提言」『長岡京古文化論叢Ⅱ』1992 年
33）注 11 に同じ
34）木村泰彦「甕据え付け穴を持つ建物について」『瓦衣千年』森郁夫先生還暦記念論文集　1999 年
35）木村理恵「藤原宮期の須恵器供給体制に関する研究」『文化財論叢Ⅳ』奈良文化財研究所学報　第 92 冊　2012 年
36）注 23 に同じ

付表－２　１トレンチ出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	皿	1	8.9	2.4	－	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ外面：ナデ（e手法）	SX39	口縁端部に油煙付着
磁器	碗	2	11.2	6.8	4.4	釉：オリーブ灰色	内外面：施釉、外面：削り出し高台	SX39	染付
陶器	皿	3	13.1	3.25	5.0	灰白色	内外面：施釉、外面：削り出し高台	SX39	目痕が２ケ所残存唐津焼
	擂鉢	4	24.6	(9.0)	－	灰褐色	内外面:ヨコナデ、内面:スリ目、外面:オサエのちヨコナデ	SX39	丹波焼
土師器	皿	5	11.4	2.0	－	橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ外面：ナデ（e手法）	SA46 P25	
陶器	水差	6	11.8	6.45	－	釉：灰オリーブ色、素地：にぶい赤褐色	内外面:施釉、内面:ロクロナデ、外面:下半部回転ケズリ	SK48	把手剥離
	椀	7	9.8	(5.8)	－	釉：灰白色、素地：淡黄色	内外面：施釉、ロクロナデ	SK48	
須恵器	杯A	8	13.6	3.55	－	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SX42	
		9	13.8	3.65	－	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SX42	
須恵器	杯B蓋	10	(3.6)	(1.4)	－	黄灰色	内面：ナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SX43	つまみ部
土師器	杯B蓋	11	(2.8)	(1.6)	－	浅黄橙色	内面：ナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SX43	つまみ部
製塩土器		12	11.0	(4.0)	－	にぶい橙色	内面：ナデ	SX43	
須恵器	杯B蓋	13	14.9	(1.55)	－	灰白色	内外面：ロクロナデ	SB37 P10 柱痕跡	
		14	16.0	(1.05)	－	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SB37 P10 柱痕跡	
	壺L	15	9.1	(6.2) (5.1)	8.8	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：底部ナデ外面：ナデ	SB37 P10 柱痕跡	
土師器	甕	16	20.3	24.0	－	橙色	内面:ハケ、ナデ、ハケ、外面:ヨコナデ、ハケ	SX36	蔵骨器
	皿	17	22.1	2.6	－	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：螺旋状暗文、放射状暗文、外面：ケズリ（c手法）	SX36	蔵骨器蓋
	椀	18	13.9	(2.0)	－	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SK44	
		19	15.0	(1.8)	－	灰白色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SK44	
		20	17.0	3.0	－	橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SK44	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	甕	21	27.0	(9.7)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SX38	
		22	32.0	(20.7)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：摩滅の為調整不明	SX38	

付表－3　2トレンチ出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土製品	土管	23	17.2	64.9	内径9.8	明赤褐色	内面：タテ方向のナデ、ヨコ方向のナデ、外面：ケズリ、ヨコナデ、ナデ、ケズリのちナデ	SX52	陶製　側面に「ヤマカ」の墨書
		24	17.8	67.65	内径10.1	にぶい赤褐色	内面：タテ方向のナデ、ヨコ方向のナデ、外面：ケズリ、ヨコナデ、ナデ、ケズリのちナデ	SX52	陶製
土師器	皿	25	6.1	1.0	–	浅黄橙色	内外面：ナデ	SE122	
陶器	壺	26	–	(8.3)	9.7	釉：灰褐色、素地：灰白色	内外面：施釉	SX123	外面底部に目痕5ヵ所
土製品	土人形	27	(3.2)	(4.7)	(2.0)	にぶい橙色		SX52	
磁器	広東椀	28	11.2	6.8	5.8	釉：灰色、素地：灰白色	内外面：施釉、外面：高台に釉ハギ	SX52	染付
土製品	土管	29	17.1	64.15	内径10.0	にぶい橙色	内面：タテ方向のナデ、ヨコ方向のナデ、外面：ケズリ、ヨコナデ、ナデ、ケズリのちナデ	SE55	陶製　側面に「カネセン」の墨書
		30	17.1	63.5	内径10.1	明赤褐色	内面：タテ方向のナデ、ヨコ方向のナデ、外面：ケズリ、ヨコナデ、ナデ、ケズリのちナデ	SE55	陶製
磁器	鉢	31	–	(5.0)	8.2	釉：灰白色、素地：灰白色	内外面：施釉	SE55	染付
陶器	徳利	32	4.6	25.6	8.2	外面釉：灰白色、内面釉：黒褐色、素地：灰白色	内外面：ロクロナデ、施釉	SE55	
土製品	土管	33	10.4	25.7	内径8.8	灰色	内面：縄目、ヨコ方向のケズリ、外面：ヨコナデ、タテ方向のケズリ	SX54	瓦製
		34	10.0	25.7	内径8.7	暗灰色	内面：縄目、ヨコ方向のケズリ、外面：ヨコナデ、タテ方向のケズリ	SX54	瓦製
		35	9.7	25.6	内径8.7	暗灰色	内面：縄目、ヨコ方向のケズリ、外面：ヨコナデ、タテ方向のケズリ	SX54	瓦製
		36	10.0	25.8	内径8.7	暗灰色	内面：縄目、ヨコ方向のケズリ、外面：ヨコナデ、タテ方向のケズリ	SX54	瓦製
土師器	皿	37	6.5	1.8	–	橙色	内面：ナデ、外面：オサエのちナデ	SX09 4区 上層	
		38	7.2	1.65	–	浅黄橙色	内面：ナデ、外面：オサエのちナデ	SX09 4区 上層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土製品	土製円板	39	(3.35)	5.1	1.8	淡黄色		SX09 3区 上層	
陶器	天目茶碗	40	12.4	(5.6)	–	釉：極暗赤褐色、素地：淡黄色	内外面：施釉	SX09 4区 上層	瀬戸・美濃産
白磁	盃	41	8.7	4.0	3.7	釉：にぶい黄橙色、素地：灰白色	内外面：施釉、外面：削り出し高台	SX09 2区 下層	高台内に「十」の墨書
瓦器	湯釜	42	22.6	(4.4)	–	内面：にぶい黄橙色、外面：黄灰色	内外面：ナデ	SX09 2区 下層	
陶器	擂鉢	43	–	(2.45)	10.0	灰褐色	外面：ナデ	SK27	
	皿	44	12.3	3.2	4.7	灰色	内外面：施釉、外面：削り出し高台	SK27	唐津焼
	天目茶碗	45	–	(1.3)	4.0	暗褐色	内外面：施釉、外面：削り出し高台	SK27	高台に目痕３ヵ所
	皿	46	13.1	(2.9)	–	釉：灰色、素地：にぶい黄橙色	内外面：施釉、外面：ケズリ	SX89	唐津焼
		47	14.0	(2.7)	–	釉：灰色、素地：にぶい橙色	内外面：施釉	SX89	唐津焼
		48	13.7	3.75	5.05	釉：灰白色、素地：にぶい橙色	内外面：施釉、外面：削り出し高台	SX89	唐津焼 目痕３ヵ所
	天目茶碗	49	11.2	(6.1)	–	釉、素地：灰白色	内外面：施釉	SX89	
		50	10.7	7.25	4.6	釉：にぶい赤褐色、素地：灰白色	内外面：施釉、外面：削り出し高台	SX89	糸切り
磁器	碗	51	–	(3.0)	4.5	釉：灰白色、素地：灰白色	内外面：施釉	SE105	肥前産 染付
陶器	皿	52	–	(1.9)	4.8	釉：灰白色、素地：にぶい橙色	内外面：施釉	SE105	唐津焼 内面に目痕
土師器		53	12.0	1.9	–	淡橙色	内外面：ヨコナデ	SE107	口縁端部に油煙付着
緑釉陶器		54	–	(1.5)	7.9	釉：うぐいす色、素地：灰色	内外面：ロクロナデ、施釉	SE107	山城産
瓦	軒平瓦	55	(23.3)	(12.9)	4.1	灰色	凹面：ヨコ方向のナデ、凸面：ヨコ方向のナデ、瓦当貼り付け時のナデ	SE71	
		56	(6.1)	(16.8)	4.6	灰色	凹面：タテ方向のナデ、凸面：タテ方向のナデ、瓦当貼り付け時のナデ	SE71	
		57	(11.8)	(14.5)	4.7	灰色	凹面：ヨコ方向のナデ、凸面：ヨコ方向のナデ、瓦当貼り付け時のナデ	SE71	
		58	(6.7)	(10.2)	4.4	暗灰色	凹面：ヨコ方向のナデ、凸面：ヨコ方向のナデ、瓦当貼り付け時のナデ	SE71	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
瓦	軒平瓦	59	(10.4)	(17.0)	(5.1)	暗灰色	凹面：ヨコ方向のナデ、凸面：ヨコ方向のナデ、瓦当貼り付け時のナデ	SE71	
		60	(7.5)	(12.5)	4.6	暗灰色	凹面、凸面：タテ方向のケズリのちヨコ方向のナデ、凸面：瓦当貼り付け時のナデ	SE71	
		61	(2.35)	–	–	暗灰色		SE71	
		62	(9.6)	(4.1)	(1.9)	浅黄橙色	内面：ナデ	SK108	
木製品	掛矢	63	83.0	28.3	15.0			SX09 4区 最下層	頭部：杉 柄：樫
	木簡	64	(37.2)	2.5	0.5			SX09 4区 最下層	
		65	36.2	2.5	0.5			SX09 4区 最下層	
		66	(15.8)	2.5	0.5			SX09 4区 最下層	
土師器	椀	67	14.0	2.9	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：オサエのちナデ（e手法）	SE83 上層	
		68	14.1	3.2	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：体部未調整（e手法）	SE83 上層	
		69	14.2	2.8	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：オサエのちナデ（e手法）	SE83 上層	
	杯A	70	15.0	2.8	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：体部未調整（e手法）	SE83 上層	
		71	15.4	(3.8)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：体部未調整（e手法）	SE83 上層	
		72	16.0	4.0	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：体部未調整（e手法）	SE83 上層	
		73	16.1	3.4	–	黄橙色	内外面：摩滅の為調整不明	SE83 上層	
	皿A	74	14.2	2.2	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：体部未調整（e手法）	SE83 上層	
		75	17.0	1.9	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：ナデ（e手法）	SE83 上層	
	杯B	76	16.5	4.55	8.8	橙色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：ケズリ、ケズリのちナデ（c手法）	SE83 上層	
黒色土器	杯A	77	16.0	(3.9)	–	内面：黒色、外面：にぶい黄橙色	内面：ミガキ、外面：ヨコナデ、ケズリ	SE83 上層	A類
		78	16.2	3.85	–	内面：黒色、外面：にぶい橙色	内面：ヘラミガキ、外面：ケズリのちミガキ	SE83 上層	A類

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
黒色土器	甕	79	17.6	(11.9)	–	黒色	内面:ミガキ、ケズリのちミガキ、外面:ヨコナデ、ケズリのちミガキ	SE83 上層	B類
土師器	甕A	80	14.2	(4.2)	–	橙色	内外面：摩滅の為調整不明	SE83 下層	
		81	19.4	(7.3)	–	明赤褐色	内面:ヨコナデ、ナデ、外面:ヨコナデ、オサエのちナデ	SE83 上層	河内産
		82	26.0	(9.3)	–	にぶい橙色	内面：ハケ、ナデ、外面：ヨコナデ、ハケ	SE83 上層	
	甕	83	26.2	24.6	–	橙色	内面：ハケ、オサエのちナデ、外面：ヨコナデ、ハケのちヨコナデ、ハケ	SE83 上層	河内系 外面に煤付着
		84	–	(14.3)	–	橙色	内面：ナデ、外面：ハケ	SE83 上層	
	高杯	85	–	(14.7)	–	褐色	内面：ナデ、外面：ミガキ	SE83 上層	
土製品	ミニチュア甕	86	5.0	(1.9)	–	橙色	内外面：摩滅の為調整不明	SE83 上層	
		87	5.7	3.9	–	橙色	内外面：ヨコナデ、オサエのちナデ	SE83 上層	
土師器	竈	88	22.0	(5.2)	–	赤褐色	内面：ナデ、外面：ヨコナデ	SE83 上層	被熱により赤色化
	鍋	89	42.0	(7.0)	–	橙色	内面:ハケのちヨコナデ、ハケ、外面:ヨコナデ、ハケ	SE83 上層	
須恵器	杯A	90	13.3	3.1	8.0	灰白色	内外面：ロクロナデ	SE83 上層	
	杯B	91	12.2	4.1	7.85	灰色	内外面：ロクロナデ	SE83 上層	口縁部に漆付着
		92	14.0	4.4	9.8	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SE83 上層	
	壺	93	–	(4.7)	7.4	灰白色	内外面：ロクロナデ	SE83 上層	外面に自然釉付着
	壺L	94	–	(7.6)	7.6	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：糸切り	SE83 上層	外面に自然釉付着
	壺M	95	–	(8.2)	4.05	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：回転糸切り	SE83 上層	
緑釉陶器	火舎	96	–	(2.2)	–	外面：うぐいす色、素地：灰白色	内面:摩滅の為調整不明、外面:ミガキ、施釉	SE83 上層	
		97	(8.85)	(7.85)	(1.2)	外面：うぐいす色、素地：灰白色	内面:摩滅の為調整不明、外面:ミガキ、施釉	SE83 上層	
	皿	98	13.1	(2.3)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、施釉	SE83 上層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	壺L	99	–	(5.0)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE83上層	
		100	–	(2.9)	6.15	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：糸切りのちナデ	SE83上層	
		101	–	(3.3)	7.8	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ナデ	SE83上層	
	壺Q	102	–	(15.0)	–	浅黄色	内外面：ロクロナデ	SE83上層	肩部に自然釉付着
	壺A	103	13.8	(13.2)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE83上層	
	平瓶	104	–	(4.6)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE83上層	
土師器	皿A	105	16.0	2.05	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部ナデ、外面：体部下半部未調整（e手法）	SE83下層	
	杯A	106	18.0	(4.2)	–	橙色	内外面：摩滅の為調整不明（c手法）	SE83下層	口縁部に油煙付着
	壺B	107	14.1	6.1	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：底部オサエのちナデ、外面：体部下半部未調整	SE83下層	
	高杯	108	–	(11.9)	–	橙色	外面：脚部ケズリ	SE83下層	
	甕	109	23.2	(24.9)	–	にぶい黄橙色	内面：ハケ、オサエ、接合痕、外面：ヨコナデ、ハケ	SE83下層	
須恵器	壺M	110	–	(7.75)	3.6	灰白色	内外面：ロクロナデ	SE83下層	底部外面にヘラ記号
	壺	111	–	(16.5)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE83上層	
	甕	112	–	(44.7)	–	にぶい黄橙色	内面：ナデ、当て具痕、接合痕、外面：ナデ、タタキの痕跡	SE83下層	
緑釉陶器	皿	113	14.6	2.4	7.1	オリーブ灰色	内外面：ロクロナデ、施釉、外面：削り出し高台	SE83下層	
		114	–	(1.2)	5.8	灰白色	内外面：ロクロナデ、施釉、外面：削り出し高台	SE83下層	
土師器	皿C	115	8.0	1.5	–	淡黄色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部オサエのちナデ	SE116中層	
		116	8.5	1.6	–	淡黄色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部オサエのちナデ	SE116掘形上部	
	椀A	117	11.7	2.3	–	橙色	内外面:ヨコナデ、外面:ナデ（e手法）	SE116上層	
		118	13.3	3.4	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SE116上層	
		119	13.8	2.75	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SE116上層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	杯A	120	13.7	3.2	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部オサエ（e手法）	SE116 上層	
	椀A	121	14.0	3.6	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ（e手法）	SE116 上層	
		122	14.1	3.65	–	黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部オサエ（e手法）	SE116 上層	
	杯A	123	14.1	3.65	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部オサエ（e手法）	SE116 最下層 粘土	底部外面に墨書「上」
		124	17.1	4.8	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部オサエ（e手法）	SE116 上層	
		125	19.2	3.15	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ（e手法）	SE116 上層	
	皿A	126	15.2	1.9	–	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SE116 上層	
		127	16.4	2.3	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部オサエ（e手法）	SE116 上層	
		128	18.0	(2.1)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SE116 上層	
		129	19.4	2.05	–	黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SE116 上層	
黒色土器	椀	130	17.0	(3.8)	–	橙色～黒色	内面：ミガキ、外面：摩滅の為調整不明	SE116 上層	A類
	甕	131	12.5	(5.7)	–	明赤褐色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SE116 上層	
製塩土器		132	12.0	(4.5)	–	淡黄色	内面：ヨコナデ、外面：ナデ	SE116 上層	
		133	–	(3.2)	–	灰色	内外面：摩滅の為調整不明	SE116 上層	
土師器	高杯	134	–	(9.7)	–	浅黄橙色		SE116 上層	
	甕B	135	(4.2)	(3.4)	(1.15)	灰黄色	内面：オサエ、外面：ナデ	SE116 上層	
土製品	土馬	136	(4.65)	(3.45)	1.8	明黄褐色	全面：ナデ	SE116 中層	
土師器	甕A	137	13.9	(8.9)	–	橙色	内面：ハケ、ナデ、当て具痕、外面：ヨコナデ、タタキ	SE116 上層	外面全体に煤付着
		138	15.6	(6.95)	–	橙色	内面：ヨコナデ、ハケ、ナデ、外面：ヨコナデ、ハケ	SE116 上層	
		139	17.4	(6.1)	–	黄橙色	内面：ハケ、ヨコナデ、オサエ、外面：ヨコナデ、オサエのちハケ	SE116 上層	
		140	18.0	(6.2)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SE116 上層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	甕A	141	20.3	(7.3)	–	にぶい黄橙色	内面：ハケ、ヨコナデ、ナデ、オサエ、外面：ヨコナデ、ハケ	SE116上層	
		142	24.0	(18.7)	–	にぶい褐色	内面:ヨコナデ、ハケ、ナデ、当て具痕、外面：ヨコナデ、ハケ	SE116上層	
	甕	143	29.2	(24.6)	–	明赤褐色	内面：ハケ、ナデ、外面：ヨコナデ、ハケ	SE116上層	
須恵器	杯B蓋	144	12.2	1.9	–	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SE116上層	天井部内面に墨書
		145	15.2	(1.2)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SE116上層	
	杯B	146	12.6	4.1	8.8	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SE116上層	
		147	15.2	4.8	11.1	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SE116上層	
	壺A	148	13.0	(1.52)	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ	SE116上層	
	鉢	149	–	(1.6)	12.8	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SE116上層	
	壺M	150	3.7	9.1	3.8	灰色	内外面：ロクロナデ	SE116上層	
		151	–	(3.8)	4.7	灰色	内外面：ロクロナデ	SE116上層	
		152	–	(3.2)	3.8	灰色	内外面：ロクロナデ、底部：糸切り	SE116上層	
	壺	153	7.5	(11.8)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE116上層	
	壺L	154	9.0	(21.3)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE116上層	外面に自然釉付着
	甕	155	17.6	(5.0)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、外面：タタキ	SE116上層	
		156	13.5	(8.45)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：タタキ	SE116堀形上部	
		157	22.3	(4.25)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE116上層	
		158	26.4	(7.95)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：タタキのちナデ	SE116上層	
		159	27.2	(5.4)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE116上層	
	盤A	160	33.2	11.2	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：糸切り	SE116上層	外面火ダスキ痕、内面使用により摩滅
灰釉陶器	平瓶	161	2.9	(5.35)	1.2	釉：オリーブ黄、素地：灰白色	外面：施釉	SE116上層	把手

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
灰釉陶器	椀	162	–	(1.65)	7.4	釉：灰色、素地：灰白色	内面：施釉、外面：ナデ	SE116 上層	
木製品	北西隅柱	163	111.0	12.0	11.0			SE116	芯持材　筏孔有り
	北東隅柱	164	110.3	12.0	11.5			SE116	芯持材
	南西隅柱	165	112.5	12.0	12.0			SE116	芯持材
	南東隅柱	166	109.0	12.5	11.5			SE116	芯持材
	北横桟	167	108	16.0	7.5			SE116	
	東横桟	168	109	15.5	8.0			SE116	
	西横桟	169	109	15.5	9.0			SE116	
	南横桟	170	109.3	15.5	9.3			SE116	
土師器	皿A	171	16.0	(2.5)	–	橙色	内外面：摩滅の為調整不明	SB91 P8	
		172	16.0	2.4	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SB91 P8	
		173	16.4	2.4	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部摩滅の為調整不明	SB91 P8	
		174	17.8	(2.3)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：ケズリ（c手法）	SB91 P8	
		175	18.0	(2.8)	–	橙色	内面：ヨコナデ、下半部摩滅の為調整不明	SB91 P8	
	羽釜	176	29.4	(6.6)	–	褐色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SB91 P8・P9	
須恵器	杯B蓋	177	14.0	2.8	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SB91 P8	
	杯B	178	13.4	3.5	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SB91 P8	
土師器	皿C	179	9.8	2.1	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部摩滅の為調整不明	SB91 P9	
	皿A	180	17.0	2.65	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：下半部摩滅の為調整不明	SB91 P9	
	杯B	181	19.2	5.5	11.9	橙色	内外面:ヨコナデ、外面:底部ケズリ（c手法）	SB91 P9	
	甕A	182	14.2	(6.1)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ハケ	SB91 P9	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	甕A	183	15.2	(4.5)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SB91 P9	
		184	16.8	(3.9)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデか	SB91 P9	
		185	16.9	(13.1)	–	浅黄橙色	内外面:ヨコナデ、内面:ハケのちナデ、外面：ハケ	SB91 P9	
	甕B	186	30.8	(8.0)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、ハケ	SB91 P9	
		187	–	(10.9)	–	浅黄橙色	内外面：ハケ	SB91 P9	
	壺B	188	16.0	(7.1)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SB91 P9	
須恵器	杯B蓋	189	16.0	(0.6)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SB91 P9	
		190	17.4	(0.75)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SB91 P9	
	杯B	191	–	(2.1)	12.0	灰白色	内外面：ロクロナデ	SB91 P9	
	甕	192	20.1	(44.2)	–	淡黄色	内外面：ヨコナデ、内面：当て具痕、外面：格子目タタキのちナデ	SB91 P9	
	杯B	193	–	(2.3)	10.1	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SB88 KP10、KP21	
	杯B蓋	194	14.3	2.6	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SB88 KP9(黒)	天井部内面に墨書「米」
	壺M	195	3.5	(3.15)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SB88 P10	
	杯	196	(2.6)	(4.8)	0.5	灰白色	内面：ナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SB88 上面 包含層	底部外面に墨書「米」
	杯A	197	13.65	3.75	–	灰白色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ	SB92 P2 柱当たり	
	杯B	198	11.9	(3.85)	9.4	灰色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ	SB92 P1	
		199	14.8	5.2	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SB92 P3	
灰釉陶器	壺A	200	10.1	(7.1)	–	釉：にぶい黄色、素地：黄橙色	内外面：ロクロナデ	SB111 P7	猿投産
土師器	椀A	201	12.4	3.65	–	にぶい橙色	内面：ヨコナデ、下半部摩滅の為調整不明、外面：ケズリ（c手法）	SB91 P10	口縁端部に油煙付着
	皿A	202	17.6	2.0	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部ケズリ（c手法）	SB91 P10	
須恵器	甕	203	19.2	(36.4)	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、外面：タタキ	SB91 P10	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	椀A	204	12.0	(3.7)	–	橙色	内面：ヨコナデ、外面：摩滅の為調整不明	SB113 P4	
	皿A	205	14.8	(2.5)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ（e手法）	SB113 P4	
		206	15.0	(3.8)	–	橙色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：摩滅の為調整不明	SB113 P4	
	甕A	207	18.0	(2.0)	–	にぶい黄橙色	内面：ハケ、外面：ヨコナデ	SB113 P4	
須恵器	壺	208	15.0	(6.85)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SB113 P4	
土師器	皿C	209	7.0	(2.2)	–	にぶい黄橙色	内外面:ヨコナデ、外面:ナデ（e手法）	SB73 P17	
	高杯	210	17.8	16.2	12.6	橙色	杯部内外面：ヨコナデ、脚部内外面：ナデ、内面：絞り痕、外面：裾部ハケ	P95	
	皿	211	19.8	(3.25)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、外面：摩滅の為調整不明	P95	
須恵器	杯A	212	15.0	2.9	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	P95	
土師器	椀A	213	10.0	3.0	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：オサエ（e手法）	SE114 上層	
	杯A	214	12.0	3.1	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ（e手法）	SE114 上層	
		215	12.0	(2.5)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ（e手法）	SE114 中層	
	椀A	216	13.0	3.85	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：オサエ（e手法）	SE114 上層	
	杯B蓋	217	–	(1.4)	–	にぶい橙色	外面：つまみ貼り付け時のナデ	SE114 最下層	
		218	–	(1.7)	–	にぶい橙色	外面：つまみ貼り付け時のナデ	SE114 最下層	
		219	15.0	2.0	–	橙色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：摩滅の為調整不明	SE114 上層	
		220	21.0	(3.0)	–	橙色	内面：ヨコナデ、外面：ミガキ	SE114 上層	
	壺E	221	9.1	7.3	6.4	にぶい橙色	内面：ヨコナデ、外面：ヨコナデ、ケズリのちミガキ	SE114 最下層	
製塩土器		222	10.0	(5.2)	–	橙色	内外面：ナデ	SE114 上層	
土製品	ミニチュア甕	223	5.0	(3.8)	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、外面：オサエ	SE114 最下層	
須恵器	平瓶	224	(2.15)	(3.9)	(0.75)	灰色	内外面：ケズリ	SE114 上層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	コップ型土器	225	–	(4.2)	5.2	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ナデ	SE114 上層	
	杯B蓋	226	12.2	(0.9)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SE114 上層	転用硯か
		227	13.0	(1.3)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SE114 上層	
	杯B	228	–	(4.0)	10.2	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SE114 上層	
		229	15.4	(5.7)	11.0	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SE114 中層	高台の一部に重ね焼きの痕跡
		230	16.0	6.0	10.4	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SE114 上層	高台の一部に重ね焼きの痕跡
	杯	231	14.8	(3.8)	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ	SE114 上層	
	鉢	232	19.8	(10.5)	–	灰色	内外面：ロクロナデのちミガキ、内面：底部に粘土接合痕、外面：下半部回転ケズリのちミガキ	SE114 上層	
	平瓶	233	–	(4.95)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SE114 上層	外面に自然釉付着
		234	–	(8.2)	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ	SE114 最下層	肩部に自然釉付着　猿投産か
	甕	235	20.0	(6.2)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、外面：タタキのちナデ	SE114 上層	
土製品	土馬	236	(5.15)	(4.3)	(4.9)	橙色	ナデ	SE114 上層	
	土製円板	237	4.1	4.3	0.5	にぶい橙色	表面：ケズリ、裏面：ヨコナデ	SE114 最下層	
土師器	椀A	238	15.0	3.5	–	褐色	内面：ミガキ、外面：ヨコナデ、ケズリのちナデ（c手法）	SD82 1区	ロクロ土師器
	杯A	239	18.0	(3.55)	–	橙色	内面：ヨコナデ、外面：ケズリのちナデ（c手法）	SD82 1区	
	皿A	240	16.8	2.3	–	橙色	内面:ヨコナデ、外面:ケズリ（c手法）	SD82 1区	
	杯B	241	–	(1.4)	11.5	橙色	内面：ナデ、外面：ナデ	SD82 1区	
	杯B蓋	242	19.0	(2.35)	–	橙色	内面：摩滅の為調整不明、外面：ミガキ	SD82 1区	
	甕	243	25.9	(22.3)	–	にぶい黄橙色	内面：ハケ、オサエ、接合痕、外面：ヨコナデ、ハケ	SD82 1区 (N)（S)	外面に煤付着
須恵器	杯B蓋	244	16.2	(1.6)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD82 1区	
		245	17.0	(0.6)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD82 1区	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯B	246	16.6	5.0	12.1	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD82 セクション１層	
		247	17.2	5.5	12.1	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD82	
土製品	紡錘車	248	2.7	2.9	0.4	にぶい黄橙色	全体に摩滅の為調整不明	SD82	
土師器	皿C	249	8.8	1.9	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		250	9.1	1.75	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		251	9.0	2.1	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：摩滅の為調整不明、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		252	9.1	1.8	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		253	9.3	2.05	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		254	9.4	1.75	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		255	9.4	1.95	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		256	9.4	1.75	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		257	9.4	1.8	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		258	9.5	2.1	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		259	9.6	1.8	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		260	9.7	1.7	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		261	9.7	2.1	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		262	9.9	2.25	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		263	9.8	2.15	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
		264	10.0	2.2	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD84 1区	
	椀A	265	12.3	4.1	–	橙色	内面：ヨコナデ、外面：ヨコナデ、ケズリ（c手法）	SD84 4区	
	杯A	266	14.8	3.6	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：下半部摩滅の為調整不明	SD84 0区	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	皿A	267	14.7	2.25	–	明赤褐色	内外面：ロクロナデのちミガキ、ナデ	SD84 0区	ロクロ土師器
		268	15.3	2.25	–	明赤褐色	内外面：ロクロナデのちミガキ、ナデ	SD84 0区	ロクロ土師器
		269	15.4	2.2	–	橙色	内外面：ロクロナデのちミガキ、ナデ	SD84 0区	ロクロ土師器
		270	16.0	2.9	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD84 0区 焼土層	
		271	15.8	2.6	–	橙色	内面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD84 0区	
		272	20.0	2.5	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD84 0区 焼土層	
		273	20.7	2.7	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD84 0区	
	杯B	274	–	(1.3)	11.0	明赤褐色	内外面：ヨコナデ、底部外面：ケズリのちナデ	SD84 0区	
	壺E	275	–	(1.7)	6.1	橙色	内面：摩滅の為調整不明、外面：ナデ	SD84 1区	
	甕A	276	14.7	(6.8)	–	明赤褐色	内面：ハケ、ヨコナデ、摩滅の為調整不明、外面：ヨコナデ、タタキ	SD84 3区	
		277	24.7	(19.8)	–	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ハケ	SD84	
		278	28.1	(9.8)	–	浅黄橙色	内外面:ハケのちナデ、内面:当て具痕、外面：ハケ	SD84	
	高杯	279	–	(5.3)	–	橙色	外面：ナデか	SD84	脚部円柱状
		280	–	(12.8)	–	橙色	内面：ナデ、外面：摩滅の為調整不明	SD84	脚部円柱状
		281	–	(9.2)	15.1	橙色	内外面：脚裾部ヨコナデ	SD84 0区	脚部円柱状
		282	–	(6.1)	–	橙色	杯部内面：暗文、脚部内面：ナデ	SD84 1区	
		283	–	(2.9)	–	明赤褐色	杯部内外面：ミガキ、脚部外面：ナデ	SD84 0区	
		284	–	(12.6)	–	橙色	杯部内面：ナデ、杯部外面：ケズリのちミガキ	SD84 0区	
須恵器	杯A	285	13.1	3.6	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 0区	
		286	13.2	3.8	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 3区	
	杯B	287	10.4	(4.05)	6.4	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 1区	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯B	288	13.0	4.2	9.5	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 0区	
		289	13.6	4.0	9.8	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 1区	
		290	14.8	5.15	10.0	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 1区	
		291	16.9	6.55	12.5	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 0区	
		292	–	(3.1)	10.0	黄灰色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ	SD84 0区	底部外面にヘラ記号
	杯B蓋	293	–	(1.9)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD84 1区	
		294	–	(1.9)	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD84 1区 南半	
		295	14.2	1.7	–	灰色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD84 0区	
		296	14.4	(1.3)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 1区	
		297	16.4	1.8	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD84 1区	
		298	16.6	1.3	–	灰色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD84 4区	転用硯
		299	17.2	2.1	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD84 1区 焼土内	
		300	19.0	(1.4)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 1区	
緑釉陶器	皿	301	14.0	(2.0)	–	釉、素地：浅黄色	内外面：施釉	SD84 0区	
須恵器	壺B蓋	302	–	(4.7)	1/4	灰オリーブ色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:天井部ケズリ	SD84 3区南半、 SD82 1区	外面に自然釉付着
	壺A蓋	303	11.8	1.65	–	黄灰色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ	SD84 0区	
		304	11.8	(1.7)	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ	SD84 4区	
		305	15.4	(2.15)	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 1区	
	平瓶	306	5.9	(5.8)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD84 2区	
	壺M	307	–	(8.7)	4.2	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：糸切り	SD84 0区	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	壺M	308	–	(3.0)	6.65	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD84 0区	
	鉢D	309	19.0	(6.8)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD84 0区	
	壺A	310	14.0	(9.7)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD84 0区	
	甕	311	22.0	(7.4)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、外面：タタキ	SD84 0区	
		312	12.9	45.35	–	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、外面：タタキ	SD84 2区	
		313	58.0	112.0	–	灰色	内面：ヨコナデ、当て具痕、外面：ヨコナデ、タタキのちヨコナデ、タタキ	SD84 1～4区	底部外面に支え痕
土師器	椀A	314	11.8	(3.25)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデのちミガキ（a手法）	SD85 東半	
		315	13.2	3.5	–	明褐色	内面：摩滅の為調整不明、外面：ケズリ（c手法）	SD85 東半	底部外面に線刻
	皿A	316	18.0	2.2	–	にぶい橙色	内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD85 東半	
		317	20.0	2.3	–	にぶい赤褐色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：ケズリ、ケズリのちナデ（c手法）	SD85 東半	
		318	21.5	2.5	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（b手法）	SD85 西半	
土製品	ミニチュア甕	319	(3.05)	6.5	–	橙色	内面：ナデ、外面：摩滅の為調整不明	SD85 西半	
土師器	甕A	320	13.4	(5.5)	–	にぶい赤褐色	内面:ヨコナデ、ナデ、外面:ヨコナデ、ハケ	SD85 東半	
		321	15.2	(3.8)	–	にぶい赤褐色	内外面：ヨコナデ、ナデ	SD85 東半	
		322	21.8	(5.6)	–	にぶい黄橙色	内面：ハケ、摩滅の為調整不明、外面：ハケのちヨコナデ、ハケ	SD85 上面	
		323	34.0	(6.3)	–	灰黄褐色	内面:ヨコナデ、ナデ、外面:ヨコナデ、ハケメ	SD85 セクション	
	羽釜	324	–	(5.3)	–	にぶい赤褐色	内面：ナデ、指圧痕、外面：摩滅の為調整不明	SD85 東半	
土製品	土馬	325	(5.1)	(3.0)	(1.6)	橙色	ナデ	SD85 セクション	
須恵器	杯B蓋	326	–	(1.4)	–	灰白色	内面：ロクロナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SD85 東半	
		327	(18.0)	(0.9)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD85 東半	
	杯A	328	–	(2.4)	10.7	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD85 西半	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯B	329	16.0	(4.8)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD85 東半	
	壺A蓋	330	12.0	(1.6)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、ナデ、外面：ヘラケズリのちナデ	SD85 西半	
	壺H	331	–	(8.1)	8.0	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：回転糸切り	SD85 西半	
土師器	皿C	332	9.0	1.9	–	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ	SD90 2区	
		333	9.0	2.0	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ	SD90 2区	
		334	9.6	1.7	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：底部摩滅の為調整不明	SD90 3区	
		335	10.0	(2.25)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ	SD90 2区	
		336	10.0	(1.9)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ	SD90 2区	
	杯A	337	16.0	3.8	–	赤褐色	内外面：摩滅の為調整不明、外面：底部オサエ（e手法）	SD90 1区	
	皿A	338	17.0	(2.3)	–	橙色	内外面：摩滅の為調整不明	SD90 2区	
	高杯	339	–	(6.15)	–	橙色	杯部内面：ナデ、杯部外面：ミガキ	SD90 3区	
	杯	340	(6.1)	(6.95)	0.5	橙色	内面：摩滅の為調整不明、外面：ナデ	SD90 3区	底部内面に線刻
	甕A	341	14.2	(4.1)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD90 1区	
		342	18.6	(7.5)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、当て具痕、外面：ハケ	SD90 3区	
		343	27.9	(7.3)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ハケ、ナデ、外面：ハケ	SD90 2区	
		344	30.6	(8.9)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ハケ	SD90 1区	
土製品	紡錘車	345	3.5	3.4	0.5	浅黄橙色		SD90 2区	
須恵器	杯A	346	18.8	3.1	–	灰黄色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD90 3区	底部外面に墨書
	杯B	347	11.9	3.65	9.3	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD90 3区	
		348	16.6	5.3	–	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD90 3区	
		349	–	(4.1)	12.0	灰白色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ	SD90 2区	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯B	350	17.8	6.25	12.0	灰白色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ	SD90 1区	
	杯B蓋	351	–	(1.15)	–	灰色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:つまみ貼り付け時のナデ	SD90 2区	
		352	13.7	1.55	–	灰白色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD90 1区	
	壺M	353	3.3	(2.8)	–	暗灰黄色	内外面：ロクロナデ	SD90 3区	
	甕	354	48.0	(9.3)	–	灰黄色	内外面：ロクロナデ	SD90 3区	内外面に自然釉付着
瓦	軒丸瓦	355	(2.7)	–	–	灰色		SD82 上面	
	平瓦	356	(11.6)	(6.45)	2.5	内面:淡黄色、外面：黄灰色	凹面：布目、凸面：縄タタキ	SB91 P10	端面に刻印「伊」
	面戸瓦	357	(8.2)	(12.2)	1.9	橙色	外面：縄タタキ	SE83 上層	
		358	(8.6)	(10.15)	1.7	灰白色	内面：布目、外面：縄タタキ	SE83 上層	
		359	(11.2)	(11.8)	2.1	明褐色	内面：布目、外面：縄タタキ	SE83 上層	
	平瓦	360	(7.9)	(4.8)	1.9	灰白色	凹面：ケズリ、凸面：格子目タタキ	SX09 3区上層	
		361	(6.75)	(6.65)	1.9	浅黄橙色	凹面：ナデ、凸面：格子目タタキ	SX09 4区中層	
	丸瓦	362	(17.6)	14.2	1.6	にぶい黄橙色		SE83	
		363	(14.3)	(7.25)	1.85	にぶい黄橙色	内面：布目、外面：ナデ	南西拡張区	
	平瓦	364	(9.5)	(18.2)	2.0	灰色		SE83 上層	
		365	(21.3)	(14.75)	2.1	黄灰色		SE116 上層	
木製品	箸	366	(13.25)	0.6	0.5			SE114 最下層	
	曲物底板	367	26.3	(26.0)	0.8			SE114 最下層	
	曲物側板	368	(1.9)	16.2	–			SE114 最下層	
	横櫛	369	4.0	(4.9)	(0.75)			SE116 最下層	
	曲物樺紐	370	1.3	1.15	0.65			SE116 最下層	

付表－4　3トレンチ出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
陶器	碗	371	10.6	(2.5)	－	黄橙色	内外面：ケズリ	SE65	唐津焼
陶器	碗	372	－	(3.2)	4.0	浅黄橙色	内外面：ケズリ、削り出し高台	SE65	唐津焼
土師器	甕	373	14.85	(4.8)	口縁部1/6	黒褐色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：摩滅の為調整不明	SE65	

付表－5　4トレンチ出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	高杯	374	－	(8.2)	－	にぶい黄橙色	杯部内面：摩滅の為調整不明、脚部内面：ナデ	SE636 粘土層	
須恵器	椀	375	－	(2.15)	7.05	灰色	内外面：ロクロナデ、ミガキ、外面：削り出し高台	SE636 南セクション灰色粘土、2層	転用硯か
緑釉陶器	皿	376	－	(1.5)	－	釉：オリーブ黄、素地：灰白色	内外面：ミガキ、外面：削り出し高台	SE636D 礫層	
灰釉陶器	椀	377	－	(1.75)	7.0	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：糸切り	SE636C 粘土層	
須恵器	瓶子	378	4.25	10.6	4.5	灰白色	内外面：ロクロナデ、内面：絞り痕、底部外面：糸切り	SE636 礫層	
	壺	379	10.8	(5.65)	－	灰白色	内外面：ロクロナデ	SE636C 灰色粘質土	
	壺L	380	－	(4.9)	13.0	灰色	内外面：ロクロナデ	SE636C 粘土層	内外面に自然釉付着
	壺	381	－	(9.8)	13.0	灰色	内面：ロクロナデ、外面：タタキのちナデ、底部未調整	SE636C 2層	外面に自然釉付着
		382	－	(7.65)	15.0	灰色	内面：オサエのちナデ、外面：ケズリ	SE636 礫層	
	甕	383	－	(4.5)	18.2	灰白色	内面：ナデ、当て具痕、 外面：タタキ、ナデ	SE636 粘土層	猿投産
土師器	高杯	384	－	(15.5)	－	橙色	内面：ナデ、外面：ケズリ	SE636 41層	
	甕A	385	18.0	(13.85)	－	にぶい赤褐色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエのちナデ	SE636 43層	河内産
須恵器	杯A	386	11.0	(3.3)	－	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SE636 43層	
		387	－	(2.7)	10.15	灰白色	内外面：ロクロナデ、内面：ナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SE636 43層	底部外面に墨書「三□」
	杯B	388	－	(3.9)	10.8	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：底部ヘラ切りのちナデ	SE636 42層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	壺M	389	–	(8.2)	4.5	灰色	内外面：ロクロナデ	SE636 42層	
	壺J	390	–	(13.1)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、内面：絞り痕、外面：底部ケズリ	SE636 41層	
	壺L	391	–	(12.1)	–	灰色	内外面:ロクロナデ、内面:頸部ケズリ、外面：体部下半ケズリ	SE636 42層	
土師器	皿C	392	7.2	(1.5)	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SK539	
	羽釜	393	21.7	(7.2)	–	黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：鍔部貼り付けのナデ、ハケ	P497	内外面に煤付着
陶器	擂鉢	394	28.4	(4.8)	–	灰褐色	内外面:ヨコナデ、内面:スリ目、外面:ナデ	SK690	丹波焼
須恵器	鉢	395	13.9	(3.9)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ	SK493	篠窯産か
土師器	甕	396	17.6	(9.5)	–	橙色	内外面：ヨコナデ	SK493	
須恵器	椀	397	10.3	3.7	4.4	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：糸切り	SK407	
	杯B蓋	398	–	(1.6)	–	灰色	内面：ナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SK407	
	鉢	399	19.0	9.4	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：糸切り	P650	篠窯産
土師器	皿	400	15.0	(2.0)	–	灰白色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエのちナデ（e手法）	SK645	
		401	15.0	1.95	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエのちナデ（e手法）	SK645	
	甕	402	16.2	(10.0)	–	橙色	内外面:ヨコナデ、内面:ケズリ、ナデ、外面：オサエのちナデ	SK645	外面体部に煤付着
緑釉陶器	皿	403	10.8	2.2	–	釉：白緑色、素地：灰色	内外面：ミガキ、外面：削り出し高台	SK645	
		404	13.3	(1.8)	–	灰色	内外面：ミガキ、外面：ケズリ	P720	
	椀	405	17.2	(2.7)	–	灰白色	外面：ミガキ	SB4009 P775	
土師器	椀A	406	12.9	(3.7)	–	橙色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：ケズリか（c手法）	SK819	
	皿A	407	14.6	(2.3)	–	にぶい黄橙色	内面:ヨコナデ、外面:ケズリ（c手法）	SK819	内面に線刻
		408	17.0	(2.25)	–	橙色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：ケズリか（c手法）	SK819	口縁端部に油煙付着
		409	18.0	(2.4)	–	橙色	内面：ヨコナデ、ナデ、外面：ケズリか（c手法）	SK819	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	甕A	410	18.6	(11.8)	–	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、当て具痕、外面：ハケのちヨコナデ、ハケ	SK819	
須恵器	杯B蓋	411	12.8	(1.1)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ、ヘラ切り	SK819	
		412	14.2	(1.05)	–	灰白色	内面：ロクロナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SK819	
		413	14.4	(1.85)	–	内面：赤色、外面：灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SK819	内面に赤色顔料付着
		414	15.0	(1.6)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SK819	
		415	16.1	(1.00)	–	灰白色	内面：ロクロナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SK819	内面に墨書
	壺M	416	4.0	(3.5)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SK819	
	杯B	417	12.0	(2.8)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SK819	
		418	20.0	(6.2)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SK819	
		419	–	(1.7)	10.0	灰色	内外面：ロクロナデ	SK819	
		420	–	(5.6)	13.6	灰白色	内外面：ロクロナデ	SK819	底部外面に墨書「豊」
瓦	軒平瓦	421	(15.6)	(12.3)	6.3	灰白色	凹面：布目痕、凸面：縄タタキ	SE636 セクション東 40 層	平城宮式 6663A 型式
		422	(8.6)	–	6.25	灰色	凹面：ヨコ方向のケズリ、凸面：ケズリか	SE636	平城宮式 6663C 型式
		423	(14.9)	(15.7)	5.8	灰色	凹面：ケズリ、凸面：縄タタキ	SE636 42 層	平城宮式 6691A 型式
	軒丸瓦	424	(6.2)	径 8.9	–	灰色	内面：ナデ、瓦当貼り付け時のナデ	SE636 セクション東 38 層	平城宮式 6134C 型式
	平瓦	425	(6.0)	(8.2)	1.8	灰白色	凹面：ケズリ、凸面：タタキ	SE636C 粘土層	
	面戸瓦	426	9.25	(11.5)	1.8	明黄色	凹面：布目痕、凸面：縄タタキ	SE636 北セクション 2 層	
	平瓦	427	(13.0)	(11.5)	1.75	灰白色	凹面：布目痕、凸面：縄タタキ	SE636	
	丸瓦	428	(12.4)	(15.6)	1.6	灰色	凹面：布目痕、凸面：縄タタキのちケズリ	SE636 南セクション 2 層	
		429	(12.0)	(12.2)	1.75	灰白色	凹面：布目痕、凸面：縄タタキ、玉縁部ナデ	SE636	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
瓦	丸瓦	430	(25.5)	13.7	2.0	淡赤褐色	凹面：布目痕、凸面：ケズリ、ナデ	SB4009 P773 柱当たり	
		431	(25.6)	15.8	1.6	暗灰色	凹面：布目痕、凸面：縄タタキのちケズリ	SE636 42層	

付表－6　5トレンチ出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構 層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯A	432	－	(1.95)	－	灰黄色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SD1119	
	杯B	433	－	(2.1)	9.0	黄灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り	SD1119	
緑釉陶器	椀	434	9.8	3.3	4.2	釉：灰オリーブ色、素地：黄灰色	内外面：ミガキ、底部外面：糸切り	SD1119	
灰釉陶器	椀	435	－	(2.4)	5.6	釉：灰オリーブ色、素地：灰白色	内面：ミガキ、外面：ロクロナデ	SD1119	
土師器	皿C	436	8.8	2.1	－	灰白色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD1121 1層	
	壺C	437	9.6	(2.45)	－	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD1121 1層	
	椀A	438	12.1	3.15	－	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1121 1層	
		439	14.0	3.7	－	橙色	摩滅の為調整不明	SD1121 2層	
	杯A	440	16.0	(4.0)	－	明赤褐色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデか（e手法）	SD1121 2層	
	皿A	441	18.0	2.5	－	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1121 2層	
		442	18.0	2.45	－	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1121 1層	
	杯B	443	11.2	(1.25)	－	橙色	内外面：ナデ	SD1121 1層	
	甕A	444	18.9	(5.5)	－	にぶい橙色	内面：ハケ、ナデ、外面：ヨコナデ、ハケ	SD1121 1層	
		445	24.0	(4.1)	－	にぶい黄橙色	摩滅の為調整不明	SD1121 1層	
		446	24.0	(15.15)	－	黄橙色	内面：ハケ、ナデ、オサエ、外面：ヨコナデ、ハケ	SD1121 セクション3層	内面に白色の付着物
		447	27.0	(9.2)	－	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：当て具痕、ハケ、外面：ハケ	SD1121	
土製品	とりべ	448	10.4	(2.9)	－	灰黄色	内外面：オサエ	SD1121 1層	内面に付着物

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土製品	とりべ	449	14.0	(4.2)	–	にぶい黄橙色	摩滅の為調整不明	SD1121	内面に付着物
須恵器	杯B蓋	450	–	(1.5)	–	灰色	内面：ロクロナデ、ナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD1121 1層	
		451	–	(1.1)	–	灰色	内面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD1121	
		452	14.4	2.2	–	灰白色	内面：ロクロナデ、ナデ、外面：ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD1121 1層	転用硯か
	杯A	453	10.4	2.55	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SD1121 1層	
	杯B	454	14.0	(4.5)	9.4	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り	SD1121 1層	外面に自然釉付着
		455	14.6	5.2	10.6	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り	SD1121 1層	底部外面にヘラ記号
		456	14.8	(5.1)	10.6	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SD1121 1層	外面に火ダスキ痕
		457	–	(3.1)	12.4	内面：にぶい赤橙色、外面：灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り	SD1121 2層	内面に赤色顔料付着
緑釉陶器	皿	458	–	(2.1)	7.0	釉：浅黄橙色、素地：灰白色	内外面：ミガキ	SD1121 1層	
須恵器	壺M	459	–	(5.7)	4.4	灰白色	内外面：ロクロナデ、内面：絞り痕、外面：ヘラ切り	SD1121 1層	
	壺L	460	–	(2.8)	7.8	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD1121 1層	
土師器	壺C	461	8.85	(2.6)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1122 1層	
		462	10	(3.8)	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデ、オサエ（e手法）	SD1122	
	椀C	463	11.95	3.5	–	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD1122	
	椀A	464	12.8	3.65	–	橙色	内面：ヨコナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1122	
		465	13.0	3.4	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c’手法）	SD1122	
		466	13.25	(3.7)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1122	
	杯A	467	14.1	3.15	–	明赤褐色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c’手法）	SD1122	
		468	15.0	3.35	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1122	
		469	18.0	(4.5)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：摩滅の為調整不明	SD1122	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	皿A	470	19.6	2.3	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：ケズリか、摩滅の為調整不明（c手法）	SD1122	
		471	20.0	(2.35)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c’手法）	SD1122	
		472	20.4	2.5	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1122	
	杯B蓋	473	20.1	(2.9)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：摩滅の為調整不明、外面：ミガキ	SD1122	
		474	22.0	(3.5)	–	橙色	内外面：摩滅の為調整不明、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SD1122	
	杯B	475	–	(1.2)	10.0	橙色	内外面：ナデ	SD1122	
		476	–	(2.0)	12.6	橙色	摩滅の為調整不明	SD1122 1層	
		477	17.7	5.2	–	橙色	内外面:ヨコナデ、内面:ナデか、外面:ミガキ、ナデ	SD1122 最下層	
	甕A	478	12.9	(7.4)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：当て具痕、外面：タタキのちハケ	SD1122 2層	
		479	13.0	(7.5)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：当て具痕、外面：タタキ	SD1122 2層	外面に煤付着
		480	18.0	(11.7)	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ハケ、圧痕、外面：ハケ	SD1122	
		481	20.0	(7.65)	–	にぶい黄橙色	内面：ハケ、オサエ、外面：ヨコナデ、ハケ	SD1122	外面に煤付着
		482	20.6	(13.9)	–	にぶい黄橙色	内面:ハケ、ナデ、オサエのちナデ外面:ヨコナデ、ハケ	SD1122	
	高杯	483	–	(13.25)	–	橙色	内面：ナデ、外面：裾部ナデのちミガキ	SD1122	
黒色土器	杯	484	23.2	(6.8)	–	内面：オリーブ黒色、外面:橙色	摩滅の為調整不明	SD1122	A類
土製品	土馬	485	(7.95)	(4.7)	(6.3)	橙色	内外面：ナデ	SD1122 2層	
		486	(8.5)	(4.7)	(6.45)	浅黄橙色	内外面：ナデ	SD1122 1層	
須恵器	杯A	487	12.3	3.9	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SD1122 1層	
	皿A	488	14.9	2.3	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ナデ	SD1122	
		489	15.4	2.6	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SD1122	
		490	15.0	1.35	13.0	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ナデ、ヘラ切り	SD1122 2層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	皿A	491	–	(1.15)	18.0	灰白色	内外面：ロクロナデ、内面：ナデ、底部外面：ナデ、ヘラ切り	SD1122 2層	
	壺A蓋	492	15.0	1.95	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1122	
	杯B蓋	493	13.2	(2.2)	–	灰白色	内面：ロクロナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD1122 1層	転用硯か
	杯B	494	12.1	(4.1)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1122 2層	
		495	13.2	4.0	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1122 最下層	
		496	15.4	5.7	11.15	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD1122 1層	
	壺L	497	6.1	(4.7)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：粘土接合痕	SD1122 2層	
		498	4.8	(3.6)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1122 1層・セクション1層	
	壺M	499	–	(5.6)	4.4	灰白色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラケズリ	SD1122 2層	
	壺N	500	–	(5.5)	–	灰色	内面：ロクロナデ、外面：ケズリ	SD1122 1層	猿投産
土師器	皿C	501	9.8	2.1	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD1001 1層	
		502	9.8	(2.1)	–	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：オサエ（e手法）	SD1001 1層	
	椀A	503	12.1	(3.5)	–	橙色	摩滅の為調整不明	SD1001	
		504	12.1	3.5	–	橙色	内面：ヨコナデ、外面：摩滅の為調整不明	SD1001	
	杯A	505	17.2	4.1	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1001 4層	
	皿A	506	14.3	2.5	8.6	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：摩滅の為調整不明、外面：底部ナデ（e手法）	SD1001 1層	
		507	15.9	(2.1)	–	橙色	摩滅の為調整不明	SD1001 3層	
		508	16.5	2.2	–	橙色	内面：ナデ、外面：ケズリか（c手法）	SD1001 1層	
		509	17.2	(2.55)	–	橙色	内面：ナデ、外面：ケズリ（c手法）	SD1001 4層	
		510	18.0	(2.45)	–	橙色	摩滅の為調整不明	SD1001 1層	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土師器	皿A	511	19.1	(2.4)	–	橙色	摩滅の為調整不明	SD1001	
	杯B	512	–	(3.7)	13.2	浅黄橙色	摩滅の為調整不明	SD1001 セクション北2層・1層	
	甕A	513	17.4	(5.2)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、摩滅の為調整不明、外面にハケ残る	SD1001 1層	
		514	18.0	(6.3)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ハケ、摩滅の為調整不明、外面：ハケ	SD1001 1層一括	
		515	18.0	(6.95)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ハケ、ナデ、外面：摩滅の為調整不明	SD1001 1層一括	
		516	19.2	(4.9)	–	明黄褐色	内面：ハケ、ナデ、外面：ヨコナデ、ハケのちナデ、オサエ	SD1001 1層	
		517	20.0	(7.8)	–	にぶい橙色	内面：ハケ、外面：ヨコナデ、ハケ	SD1001 1層一括	
		518	25.6	(8.6)	–	浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：摩滅の為調整不明、当て具痕か、外面：ハケ	SD1001	
		519	27.5	(8.1)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ハケ、摩滅の為調整不明、外面：ハケ	SD1001 セクション5層	
製塩土器		520	–	(4.1)	–	橙色	内外面：オサエ	SD1001 セクション4層	粘土紐の接合痕
		521	–	(3.8)	–	にぶい橙色	内外面：オサエ	SD1001 セクション北2層	粘土紐の接合痕
須恵器	杯B蓋	522	10.4	(1.45)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ、ヘラ切りのちナデ	SD1001 1層	
		523	15.1	(2.4)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1001	
		524	16.8	(1.9)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SD1001 1層	転用硯
		525	17.3	(1.7)	–	灰白色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD1001	転用硯
		526	18.75	1.7	–	灰白色	内外面:ロクロナデ、内面:ナデ、外面:ヘラ切りのちナデ、つまみ貼り付け時のナデ	SD1001	
		527	–	(1.4)	–	灰白色	内面：ナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	SD1001 層一括	つまみ部墨書「十」
	杯B	528	–	(1.6)	10.4	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD1001 2層	
		529	12.5	3.9	8.9	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1001 4層	
		530	14.8	(5.2)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD1001 1層	外面に自然釉付着

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	杯B	531	16.0	4.95	11.6	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1001上面	
	壺M	532	–	(3.8)	4.9	灰白色	内外面：ロクロナデ	SD1001 1層	
	甕	533	16.6	(6.15)	–	灰オリーブ色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、外面：タタキ	SD1001上面	外面に線刻・自然釉付着
		534	18.1	(4.9)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、ケズリ、外面：タタキ	SD1001	
		535	20.2	(44.6)	–	灰色	内外面：ロクロナデ、内面：当て具痕、外面：タタキ	SD1001	外面に自然釉付着
	平瓶	536	2.6	(4.5)	2.5	灰色	ケズリ	SD1001 3層	把手
灰釉陶器	椀	537	10.6	(2.3)	–	にぶい黄橙色	内外面：ナデ	SD1001	
緑釉陶器	皿か	538	–	(1.6)	6.6	灰色	内面：ミガキ、外面：ケズリ	SK1025	
須恵器	杯B蓋	539	14.0	(1.0)	–	灰色	内面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	SK1218	
土師器	杯A	540	13.0	3.3	–	橙色	内面：ロクロナデ、外面：ナデ	SK1370	
須恵器	杯G	541	9.2	3.4	–	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切り	SK1080	
	杯B蓋	542	14.8	2.0	–	灰白色	内外面：ロクロナデ	P5	転用硯
土師器	皿C	543	9.4	(1.85)	–	橙色	内外面：ヨコナデ	SK1152	口縁端部に油煙付着
	杯A	544	16.0	3.0	–	橙色	摩滅の為調整不明	SK1152	全体に煤付着
	甕A	545	24.6	(6.7)	–	黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：圧痕、外面：ナデか	SK1152	
		546	27.1	(4.3)	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、外面：ハケのちヨコナデ、ハケ	SK1152	
須恵器	杯A	547	–	(2.85)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SK1152	
		548	–	(3.2)	–	灰白色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SK1152	
	杯B	549	–	(2.8)	9.1	灰色	内外面：ロクロナデ	SK1152	
		550	–	(1.2)	10.6	灰白色～灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SK1152	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
須恵器	平瓶	551	2.2	(4.5)	1.6	灰白色	ケズリ	SK1152	把手
土師器	皿A	552	20.8	2.3	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ケズリか（c手法）	SK1383	
須恵器	杯B	553	9.4	3.6	7.0	灰色	内外面：ロクロナデ	SK1383	
土師器	甕A	554	27.0	(7.1)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ハケ、ナデ、圧痕か、外面：ハケ、ナデ	SD1168	
須恵器	杯B蓋	555	16.5	(1.6)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	SD1168	
	杯A	556	14.8	2.5	–	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SD1168	
	杯B	557	–	(3.2)	11.0	灰色	内外面：ロクロナデ	SB5001 P1145	
	杯A	558	12.0	3.0	–	灰色	内外面：ロクロナデ、底部外面：ヘラ切りのちナデ	SB5001 P1145	外面に火ダスキ痕
土師器	甕A	559	20.0	(6.7)	–	橙色	内面：ハケ、当て具痕か、外面、ヨコナデ、オサエのちナデ、ハケ	SB5003 P1192	
須恵器	杯B	560	16.0	5.2	12.8	灰色	内外面：ロクロナデ	SB5003 P1192	
土師器	甕A	561	32.4	(9.2)	–	にぶい黄橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ハケ、当て具痕のちナデ、外面：ハケ	P1215	
	壺C	562	10.0	(3.4)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、外面：オサエのちナデ（e手法）	P1252	
須恵器	壺L	563	4.0	(3.0)	–	灰色	内外面：ロクロナデ	P1278 柱痕跡	
		564	–	(3.0)	8.5	灰白色	内外面：ロクロナデ	P1320	
	杯B	565	10.2	3.8	7.0	灰白色	内外面：ロクロナデ	P1369	
		566	–	(2.3)	10.2	灰色	内外面：ロクロナデ	P1369	底部外面に墨書
		567	14.6	5.1	11.5	灰色	内外面：ロクロナデ	P1369	
土師器	高杯	568	26.0	(12.6)	–	橙色	杯部内面：ミガキ、杯部外面：ケズリのちミガキか、脚部内面：絞り痕、オサエ、脚部外面：ケズリ	SD12	
		569	28.6	杯部(2.55) 脚部(1.6)	15.4	明黄色	杯部内外面：ヨコナデ、杯部外面、脚部内外面：摩滅の為調整不明	SD12	
須恵器	杯B	570	–	(2.55)	11.6	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切り	SD12	

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
瓦	軒丸瓦	571	(5.5)	–	–	黄灰色	ナデ	SD1001 1層	
		572	(5.4)	–	–	暗灰色		SD1122 1層	
		573	(9.5)	–	–	黄灰色	ナデ	B–4地区遺構検出	
	軒平瓦	574	(17.15)	(9.6)	5.8	灰色	凹面：コビキのち布目痕のちナデ、凸面：タテ方向のケズリ	SK1208	難波宮式6574型式
		575	(8.9)	(13.0)	(5.2)	灰色	凹面：ヨコ方向のヘラケズリ、凸面：タテ方向のヘラケズリ	SD1122 1層	平城宮式6663C型式
		576	(5.1)	–	–	灰色	凹面：ヘラケズリ、凸面：縄タタキ	P1253	
	丸瓦	577	(15.35)	(10.7)	2.05	灰色	凹面：布目痕、凸面：玉縁部ナデ	SD1121 1層	
	平瓦	578	(18.0)	(11.1)	1.9	灰色	凹面：ヘラケズリ、布目痕わずかに残る、凸面：縄タタキ	SD1122 2層	
		579	(17.3)	(13.3)	2.15	灰色	凹面：布目痕、凸面：縄タタキ	SK1152	

付表–7　6トレンチ出土遺物観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
土製品	ミニチュア土器	580	5.4	2.6	–	浅黄橙色	内面：ナデ、外面：不調整、指圧痕残る	SK102	口縁部に穿孔有り
土師器		581	(3.4)	(2.0)	(2.0)	黄灰色	全体にナデ	SK98	把手か
陶器	椀	582	7.85	(3.3)	–	灰黄色	内外面：施釉	P166	肥前系
瓦	軒丸瓦	583	(15.2)	径(16.8)	1.6	黒褐色	凹面：布目のちケズリ、瓦当貼り付け時のナデ、凸面：ナデ	SK102	巴文
須恵器	杯B蓋	584	–	(1.5)	–	灰色	内面：ナデ、外面：つまみ貼り付け時のナデ	P171	つまみ部
土師器	羽釜	585	14.4	(3.3)	–	灰黄色	内面：ナデ、外面：ヨコナデ、鍔部貼り付け時のナデ	SX09 下層	
須恵器	杯A	586	13.4	3.85	–	黄灰色	内外面：ロクロナデ、外面：ヘラ切りのちナデ	P138	
土師器	甕A	587	24.0	(4.6)	–	にぶい橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ナデか	P138 柱穴	
		588	26.0	(3.4)	–	灰白色	内外面：ヨコナデ、外面：ハケのちヨコナデ、ハケ	P138	
土製品	土馬	589	(4.1)	(2.6)	(1.5)	にぶい橙色	全体にナデ	P138	脚部

種類	器形	番号	法量（cm）			色調	調整	遺構層位	備考
			口径	器高	底径				
製塩土器		590	–	(4.5)	–	橙色	全体にナデ	P155	
土師器	皿A	591	16.0	(2.0)	–	明赤褐色	内外面：ヨコナデ、外面：ケズリ（c手法）	P146	
	甕A	592	14.6	(8.4)	–	橙色	内外面：ヨコナデ、内面：ナデ、外面：ハケのちヨコナデ、ハケ	P146	

付表－8　石製品観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			遺構層位	備考
			口径	器高	底径		
石器	打製石鏃	593	1.9	1.6	0.35	5トレ　B-4　1層	サヌカイト製　重量1.0g　凹基式
		594	2.05	1.5	0.4	5トレ　B-4　3層	サヌカイト製　重量0.7g　凹基式
		595	2.5	1.6	0.3	5トレ　B-5　3層	サヌカイト製　重量1.0g　凹基式
		596	2.8	1.4	0.35	2トレ　南西部 精査	サヌカイト製　重量1.1g　凸基式
	剥片	597	4.5	2.55	1	2トレ　南西区 拡張南　掘下げ	サヌカイト製　重量8.0g
		598	3.7	2.1	1.1	2トレ　北部 黄色粘土直上	サヌカイト製　重量5.7g
	削器	599	6.65	2.55	1.35	5トレ　F-1　1層	サヌカイト製　重量18.7g
	楔形石器	600	3.35	4.15	1.25	5トレ　F-1　1層	サヌカイト製　重量17.1g
	剥片	601	2.5	3.45	0.9	1トレ　包含層	サヌカイト製　重量6.0g
		602	4	3.85	1	5トレ　SD1059	サヌカイト製　重量18.5g
		603	1.25	2.75	0.7	2トレ　北部 黄色粘土直上	サヌカイト製　重量1.4g
		604	2	1.25	0.4	2トレ　SB92　P7	サヌカイト製　重量0.9g
	石核	605	4.35	4.9	2.5	2トレ	サヌカイト製　重量61.1g
	剥片	606	6	3.45	2	2トレ　南西区 南東部掘下げ　精査	サヌカイト製　量37.6g
石製品	水晶玉	607	1.5	1.5	0.6	5トレ　D-2　1層	水晶製
	砥石	608	(19.9)	8.65	8.7	2トレ　SE116 上層	

種類	器形	番号	法量（cm）			遺構 層位	備考
			口径	器高	底径		
石製品	砥石	609	(17.0)	(11.7)	8.5	2 トレ　SE116 上層	
		610	(11.8)	12.5	4.4	4 トレ　SE636 下層	
		611	(10.55)	(8.3)	1.4	2 トレ　SE83 南半 上層 1	被熱変色する
	砥石か	612	(9.8)	(7.8)	5	2 トレ　SD90 上面　包含層	
	砥石	613	12.3	8.15	5.55	6 トレ　P160　柱穴	
		614	(6.9)	(10.2)	2.8	5 トレ F-1 P1368、 5 トレ E-3 2 層	砂岩製

付表－9　金属製品観察表

種類	器形	番号	法量（cm）			遺構 層位	備考
			口径	器高	底径		
鉄製品	斧	615	7.45	3.25	2.1	5 トレ　D-4　1 層	袋状着柄
	刃子	616	(5.85)	1.9	1.4	SD1122	
	不明	617	3.7	(3.3)	1.0	2 トレ 南西拡張区北 掘下げ	
	鎌	618	(4.3)	(3.3)	0.55	SD1122　2 層	
	刃子	619	10.0	1.15	0.45	SE636D　上層	
	釘	620	(4.95)	1.05	0.65	SD84　1-2 区 セクション	
		621	(7.25)	(3.95)	0.8	2 トレ　南東拡張区 南東部掘下げ	
		622	(6.55)	1.65	0.9	2 トレ　SX09 上層　4 区　黒 194	
		623	(5.9)	(1.3)	0.7	5 トレ　E-3 SK1273	
		624	(8.7)	(1.1)	(0.9)	SB91　P10	
		625	(6.8)	1.6	0.9	5 トレ　F-1　P1368	
		626	(6.95)	2.0	1.15	5 トレ　E-2　1 層	
		627	(3.85)	2.1	1.8	5 トレ　E-1　2 層	

種類	器形	番号	法量（cm）			遺構 層位	備考
			口径	器高	底径		
鉄製品	釘	628	(5.95)	2.25	1.9	5トレ　C-4　2層	
		629	(11.6)	(2.6)	(2.5)	5トレ　F-1　P1369	
	鉄滓	630	5.2	5.5	3.3	SD1121　1層	
		631	4.8	1.9	0.95	SD1121　1層	
		632	2.7	4.4	2.2	2トレ　南東拡張区 南西部　掘り下げ	
	鎹	633	(3.3)	(6.1)	0.8	SB91　P10	
	襖引き手	634	7.2	(6.2)	0.9	2トレ　北部 SE122	
銅製品	キセル吸口	635	(2.85)	(0.7)	0.55	SX09　3区上層	
	銭貨	636	径　2.4	内辺　0.6	–	SE114　最下層	和同開珎
		637	径　2.4	内辺　0.7	–	SE114　最下層	神功開寶
		638	径　2.2	内辺 0.65	--	SD403	寛永通寶
鉛製品	円盤	639	1.05	2.2	0.35	SD30	重量 8.1g　鉄砲玉を加工？
		640	1.8	1.9	0.3	試掘トレンチ3 SX15	重量 7.0g　鉄砲玉を加工？
	鉄砲玉	641	径　1.2	–	–	5トレ　E-3　撹乱 1080	重量 9.43g
		642	径　1.05	–	–	SK698	重量 7.69g

付表–10　報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうあとうきょうだい1019じはっくつちょうさほうこく
書名	長岡京跡右京第1019次発掘調査報告
副書名	
シリーズ名	長岡京市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第56集
編著者名	木村　泰彦、山本　輝雄、小田桐　淳、原　秀樹
編集機関	公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617–0853　京都府長岡京市奥海印寺東条１０–１

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
長岡京跡（ながおかきょうあと）	長岡京市（ながおかきょうし）調子（ちょうし）一丁目25番1他	26209	107	34°54′40″	135°41′55″	20110404～20120330	6,300㎡	学校建設工事

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡（右京第1019次）	都城	江戸時代～戦国期	土管埋設遺構、井戸、掘立柱建物、柵、溝、堀	土師器、陶器、軒丸瓦、軒平瓦、土管、木簡、掛矢	戦国時代の堀は、山崎合戦に関わる防御施設の可能性がある
		平安時代	掘立柱建物、井戸、土器棺墓、土坑	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器	第３次山城国府関連遺構の可能性がある
		長岡京期	掘立柱建物、井戸、溝、土坑	土師器、須恵器、黒色土器、軒丸瓦、軒平瓦、銭貨	甕据え付け建物と関係する須恵器大甕を確認

※緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。